

神たちに送られ異世界に

こっどん1999

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

残念な死に方をしてしまった龍介しかし不幸中の幸いドラクエの要素ありの世界に転生！

二人の神に見送られて龍介は「アレフガルド」で何を作っていくのか。

初投稿です！生暖かい目で見てくださいますようお願いいたします

※アンチヘイトはこれから出す予定なのでつけてます。足りないタグがあつたら教えて下さい。

☆は挿絵をはっている印です

※1話がとつともなく短いくせに不定期投稿です。

目次

終わりで始まり	1
終わりで始まり	6
終わりで始まり	12
龍介、手に職をつける	19
龍介、手に職を付ける	24
初挑戦の龍介	35
初挑戦の龍介	49
初挑戦の龍介	65
龍介、鉄山に行く	76
龍介、鉄山に行く	93
龍介、鉄山に行く	111
龍介、鉄山に行く	126
鉄山のその後の龍介	141
迷宮入りの龍介	155
迷宮入りの龍介	169
迷宮入りの龍介	184
迷宮のその後の龍介	194
スライムと遊ぶ龍介	202
スライムと遊ぶ龍介	213
森に行く龍介	231
森に行く龍介	243
森に行ってきた龍介	253
龍介のダッシュラン狩り	262
龍介のダッシュラン狩り	271

☆龍介のダッシュラン狩り	3	282
鍛冶とか学ぶ龍介		291
SPについて話a……合えない龍介	1	299
SPについて話a……合えない龍介	2	304
魔物を撃退したその後		314
やくつとSPの消化ができた龍介		322
リュウスケは新しい服を発注する		330
何気ない龍介の平日		338
何気ない龍介の平日	2	347
何気ない龍介の日常	3	354
☆何気ない龍介の日常	4	360
龍介の魔物捕獲大作戦!		368
龍介の魔物捕獲大作戦!	2	376
年越しスペシャル?		386
龍介の魔物捕獲大作戦!	3	391
龍介の魔物捕獲大作戦!	4	403
龍介の魔物捕獲大作戦!	5	416
龍介の魔物捕獲大作戦後		426
龍介の家、やや魔改造		435
龍介の家、やや魔改造しようとしたら……		440
龍介VSオークキング		446
龍介VSオークキング	2	451
龍介VSオークキング	3	458
龍介VSオークキング	4	462
龍介VSオークキング	5	467

龍介V S オークキング	6			471
龍介V S オークキング	7			476
龍介V S オークキング	8			480
龍介V S オークキング	9			483
龍介V S オークキング	10			488
龍介V S オークキング	11			493
龍介V S オークキング	12			497
V S オークキングのその後				500
龍介、兵士の訓練に付き合う	1			506
龍介、兵士の訓練に付き合う	2			509
龍介、兵士の訓練に付き合う	3			513
龍介、兵士の訓練に付き合う	4			517
龍介、兵士の訓練に付き合う	5			520
龍介、兵士の訓練に付き合った後				523
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	1			527
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	2			530
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	3			534
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	4			537
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	5			541
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	6			544
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	7			546
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	8			548
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	9			551
ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる	10			553
龍介の休日	1			556

龍介、ダンジョンふたたび	10	616
龍介、ダンジョンふたたび	9	614
龍介、ダンジョンふたたび	8	612
龍介、ダンジョンふたたび	7	609
龍介、ダンジョンふたたび	6	606
龍介、ダンジョンふたたび	5	604
龍介、ダンジョンふたたび	4	601
龍介、ダンジョンふたたび	3	599
龍介、ダンジョンふたたび	2	597
龍介、ダンジョンふたたび		595
トラブルに魅入られてた龍介		593
トラブルに魅入られた龍介	9	590
トラブルに魅入られた龍介	8	587
トラブルに魅入られた龍介	7	584
トラブルに魅入られた龍介	6	581
トラブルに魅入られた龍介	5	579
トラブルに魅入られた龍介	4	577
トラブルに魅入られた龍介	3	575
トラブルに魅入られた龍介	2	573
トラブルに魅入られた龍介	1	571
龍介の休日	6	569
龍介の休日	5	567
龍介の休日	4	564
龍介の休日	3	561
龍介の休日	2	559

龍介、ダンジョンふたたび	1	1
龍介、ダンジョンふたたび	1	2
龍介、ダンジョンふたたび	1	3
龍介、ダンジョンふたたび	1	4
龍介、ダンジョンふたたび	1	5
龍介、ダンジョンふたたび	1	6
龍介、ダンジョンから帰宅		
龍介、ダンジョンから帰宅	2	
龍介、ダンジョンから帰宅	3	
龍介は準備中	1	
龍介は準備中	2	
龍介は準備中	2	5
龍介は準備完了	3	

649 646 643 639 637 635 632 629 627 624 622 620 618

終わりで始まり

俺の名前は佐々木 龍介

今日俺はドラクエをプレイしてたはずなのに気が付いたら真っ白な部屋にいた・・・

小説とかでよく出てくる先の見えないような真っ白な部屋
そして必死に謝ってくる女性・・・

(……………誰か説明プリーズ!!)

「説明しよう!!いまの状況」

「メラガイアー!!」

ドグアツシヤアアアアアン!!!

と、突然出てきた男が女性に吹き飛ばされた……………

「すみません龍介さん、見苦しいものを見せてしまって」

「え、あ、だ、大丈夫ですよ? ……っていうかなぜ俺の名前を?」

「ああ、実は私というか私たち、神なんです」

……………ん?

「私たち神なんです」

「いや、別に聞こえなかったわけじゃありませんよ。ちよつとびつくりしただけです」

「あ、そうですか」

「で、その神様がどうして俺の目の前にいるんです?」

「それは……………非常に言いづらいんですけど……………実はあなたは死にました!」

ハ？

「え、死んだってどういうことなんですか!？」

「実は私はさっきの男の妻クズなんですけど、あの人は私というものがないながら浮気をしたんです。そのことでケンカしてたんですけどその時投げたティッシュ箱が龍介さんの部屋にたまたま転移して龍介さんに当たってしまったんです……」

「まさかそんなことがあったなんて……どうして箱にそんな威力がある?」

「それは……怒りで我を忘れて全力で投げたので……」

「本当にすいませんでした!」

神の全力はティッシュ箱で人を殺められるのか……まあ、神だからか……

「もういいですよ。それより自分はどうなるんですか?まさか地獄行きとかないです……よね?」

「い、意外と冷静ですね?こちらとしても助かります。それで龍介さんにはこの二つのうち一つを選んでほしいんです。それは……」

- 1、このまま天国に行く
- 2、私たちの管理している世界へアレフガルドに記憶を持ったまま転生する

「2でおねがいします!!」

2を聴いた瞬間に決まった。これは夢にまで見た異世界転生!しかも聞くところによるとドラクエの呪文や魔物もいるという剣と魔法の世界、スキルやステータスもあるという、なんとというファンタジー!!これは胸が躍らずにいられない!そういえば最初のほうに呪文を使ってた!とっさすぎて忘れてたよ!!

「え、即答ですが本当にいいんですか?い、一応魔物もいますし死線も何度かくぐるところかへたしたら死にますよ?」

「これはスキルを覚えやすくなりレベルも上がりやすくなるってことでいいんだよね？」

「ああ、その解釈で構わないよ！せっかく転生したのにすぐ死んでもらうと後味が悪いんで特別につけさせてもらったよ！」

なんて親切設計

「そうなのか、ありがとうな。そしてスキルのレベルはどこまであるんだ？」

「スキルは5が最大だよ。1が初級、2が中級、3が熟練級、4が達人級、5が超越級と言われるんだ。特殊スキルはLv1でも中級か熟練級の物もあるよ。それだけ強力なものもあるんだ。さらに特殊スキルはその人個人、もしくは職業限定なんだ」

「なるほどね、他にもいろいろ聞きたいが大丈夫か？」

「ああ、転生する世界のことをある程度教えておかないかね！」

こうして俺の異世界ライフが始まる！！

終わりで始まり 2

……ここが異世界か、広がる大自然！陰に潜むモンスター！そして人との出会い！おらワクワクおっとこれ以上はいけない．．．さて、ステルたちに聞いた情報をまとめてみるか。

種族

種族は人族、エルフ族、獣人族がいるらしい。

人族は一番多い種族で文明レベルは全種族の中で一番。

エルフ族は弓の名手で魔法のスペシャリスト、長寿だが出生率が低く人口が少ない。

獣人族は高い身体能力を持つ近接戦のエキスパート、なので脳筋が多いらしい。

次に、モンスター

モンスターは基本自然発生で世界にあふれる魔力から生み出されるしくみで

モンスターの中にもランクはあり、F〜SSに分けられとされてSは災害級、SSは魔王級といわれめったに出て来ることはない。

魔王級は大抵魔界に自分の住処を作っているらしい．．．魔界とか夢が広がるね！

さらにモンスターは進化をすることによってランクを上げていく次に呪文

例えばメラ系というと

初級：メラ 中級：メラミ 上級：メラゾーマ 特級：メラガイアー
という感じらしい。

中級まではある程度がんばれば覚えられるらしいが上級からは職業が関係してくる。

職業は多種多様で戦士、魔法使い、僧侶と星の数ほどあり人それぞれに職業が決まっている。

さらに一定のレベルになると上位の職に転職できるようになる。

そしてお金の価値はGゴールドというもので、100Gが日本でいう100円だ

・・・まつすぐ行ってるんだけどな・・・やっぱり適当じゃダメなのか？

ん〜どうしたものか……………ガサガサ……………!?

「だれだ!？」

俺はとつさに銅の剣を抜くすると草陰から出てきたのは……………

「な……………ナメクジ? 鑑定してみるか」

|||||

大ナメクジ ♂ Lv1

ランク：F

HP：14／14

MP：3／3

|||||

大ナメクジか……………弱そうだし行けるかな？

とりあえず一発入れてみるかダツシュからのっ!

ザシユツ!

「ギイイイイイイイイイイイイ!」

どうだ?

|||||

大ナメクジ ♂ Lv1

HP：4／14

MP：3／3

|||||

お、へってるへってるもう瀕死だな

「ギイイイイ!」

怒ってる怒ってるでもナメクジだし体当たりでもしてくるのかな

?

「ギイイイイイイ!」——ボウツ

「うわ!？」

あぶな! 火の玉出したぞこいつ! 今のが呪文か、なるほどな油断大敵……………か!

ザシユ! 「ギ……………ギイイ……………」

終わりで始まり 3

side:??

どうしてこうなった？あのエフニアの町からヒューマ帝国までの道で強いモンスターに出会うことなんてないはずなのに、こんなことならヒューマ帝国に活動拠点を移そうなんて言い出さなければよかつたぜ

「ガアアアアアア！」

「ぐあああ!!運が悪いなくそがああああああ!!」

「大丈夫か!?まさかこんな初心者用の森からグリズリーが3体とはな！」

ああ、本当に運が悪い、エフニアでやっとDランクに上がったつてのによお!!

グリズリーはきついぜ、ホントによ……………

「ゼータさん!?大丈夫ですか!ホイミ!」

「ああ、ありがとうよりツク、おらああああ!」

ゼータを薄緑の光が包みHPを回復させるがリツクのMPももう少ないはずだ、どうにかして突破口を……………

「でりやあああああああ!!」

すると俺の目の前にいたグリズリーの首から剣が生えた

「大丈夫ですか!」

俺はいきなりのこととで少し呆然としたが直ぐに立て直し相手が誰なのかを理解した

それは青年だった、まだ初心者丸出しの格好をした青年だ、どうしてグリズリーを倒せたのかなんでどうでもいいまずは敵が減ったことに俺は…

~~~~~

side 龍介

「ん?あれはなんだ?」



助けたおっさんもびつくりしてるよ

「大丈夫ですか！」

へ レベルが上がりました

おお、レベルが上がった、やっぱ強そうだからなこのクマ、でも今は確認している暇はない！

向こうのを鑑定してみよう

|||||

グリズリー ♂ Lv1

ランク：D

HP：157／198

MP：75／75

攻撃力：142

防御力：62

|||||

|||||

グリズリー ♂ Lv5

ランク：D

HP：195／210

MP：83／83

攻撃力：163

防御力：87

|||||

見えるのはここまでか、ってこいつら強い！さっきはよく殺れたな俺！

「誰だか知らねえが助かった！さすがに三匹はきつかったんだ！」

「礼はあとで！いまはあの二匹を！」

「おう！ゼータ！待たせたな！」

「やっと倒しやがったかサザン！おせえぞ！あとそいつ誰だ！」

このゼータって人すげえな、この二匹を一人で押さえてたのかよ

「こいつはグリズリーを一撃で倒した期待の新人だ！戦力アップだぞ！」

一撃なのは不意打ちだったからですけどね!? まあ異世界歴約3時間の超新人なのは確かだけど……

「そいつはいいや! しっかり動いてもらおうぞ!」

「善処します!」

「すまねえがそいつは任せた! 俺たちはこつちを先に殺る!」

「任せられた!」

まさか初心者に一匹任せるとはな、でも任せられたからには頑張らなきゃな

俺はダツシュを使いつつ地味に足を狙う。決定打にはならないけどクマはスピードに追いつけない

というか追いついてもらっちゃ困る! 今の自分だと確実に一撃で死ぬ!

〈 剣術のレベルが上がりました 〉

〈 ダツシュのレベルが上がりました 〉

このまま時間稼ぎをすればいけるな

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!」

クマはうっとおしいのか腕を振り回しているが大振りすぎて当たらないね!

そして両足を切り刻みつつヒット&アウェイ!

お、クマが膝をついたここぞとばかりに突き突き突き!

「待たせたな! あっちは片づけてきたぞ!」

わお、袋叩きだと早いね!

〈 レベルが上がりました 〉

よっしレベルアップ! 確認しなきゃ

|||||

リュウスケ・ササキ 男 Lv18 →16

種族：人間 15歳

HP：120 / 120 →90

MP：102 / 102 →65

攻撃力：47 →30



者ってなんですか？」

「なんだ、冒険者を知らないのか？この世の中冒険者を知らないやつなんていないと思うんだがな！あと俺たちはもう一緒に戦った戦友だ！敬語なんて堅っ苦しいのはやめてくれや、癖とかならしようがないけどな」

そういつてゼータは俺の背中をたたく……結構痛い。

この人絶対脳筋だわ。

「じゃあそうさせてもらうよ、で、冒険者ってのは何なんだ？」

「冒険者っていうのは、今みたいに魔物を狩ったりして金を稼ぐやつらのことだ、ギルドがあつてな住民の依頼を受けたりして金を稼ぐこともできるんだ」

サザンによると冒険者はランクF〜Sまであつて、AやSってのはほんの一握りしかないらしい。

そして冒険者ギルドで職業につけるらしい。職業は前に確認した通り人それぞれ適性がある。

神官風のリックはその見た目通り僧侶らしい。

ゼータは武闘家でサザンは戦士とのこと。

それぞれの職でステータスの上昇に違いが出てくるらしい。

「で？これからどうするよりユウスケ」

「どうするって言ったって、特に目的はないからな……もし良かったら冒険者登録できるところに連れてつてくれないか？目標はゆっくり決めていくことにするよ、あとリュウでいいぞ」

「よし！そうと決まったら早速ヒューマ帝国に出発だな！サザン！早く行こうぜ！」

「ちよつと待て！まだグリズリーの剥ぎ取りが終わつれないんだよ！もう少し待ってくれ」

「ちえー、しかたねえなあ早くしろよ」

「こいつ……」

「まあまあ二人とも落ち着いてください」

あ、リックが止めちゃった、今からが面白いところだったのに

ともかくこれで最初の目的は決まったな！ヒューマ帝国で冒険者



になつて職業に就く！

………自宅警備員やニートだったらさすがに泣くけど大丈夫だよ  
なきつと！

## 龍介、手に職をつける

あれから2日ほどでヒューマ帝国についた

2日の間にこの世界についてよく聴くことができた、一応自分は気が付いたらこの大陸にいたってことで信じてくれた

たまにいろいろらしい、転移魔法の暴走だとかで飛ばされる犠牲者が、さすがに大陸外からは初めてらしいけど

2つある大きな国のことや、東にある世界樹、そしてダンジョンの存在！旅の扉という異空間につながっているゲートがあるらしい。

無限に魔物を生み出して冒険者を迎え撃ち、死んだ冒険者を吸収してまた魔物を生み出す。

ダンジョンも魔物の一種と言われている。

ダンジョンは、魔力が特に濃いところなどに出現したりするので魔物大氾濫スタンピードなどが起こると見つかることがあるらしい、もし見つければギルドカードをかざすことによつて見つけた人と場所の情報がギルドに届く。ギルドカード万能説、なんでも500年ほど前からある技術らしい。

見つけた旅の扉は基本見つけた人の物で国に売ることもできるらしい。

ダンジョンには大きくなればなるほど資材などが豊富で、それだけ出てくる魔物もやばい、ダンジョン内の魔物は倒すとドロップと言つて、素材を落とすので剥ぎ取りなどをしなくていい便利さがある。

そして宝箱があつて中からは魔剣や魔槍、各種マジックアイテムが出てくる。

最深部にはボスがいて倒すことによつて莫大な資産やアイテムがもらえるという噂だ。あくまで噂なのは階層が低いダンジョンのボスがかかるものはすこし貴重な物程度だった記録があるかららしい。

ダンジョンボスは一度倒すと復活はしない、が、ダンジョン内の魔物のレベルが平均7ほど上がるらしい。

ダンジョンはDランクから入れるようになり旅の扉は各国が管理している、なんでも特殊な技術で扉を移動させられるとのこと。





「ヒューマ帝国へようこそ、身分証を拝見いたします。」

身分証?…ど、どうしよう…:…:…:…:…:…:…:そんなものもってないぞ。

「冒険者だ、これでいいか?」

「はい、ありがとうございます、そちらの方は?」

「ああ、こいつはどうも呪文の暴走で飛ばされてきたみたいでな身分証を持っていないんだ。」

「そうでしたか、それは御気の毒に…一応規則ですので犯罪の有無と入国料10,000Gをお支払いください。」

「入国料は払つといてやるよ犯罪は、ないと思うが一応確認しとけ」

「ああ、ありがとうございます、いつか絶対返すからな?」

「いや別に返してもらわなくてもいいんだがな。」

あらやだサザンさん男前、でも返すけどな

「それで犯罪の有無ってのはどうやって確認するんですか?」

「はい、この水晶に触れていただければわかります、変わらなければ犯罪無し、赤くなれば犯罪あります。」

てなわけに触ってみる、変化は…ない。

「はい、ありがとうございます、ようこそヒューマ帝国へ。」

「ありがとうございます。」

~~~~~  
「さてとこれからどうするよ?まずはギルドに行つて素材の換金だろ?」

「俺はその時に登録も済ませたいと思つてる、あと職にも就かなきゃな。」

「じゃあまず換金だな、登録には500Gいるんだよ。」

「マジか、無一文だから助かったよ、でも本当にいいのか?多めにもらつても。」

「これは三人で話し合つて決めたことだ、なにしろピンチを助けてもらつたんだからな。」

マジみんな男前。

「じゃあギルドに行こうか。」

「行っておきますがこれは普通ではありません。」

リックが心を読んだ!? そういう魔法か!?

「心なんて読んでませんよ。」

にっこりほほ笑んでるけど絶対嘘だ、サザンたちも後ろでびびってる、やっぱり読めるんだとかつぶやいてるから前科があるなこれは。「じゃあ山分けだおれたち三人が40,000Gで残りがリユウのだ。」

「ありがとう、そしてこれが入国料の時払ってもらったお金だ返しくよ。」

「まったく、返さなくてもいいのによ。」

「いや、なんか金を借りたままにすると落ち着かないんだよ。」

そういつておれはサザンに10,000Gを渡した。

「よし、じゃあまず登録してこい!そして今日は宴だ!ギルドの隣の酒場で飲んでるからよ登録終ったらちゃんときよ!」

「俺は酒が飲めないんだが・・・」

「何言ってるんだ、もう15なんだろ、すっかり成人してるじゃねえか。」

「この世界の成人は15からなんだな。」

「あまり強くないぞ?じゃあひとまず登録してくるよ。」

「おう!今日は俺のおごりだ!すっかり楽しもうぜ!」

そういいながらサザンたちは酒場に向かっていった。

「さて、じゃあ登録をお願いします。」

「はい、登録料は500Gです。」

俺は受付に500Gを渡した。

「ではこの紙に名前を、カードに血を一滴たらしてください。」

「えっと、文字が書けないので代筆とかお願いできますか?」

「代筆には100Gがかかりますがそれでもよろしいでしょうか」

「はい、お願いします、名前は佐々木・・・リユウスケ・ササキです。」

「リユウスケ・ササキ様ですね、では血をお願いします。」

追加で100Gを渡し血を垂らし受付の人が透明の箱の中に入れると何の変哲のないカードが白色のカードに変わっていくそこにはこう表示されていた。

リユウスケ・ササキ

人間

職業：無し

ランク：F

|||||

「ではギルドやカードの説明をしますね。」

ギルドカードは身分証明書のようなもので各町に入るときに必要な。
紛失した場合は50,000Gで再発行する。

ギルドカードの色は F||白 E||茶 D||緑 C||黄 B||青

A||赤 S||金

と分けられる。この世界ではAランクは十数人、Sランクは3人しかいないようだ。

まあBランクからは才能のある人だけが行けるといわれているらしいからな。(サザン談)

F・Eは依頼をこなしていくと上がりDから上はランクを上げるための試験がある。

Bランクから通信機能が使えるようになる、通信機能は相手と遠距離で話すことができる。

携帯電話みたいなものだ。

通信の仕方はBランクに上がった時に教えてくれるそうだ。

ギルドでは依頼を受けることができ、今のランクより1つ上の依頼まで受けられる。

なので今はEランクの依頼まで受けられるようだ。

依頼が受けられるのは基本的に二つまで。

そして銀行という仕組みがありお金を預けることができる。これはギルドによつぽどのことがない限り使えなくなることはないらしい。

次に犯罪、冒険者が犯罪を犯すとギルドカードが真っ黒に染まりギルドに情報が入り指名手配される。

しかし命にかかわる事、盗賊などは撃退して殺してしまっても犯罪にはならない。

「そこら辺の判断基準をどうしているのか、などは今の技術では解析できないからそういうものとして考えておくといいと言われた。」

最後に緊急依頼というものがあり魔物大氾濫スタンビードなどや国を脅かす魔物が現れた時などに発令される、これは一定のランク以上は強制参加とのこと。

「新人はどうしても、盗賊でも人を殺すということに躊躇して逆に殺されるといいうことがよくありますなのでくれぐれも気を付けてください。」

「わかりました。」

殺人か、俺にはできるかわからないな、しかし覚悟はしとかなきやな。

「あと職業に就きたいんですけど。」

「就職ですね、就職にも500G必要ですがよろしいですか？」

「はい、お願いします。」

「ではこちらへどうぞ。」

そういつて連れてこられたのは下に魔法陣が書いてある円形の部屋。

そこで俺は500Gをわたした。

「では適正職業を表示します。——適正ハ閲覧ロ」

ハロワに聞こえたけど気のせいだろうと信じたい。

目の前に半透明のウィンドウが表示されるそこには。

|||||

適正職

・魔物使い 適正S

他 F

|||||

適正が一つだけかかてか他がFつてことは無いに等しいな。

「適正が一つつてなかなかないですよね。」

「そうですね、めったにないです、しかも他がFつてことはもう運命で

ことが条件で従魔にできる

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

インベントリチート説、そして可能性は？

可能性||||||||||||||||||||||||||||||||

特殊スキルで、物や人に可能性を与える。

スキルの取得率大幅増加

獲得経験値大幅増加

成長値大幅増加

仲間にも適用される

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

なんか魔物使いにぴったりの効果になったな・・・

可能性って自分に合った方向に成長するのかもな。

「おお。」

「無事に就けたみたいですね、ギルドカードも確認してください。」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

リュウスケ・ササキ

人間

職業：魔物使い

ランク：F

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「はい、大丈夫ですね、お疲れさまでした、では依頼を受けていきますか？」

「いえ、一緒にきた仲間が酒場で待っていますのでもう行きます」

「そうですか、ではまたのご利用をお待ちしております」

そういつて彼女は微笑んだ

~~~~~

俺はサザンたちが飲んでる酒場についた、いかにも酒場って感じで冒険者らしき人が多いな。

その中で俺はサザンたちを見つけた、ちょうど向こうも気づいたっほいな。

「おーおーいリュウー！こっちだこっち！」

ゼータめ、飲みすぎじゃないか？顔がまっかだぞ。

「遅くなつて済まないな、職業についてたら時間がかかった。」

「良いつてことよ！で？どんな職業に就いたんだ？」

「魔物使いだよ。」

「魔物使いか、珍しいな、しかしなんでまたそれを選んだんだ？」

「これ以外の適正がFだったつてのもあるが、たくさんの魔物たちと一緒に戦うつて、心躍らねえか？」

「まあ、たしかに強力な魔物とかと共闘できるつてのは心強いな。」

「サザン！やつとリュウが来たんだ！グリズリーの料理を出してくれ！」

「わーつたよ、つたくリュウのために用意したんだからな！食いすぎんなよ！」

「わかつてるつて、ほらこれがグリズリーのステーキだ！」

「あれで全部じゃなかったのか？」

「ああ、このカバンはマジックアイテムで300kgまで入るんです、これ一つで200,000Gぐらいしたんですよ？」

ひゃー、マジックアイテムつてどれも高いのか、でもインベントリあるからぶつちやけいらないな。

「そんなにするのか、おお、これむつちやうまいな！このおいしさを的確な言葉で表現したいから、家に帰つたら国語の勉強するわ。」

「おまえ、遠くから飛ばされてきたんだろ？いつになるんだよ、その間にもつとうまいもの食えてるさ。」

そうでした。

「まあともかく、本当にうまいな、今まで食べたステーキの中で一番だ。」

「そうなのか、でも竜の肉はもつとうまいぜ？昔知り合いに食わせてもらったんだ、あの時は涙が止まらなかつた。」

「ゼータは2日ほど止まりませんでしたよね。」

「うるせえ、リックも鼻水垂れ流していたくせに。」  
「なっ」

「はいはいそこまでだ。」

あ、サザンが止めやがった、今からが面白いところなのに、それよりも竜か……

「竜は強いんだろうな。」

「ああ、強い、強すぎてBランクぐらいじゃないと狩れないんだ。」

「Bランクか……」

「そんなことよりはやく飲めよ、うまいぜ?」

「酒が弱いつて言ってるのに、まあいいか、今日は飲むぞ!」

「おお、その意気だ!」

この後無茶苦茶のんだ。

結果、飲みすぎで倒れてサザンたちが止まっている宿屋でお世話になった。

〈 毒耐性を取得しました 〉

〈 毒耐性のレベルが上がりました 〉

~~~~~

「知らない天井だ。」

まあ、うん、言ってみたかっただけ。

で、昨日取得してたっぽい耐性、酒の飲みすぎは体に毒だつてことかな。

おかげで酔いにくくなったし二日酔いがなくなった。

サザンたちは全員二日酔いでダウンだ、この帝国にいるうちはこの鶴翼亭かくよくていに宿をとっているらしい。

ちなみに一泊1,000Gだ。

サザンたちが3日ぶんを先に払ってくれていた。

「本当に大丈夫か?」

「あ、ああ、ポーシヨンのんだから昼には復帰だ、たぶんな。」

「そうか、俺は依頼を受けてくるよ、何かあったらまたよろしくな。」

「おう!その時はしっかり頼ってくれよ、新人。」

「ああ、わかったよ。」

てなわけで武器屋に来た、なぜかという銅の剣がぼろくなっていたからである。

刃こぼれがひどいなので新しい剣を買おうと思っている。

へー、いっぱいあるんだな。

「すみませーん。」

.....

「すみませーん!!!」

「だあああ！うるさいわい！ちゃんと聞こえとる！」

髭もじやなおっちゃんが出てきた。

「でも誰もいないと買い物できないですし。」

「まあそれもそうだが、で？何がほしいんだ。」

「剣がボロボロになってしまったので兵士の剣と剥ぎ取り用のナイフがほしいんです。」

「剣にナイフだな、それだと8,000Gでいいぞ。」

「ナイフの料金が入ってないんですけど？」

「なに、新人への選別だ。」

「おっちゃん、見た目によらず優しいんだな、これ、8,000Gちょうどだ。」

「まいど、見かけによらずはよけいだ、あと敬語使つてるときよかあそっちのしゃべりの方が似合ってるぞ。」

「そうか？じゃあこのままでもいいかせてもらおうよ。」

「そうするといい、今どき礼儀正しいしゃべり方なんて貴族か商人ぐらいしか使わねえ。」

「そうなのか、ともかくナイフありがとう。」

「ああ、また来いよ、新人。」

「俺の名前はリュウスケだ、リュウでいい、おっちゃんは？」

「俺の名前はギガースだ」

「そうか、よろしくな。」

そういつて武器屋を後にした。

なか取れないから代わりにやってほしい

報酬：一時間800G

|||||

|||||

E

ペット探し

家のペットが2日前に逃げ出してしまった

見つけてきてほしい

報酬：5,000G

|||||

|||||

E

いっかくうさぎの退治

いっかくうさぎが畑を荒らすので退治して

ほしい

報酬：一匹800G

素材持ち帰り可

|||||

ほうほう、まあ薬草とかは無難だよな。

そしてペット、テンプレだとすぐくやばい奴だったりするよな。

まあここはスライムの核と薬草かな。

薬草について聞いてみるか。

「すまないが、薬草の実物ってみられるか？」

「はい、薬草はこの葉っぱです。」

薬草 |||

薬の原料となるくさ

|||||

「しかしまれにこのドクデ草を持ってくる方がいるので気を付けてください。」

そういつて受付嬢さんはよく似た草を出す。

ドクデ草 |||

薬草によく似た草

猛毒があり大量に摂取すると目が

黒くなり失明する

|||||

恐ろしい草が生えてるものだな。

しかし鑑定眼で見分けられる代物だな、少し安心した。

「なるほどわかった。どこらへんに生えている？あと採るときに気を付けることかだな。」

「北東にある初心者森で採ることができます、気を付けることは群生して生えているところを根こそぎ取らないってことだけですな。」
「なるほどな。」

さて初心者森とやらに行ってみるか、タイムもしてみたいしな。

~~~~~

俺は今防壁の北門に来ている。

「ん？君はたしか昨日来た子だね？」

「ああ、たしか入国の時の手続きの兵士の・・・」

「リブロだ、冒険者登録できたのかい？」

「リユウスケだ、リユウでいい、冒険者登録をして初依頼で初心者森までね。」

「なるほどね、一応規則なんで記録を取らせてもらおうよ、ギルドカードを見せてくれ。」

「ああ、これでいいか？」

「ありがとう、最近盗賊が増えてきているから気を付けるんだよ。」

「ああ、わかった。」

~~~~~

さて、たぶんここが初心者森だと思うんだが思ったより茂ってるな。

.....なんか見られてる気がするな.....

へ 気配察知を取得しました へ

なんか無効の茂みから気配が.....

すると茂みから黒い影が飛び出してきた！あつぶな！目の前に飛んできたぞ!?

〈 警告を取得しました 〉

なんか遅い、もうちよつと早くほしかった。

するとなぜかその場にいるのが危ない気がした、俺はとつさに後ろに下がる。

横の茂みからもう一匹飛び出してきて俺がいた場所に突き刺さった。

これが警告の効果か・・・気配察知が低いせいで察知しきれなかったのか？

ともかく鑑定だな。

|||||

いつかくうさぎ ♂ Lv1

ランク：F

HP：13 / 13

MP：11 / 11

攻撃力：10

防御力：5

素早さ：26

賢さ：9

|||||

|||||

いつかくうさぎ ♀ Lv3

ランク：F

HP：19 / 19

MP：17 / 17

攻撃力：14

防御力：12

素早さ：38

賢さ：15

|||||

初心者森だけあつてレベルが低いな。

とりあえずタイムを試してみるか、その前に認めさせるか仲良くなる。野菜でも与えてみるか？

俺はインベントリからニンジ―を取り出した、これは地球のニンジ―のようなものだ

それを2本あげてみる。

お、普通のウサギみたいだな、ぷうぷういいながら食べてる。行けるかな。

「タイム」

へ ティムに失敗しました へ

くそ、まだ足りなかったか。てかうサギたちすぐく怒ってないか？あれ絶対怒り狂ってるわ、目が血走ってるもんな。

もう一度ニンジ―を与えてみる、が、踏み砕かれる……キレてるわ。どうもタイムできそうにないな、仕方ないか。

俺は兵士の剣を抜き戦闘態勢に入った。

Lv3のいつかくうさぎが突撃してくるが早さが足りない、すれ違いざまに首を斬る。

一撃でHPを削り切ったらしくそのまま動かない、すぐさま次の目標に向かい斬る。

そのまま血抜きをしてインベントリの中にしまう。

初タイムは失敗か、まあ気長に頑張るか。

へ レベルが上がりました へ

よし。

|||||

リユウスケ・ササキ 男 Lv4 → 3

種族：人間 15歳

職業：魔物使い

HP：166 / 166 → 36

MP：142 / 142 → 30

攻撃力：81 → 24

防御力：75 → 23

けて薬草の枚数は250枚になった。

50枚の束を5つ作ってインベントリに入れる、すると。

―ボトツ

後ろの方で何かが落ちるとがした。察知距離外だったので気づく
ことができなかつた

落ちたものの正体はスライムだつた。

|||||

スライム ♀ Lv5

ランク：F

HP：14／24

MP：19／19

攻撃力：10

防御力：12

素早さ：10

賢さ：35

|||||

地味にレベルが高いスライムだな・・・木に登って上から奇襲かけ
てたのかもしれない賢さ高いし。

で落下してダメージを食らつたと。

薬草とかあげたらテイムできるかな。

武器を抜かずにスライムに薬草を近づけてみる、薬草はスライムに
吸い込まれていきシユワシユワ溶ける。

|||||

スライム ♀ Lv5

ランク：F

HP：24／24

MP：19／19

攻撃力：10

防御力：12

素早さ：10

賢さ：35

＝ ＝ ＝
しつかり回復してるな、少し様子を見てみる、ぷるぷるしていて変わりがない。

逃げもしない襲っても来ない、やってみるか。

「俺と一緒に来てくれないか？—ティム」

へ スライムのティムに成功しました へ

っしや！ティム成功！

「これからよろしくな」

『よろしく…あるじ？』

女の子の声が頭に響く。

「お、しゃべれるのか？」

『まだ…なれないけど…ティムされたときに…つながった。』

「そうなのか。」

『ねえ…あるじ…なまえ…ちようだい？』

「なまえか、そうだな…マリン、スラン、スーのうちどれがいい？」

『あるじ、ねーみんぐせんす、…かいむ。』

「真剣に考えた結果だ。」

『じゃあ…すー。』

「よし、じゃあお前は今日からスーだ、よろしくな、スー。」

『よろしく、あるじ。』

ステータスを見ると下のほうに従魔という欄が追加されていた。

＝ ＝ ＝

リュウスケ・ササキ 男 Lv4

種族：人間 15歳

職業：魔物使い

HP：166／166

MP：142／142

攻撃力：81

防御力：75

素早さ：82

賢さ：75

自身に危険が及びそうなときに音がする

|||||

インベントリ

物を収納する魔法

インベントリ内は時間が止まっており

劣化しない

生物は入れられない

容量：5 t

|||||

ルーム

異空間に部屋を作ることができる

部屋数：1 / 15

|||||

リミット

ダンジョンから瞬時に脱出する呪文

消費MP：5

|||||

身軽

身軽に動くことができる

行動補正（大）

|||||

「ふ〜今日はこれぐらいでいいだろ。」

『そう…だね、あるじ。』

「スーはどうする？このまま城下町へ帰るか？ルームに入ってもい

いぞ？」

『この…まま、連れてって。』

「了解。」

そういつて俺はスーを抱える。

『……………おー…らくちん。』

「そうか、気に入ってもらえて何より、薬草もたくさん回収したし十分かな。」

『もう……かえる?。』

「ああそうしようか。」

そうやって俺は帰ろうとしたのだが気配察知に反応があった。

「何かが3体ほど近づいてくる、警戒するぞ。」

『ん……』

俺はスーを下におろして警戒する、警告が反応し俺は直ぐにどこに移動する。

すると短剣が後ろの木に突き刺さる。

「……ちっ。」

「だれだ!!」

相手は、人間?

「よお、ちよつと荷物を全部おいていってくれやしないか?」

「盗賊か、もし、いやだと言ったら?」

「そしたら命はいらねえってことだ、おいお前ら!」

茂みから3人出てきた、まあ気配察知で知ってたんだが。

「へへへ。」

「おいおい、おとなしく置いていったほうが身のためなんじゃねえのか?」

「もういいからこいつ殺そうぜ兄貴。」

やらなきややられるのはわかりきっている、だが魔物を殺すのとは全く違う……

俺に、できるのか……俺は……ここで死ねば、転生させてくれたシヤルやステルに顔向けできない!

〈 称号：シヤルムとタイステルの加護を取得しました 〉
気が付くと俺は白い空間にいた。

初挑戦の龍介 2

〈 称号：シャルムとタイステルの加護を獲得しました 〉
気が付くと俺は白い空間にいた。

「……ここは、まさか。」

『あるじく……ここ……ここ……どこ?』

「スーも来てたのか。」

「やあ、龍介。」

「やっぱりか、ステル、ここは俺が最初に来た場所だな?俺は死んでしまったのか?」

「おお龍介よ、死んでしまうとは情けない、ってことにはなっていないから安心してくれていいよ。」

それを聞いて、安心した。

「そうか、それを聞いて安心したよ、で?シャルはいないのか?」

「シャルは他の神を抑えるのに必死だよ。」

「他の神?」

「ああ、「アレフガルドに転生した子が来るの!」ぜひ会わせて!」って感じで主に女神たちが。」

「oh……てか他にも神がいるのか。」

「まあね、豊穰の神、炎の神、いろいろいるよ、それで今日呼んだのは称号の説明だね。」

「ああ、この二人の加護か。たしかに普通と違う気がするな、小説とかだと○○神の加護みたいな感じだと思ってるが?」

「普通はそうだよ、まあ君だけの特別な称号だね。」

「そうなのか、で、この称号で何か変わるのか?」

「魔法と武術系の成長が早くなる、ついでに僕たちと会話ができる、だね。」

「なるほどな、で、どうしてこれを?」

「君は、僕たち二人にとって特別な存在なんだ、だから少しでも生きてほしいんだよ。」

「……で、本音は?」

「神は結構暇で、君の生活を見させてもらってるんだ！最近毎日が楽しいよ！あと鑑定で見られるといろいろまずいから隠蔽のスキルを上げるよ。」

へ 隠蔽を取得しました へ

「なんか一気にありがたみが薄れたが・・・ありがとう。」
「どうってことないさ。」

『はなし・・・おわった？』

「ああ、スー置いてけぼりにしてすまなかつたな。」

「やあ君がスーだね。初めまして、闘神のタイステルだ。」

『!?・・・かみさま？』

「ああ、そうだステル、スーにも何か加護をくれないか？」

「そうだな、闘神の加護と魔法の神の加護をあげよう。」

『あり・・・がとう・・・』

「どうってことないさ、これからも龍介を助けてやってくれよ？」

『うん・・・』

「おっと、そろそろシャルが突破されそうだ。龍介、君が少しでも第二の人生を楽しく過ごせるように祈っているよ。」

「ありがとう。」

次の瞬間、光に包まれた

~~~~~

.....「おい！聞いてんのか！」.....

「おい！」

「あ、ああ、なんだ？」

「何だ？じゃねえよ、荷物全部おいてくか命置いてくか選べってんだ！」

「ああ、断る。」

「・・・そうかい、じゃあしょうがねえな、てめえら！」

「「おう！」」

ヒュッー

盗賊の3人がとびかかってくるが一人の姿が掻き消える。

「な!?!」

「何しやがった!!」

「さて、なんのことかな」

俺は剣を抜く、1人の姿が消えた種明かしは上を見るとわかる。

上ではスーが盗賊の首を吊ったところだ。木の上を上り伸縮自在のスキルと奇襲のスキルで瞬時に相手の首を吊るなんか、暗殺者じみてきた。

「さてどうする?」

「よくも!」

「おおおおおお!」

まず最初に飛び込んできた盗賊の武器を上を弾き隙だらけの脇腹を斬る、次の攻撃を剣の腹で受け流し素早い動きで2回攻撃をしかける。

〈 隼斬りを覚えました 〉

〈 受け流しを覚えました 〉

何か覚えたし。

「ぐふっ……」

一気に二回切られた盗賊は血を吐きながら崩れ落ちた。

「くそおおおおおお!」

2人目の攻撃をしゃがみで避け足払いをかける。

〈 足払いを覚えました 〉

〈 格闘術を取得しました 〉

「ぐわ!」

倒れたところを素早く斬りつけて止めを刺す。

〈 レベルが上がりました 〉

「さて、あとはお前だけだ。」

「ひ、ひいっ!」

兄貴と呼ばれていた男は真っ先に逃げ出した、少しつけてみるか。

「スー、少し泳がすぞ。」

『りょう……かい。』

俺はインベントリに盗賊の死体を入れ男を追う。

~~~~~

男はあれから森の奥に進み洞窟に入っていた。

その間に俺とスーは追跡と気配遮断のスキルを取得した。

さらにスーは気配察知と暗殺術のスキルも手に入れていたらしい、うちの子が暗殺者になりつつあることに少し危機感を覚えた一瞬だった。

「あそこがアジトか？」

『そう・・・っぼい。』

「見張りが2人・・・スー、やれるか？」

『らく・・・しよう。』

スーが茂みを通り洞窟の上からそーっと近づき見張りの2人をひも状に変化させた体で釣り上げる。

「がつ!?!・・・っ!?!・・・っ!?!・・・」

「ぐえ!?!・・・っ!!・・・っ!!・・・」

少し抵抗されたようだが奇襲と暗殺術のコンボで無事に仕留めることに成功したようだ。

「大丈夫だったか？」

『らくしよう』

洞窟の中には1, 2,・・・13人・・・結構多いな。

へ 気配察知のレベルが上がりました へ

3人ほどがすこし離れたところにいるな、何かを守っている・・・宝か？

「スーは離れている3人をやってくれ、おれは10人をやる。」

『わかった。』

スーは音を立てずに3人のほうへ向かっていった。

「さて、いっちょ暴れますかね。」

もう俺に人の生活を脅かす盗賊を殺すことに抵抗は・・・ない。しばらく進むと盗賊が集まっているらしき広場についた。

「親分！やばい奴が来る！」

「なんでえ、うるせえな！ギャーギャー騒ぐな。」

「で、ですが俺の手下が3人一瞬にしてやられたんです！」

「ああ？お前の手下は、最近入ったばかりの新人じゃねえか、どうせうっかり高レベルの冒険者でも襲ったんだろ？」

「い、いや、相手も新人冒険者です、皮の鎧と兵士の剣を装備した冒険者でした、その冒険者が来るんです！」

「で？相手は何人だ？」

「ひ、1人です」

「1人？そりや何の冗談だ？」

そういつて親分と言われた男は大きく笑う、そろそろいいか。

「冗談じゃ、ないんだけどな。」

「ぐわっ！」

「ぎやつ！」

「ぐへえ！」

〱 レベルが上がりました 〰

俺は一番近くにいた盗賊の背中を斬り捨てる。

「誰だ！」

「お、親分！こいつです！」

「ああ、今話してた冒険者の新人だよ、昨日登録したばかりだ」

「ほう？たかがFランクがこの狼牙盗賊団頭首、狂犬のアンダードック様に勝てるんでも？」

「アンダードック？知らないね、おれはアジトがあったから襲ったま
でだ。」

「そうかい、やれ！お前らあ！」

「」「」「おおおおおおおおおお！」

「うるさい。」

四方八方から襲ってくる盗賊を俺は足払いで体勢を崩させるその
すきに隼斬りで数人を仕留める。

「ぐはっ」

「ぎゃあ！」

「ぐふっ」

「ボウツ

「っ!？」

警告が反応し俺はその場を離れる。

「……魔術師か。」

「……メラ」――ボウツ

「くっ!？」

「ぎゃああああ!熱い!顔が!顔があ!」

避けたら後ろの男に当たったらしい、うげえ顔が爛れてやがる。

「おまえ、仲間も巻き込んでるぞ?」

「ちっ……メルぐはっ!」

「お構いなしか」

俺は魔術師に接近し拳を叩き込んで呪文を止めさせる。魔術師は短剣で襲ってきたが受け流しカウンダーを叩き込む、これであと2人……ちなみにメラが当たった男はもう動いていない。

「レベルが上がりました」

「剣術のレベルが上がりました」

「格闘術のレベルが上がりました」

「ほう、なかなかやるようだな。」

「なかなか、ね、そういうあんたは強いんだろうな?」

「もちろんだ、ここにいる奴らとは全く違うぞ?」

|||||

アングードック 男 Lv18

種族：人間 23歳

職業：武闘家

HP：204/204

MP：87/87

攻撃力：120

防御力：112

素早さ：99

賢さ：68

〈 回復魔法のレベルが上がりました 〉

〈 ベホイミを覚えました 〉

〈 キアリーを覚えました 〉

やべえ、死にかけて、ホイミ連発で何とか持った感じだ、しかし、楽しくなってきたあ!!

「もう終わりだ」

「へっ、いつ終わりだって言ったよ、おおおおおおおおおおお
！ー回し蹴りい！」

「まだ策は尽きてないって、か！」

「おおおおおおお！」

「はあああああああああ！ー隼斬り！」

ガキイイイイイイン……

「はは、まさか、剣が折れるとはな、だが……」

俺の……勝ちだ。

「ぐはあっつ……」

こうして俺の初盗賊殺しを達成した。

〈 剣術のレベルが上がりました 〉

〈 称号：戦闘狂を獲得しました 〉

非常に遺憾である。

『あるじ、おわったよ。』

「お、こっちもちょうど終わったところだ。」

〈 レベルが上がりました 〉

お、どのくらい上がってる。

〈 可能性のレベルが上がりました 〉

……かな？

|||||

リュウスケ・ササキ 男 LV17 → 9

種族：人間 15歳

職業：魔物使い

HP：312 / 312 → 98

MP：257 / 257 → 76

初挑戦の龍介 3

「ところで、その抱えているスライムは？」

「こいつはスー、俺の相棒さ。」

「そういえば君は魔物使いだったね、魔物使いはパートナーを見つける前に挫折するので有名だけどその分だと安心だね。」

「そうなのか？」

「ああ、タイムする条件をクリアするのがとても難しいらしいよ」
「なるほどな。」

俺は最初のタイムを思い出して苦笑いした。

~~~~~

「ここに出してくれないか？」

俺はいま詰め所に来ている、ここで盗賊の死体を出していく。

1, 2, 3, 4……16人

「これで終わりだ。」

「こいつは!?リユウが壊滅させたのって狼牙盗賊団だったのか。」

「ああ、そういえばそういつてたな。」

「いや、たまげたな、まさか登録したばかりの新人が指名手配中のアンダードックを倒してくるとは。」

「たしかに苦戦したが、そこまでの強さはなかったぞ?」

『あるじ、嘘はよくないよ、結構やばかった。』

「いやいや、けっこう楽だったって。」

『ホイミ4回。』

「み、見てたのか……」

「ところでリユウは誰と話してるんだい？」

「ああ、スーと話してたんだ。」

「そうか、君たちは仲がいいんだな、だが国で従魔が暴れてその原因が主人や従魔にあったら全責任が主人がとってもらうことになっていくから気を付けるんだよ?」

「もちろんだ。」



「それでつと、これが盗賊討伐の報酬とアンダードックの賞金だ。」

リブロは他の兵士に袋を一つ持たせてこさせた、結構でかい。

「盗賊15人とアンダードックの合計で525,000Gだな。」

「…結構な量だな。」

「まあ、アンダードックの賞金が一番大きいかな。この紙をギルドに持たせて行ってくれ、君がアンダードックを倒したことの報告書だ。たぶんこれでランクを上げられるはずだよ。」

「お、それは助かる。」

「どうつてことないよ、これも兵士の義務さ。」

「そういえば盗賊団の宝はもらつてもいいのか?」

「ああ、盗賊の物は倒した冒険者の物だよ、ただ、貴族の持ち物のようなものがあつたら返してほしいかな、もちろん貴族から報酬は出る。」

「そうか、それを聞いて安心したよ、じゃあギルドに行くとするよ」

「ああ、これからも頼むよ賞金稼ごさん」

こうして俺は詰め所を後にした。

~~~~~

場所は変わつてギルド。

「依頼の達成の報告に来たんだが…」

「はい、何の依頼でしょうか。」

「薬草とスライムの核だ、それにいくつかうさぎとスライムの身の換金も頼む」

「かしこまりました、ではまずクエストの完了からですね、いくつ採つてきましたか?」

「薬草が500枚と核が15個だな。」

「……え?」

「どうかしたか?」

「い、いえ、ものすごい量でびっくりしただけです。」

「そうか?じゃあ換金頼む。」

そういつて俺は薬草500枚をカウンターに置いていく。

「……………本当に……………500枚…すごいですね、過去最高ですよこの枚数。」

「まあ、運が良かっただけだ。」

「そうですか、では薬草500枚と核が15個で7,000Gです。」

「ああ、ありがとう、それとこれを門の兵士から持っていくように言われたんだが。」

「これですか?……………!?……………これを本当に?」

「ああ。」

「少々お待ちください。」

受付嬢さんが「ギルドマスター!」って叫びながら奥へ消えていった……………面倒ごとの予感。

「お待たせしました、こちらへお越しください。」

おとなしくついて行くしかないか……………

「ギルドマスター、お連れしました。」

扉の奥から「入れ」と少し野太い声が聞こえる。

中に入ると筋肉ムキムキのマツチヨマンがいた。

「お前が盗賊団を壊滅させたリュウスケか?」

「ああ、そういうおっさんは?」

「俺はこのギルドマスターのグランだ、よろしく。」

「ああ、よろしく、リュウでいい……………で?呼んだのはなんでだ?」

「決まっている、リュウが本当に狼牙盗賊団を壊滅させたか確認するためだ。」

突如、おっさんから殺気があふれ出る、俺はすぐさまハヤブサの剣を抜き備える、そのときスーも威嚇をする……………しばしの沈黙……………

へ 威圧を取得しました へ

「ハハ、ハハハハハハ!なるほど!たしかに強いな、ああ、納得だ。」

リュウはフランクに収まりきれぬ人材じゃないな!」

「そうか、それはよかった。」

内心冷汗だくだくである、このおっさん強い。

「よし、今日からリュウはDランクとする、これはギルマス権限だ、誰にも曲げさせん。」

「Dランクからは試験があるんじゃないかったのか？」

「その試験が盗賊の討伐だ、冒険者たるもの盗賊を撃退できずに一人前とは言えん。」

「さっきの殺気はなんだ？」

「なに、ちよつと強さの目星をつけたただけだ。そっちのスライムもな。」

「スーがいること気づいていたのか。」

「もちろんだ。そのスライムがただのスライムじゃないこともな。そいつ一匹でEランク冒険者1人分ってところだな、普通ではありえないぞ?。」

「はあ、勘弁してくれよ。」

「なんだ?ランクは要らんのか?。」

「いや、もらっておくよ。」

「さて、やることも終わったし、これから訓練場で一戦、しないか?リュウ。」

「いや、酒場で一杯みたいなノリで言わないでほしい、死にそうだ。」

「訓練場には闘神の加護があつてだな、どんな致命傷でも細切れでも復活できるようになってるんだ。」

ステル何やってんだよ!

《いや〜やっぱり訓練は真剣じゃないと張り合えないじゃん?》

……………何も聞こえなかった、きつとそうだ。

「俺はおっさんみたいに戦いに飢えてねえ。」

「頼む!最近事務作業ばっかで体が訛ってるんだ。」

「ギル〜ド〜マ〜ス〜タ〜?。」

「ひいつ」

うわ、筋肉の塊のおっさんがおびえてやがる、この人はいったい!?

「あ、初めましてサブマスのクリストファーです、クリスとお呼びください。」

「ああ、よろしく。」

思ったより怖くない？ギルマスは何をおびえているんだ？

「で、ギルマス、あなたはまだ書類の確認やらが終わってないでしょう？いつまで待たせるんですか？体が訛る？あなたがいつまでたっても仕事を残しているのがいけないんじゃないですか？この前も逃げたでしょう？今度は荷がしませんよ？また徹夜したいんですか？ならどうぞ行ってもらっても構いませんよ？しかしその場合は私含めギルドの人間は一切手を貸しませんよ？それでもいいんですね？いいんですね？だいたいあなたという人は…」

あ、この人苦手だわ、正論ばかりだから何も言えないパターンだわ

「あ、ああ、分かった分かった、ちゃんと終わらせる！終わらせるからその辺にしろといてくれ!!」

「本当ですね？まったく、そういうわけですのでリュウスケさんの模擬戦はまた今度ということでおねがいします。」

「いや、こつちも助かった、このまま流さないと流されそうなどころだったんだ。」

「ではカードをDランクに変えてきますので少々お待ちください。」

「はくまさかクリスに見つかるとは……………」

「まあ、おっさん自業自得だな。」

こうして俺はDランクになった。

~~~~~

場所は変わって掲示板前。

「よお、リュウ。」

「ん？ああ、サザン達か。」

そこにいたのはサザン、ゼータ、リックの3人だった。

「どうした？良い依頼がないのか？」

「いや、ないわけじゃないんだよ。」

|||||

D



リユウスケ・ササキ

人間

職業：魔物使い

ランク：D

|||||

「…俺たちの一年って…なんだったんだろうな、リック……」

「才能の違い……ですか……」

「なんだお前ら、今までが無駄だったみたいな顔して。」

「なんか唐突にそう感じたぜちくしょう。」

「まあ、元気出せよ?」

「お前のせいなんだがな…まあいい、Dランクに上がったってことは俺たちと一緒にクエストに行けるじゃないか。」

「…それもいいかもな。」

「そうと決まったら早速……ゴレム退治と鉄鉱石採取を受けようぜ?」

「じゃあ行こうぜ!!」

「あ、今日は準備をするから行くのは明日からで頼むぞ?」

「えっ」

ゼータとサザンが驚いたように声を上げる（今は午後2時くらい）  
…まさかこの脳筋……

「当たり前だろう? さつき受付の人に聞いたが鉄山までは1日かかるらしいじゃないか。」

「そ、それもそうだな、よし今日は各自で準備だな! …それで気になつてたんだがそのスライムは従魔か?」

「ああ、バトルスライムのスーだ。」

「バトルスライムって種族なのか、俺はサザンだよろしくな。」

『よろしく。』

「よろしくだったよ。」

~~~~~

明日の朝に集まって出発することになった。

今日の残りの時間は食糧調達、アイテムの調達だな、インベントリのおかげでいくらでも買える。

「おばちゃん、野菜と肉を買いたいんだ。」

「おや、かわいいスライムだねえ、何がほしいんだい？」

「ありがとう、そうだな……」

ニンジーにキャベチーに、オオニワトリの卵、オオニワトリの肉
……あとは……

「ニンジー50本、キャベチー30玉、卵13個、肉10kg、あとポテト20個とそうだな、油を10L、酢を10L、塩、胡椒、を400gくれ。あ、あとパンを20個だ。」

「また結構買っていくね？胡椒は少し高いが大丈夫なのかい？」

「ああ、大丈夫だ。」

塩は100g200G 胡椒は400Gだ、砂糖に至っては700Gだった流石に買えない。

「それならいいけど、え〜つと？合計で37,000Gだよ。」

俺はすっかりちようどを渡す。

「まいどあり、また来なよ。」

「ありがとう。」

次は、雑貨屋かな。

「いらっしやいませ〜。」

「調理器具と食器がほしいんだ。」

「調理器具と食器ですね、こちらになります。」

店員さんに教えられた場所にはフライパン、フライ返し、鍋、中華鍋っぽい奴、フライパン、皿、コップ、フォークにスプーンそして……

「これはなんだ？」

「こちらの商品はE、F級魔石をセットしてつまみをひねると火が付く魔道具になっております。」

「じゃあこっちはっ？」

「こちらは同じ級魔石をセットすることによって物を冷やすことがで

きる魔道具でございませす。」

……………コンロに冷蔵庫か。

「この魔石でどのくらいもつんだ？」

「これ一つでだいたい2ヶ月ほどです。魔石の階級が大きいほど長く交換しなくてはすみませすがこの魔道具が耐えられない場合がございませすのでご注意ください。魔石は当店でも取り扱っておりますしダンジョンでも手に入れることができます。」

ダンジョンか……………そういえばもう入れるランクだったよな……………明日からの依頼が終わったらいってみるか。

「じゃあその二つと器具一式と皿にコップ、スプーンにフォークを三組くれ。」

「はい、お買い上げありがとうございます！合計で867,000Gになります。」

おっふ、アンダードックの金がなかったら買えなかったな……………

「あ、魔石も2つ頼む。」

「魔石2つ800Gですね。」

「これでちょうどだ。」

「お買い上げありがとうございます！こちらの商品はどうするんですか？」

「ああ、インベントリに入れていくから大丈夫だ。」

「そうでしたか、ご利用ありがとうございます！またのお越しをお待ちしています！」

さてと、つぎは、武器屋か、武器壊しちゃったもんな……………おっさん怒るかな……………

……………

「よお、景気はどうだ？」

「どうしたいきなり、まあまあだよ、で？どうした？まだ4,5時間しか立ってないぞ？まさか武器をもう壊したってわけじゃないだろうな？」

「……実はそうなんだ。」

「まさかほんとに壊してくるとはな、その武器はしっかりお前を守れたか?」

「ああ、これがなかったら勝てなかったさ。」

「そうか、ならその武器も本望だろ、どうする?新しい武器をつと、もうあるじゃねえか、どうしたそれ。」

「ああ、狼牙盗賊団の宝の中にあつたやつだ。ハヤブサの剣と炎の剣があつてこれはハヤブサの剣だ。」

「はっ、まさか初心者かBランクの武器を持つとはな。だがおめえ、いつの間に隠蔽なんて覚えたんだ、成長が見られないだろ?」

「何が見られないだろ?だよ、勝手にみんなよ、プライバシーの侵害だ。」

「ぶらっぱしーってのがなにか分からないがこれが唯一の俺の楽しみだ。誰にも邪魔させん!で?どうしてここに来たんだ?」

「ああ、買い物と新しい相棒の紹介だ、スーって言うんだ。」

「ほうほう、これはまたなかなか強いスライムじゃないか。」

「また勝手に見てるのか。」

「いいじゃないか、減るもんじゃないし。」

『見られても平気、強いのは成長の印だよ、あるじ。』

スーは強い子だった、たくましく育ってくれて俺は嬉しいよ。

「明日から少し遠出、と言うか鉄山の依頼を受けていくんだ。それで投擲用の投げナイフをくれないか。」

「投げナイフね、いくつだ?」

「2、30本でいい。」

「じゃあ30本で9,000Gだな。」

「じゃあこれで丁度だ。」

「まいどあり、鉄山ってことはゴーレムも受けるのか?」

「ああ、そうだな。」

「ゴーレムのおかげで鉄が入ってこなくて困ってたんだ、よろしく頼むぞ。」

「了解だ。」

こうして一日が終わった。

龍介、鉄山に行く

すうく……すうく……顔に何かがあたってる……けど眠い
ペチペチ、ペチペチ
……プヨン……くっ……ぐぐぐ……

「ふはあつ!!」

『あ、あるじやつと起きたらもう少しで時間だよ?』

「はあ、はあ、スー起こすときはもっと優しくしてくれよ…」

どうやらスーが上に乗ってて息ができなかったようだ。

『だってあるじ全然起きないんだよ?こうするしかなかったよ。』

「そうなのか?それはすまなかったな。」

ともかく起きないことには始まらないので起きて朝食を食べて待ち合わせの北門に眠い目をこすりながら向かった。

~~~~~

「お、やつときたか。」

「すまない、遅くなったと、馬車か?」

「別にいいってことよ、鉱山に潜るとなるとそれなりに荷物があるからな。お前の荷物はそれだけか?準備するって言ってた割には少ないじゃねえか。」

「ああ、インベントリに全部入ってる、何ならそっちの荷物も持っていけるぞ?」

「そうなのか?空間魔法持ってたのか、とことん羨ましいやつだよお前は。」

「本当に、羨ましいですね。」

「ん?魔物使い全員が使えるわけじゃないのか?」

「そもそも魔物使いが少ないし職業についた時に使えるスキルつてもひとによって違うんだ。」

「そうなのか、となると俺は本当に運がいいんだな。」

「本当、運がいいよお前は。」

「で、どうする?」

「じゃあお願いします。そのほうが馬車の負担も減るでしょうし。」  
「了解だ。」

馬車に積んである荷物を片っ端からインベントリに突っ込んでいく。

「ほんとに全部入っちゃったよ、すげえな。」

「よし、これで終わりだな。」

「ありがとうよ、助かった。」

「大したことじゃない。」

「よし、じゃあ鉄山に行くか。」

く休憩時間く

「あく、腰がいたい……………クッションかなんか持ってくればよかったです。」

「ははは、さては馬車に乗り慣れてないな？そんなんじや遠出や護衛なんてできねえぞ?」

「仕方ないだろ、俺の国では車っていうこんな硬い席とかじゃない。便利なものだったんだぞ?」

「そんな便利なものがあるのか、いつか乗ってみたいものだな!」

「車の構造はわかってるんだが作れる奴がいるかがわからないんだ。」

「そうなんですか、それは残念ですね。」

「だが、いつか作るさ。こんなのに乗ってたら尻が壊れそうだ。」

「その時は乗せてくれよ?」

「もちろんだ。」

「おい、昼飯にするぞーリュウ、食料を出してくれ。」

「わかった。」

ついでに俺たちの分も作るか。

フライパンにコンロ、大鶏の肉を少し薄めにスライスして、塩、胡椒をふりかけてキャベチーと炒め黒パンに挟む、まあ簡単な野菜炒めをパンに挟んだだけだ、でも黒パンが硬い、食えなくもないけど硬い、あとぼそぼそしてる……………俺が絶対に白いパンを作ると決心した瞬間であった。

く料理術を取得しましたく



~~~~~

左手に森がある道を通っていた時のこと。

……………見られている……………

「見られてるな。」

サザンがこっそり話しかけてきた。

「ああ、だいたい7人だ。」

「わかるのか？」

「気配察知がある。」

「本当万能だよな…盗賊か。」

「おそろくな。」

「冒険者を襲うなんて馬鹿な奴らだな。」

「俺たちが中にいるしリックが御者やってるから商人にでも見えたんじゃないか？」

「はは、かもな。」

「どうする？」

「もちろん全滅だ、もしくは捕縛して奴隷商だな。」

「奴隷なんているのか？」

「何だ知らなかったのか？」

「俺の国ではとつくの昔に廃止されているさ。」

「それは驚きだ。」

「後で詳しく教えろよな、あと5mだ。」

「わかったよ」

すると盗賊らしき声が聞こえた。

「おら!!馬車の荷物全部置いていけ!命ぐらいは見逃してやってもいいぞっ。」

「ははは!早くしろお!!」

「ヒヤッハー……………」

「さてやってやりますか。」

俺たちはサザンたちと馬車から飛び出した。

「おうおうおうおう、お前らあ!冒険者の馬車狙って無事に帰られる

よ思うなよ！」

「死にてえ奴からかかって良いや！」

完全にヤの付く人ですわわかります……じゃなくて、目の前には6人しかないいな……

1人が……茂みの奥にいるな……弓かそこら辺か？

「スー、森の方に1人いる、やれるか？」

『もちろん！任せてあるじ。』

盗賊とサザンたちが話してる間にスーを茂の方に向かわせる。

これであつちは終わりだ。お、ちょうどこつちも。

「人数は俺達のほうが多い！こんな奴らぶつ殺しちまえ！」

「おおおおおお！」

「ヒヤッハーーーーー！！！」

盗賊が叫ぶ。

「おお、威勢がいいな。」

「はは、こうでなくちゃ。」

相手の戦力を人数で軽視した盗賊達は真つ向から突っ込んでくる

………バカだこいつら。

「疾風突き！・火炎斬り！」

「グアアアア！」

「正拳突き！・爆裂拳！」

「っ！」

「げっ！がっ！ぶっ！ぎゃっ！」

最初に動いたのはサザン、盗賊に鋭い突きを一撃その後燃える剣で一刀両断。

どういう原理なんだろう。

ゼータは向かってきた2人のうち1人を腰を深く落とし、まっすぐに相手を突く……中段突きだ胸部がへこんで相手が声を出さずに沈んでいることからその威力が尋常じゃないことがわかる。

会心の一撃！相手は死ぬ……

2人目には連続で4回ほどの拳の雨、痛そう。

「うらあー！」

「おらあ！」

「ふん！」

「・・・隼斬り。」

こつちには3人来たが俺の敵ではない、すべての攻撃を余裕を持って躲し隼斬りを放つ！

「ぐっ！」

「なに!？」

「ぼっ、バケモノだ！」

・・・びつくらこいたあ、まさか人が8等分になるとは…SAN値が下がりそう

ハヤブサの剣……これは強い。

怯んだ隙に足払いをかける。

「うわ！」

「くっ」

見事にすっ転んだ盗賊、チェックメイト、盗賊の喉元に剣を突きつける。

「ぐっ、降参だ。」

「こ、降参だ。」

へ レベルが上がりました へ

降参した2人を縄で拘束する。しかし盗賊のニヤニヤは止まっていない、たぶん森の1人を待っているんだろうが……

「なっ」

来たか。

『あるじく終わった。』

「いい子だ、夜もつとうまい飯を作ってやるからな。」

『やったー。』

もう1人の盗賊を引きずって森からスーが出てきたのだ。盗賊は……気絶つと、縛つところ。

「終わったな。」

「ああ。」

「全く出番がなかった。」

リックが落ち込んでる、僧侶だからしようがないんじゃないのか？
「治療士だからしようがないんじゃないか？」

「一応火の呪文は使えるんです。リュウさんの支援でもしようかなと思っただら結構余裕でしたし。」

「そうだよ、リュウほんとに強いな。人が8つに分かれるところなんて初めて見たぜ。」

「この剣のおかげだな、ハヤブサの剣って言って1回で2回攻撃できるんだ。隼斬りと合わせて4回攻撃だな。」

「もうそんなの持つてるのか、いいな。」

「サザンの燃える剣はそうだったものじゃないのか？」

「これは火炎斬りって言ってな、剣に炎をまとわせて斬る特技だ。」

「炎の剣とは違うんだな。」

「炎の剣は魔剣に片足突っ込んでる一級品だ最低でも100万はくだらないぞ？」

「そうなのか？炎の剣なら持つてるんだが、何分使い方がわからなくてな。」

「……………本当に規格外だということを実感するぜ：買ったのか？」

「いや、盗賊の宝の中にあつた。」

「そうか、すごいやつを倒したんだな、羨ましいぜ。で、魔力のことだがリックの方が詳しいな。」

「ええ、魔力は自分の体のうちに宿るもので体の奥底に意識を集中させると温かい塊があるのがわかると思いますそれが魔力と言われま

す。」

少し集中してみる……………

「……………あ、これか？」

「飲み込みが早いですね。その塊を全身にまとわせるように動かせることができれば身体強化というものになります。ですが常に魔力を消費している状態なので魔力を大量に持ってないと持続は難しいです。」

「……………こうか？」

「魔力操作を取得しました」

〈 身体強化を覚えました 〉

「ほんとに、規格外ですね。目に魔力をまとわせると魔力を薄くですが感じる事ができます。呪文を使うときは自然と魔力が手のひらから消費され発現しているんです。」

「なるほどな。」

〈 魔力察知を取得しました 〉

サザン達の中心に薄い光があるのがわかる、これが魔力。

「何か呪文を使ってくれないか？」

「いいですよ。メラ」――ボウツ

リックの光が右手に伸びて右手から出た瞬間赤色に変わり火の玉が出る。こういう仕組みか。

〈 魔力察知のレベルが上がりました 〉

「それでどうやって色を変えているんだ？」

「どうということですか？」

「メラを発動した時、魔力の色が赤に変わったあとに発動してたからな。どうやって色を変えているかが知りたいんだ。」

「それは発動させたい魔法を思い浮かべると変えることはできるので、すがスキルを使わず発動させるのは非常に困難と言われています。炎の剣なら魔力を込めて使いたいと思うだけで使えると思います。」

「やってみるか。」

俺はインベントリから炎の剣を出し魔力をまとわせてみる。

――ボウツ

「お、出たな。」

「こういう物はだれにでも使えるのでとても高価なんですよ。」

さてと、どうやって魔法を出すか分かったがまだ気になることがあるな……ステルにも聞いてみるか。

「分かった、ありがとうな。」

「お安いご用です。」

「さて、こいつらどうする？」

「気絶させて馬車に積んでおきましょう。死体はインベントリに入れてもらっても良いですか？」

「ああ、構わないが、この細切れのやつはどうする？」

「ああ、燃やしますから置いて置いて置いていいですよ、少しもつたいないですが。」

というわけで盗賊を気絶させ死体をインベントリにしまっていく。

↳馬車↳

さて、シャルに聞きたいことがあるがどうやって話しかければいいやら……

《呼びました？》

呼ぶ前に来ちゃったよ

《思念が飛んできたので、あと呼ぶときは念じるだけで大丈夫です。しゃべる時も思うだけでいいですよ》

『こうか？』

《上手です、それで何か聞きたいことがあるんですか？》

〈 念話を取得しました 〉

『ああ、魔法の発動だがあればスキルを持っていないと発動しにくいのか？』

《ええ、ただしそれは知識不足だった場合です。魔法はその分野について知っていれば知っているほど発動することができます。イメージが大切です》

『……科学をかじっていないければいけないってことか、あと想像力？』

《ですが地球の知識を持っている龍介さんなら、簡単に発動できますよ？》

『地球とこことはそこまで違うのか？』

《ええ、火はどうして燃えるのか、どうして燃え続けるのか、火の温度、そういう知識はあまり発展していません。ただそういうものとか考えていないようですよ。》

『だがスキルのレベルが上がれば新しい呪文を覚えるんだろう？スキルが有れば意識はいらぬのか？』

《そういうわけではありません。全く知識を持たないと最低ラインの威力しか出ないんです。ですが魔力を多めに込めることで威力を上

げることができません。ここだけの話なんです。ここだけか大ききさなど
思い浮かべればその通りになります。この世界では全く使われない
システムでしたので是非活用ください。あと、水魔法は存在しませ
ん。理由としては水のような複雑なものを操るのには脳に負担が掛
かり過ぎるからです。ですが並列思考といったスキルがあれば不可
能ではありません。》

『なるほどな。あと、もう魔力が回復したんだがこれは普通か?』

一秒にMPが1回復している感じだ。

《普通じゃありません、多分体質ですね。》

『体質?』

《なんといいですか、いるんですよ。ホイミなどをかけられて回復量
が多い人や逆に効きにくい人、めったにいないと思うんですけど龍介
さんは魔力の回復量が異常に早いんでしょう。》

『そんなものもあるのか。謎が解けたよ、助かった。』

《いえいえ、また頼ってください、私達はいつでも見えていますよ♪》

『それはストーカーということでもいいのか?』

《そんなことありませんよ! たまに覗いてるだけです! やっぱりに
なりますからね。他の神たちも多分見てるんじゃないかなと思います
すよ。多分接触もしてくると思います》

『それは、また厄介事になりそうなんだが?』

《多分大丈夫ですよ! そ、そこまでひどいことにはならないと思いま
す。》

声が震えてるんですけどシャルさん?

『おーい、リュウ! そろそろ行くぞ。』

『ああ、分かった!』

『そういうわけだから、もう行く。また何か聞きたいことがあったら
連絡する。』

《ええ、お待ちしております。》

シャルとの会話を切るとサザンたちの方へ向かった。

〜夜の野宿〜

「リュウ、テント張るから手伝ってくれ。」

「なあ、テント張ったあと見張りはいるんだよな？」

「なに言ってるんだ、当たり前前だろ？じやないと魔物に襲われて全滅だぞ？どうした？いきなり。」

「いや、俺、ちよūdい魔法を持っているんだ。」

「魔法？」

「ああ、もちろん他言無用だ。」

「ああ、もちろんだ誰にでも隠したいことの1つや2つある。」

まあ、サザンたちなら大丈夫か。

「じゃあ行くぞ。——ルーム」

目の前に白い扉が現れる

「これは？」

「空間魔法のルームだ、異空間に部屋を作る。魔力を消費することによって内装を変えられる、森から宿の部屋まで何でもだ。」

「おいおいそれはまた最高にやばいな。その森ではなにか取れたりするの？」

「一応取れるぞ、魔力が一つに50いるけどな。」

「おおう、それはすごいな、ちなみに味は？」

「そこそこうまい、食べてみるか？」

「いいの？」

「ああ、前作った時の森がまだ残ってたはずだ」

前回少し試した時のまま残していたはずだ。

今いるのは扉が16個ある通路だ、左右に7つ奥に1つ、後ろに今入ってきた入り口でこの扉は白色で他の扉は全部灰色だ。んでもって扉の上に左から1、2、3とぐるっと回って右に15となつていい。

俺は1と書かれた扉に入る、サザンたちもついてくる。

扉を抜けるとそこは………平原と森でした。

「はっ？」

「え……」

「こりゃあ……」

驚いてるな、ちなみに部屋名は『平野と森』、そのままである、ネー

通路に戻ってきて2の部屋に入る。

「なにもないな。」

ゼータが言ったように何も無い、真っ白な空間だ。

「ちよつと待ってろ。」

目の前に出てきたウィンドウに何の部屋にするかを入力する、前にMPの回復だ。

|||||

ワンルーム Lv1

次のレベルまでの必要魔力量

0 / 150

現在の効果

最適な温度、湿度の維持

魔力消費による家具の生成 ▽

|||||

へ 空間魔法のレベルが上がりました へ

MPを100消費してキッチン、トイレ、風呂付きのワンルームを作った。家具を置くには魔力を捧げなきゃいけないのか………もつと魔力がほしいな………とりあえず作れる家具を見えるか。

|||||

生成可能家具

ベット：MP20消費

タンス：MP30消費

テーブル：MP40消費

椅子：MP10消費

冷蔵庫：MP60消費

|||||

ベットを4つと、冷蔵庫置けばとりあえず問題はないかな。

置く場所を指定し作ろうと意識するとポンツというなんとも柔い音とともにベットと冷蔵庫が設置される。

「できたぞ、あと土禁だから玄関で靴は脱げよ?」

「靴を脱ぐ部屋なんて初めてだな、リュウの国の習慣か?」

龍介、鉄山に行く 2

く起床く

今回はスーに起こされず起きることができた。スーはまたあの起こし方をしようとしていたらしい……きちんと起きよう。

「ほら、朝飯できたぞ。」

今日の朝飯は昨日の残りのスープに卵を入れた卵スープに焼き鳥、黒パンだ。

それにマヨネーズも作ってみようかな。

材料は卵黄、酢、水、塩、胡椒、油だ。

作り方は卵黄1個に対し、酢を大きじ1程度、水小さじ1、塩、胡椒を少々何だけどオオニワトリの卵少し大きいからな……適当でいいか。

卵黄1個に対し300ccぐらいまでの食用油を少しずつ加えながら、好みのマヨネーズの食感にまで混ぜあわせる。

途中で分離しそうになったら酢を加えてつと塩、胡椒を加えて完成、ちよつと多めに2kg作ってしまった。

ぺろっ……よし、しっかりマヨってる。

へ 料理人のレベルが上がりました へ

『あるじー、それなに?』

「お?なんだ?その黄色いの。」

「これは俺の国の調味料だ、食ってみろ。」

そう言つてマヨネーズを勧める。

『おいしく!』

「おお、うまい!」

「おいしい!食べたことない味ですね。」

「なんにでも合いそうな味だな。」

そうだろうそうだろう、マヨネーズは何にでも合うからな!

あとは醤油と味噌、わさびも欲しいな……味噌、醤油は発酵させなきゃいけないからインベントリに入れられない。となるとここで作るか。ま、後で考えるか。

「さて食べるか、いただきます。」

「なあ、そのいただきますってのは何だ？」

「これは俺の国の礼儀作法で、その食事の素材を作ってくれた人、料理を作ってくれた人、そしてその食材に感謝する言葉で、そして食べ終わったら感謝の気持ちを表してごちそうさまと言うんだ。」

「へく珍しいな。確かに神様に感謝することはあっても料理人や食材そのものに感謝したことはなかったな。」

「たしかにそうです。リュウサンの国の人達はみんなそんなに礼儀正しいんですか？」

「あく確かに落ち着かないほど礼儀正しい国とか言われてたりするな。」

「ははは、そりやすごいな、そこまでか。」

「まあな、さて早く食べようぜ、飯が冷めるぞ。」

「『いただきます。』」

~~~~~

「『ごちそうさま(でした)。』」

「いやこのマヨネーズってやつ、ほんとになんでも合うな。肉にかけてよし、パンにかけてよし！もう最高だ。」

「リュウさん、これ売ってもらえませんか？」

「ああ、確かにこれはほしいな。」

「別に金なんて取らないんだが。」

「いいえ、これを無料でもらうなんてとんでもない。ぜひ対価を払わせてください」

「お、おう。」

いつになくリックが押してくる。

「といつてもいくらの値をつければ良いのかがな・・・サザンたちはこれにいくらの値をつける？」

「1000G」

「2000G」

「1500G」

……………結構な値がついたな。

「ちなみに量は？」

「500g」

「じゃあ500gで1500Gだ。」

「じゃあ500gください、1500Gです。」

「まいどあり。あまり日持ちはしないからさっさと食べたほう良いぞっとじゃあそろそろ行くか？」

「「そうだな（ですね）。」」

時間的には朝の9時ほど、飯を食べ終わった俺達は外に出て目的地へ向かった

~~~~~

「ついでぞ。」

「確か坑道の奥にゴーレムが現れたって話だよな。」

「そのはずだ。」

「じゃあなんで、ゴーレムが2体守るようになっているんだ？」

俺に聞かれても困る。先ほどサザンが言ったように鉱山の入口の左右に2体ゴーレムがいる。

ちなみにステータスがこれだ

右

|||||

ゴーレム ♂ Lv7

ランク：E

HP：182／182

MP：24／24

攻撃力：96

防御力：80

素早さ：20

賢さ：19

器用さ：25

幸運：45

んでもう1体

左

ゴーレム ♀ Lv9

ランク：E

HP：198／198

MP：30／30

攻撃力：116

防御力：104

素早さ：26

賢さ：24

器用さ：31

幸運：51

「どうする？、俺は左のやつとやりたいんだが。」

「大丈夫なのか、あっちのほうが一回り大きぞ。あれくらいなら余裕だが？」

右が4m、左が5mぐらいかな。

「あっちのほうが好きそうだ、行くぞ！スー。」

『あるじ、戦闘狂になった？』

「あ、おい！くっそしかたねえ！俺らは右をやるぞ！」

「おう！」

「はい！」

失礼な、そんなわけない…よな？き、きつと称号のせいだ、うん。

「さてと、スー相手はHPと攻撃力、防御力が高いがあとは雑魚だ、どう闘う？」

『スピードで翻弄、地味に削る。』

「良い手段だ、ついでに魔法も組み込むぞ。」

『あるじ、魔法使えたっけ？』

「昨日使えるようになった。」

試しにイメージしてみる。そうだな確か地表に出た溶岩の温度が1000℃ぐらいだったような。

じゃあ直径10cmくらいで1000℃、ちよつと圧縮してみよう。魔力で包んでにぎにぎと。

……直径4cm位になつたな。

へ 火魔法を取得しました へ

へ 火魔法のレベルが上がりました へ

「あつくは・・・ない、おかしいな、1000℃なはずなんだが。」

『あるじ、それなに？すつごく熱気が来るんだけど。』

「自分にだけ熱さが来ない？そういう仕組みか。」

多分考えるだけ無駄なんだろう。

「とりあえず投げてみるよ。」

シユンツ！バガアアアアン!!!……

い、今ありのまま起こつたことを話すぜ：俺は今奴に火の玉を投げたんだ、次の瞬間には奴の右腕がはじけていた……な、なにを言っているかわからねえと思うが俺にもわからん。圧縮がすごいのか温度がすごいのか……でもレンガが1000℃で溶けるか微妙なところだな。ロシア軍のナパーム実験で、赤レンガがっら状に溶けたりしてた画像見たけどどうなんだろう、よくわからん、まあ、結果オーライ!!

『いまのなに？あるじ。』

「ちよつとした火の玉だ。」

『威力が違うけど？』

「ちよつと熱い火の玉だ、説明すると1000℃位ある火の玉を圧縮して投げただけだ。」

『すごい！あんなの始めてみた。』

「そうだろう、そうだろう、さて行くぞスー！」

『らじやく。』

だいたい半分、ぐらいHPがなくなってるな、行けるだろ多分。

へ ダツシユのレベルが上がりました へ

奴は右腕が無くなっている。ということ左手一本で俺たちを捌

かなきやいけないってことだ、賢さ的に無理だろうから余裕だな。

俺は右手に剣を持ち左手で魔法を練る、そんなスタイルで行つてみようと思う。

さてスーが相手の集中乱しているうちに俺はハヤブサの剣で斬りながら―スパツ！―

……あれ？おかしいな……硬いと思つて身構えてたのにすつぱりと斬れた……これは、攻撃力と防御力の差つてやつか？まあ良いや、試しにメラ使つてみるか―ボウツ！

さつき使つたのと同じやつか？大きさは圧縮前だけど……まあ押し付けてみるか。

ジュオオオオオオ……溶けたな、うん、あ、コアだこいつが弱点っぽいな。

ガラガラガラガラ……サラサラサラ……

コアを外すと崩れ砂になった。

「終わったな、ほらコアだ。」

『綺麗だね。』

「ああ、そうだな。」

へ レベルが上がりました へ

|||||

リュウスケ・ササキ 男 Lv20 → 2

種族：人間 15歳

職業：魔物使い

HP：337 / 337 → 15

MP：276 / 276 → 12

攻撃力：216 → 10

防御力：212 → 14

素早さ：227 → 13

賢さ：194 → 14

器用さ：246 → 11

幸運：***

称号：シャルムとタイステルの加護

「どう見ても入り口は3mほどののに、ゴーレムがいるってことがおかしいんだよな。」

「……………確かに、まあこれ見たらそういうこととしか言えなくねえか？」

「かもな、この先に一体何がいるんだろうな。」

俺達が見たのは地面からゆっくりと出てくる3体のゴーレムの姿。全く、楽しいねえ

しかし1体色が違うな。

「どうする?」

「全部あいてにしても負けない自信はある。」

「最初あんなグリズリー相手してただけはあるな、まあ、2体は俺とスーがもらうさ。」

「あの時は火事場の馬鹿力ってやつがあっただな……………大丈夫なのか？」

「余裕だ。」

|||||

ゴーレム ♀ Lv9

ランク：E

HP：180／180

MP：29／29

攻撃力：112

防御力：104

素早さ：30

賢さ：30

器用さ：33

幸運：61

|||||

|||||

ゴーレム ♂ Lv8

ランク：E

HP：177／177

となると怒りの魔神も？でもあれ合体系だった気がするな。合体、ロマンだな……—ブンツ!!—おっと、うーん、ゴーレムより少し早いくらいか。硬さは—サクツ—少し硬い、が行けないわけでもない、じやあ呪文を重点的に使ってみるか、両手に魔力をためて、右手にさっきのメラ、左手には水…がほしいんだけどないんだったな。

氷か、んくそうだな、長さは1mくらいで、氷柱みたいな？

すると左手に長さ1m直径5cmほどの氷柱ができてきた。おい感じいい感じ、パキパキ言ってるよこれ。

ちよつと投げてみる。あ、ちなみにストーンマンは必死に攻撃してきたるけど俺が紙一重で躲しています。

へ 並列行動を取得しました へ

へ 並列思考を取得しました へ

へ 氷魔法を取得しました へ

へ ヒヤドを覚えました へ

そしてこの氷柱をストーンマンの足に投げつける！するとなんということでしよう！相手の足が地面に貼り付けてしまいました！こう、円形に広がる感じに凍らせているそして右腕にメラを叩きつける！これで使い物にならなくなったはずだ。並列思考のレベルを上げれば連射も容易にできるかもな、そう思いながら右手にメラ、左手にヒヤド投げつける、関節を溶かして固める。これで右手が使えなくなったな、ついでに左腕も固めとくか。

そしてメラミの威力を試してみよう。まず、普通に威力を確かめる—ボウツ—、んく火の玉が2つ回って飛んでいった、メラに比べると火力は劣るかな？って感じですこし表面を溶かした感じだメラだともう少し奥まで溶かすもんなく、2つ回って飛ぶからなく、おっと動きが鈍くなってるな、もうすぐ終わりか、コアを取り出すか……あ、これって魔力察知でコアの場所とかわからないかな？

あゝ薄っすらと左胸に魔力が集中してるな、よし。

「しっ!!」

胸のあたりを三角に切ってコアを取り出す。これで終わりだな、ストーンマンは崩れて砂になっていく。

龍介、鉄山に行く 3

鉄山の通路の広さは縦横3mくらいで下に向かって掘られている。

一見迷路のようだが出口に繋がる道は少し広めに作られているように最深部までは広い道を奥に行くだけで良いらしい。

「しかしよく見たら意外と広いんだな。」

「細い道に入ると迷うぞ、広い道は出口に繋がる大切な道だからわかりやすくしているらしいぞ。」

「確かに横道は迷いそうだな。」

あと、坑道には所々明かりの魔道具が置いてあから見やすい。

「この魔道具って量産できるんだな。」

「ああ、使う術式も簡単で使う魔石も低コストだからな、もちろん高レベルの魔道具は作るのに才能と最高の素材がいるがな。」

「術式？何だそれ？」

「術式って言うのは魔道具を作るときに刻む文字で魔力を込めて発動することが出来ます。ダンジョン産の魔道具にはこれが無いことから高値で取引されたりするらしいです。」

「その術式ってのは見ることができてるのか？」

「ええ、魔力察知で見ることが出来ますよ。」

見てみるか。

俺は魔力察知を使い魔道具を見てみる、すると……

へ 魔石 光ヲ 灯ス へ

……………んく……………日本語……………かな？

『魔石 光ヲ 灯ス』か…」

「リュウさん！読めるんですか!？」

「え？ああ、読めるぞ？」

「すごい！古代文字は解読不可能と言われていたのに！」

「解読不可能ならなんでこれが使えてるんだ？」

「古代の文献にこの組み合わせでこうなるといった感じで残されていたんです。文字の方はまだ解析中のはずですが…」

「まあ、詮索しないでくれ。」

「わ、分かりました。」

「お、広いところに出るぞ。」

広いところに出るとそこは休憩所?のようなところだった、そこに佇んでいるのは。

「ゴーレムだな。」

「ああ、あれが出てきたゴーレムか?」

「確か最深部だったはずだ、ここはまだ中腹つてところだ。」

「でも4体は多くねえか?」

「たしかに、最深部にはもつと強いのかがあるのかもな。」

「洒落になんねえな。」

|||||

ゴーレム ♂ Lv9

ランク：E

HP：129 / 129

MP：31 / 31

攻撃力：114

防御力：105

素早さ：27

賢さ：23

器用さ：32

幸運：46

|||||

これくらいのが4体だ、余裕かな。

「どうする?俺達だけで全部受け持つでもいいぞ?」

「へっ、なに言っただよりユウ、もちろん半分もらうにきまてんだろ。」

「さつき、思ったより早く倒せたからな、多分行けるだろ。」

「そうか、じゃあ半分だ。」

そう言うや否や俺はメラを2体にぶつける。どちらも一部が吹き飛ぶ、これで2体のターゲットは俺に変わったはずだ。

「スー、1体頼むぞ。」

『わかった。』

スーは素早くゴーレムの足元に滑り込み両足を引っ掛けて倒し、伸ばした体でめった打ちにする、痛そうだな。

こっちはどうするか、すべて受け流してみるか、ひたすら、ひたすら受け流す、受け流す、受け流す、受け流す、受け流す、反撃、受け流す、受け流す、受け流す、反撃、蹴りで反撃したら格闘術上がるかな？

受け流す、反撃、受け流す、反撃、受け流す、反撃、受け流す、反撃、受け流す、反撃、ズーン、あ、両足が砕けてた、やり過ぎだな。

へ 格闘術のレベルが上がりました へ

へ 回し蹴りを覚えました へ

よっし、計画通り！あとは、コアを抜き出すのみだ、左胸にコアつと、簡単だな。

「終わったな。」

『あるじく、はい、コア。』

「お、ありがとうな、スー。」

「ふー、結構余裕だったようだな。」

「ん？ああ、そっちも余裕そうだな。」

「まあ、あのグリズリーに比べたらスライムも同然だ。」

「で、もう少しで終点だな。」

「そうだな、原因を倒したあと、鉱石採集だ。」

~~~~~

「もう少しで最新部か？」

「ああ、距離的にそんな感じだ。」

ここまでの間にゴーレムの壁と数回、戦闘になった。戦闘といっても遠距離から一撃だった。

この時レベルも上がった。

|||||







- ・隠蔽 L v 2
- ・魔力察知 L v 3
- ・ダツシユ L v 3
- 特殊スキル
- ・伸縮自在 L v 4
- ・悪食 L v 2
- 特技
- ・身体強化

スーは格闘術、魔力察知、ダツシユ、悪食のレベルが上がり俺は並列行動、並列思考、魔力操作が上がった。

今回進化が来なかつたってことはランクごとに進化する基準が違  
うようだ。

そして最新部の入口付近につく。

少し前から何かいるのは気配察知でわかっている。ただ1体だけ  
けつてのが引つかかるな。

「少し覗いて見るぞ。」

サザンが先に広場を覗くみたいだ。

「っ!」

「どうした?」

「なんかやばいのがいる。」

俺も覗いてみるか・・・全身真っ黒い見た目のマネキン?み  
たいなのがいるな。

|||||

ダークゴーレム ♀ L v 28

ランク：D

HP：377 / 377

MP：128 / 128

攻撃力：248

防御力：284

素早さ：190

賢さ：203

器用さ：227

幸運：74

やばっ！今までで一番やばい、自分より少し高いステータスだ。

へ 鑑定眼のレベルが上がりました へ

お、これでMAXだな、もっかい見るか。

ダークゴーレム ♀ Lv28

ランク：D

HP：377／377

MP：128／128

攻撃力：248

防御力：284

素早さ：190

賢さ：203

器用さ：227

幸運：74

スキル 攻補助魔法 Lv1 ・格闘術 Lv4

・闇魔法 Lv1

特殊スキル 影術 Lv3 ・ゴーレム生成 Lv2

スキルまで見られるようになったのか。で、攻補助魔法と闇魔法、

影術が所見か。

攻補助魔法 相手にマイナスの状態異常を与える魔法

闇魔法 闇を扱う魔法

込める魔力によつて暗黒さが増す

闇魔法

闇魔法

闇魔法

闇魔法

闇魔法

込める魔力によつて暗黒さが増す

影術

影を使う術

暗殺者の終着点

ゴーレム生成  
自分以下の強さのゴーレムを作り出す  
レベルはランダム

影術と攻補助魔法に気をつけなきゃな。

「どうする？流石に行けるか怪しいぞ？」

「いや、あれは俺がやる。」

「いけるのか？」

「五分五分だ、あと入り口で出てきたゴーレムはこいつの仕業だったようだ。そういうスキルが有る。」

「……よし！じゃあもし他のゴーレムが出てきたら任せろ！」

「ちよ、リュウ一人で大丈夫なのかよ、俺達も加勢したほうが。」

「あれみたら無理だつてわかるだろ。」

「確かに……」

「リュウで五分つて言ってたんだ、俺らがどうこうできる奴じゃない。」

「わかった、リュウ、しっかり倒してこいよ。」

「ああ、スーも新しいゴーレムが出たら頼む。」

『わかった、気をつけてね。』

「もちろんだ。」

俺はダッシュでダークゴーレムに詰め寄る。するとダークゴーレムを守るように4体のゴーレムが出てくる。

ゴーレム3体とストーンマン1体だ、平均10レベル、十分サザン達でカバーできる。

出てきたゴーレムを掻い潜りダークゴーレムに魔法をぶち込もうとした、が、それが当たるとはなかった。

目の前からダークゴーレムが影に消えた、その直後警告が脳内に響

き渡る。

「いふっ!？」

〈物理耐性を取得しました〉

次の瞬間俺は壁に吹き飛ばされていた。いってえ……額に血が伝うのが感じられたし少しくらくらする。

「べ、ベホイミ。」

影術ってそういうことかよ…

奴は影を自在に移動できるらしい。

それは暗殺者の終着点だ、影を自在に移動できれば暗殺仕放題だな。

「っ!？」

攻撃を受けた時に何かされたか?!いきなり体から何かが抜ける感覚が襲った。なんだ？

……ステータスに状態という項目が増えて防御力低下と書いてある。げっ、防御力が4分の1減ってるこれは攻撃されたらやばいな……

ダークゴーレムは右手に魔力を集めその魔力が黒く染まった、闇魔法か？

黒い塊を飛ばしてくるがーブオオオオンー少し早いだけで目で追えない程でもなーガガガガガー……い……

……威力は高めと……気をつけなきゃな。

じゃあ、お返しだ、メラミとヒヤドを投げつけてやる。

メラミはメラが2つ並んで飛ぶような見た目だ。どちらも高温、もちろんダークゴーレムは影に逃げる。

そして、警告が響く。

「さっきは初見でしてやられたが、今度はっ」

下からアツパーの形で飛び出してくるダークゴーレム、俺はすぐさま拳を避け蹴り飛ばす。

体勢を崩したダークゴーレムに素早くメラをぶつける、が、また影に逃げられた。

めんどくさいな。

数m先にダークゴーレムが出てくる、どうやら左腕にかすっていたらしい。

―ブオオオオン―

「おっと。」

―ブオオオオオン―

―ブオオオオオン―

―ブオオオオオン―

―ブオオオオオン―

―ガガガガガガガガガガ―

〈魔力察知のレベルが上がりました〉

魔法で仕留めようとでもしてるのか？連続で闇魔法を投げってきた、でもあんな遅い球が当たるはずがない。

身体強化を使い剣に魔力でコーティングして魔法を斬る、意外と行けるもんだ。

しかも心なしか切れ味が上がってるような気がする。

ダークゴーレムとの距離を再び詰める、身体強化を使っているからかいつもより速いおかげかダークゴーレムが影に入り込むよりも速く近づくことができた。

影に入りかけていたダークゴーレムの頭をつかみ引きずり出す。結構抵抗していたがついには諦めたようで影から出てきた、そこをすかさずハヤブサの剣で切りつける。

ギイイイン！という音を出しながら剣はダークゴーレムの体を削る。

「ぐっ！」

真正面から腹を殴られたが物理耐性のおかげか、体勢が悪いおかげか耐えられない程でもない。

「ホイミ。」

これで十分だな、さてもうそろそろ終わりにしよう。

俺はヒヤドを5つ同時に作りありったけ鋭くし空気抵抗を少しでも無くして速く飛ぶようにした。

〈氷魔法のレベルが上がりました〉

へ ヒヤダルゴを覚えました へ

ーヒュッー

目にも留まらぬ速さとはこのことかと実感した。ダークゴーレムも捉えきれなかったようで影に入る前に半身が氷漬けになった。

流石に氷ごと影に入ることとはできないようだこれで終わり………だけでもつたいないな。

「俺達の仲間にならないか？お前の能力がほしい。」

俺は聞いてみた、

………どうだ？

しばらく考えてた？ようだったが確かにうなずいた。

「タイム」

へ ダークゴーレムのタイムに成功しました へ

「これからよろしくな。」

『よろしく………お願い………します、主……様。』

スーの小さな女の子的な声と違って少し大人びた女性の声だ。

『この氷……溶かして………もらえますか？』

「ああ、すまない今溶かしてやるぞ。」

俺はダークゴーレムを氷から出してベホイミをかける。欠けた体はしばらくすれば治るそうだ。

「さて名前だが……ヤミかレムのどっちが良い？」

『じゃあ……レムで………お願い………します。』

「改めてよろしくなレム。」

『はい。』

『あるじくおわった？』

「ああ、おわったぞ、新しい仲間のダークゴーレムのレムだ。」

『そうなの？やったー！よろしくね！レムお姉ちゃん。』

「こっちはバトルスライムのスーだ。」

『よろしく………お願いします、スーさん。』

『スーでいいよ？』

『わかりました、よろしく、スー、主様。』

「さてとサザン！こっちは終わったぞ。」





|               |        |        |      |
|---------------|--------|--------|------|
| ・ダツシユ         | Lv 4   | ・鷹の目   | Lv 3 |
| ・回復魔法         | Lv 2   | ・毒耐性   | Lv 2 |
| ・気配察知         | Lv 4   | ・警告    | Lv 3 |
| ・隠蔽           | Lv Max | ・格闘術   | Lv 3 |
| ・気配遮断         | Lv 3   | ・追跡    | Lv 3 |
| ・火炎耐性         | Lv 3   | ・威圧    | Lv 3 |
| ・料理術          | Lv 2   | ・魔力操作  | Lv 3 |
| ・魔力察知         | Lv 4   | ・念話    | Lv 1 |
| ・火魔法          | Lv 2   | ・並列思考  | Lv 2 |
| ・並列行動         | Lv 2   | ・氷魔法   | Lv 2 |
| ・物理耐性         | Lv 1   |        |      |
| 特殊スキル         |        |        |      |
| ・可能性          | Lv 3   |        |      |
| ・空間魔法         | Lv 3   |        |      |
| 呪文            |        |        |      |
| ・ホイミ          |        | ・ベホイミ  |      |
| ・インベントリ       |        | ・キアリー  |      |
| ・ルーラ          |        | ・ルーム   |      |
| ・メラ           |        | ・メラミ   |      |
| ・ヒヤド          |        | ・ヒヤダルコ |      |
| 特技            |        |        |      |
| ・隼斬り          |        | ・足払い   |      |
| ・威圧           |        | ・身体強化  |      |
| ・受け流し         |        | ・回し蹴り  |      |
| 従魔            |        |        |      |
| ・スー           |        |        |      |
| ・レム           |        |        |      |
| スー ♀ Lv14 → 4 |        |        |      |
| 種族：バトルスライム    |        |        |      |
| ランク：E         |        |        |      |





## 龍介、鉄山に行く 4

さて、鉄を掘るにあたって必要なのは体力と忍耐力、露天掘りとかしてたら幾らかは楽だったと思うがまあ頑張るしかないか・・・

「……………」カントツカントツ

「……………」ガツガツ

「……………」ザクツザクツ

「……………」おっと、これも鉄鉱石か。」

「だあああああああああああああああ！」

「何だ、びっくりさせるな。」

「飽きた、こんな作業やってられっか。」

「ゼータ、きついのはわかるがしつかりしてくれ。」

「でもよお、かれこれ一時間だけ？さつき昼飯食ったばっかなのにもう腹減ってきちまったよ。」

「まだ300kgしか取れてないぞ、2t掘るとか言ってた奴は誰だ？」

「その殆どはリュウが掘ったものだろ？俺たちは100kgも掘れてないと思うぞ？」

「こんなの、ただの努力次第だろ。」

「そんなことがあつてたまるか!!」

「それにリックを見習えよ、採掘量で言うとリックがダントツだぞ。」

「なっ！」

「リックに負けるのは許されない！」ガガガツ

「そうだ、俺達も頑張るぞ！」ガガガガガツ

この競争心である、プライドがあるんだろうな…

『あるじくみてみて〜。』

「ん？どうしたスー。」

スーが体に土…………いや鉄鉱石を入れてきた。

『あっちにいっぱいあった。』

「すごいなスー、お手柄だぞ。」

『えへへ〜。』

あいも変わらず、スーはかあいいなあ。

ちなみにレムは俺の影の中で休憩中、手伝いそうにしてるけど流石に体の回復が優先だ。

「もうそろそろいいかな。」

「はあはあはあ。」

「ぜえぜえぜえぜえ。」

大体800kgと。よく掘ったなこころへんはもう掘り尽くした感じか？もつと奥深くまで行ったら良いのとか取れるんだろうけど今はこの依頼の完了優先だな。

「よしじゃあ帰ろうか。」

「ええ、わかりました。」

「ああ、ぜえぜえ、わかった。」

「はあはあ、ああ。」

~~~~~

「つと、もう外は夜か、鉦山内は時間がわからないのが困るな、どうする？」

「野宿、いや、リュウの魔法をもつかい使ってもらってもいいか？」

「たのむ、疲れて見張り番とかできそうにない。」

「はあ、しようがない。ほら、いくぞ。」

「助かった。」

そういえばちよくちよくルームの部屋に魔力を注いでたんだ、どれどれ？

|||||

平野と森 Lv3

次のレベルまでの魔力

134/600

現在の効果

平原・森の最適な環境維持

昼夜の追加

果実の生成・成長促進 I

|||||

ワンルーム Lv2

次のレベルまでの必要魔力量

174 / 350

現在の効果

最適な温度、湿度の維持

魔力消費による家具の生成 ▽

|||||

生成可能家具

ベット：MP20消費

ダブルベット：MP25消費

タンス：MP30消費

テーブル：MP40消費

椅子：MP10消費

冷蔵庫：MP60消費

壁紙変更：MP5消費

(ランダム)

|||||

森の方では魔力無しで果実ができるようになったのか。そして部屋では、ダブルベットに壁紙と、今は特に関係はないか、果実は朝にでもためしてみるか。

「今日の晩飯はなんだ？リュウ。」

「たのしみです。」

「なんで俺が作ることが決まってるんだ？」

「リュウの料理がうまいからだ、俺達だとなんか作れないぞ？それでも良いなら作るぞ、リックが。」

「私もうくなのが作れませんよ。スープぐらいだったらなんとか…でもリュウさんのとは天地の差があります。」

「仕方ないか……きちんと風呂に入ってから食べよ。」
砂埃で汚れまくってるからな。

今日の晩飯は鶏肉をミンチ状にし塩胡椒を混ぜて焼いたミートサラミだ黒パンとよく合う。ビールも欲しくなる一品だ。

「『『いただきます。』』」

『食べられないのがとても残念です……』

さすがにゴーレムのレムは食べられないよな……

「おお、うまい！エールが飲みたくなる味だな。」

「ほんとうにそうですな。」

エールって言うのはビールの一種だ。たしか、大麦麦芽を使い酵母を常温で短期間で発酵させ複雑な香りと深いコク、フルーティーな味を生み出したビールってネットで見たことがある、ここならそういうのを作る施設も作れるかもな。

「さてと、腹もいっぱいになったし寝るか。」

「ああ、先に寝といってくれ俺は少しすることがある。」

「ああ、わかった、お休み。」

「おやすみなさい。」

「ZZZZZZZZZZ」

さてと、所変わって夜の平野と森、俺はここに果実を取りに来てい
る

ん〜よくわからんな……

『あるじ〜。』

「ん？どうした？」

『あつちの木になんか生えてる。』

「え〜つと、あ、あれか？」

なんか青りんごっぽいのが生えている。

「取ってこれるか？」

『かたん、まっかせて〜。』

スーはするするときに登りその果実を落としてくれた。

「さて、お味はいかほどか。」

匂い的にはリンゴそのもの……ん……ん……ん……薄い、リンゴを水

で3倍ぐらいに薄めた味だ。

『スーも食べたい!』

「ちよつと味がうすいぞ。」

そう言う前にスーが果実を取り込む。

『んく…薄いね。』

「ははは、だから言っただろろう?」

でもこの薄さは…まだ果実の生成・成長促進Iだからだろろうな。

「たぶんこの部屋のレベルが上がればおいしくなるさ、それまでの辛抱だ。」

『たのしみだねくあるじ。』

「ああ、たのしみだ、さして、寝るぞ。」

『うん!』

こうして夜は開けていった。

~~~~~

〜

〜道中〜

「ん、何だスライムか…」

『あ、ちよつとまって!』

「ん?サザン!ちよつとまって!」

「あ?どうしたんだ急に。」

「スーがそのスライムに何かあるみたいだ。」

「ぶるぶる。」

『うんうん。』

「ぶるぶる。」

『へくそうなんだ、あるじく。』

「ん?どうした?」

『スーね、この子一緒にいききたいって言ってる、一緒に連れていけない?』

「……………そうだな、いいぞ、タイムで良いのか?」

『うん!』

「タイム」

へ スライムのタイムに成功しました へ

よし、さて、名前だが…スライム…スライム…スライム…スライム…

「名前はライムだ、スーの妹分になるからちちゃんと仲良くやれよ？」

『うん！』

「ぶるぶるぶる。」

まだしゃべれないのか？なんとなく感情が伝わってくるな…他にも連れて行きたい？

……………他にも？

「そうだな、どのくらいいるかわからないが……………ルームの森のなかに住んでもらうか。」

『いいの？』

「ああ、その代わり二人でちゃんと面倒を見るんだ。」

「ぶるぶるぶるぶる！」

『やった~~~~！じゃあライムちゃん、連れてこよう！』

「ぶるぶる。」

一二匹が森の奥に走っていく。

「二匹が森のなかに入ってたが良いのか？」

「ああ、他にも連れて行きたい奴がいるらしいからルームに入れてやろうと思つてな。」

「全部スライムなのか？」

「多分そうなんじゃないか？」

お、来たみたいだ……………おふ…30匹はいるか？これ？

「こ、こんなにスライムがいると、流石に威圧感があるな。」

サザンが引いてるぞ。

「これで全部か？」

「ぶるぶる。」

そうみたいだな、じゃあ移動させるか。

「さて、みんなこっちに来てくれ。」

「ぶるぶる、ぶるぶる。」

翻訳してくれてるのか？ともかく聞き分けのいい子たちみたいだ

な。

~~~~~

さて、スライムの世話、訓練などはスーやライムに任せるとして
「ぶっちやけヒマだな。」

「ああ、やること無いしよお。」

「腰は痛いし。」

暇だ、やることがない…あ……もしかしたら…

「一つ試したいことがあるがいいか？」

「おう、いいぞ。」

「意外とあっさり許可するんだな。」

「リュウが何か悪意のあることをする気がしないからな、あと暇だからだ。」

「これは成功するかわからないぞ、もしかしたら俺だけ先に国に帰ってしまいかもしれないな。」

「まあ、その時は報酬持ち逃げしないってことだけ約束してくれたら問題ねえ。」

「じゃあやってみるか、—ルーラー！」

馬車全体が浮くような感覚がした、成功か？

「おい、なにしたんだ？」

「なにちよつと呪文をね。」

「リュウさん！また何かしたんでしよう！」

「なんで分かるんだよ…」

「こんなことできるのリュウさん以外にありません。」

まあそうだろうね、戦士、武闘家、僧侶、俺、あり得るの俺しかないしな。

「無事についたか？」

「ええ、無事に帝国につきました。」

「は!?!」

「まじかよ…」

「物は試しだったんだが、成功してよかった。」

「で、なにしたんです?」

「ルーラを使った」

「あゝ………使い手を選ぶ魔法も唱えられるんですね。」

「使い手を選ぶ魔法?なんだそれ。」

「習得した例が少なすぎる呪文のことで何かしら素質がいたりするんですよ。」

「へゝそうなのか。」

「おい、速く行こうぜ。」

「あ、すいません、いま出発させます。」

　　そういえば馬車に繋いでいた馬つて暴れなかったのか?

「そういえば馬は大丈夫だったか?浮遊感とかなれてなさそうだが。」

「ええ、よく訓練していますからこれくらい大丈夫ですよ。」

　　この世界の馬はタフだな。

「やありユウ、しばらくいいないと思ったら遠出してたのか?」

「ああ、ちよつと依頼で鉦山にな。」

「ともかく無事で何よりだ、ん?スライムが増えてるってことは新しい仲間かい?」

「ああ、ライムだ、まだまだ弱いがしつかりしてるよ。」

「ぶるるぶる。」

「そうかそうか、いい仲間巡り会えてるようで何よりだね。」

~~~~~

所変わってギルド

「あれ?たしかあなたは……リユウスケさん?依頼に行ったんじゃないんですか?」

「ああ………」

「??どうかしましたか?」

「そういえばこの前も思ったけど名前を知らない。」

「いや、そういえば名前を聞いてなかったなと思ってな。」

「そういえば自己紹介していませんでしたね。私はシリカといいます。」

「そうか、よろしく。それで依頼だが終わったぞ。」

「え、速くないですか？たしか受けてたの鉄山の鉱石採掘とゴーレム退治ですよ？失敗したんですか？」

「いや、思ったより速く終わった、鉱石はどこに置けばいい？」

「でも、鉱石なんてどこにもないですよ？」

「そこはインベントリだな。」

「……そうですか、それで量はどのくらいなんですか？」

「ああ、そうだサザン。」

「ん？どうした？」

「鉱石を少しもらってもいいか？報酬は少し多めに分ける。」

「ああ、いいぞ。」

「750kgぐらいだ。」

「……………」

「？……おーい、どうした？」

「はっ……………いいえ、ここでは出しきれないので裏の倉庫の方に出してもらえますか？」

「ああ、わかった。」

~~~~~

「ん？どうした、シリカちゃん。」

「ああ、カルロさん、こちらリュウスケさんです。依頼の鉱石を大量に持ってきてくれたので直接倉庫にと思いましたが。」

「ほう、そうかい、おれはカルロだ、倉庫番をしている、よろしくな。」

「ああ、リュウスケだリュウウでいい、よろしく。」

「で、量はどのくらいだ？まさかその革の鞆に入ってるなんて言わな

いよなっ？」

「750kgだ、収納先はインベントリだ。」

「750か、それだと……この箱に入れてくれるか？」

「わかった。」

「……………つとこれで15箱かな。」

「ほんとに750kgありやがる……いや、まさか本当とは思わなかった。」

「本当に750kg、すごい。」

「信じてなかったのか？」

「普通信じられるものじゃありません。」

「そうかな？」

「〜ギルド〜」

「鉱石は確認しました、ゴーレムの方はどうでした？」

「ああ、コアが18個だ。」

「そんなにいたんですか!？」

「うおっ、びっくりした〜。」

「ああ、そしてそのうちの2つほどはDランクのゴーレムのものだ。」

「よく倒せましたね……ヘタしたらCランクの依頼に匹敵しますよ。」

「俺もそうだろうとは思う、ちなみにこの依頼を出した奴は誰だ？」

「この国です。」

「次からは詳しい説明も乗っけておくことを気をつけさせてくれ、流石にあの依頼は説明不足だ。」

「わかりました、ギルドで全体でも注意をしておきます。」

「で、いくらになる？」

「え〜つと、そうですね、鉱石で3,750,000G、退治で72,000G、コア自体で54,000Gで合計3,876,000Gです。」

「ああ、ありがとう。」

「依頼お疲れ様でした。」

~~~~~

「さて、報酬は一人969,000Gだが鉱石分をわけなきやな。」

「その話なんだがな、リュウ。」

「どうした？」

「それ、ゴーレムの分も入ってるんだよな？」

「ああ、そうだが？」

「ゴーレムはほとんどお前が倒しただろ？だからプラスマイナスで鉱石分はなしってことになった。」

「そうか？はないあつて決めたなら良いんだが。」

「でも90万か、普通だとこんなに稼げねえな……」

「今回はヘタしたら全滅してたかもしれないからな。リュウがいてくれてほんとに助かった。」

「なあ、リュウはどうしてそんなに強いんだ？」

「どうして、と言われてもな……そういうスキルとだけ言っておく。」

「とことん運がいいんだな。」

「そうだな。」

「よし！今日は飲むぞ！」

「宴だ！」

『ご飯？』

「ああ、これからご飯だ。」

「ぶるるー！」

喜んでるみたいだな。

〈 毒耐性のレベルが上がりました 〉

飲み過ぎたしもう食べねえ。

「あゝやべえ、飲み過ぎた・・・気分わりい。」

「待ったく、サザンたちはいつもこうですよね。」

「なんでだろうな、つい飲み過ぎちまう。」

その気持ち良くわかる……

『美味しかったね〜。』

「ぶるるるぶる。」





|||||

他のスライムもぎつと見たけどだいたい同じくらいだった。

さて、明日はダンジョンだ。どんなところか楽しみでしょうがな  
いっついてもサザンたちが言うにはDランクはいわゆる初心者用  
ダンジョンにしか入れないらしいが初心者と言っても十分にやばい  
らしい毎年行方不明者が多数とか少数とか。

~~~~~

、

鶴翼亭で一泊宿をとった俺は早速ルームにはいる。

「ベットはもう4つもいらないよな……どうするか……スーとライ
ムがそれぞれ使うか？」

『あるじと一緒に寝る〜。』

「ぶるるぶる。」

そうか……じゃあ消していいな、そうだ、ついでにダブルベットに
しよう。

|||||

ワンルーム Lv2

次のレベルまでの必要魔力量

174 / 350

貯蓄MP : 40

現在の効果

最適な温度、湿度の維持

魔力消費による家具の生成 ▽

|||||

へ〜一度作ったものを消去すると貯蓄できるのか……ベット4つで
40つてことは半分帰ってくるのか。

部屋のレベルも上げておこう。

|||||

ワンルーム Lv3

今日はいい夢が見られそうだ。

あ、そういえば忘れていたが捕縛した盗賊は目と耳を塞いでルームの森に放置しておいた。スライムたちにも手を出さないように言っておいた、少くし精神的に増え安定になったが無事引き渡せた………何かブツブツつぶやいてたけど少くしだ少し。

鉄山のその後の龍介

さて、朝だ

「おはよう、スー、ライム。」

『おはよう、あるじ。』

『お………は……よう?』

「お?」

ライムが少し喋れるようになってるな。喋られるようになるのは個人差があるっぽいな、レムはすぐ喋れてたし。

『おはようございます、主様。』

「ああ、レムもおはよう、体はどうだ?」

『もう少しで完治します。』

「わかったしっかり直せよ。」

『はい!』

ん〜いい笑顔だ。この笑顔120円!……よく考えると安いな
………

「さて今日は…ルームに部屋を増やす。か」

『森もレベルアップした〜い!』

「ああ、そうだな。」

てなわけでルームだ。

今回は闘技場?コロシウム?と………鍛冶部屋を作ろうと思う。

「まずはコロシウムだな。」

|||||||

コロシウム Lv1

次のレベルまでの必要魔力量

0/100

現在の効果

タイステルの加護(死なない結界)

コロシアムの地形変化I

|||||||

|||||||

現在の効果

タイステルの加護（死なない結界）

コロシアムの地形変化Ⅱ

|||||

変更可能な地形

・スタンダート

・水中

・湿地

|||||

湿地が増えたか、これで戦い方のバリエーションが増えたも同じ。

「スーたちも自由に使っていていいからな、他のスライムの訓練にでも使ってくれ。」

『わかった。』

『わかっ……た……』

『これは面白そうですね。』

「ちよつと地形を変えてみるか。」

まず、水中だな。

次の瞬間、いままで平面な闘技場が観客席の近くまで水に沈んだ、観客席の高さはこのためか。

次は湿地、一瞬で水がなくなり少しジメジメしたような場所に早変わり。苔とか普通に生えてるところがなんとまた。

「これは便利だな。」

『すごいー！』

『す………い。』

『すごいです！主様。』

「ここを自由に使っていていいから使いたかったら言ってくれよ？」

『は……い。』

『は……い……』

『わかりました。』

さて、MPも回復したし次は鍛冶部屋だ……が、急遽変更して祭

壇だ、祭壇を作ろう

ステフは箱でいいとかいつてたがやっぱここは形が大事だよな。
…どんなのにしようかな？

|||||

神秘の祭壇 Lv1

次のレベルまでの必要魔力

0/300

現在の効果

神への供物

|||||

見た目は白い祭壇と上から柔らかな光が注ぐというなんとも神秘的なものになった。

「さて、マヨネーズを作るか。」

あゝでも材料が心もとないな…買いに行くか。

「スー、ライム、買い物に行くぞ。」

『はくい。』

『…わかった。』

~~~~~

↳

「おばちゃん、いるか？」

「おや、あんたかい？この前大量に買っていったばかりだろう？」

「少し大人数で行ったからな、調味料の消費が激しかったんだ。」

「そうかいそうかい、で、なにがほしいんだい？」

「卵、酢、それに塩、胡椒、砂糖だな…あと小麦粉はあるか？」

「小麦粉はちょうど切らしていてねえ…小麦ならあるけど。」

「じゃあそれもくれ。」

「どのくらいだい？。」

「卵は20個、酢は15Lで塩、胡椒、砂糖はそうだな、500gだ。」

「小麦は？」

「相場がわからないんだが……………」

「え、一束180Gだね。」

「じゃあ50束くれ。」

「あいよ、合計で23,700Gだよ。」

俺は値段ぴったり渡す。

「まいどあり、またきな、安くしとくよ。」

「ああ、また来る。」

~~~~~

「さて作る。か」

『マヨネーズ？マヨネーズ作るの？』

「ああ、マヨネーズだ。」

『まよ・・・ねーず？』

『マヨネーズはねとっても美味しい食べ物なんだよ？』

『たのしみ…………』

まあ作り方は前と一緒にだな。前2kg作ったはずなのにサザン達との食事ですぐなくなつたからなく。

さて、味見つと……………うん、前のよりもいいできた。

「ほら、できたぞ。」

『わーい！』

『??』

「ライム、これがマヨネーズだ。」

『おいしい…………』

小麦粉も作りたいがまずはマヨをあげなきゃな。

~~~~~

さてと、祭壇にマヨネーズを……………半分でいいかまたたりなさそうだったらまた送ればいいし。

「さてと。これで送りたいと強く願う。」

おれはステルに届くように強く願った、すると祭壇においてあったマヨネーズが消えた。

『なくなったね?』

「そうだな、多分ステルが回収したんだろ。」

《いやゝありがとう龍介、助かったよ。》

樽をすれば。

『足りなかつたらまた言ってくれ、すぐ送る。』

《わかつたよ、その時はまたよろしくね。》

あ、そうだ、術式について聞かないとな。

『そういえば聞きたいことがあつたんだが良いか?』

《ん? いいよ? なんでも聞いてくれたまえ。》

『術式はなんで日本語なんだ? そしてどういった法則がある?』

《ああ、あれか、程よく複雑で量があつた言葉だからつてのが理由だね。法則は自分で探してみても、そのほうが楽しいだろ?》

『確かにそうだな、わかつたありがとう。』

《お安い御用お安いご用……うん! 美味しいね! これはシャルやエレナ達が喜ぶよ。》

『それは良かった。』

《それじゃあ渡してくるよ。》

『ああ、俺もやることがあるからこれできるぞ。』

《この世界を楽しんでいるようだね。》

『それはもう、楽しいき。日本じゃすごととして帰って寝てたまにゲムしてな生活だったからな。』

《そう言ってくれると嬉しいね、じゃあまたいつか。》

『ああ、またな。』

ステルとの通信が切れた。

「さてと、何するかな。」

『あるじ〜。』







いろんなのがあるんだな。

「なるほど、わかった、これからもしっかり強くなるんだぞ？」

「「「ぶるるー」「」」」

『了解しました！だつて。』

なんか軍人っぽくね？

## 迷宮入りの龍介

あ、小麦粉作らなきゃ……………

朝起きて一番に考えたのがこれである。

昨日作ろうとして忘れてたよ……昨日はそのままスライム森林でスライムたちと戯れてたよ。

いや〜まいったね。あと果実の生成、成長促進Ⅱで青リンゴっぽいのが少し味が出た、着実にリンゴになってきている。

大きな変化としてはそれぐらい、いや、森の中心に大きな湖ができた。憩いの場になりました。俺以外人じゃないんですけどね。

「そうだな……………森のスライム全部と従魔契約するか……………」

『みんなとしてくれるの?』

「ああ、流石に全部の名前を考えるのは無理だが……………隊長格には名前をつけてもいいかもな。」

まあ今は保留だ。

『みんな喜ぶよ〜。』

『きつと、よろこぶ。』

「よし、じゃあ行くぞ。」

てなわけで

|||||||

リュウスケ・ササキ 男 Lv25

種族：人間 15歳

職業：魔物使い

HP：385 / 385

MP：321 / 321

攻撃力：257

防御力：261

素早さ：244

賢さ：234

器用さ：294

幸運：\*\*\*\*\*





少し他の魔物がなつきやすくなる。

闇の神エレナの加護

闇を司る神エレナの加護。

闇魔法を習得できる。

闇魔法に対する耐性もつく。

光の神ルーの加護

光を司る神ルーの加護。

光魔法を習得できる。

光魔法に対する耐性もつく。

闇魔法

闇を扱う魔法。

込める魔力によつて暗黒さが増す。

光魔法

光と雷を扱う魔法。

ドルマ

闇を凝縮させた玉を放つ。

消費MP：3

デイン

雷を凝縮した聖なる光を放つ。

非常に高圧な電流が流れている。

消費MP：4

光耐性

光属性の攻撃に耐性を持つ事ができる。

光属性被ダメ軽減(微)

闇耐性

闇属性の攻撃に耐性を持つ事ができる。

闇属性被ダメ軽減(微)

こんなもんか

「さて、スライムたちも契約し終わったしダンジョンに行く準備をするか。」

あ、小麦粉……でも器具がないのも忘れてた……ん……もう良いや、後で考えよう。

「小麦粉はやめだ、本題のダンジョンにいこう。」

『ダンジョン?』

「ああ、まだ今のランクだとそこまで大きなところには入れないようだけだな。」

『スーも頑張る。』

『ライムも。』

「ああ、期待してるぞ?」

『うん。』

非常に頼もしい。

~~~~~

さてダンジョンがどこに置いてあるのかわからない……なのでギルドに来た。

「あ、リュウスケさん、依頼を受けに来たのですか?」

「いや、ダンジョンに行ってみたいと思ったがそもそもダンジョンがどこにあるのかわらなくてな。どこにあるか教えてもらえないか?」

「それでしたらお城の地下にあります。」

城の地下?城って言うところの国の真ん中にある城か?

「城に入れるのか?」

「はい、建国以来続けられてきたもので、城の一階は一般開放されています。ダンジョンへの入り口は城の方に聞いてもらえればわかると思います。」

「城へ行くにはどうしたら良い？」

「ギルドの目の前にある大きな道が城に続いています、城へ行く馬車も多くあるのでそれもご利用ください。」

「わかった、ありがとう。」

「いえ、またのご利用お待ちしております。」

しかし珍しい国だな、城の一階を開放、建国以来続けられていることは小説とかでよく出てくる自分至上主義的な王様ではないかもな、根拠はないが。

城下町も結構綺麗にされてるし、良い国だ。

さてと、王城行きの馬車があるとか言ってたが……

「王城域の馬車だよ！城へ行く奴は速く乗りな！一人200Gだ！」

あれだな

~~~~~

馬車に乗り王城に行く途中で大きな川、と言うより堀？があつて、綺麗に装飾された大きな橋がかかっている、なにか聞いてみると貴族街と平民街の境界らしい貴族の階位は上から皇帝、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵で城に近づくほどその爵位は高いらしい。貴族街は平民街と大きく違い、まず屋敷が多かつたそして平民街より質がいいように見えた、もちろん平民街も十分に綺麗だったでもやっぱり質が違う気がする。商品の質とかね。普通の人は城に行く用事もないのでめったにこないようだ。来るとしたら金持ちな冒険者ぐらいらしい。しかしちよつと行儀が悪くて冒険者出禁の店がほとんどらしい。何やてんだよ全く。

基本平民と貴族の差はあまりない、がやっぱり平民を低く見るやからが多いらしい。まあそうだよな、自分のほうが裕福だからな、しよ

うがないとも言える。

まあ、関わり合いにならないほうが得策だな。

「ついたぞ。王城だ」

どうやらついたらしい。

「おや？リユウじゃないか、それにスーちゃん、ライムちゃん。どうしたんだい？」

「ん？リブロか？北門の門番じゃないのか？」

「今日はたまたま城の警護の方に当てられててね。」

「そうなのか、ちょうどいい、ダンジョンに行きたいんだが案内してもらえるか？」

「ああ、いいよ。こっちに受付があるんだ。」

他にも城の中を少し案内してもらった。

真ん中には大きな階段、騎士が守ってる。王の間へ続く階段らしい。

王の間が二階にあると王の命を狙ったとか起きるんじゃないかと思っただが、騎士がしっかり防いでるらしい。

他にも仕掛けはあるらしいがやっぱり企業秘密、しかし騎士マジ優秀。

他にも書庫？みたいなのもあった。閲覧に10,000Gを預けなきゃいけない。もしやらかした時の修理費だな。

公共の食堂とかもある。少し高めだがその分おいしくて人気があるらしい。

「リユウ、ここがダンジョンの受付だ」

「あら？リブロさんじゃないですか。どうしたんですか？」

「この子がダンジョンに挑戦するんでな、その案内だ」

「大丈夫なの？一応Dランクからなんだけど・・・」

「きちんとDランクだよ。実力も十分にある。」

「リブロさんがそう言うなら問題はなさそうね。」

「じゃああとはよろしくたのむよ。」

「わかりました。ではこちらへどうぞ。」

そう言って連れてこられたのは奥の部屋。



「ここで説明をさせていただきます。」

「よろしくたのむ。」

「ダンジョンへの入場は基本無料です、ですが多少記録を取らせていただきます。冒険者同士でのいざこざは基本自己解決でお願いします。しかし、場合によっては冒険者をやめていただくこともあります。ダンジョン内では常に危機が迫っています、とくに冒険者の被害が多いのは同じ冒険者に襲われてのものです、気をつけてください。」

『あるじは、スー達を守るから死なないもんね。』  
『あるじは、まもる。』

なんとも頼もしい子たちだ、まあ初心者のダンジョンらしいし大した危機感はないがな。

「思い出の鈴は瞬時に扉に戻ることができませんので買うことをおすすめします。ダンジョンで死ぬと迷宮に吸収されます。もし他の冒険者のご遺体がありましたらできる限り回収をお願いします、最悪ギルドカードだけでもお願いします。もちろんそれなりのお礼もさせていただきます。その時ご自身のギルドカードの色の確認もさせていただきます。」

「わかった、Dランクはあまり深いダンジョンに入れないと聞いたが？」

「はい、最初は5階層の旅立ちの扉から、守りの扉、迷いの扉などがDランクで入れる迷宮です。」

「じゃあまず旅立ちの扉で頼む。」

「わかりました。ではこの紙に名前とランクをお書きください。」

「代筆を頼めるか？」

「わかりました、お名前とランクを教えてください。」

「リュウスケ・ササキ、Dランクだ」

「はい、ではこの扉の奥にある渦の中止に入り数秒お待ち下さい。」  
「わかった。」

扉の奥には3つの渦それと従業員と渦に並ぶ冒険者、奥には階段、渦は左から始まりの扉、守りの扉、迷いの扉。

冒険者が渦に入り消えていく、また別の扉では渦の目の前が光冒険

者が出てくる。あれが思い出の鈴を使った冒険者だろう。俺の後ろからもそろそろと冒険者が入ってくるが皆奥の階段から下に行っている。

「奥の階段は何なんだ？」

俺は少し思い近くの従業員に聞いてみる

「あの階段は下に続いております。下に行くほど高い冒険者ランクが必要です。」

「なるほどな。」

まあ今は旅立ちの扉でいいか。渦に並び順番が来るのを待った。少し待つと順番が来た。

「Dランクのリユースケ様ですね、確認しました。どうぞお入りください。」

渦に入ると周りの風景がゆがんでいく……これは少し気分が悪くなるな……

『ぐるぐるだ。』

スーたちは案外余裕そうだな。

次の瞬間、俺達は草原にいた。

「……………oh……………Fantasy」

すごすぎだろ、平原かよ。

「お？あんちゃん、もしかして迷宮初心者か？」

「ん？ああ、今日始めてきた。」

「そうかそうか、いきなり草原でびっくりしただろ。」

そう言つて冒険者のおっさんは豪快に笑う。

「おっさんはどうしてここに？見た感じDランクには見えないが？」

「おっさんて…俺はまだ21なんだがな」

まじかよ……どう見ても30は超えてると思つてた

「まじかよ……まあいい、おっさんDランクじゃないんだろ？」

「たしかに俺はDランクじゃねえ。依頼で、このダンジョンでの助っ人よ。」

「助っ人？ここは初心者の迷宮だろ？そんなのいるのか？」

「甘いな、迷宮は何があるかわからねえ、爆発的に魔物が増えたり、こ

の迷宮ではありえない魔物が出ることだってあるんだぜ？ま、迷宮のレベルが低いところにはしか助っ人は置けないがな。流石にBランク以上の迷宮に助っ人は無意味だ。」

確かにAランク並の迷宮にはAランク以上の冒険者が行くところだ、それ以上の助っ人となるともはやいないだろう。

「なるほどな、覚えとく。」

「あと、ここにはないらしいが、モンスターハウスにも気をつけろよ？閉じ込められて大量の魔物に押し潰されるぜ。」

「わかった。」

「定期的に巡回してるからよ、何かあったら逃げて来るか知らせに来いよ。」

いい情報だ、助かった。

おっさんと別れたあとは探索だ、と言ってもあたり一面草原、数人の冒険者が戦っていたりする。

他の冒険者を見た感じ、出てくる魔物はスライム、コウモリのような魔物ドラキー、アリのクイの魔物おおありくい、巨大な鳥ピツキーの4体っぽいな。

「キー！キー！」

早速ドラキーのお出ましだ、空から降りてきた。迷宮に空ってどうなってるんだとか言うツツコミはなしだ。草原なので空がある。ハイ終わり。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ドラキー ♂ Lv 9

ランク：F

HP：56 / 56

MP：31 / 31

攻撃力：42

防御力：32

素早さ：44

賢さ：23

器用さ：17









## 迷宮入りの龍介 2

この後ピツキーやおおありくい、スライムと戦闘になった。と言っても大して苦戦はしていない。

しいて言えば、ピツキーがルカニを使ってきたことくらいか？それでドロップが魔石、たまにかぜきりの羽。

おおありくいは魔石と毛皮を落とす。スライムは魔石と薬草、なぜ薬草なのかと考えるときりが無い。

ま、ゲームでも敵が何故か防具や武器を落とすこともあったしな。いまさら気にしても無駄だ。数回の戦闘の後、下に行く階段を見つけた。降りてみるとまた草原だ。後ろには今降りてきた階段がある小屋……うわ……小屋は簡単なもので中を見ると上への階段が続いている……空間どうなってるんだよ……まあ、気にしても仕方ないこと仕方ないこと。

へ スルー力を取得しました へ

……さて、と……ここはさしずめ地下一階もしくは二階か……まあこれまでの戦闘でみんなレベルが上がっている。レムも無事に回復したようで少し戦闘に加わっている。

この階層は上の階層の魔物に加えおぼけキャンドルが出てくる。おぼけキャンドルは小さなナイフを持った巨大なろうそくだ。火魔法を使い、特技にメラメラ斬というものがあつた。ま、あ、使う前に倒されちゃったんですけどね。あ、魔石と……ナイフ？ブロンズナイフか。レア度D。売れるのか？

「次おぼけキャンドルが来たら少し特技を見させてくれ。」

どうやっているのか見てみたいしな。

『わかつた。』

『うん。』

「ゲゲゲゲゲ！」

へ 鷹の目のレベルが上がりました へ

噂をすれば、少し遠くにおぼけキャンドル3体のご登場。

スーたちを後ろに下がらせて全部あいてをする。







はやぶさの剣に魔力を通し燃えるイメージを思いう浮かべる、すると勢い良く剣が燃え上がった。

へ 火炎斬りを覚えました へ

へ レベルが上がりました へ

あつさりしてるよほんとに。

あとはチョコチョコイのチョコイで終わりつと。

「ゲゲ・・・ゲエ・・・」

『あるじ、終わった？』

「ああ、終わったよ。」

『あのね、あつちに階段あつたよ』

「お、よくやったな」

『うん！』

えつとと・・・ライムは？・・・ああ、おおありくと殺り合つてたか、まあおおありくいは舌と爪の攻撃ぐらいしかしてこないしな、簡単に倒してるよ。お？ライムが10レベルになってたみたいだな。みんなレベル上がってるし。

|||||

リュウスケ・ササキ 男 Lv26 →1

種族：人間 15歳

職業：魔物使い

HP：391 / 391 →6

MP：326 / 326 →5

攻撃力：264 →7

防御力：267 →6

素早さ：251 →7

賢さ：242 →8

器用さ：300 →6

幸運：\*\*\*

称号：シャルムとタイステルの加護

戦闘狂

闇の神エレナの加護

























## 迷宮入りの龍介 3

下の階層に行く前に腹ごしらえ。黒パンに卵と一緒に焼いた肉とキャベチーをはさみマヨをかけたサンドイッチ！

これは神である。

『『いただきます！』』

—パクツ

『んんんん！おいしいんんん！！』

『おいしい！！』

ホント喜んでくれると料理人冥利につきる。—パクツ—うまつ！なにこれ半熟卵にしっかりとろした鶏肉、マヨのいい感じの酸味とマツチング！黒パンもいい具合の硬さで歯ごたえ抜群！それにさすがマヨ！何にでも合う！！

……………ゲツプ。

『『ごちそうさまでした！』』

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

さて、地下3階？に来ました。はい、草原だと思ってたけどそんなことはなかった。遺跡ですよ奥様。バリツバリの遺跡。それが旅立ちの扉の地下三階でした。Fantasy！！

へ スルー力のレベルが上がりました へ

フウーーーー……………さて、思い切りガツチガチの迷宮、周りは煉瓦の壁で囲まれ少し薄暗く苔がそれなりに生えている古い物だ。

「明かりとか持ってきてないんだが……………」

『主様、魔法を使えばいいんじゃないんですか？』

あ、そうかそうか、そういえばそんな便利なものがあつたな。

「忘れてた、えくメラでいいか。」

少し小さめの火の玉を思い浮かべ魔法を発動する。うん、ちょうどいい明るさだ。

「ホント迷宮ってなんだろうな」

『すごいね！草原じゃないよ！あるじ！』

『……………』

ライム絶句

「ガチもんの迷宮ってことは迷路か？めんどくさいな……………」

階段があるこの部屋は普通に広い。そして目の前に重そうな鉄の扉。あけたくねく。

といってもこの扉以外何も無い。

「しかたない、行くか」

扉を開けて

落ちた。

「は？？」

『えくく？』

『え．．』

「えくくく」

まさか床がないとか……………ここもう初心者の迷宮じゃないだろ

……………

「っ?!いたあっ!!」

〈 物理耐性のレベルが上がりました 〉

思ったより深くなかった。深さ4mくらいか？ベチャって行ったよベチャって。

あくHPが少し減ってる、ホイミ。ぐぬぬ思わぬ畏。下に何もなく

あれから結構時間がたったし歩いた。

「魔物がいないな。」

『全くいないよ』

『いない。』

『いませんね。』

罨だけはわんさかあるのに。

例えば落とし穴、ただし深さは2m。地面から槍が出る罨、やりと
いうかもはやただの棒。天井が下がる罨、しかし押し戻せるほどの圧
力。下から壁が出てきて閉じ込められる罨、なんか取っ手がついてて
普通に元に戻せた。

THE初心者用。ま、おかげで罨察知のレベルが上ってる。スーた
ちも覚えていた。

非常に助かる。が、魔物がいないと経験値が入らない。スキルの方
には入るが自分自身が上がらないしな。ぶつちやけネタがわかれ
ば子ども騙しすぎて罨が面白く無い。

『あ、扉だよ』

「お？ほんどだな。やっと出口か？」

中に入ると床がなかった。正確には3m下がってる。

「いや、流石にもう引つかからんよ？」

『あ、看板だよ。』

えーつと、

【引つかかったあなたはゴブリン以下】

.....うぜえ、罨にかかってないのかかわらずイラッ
とした。ゴブリン、いるんだな。初めて知ったよ。

『あるじよ、階段があるよ』

『階段』

「お、本当か？やっぱこの階は罨のみか。」

次は混合かもな。

「じゃあ行くか。」

~~~~~

次の階は遺跡、魔物付き

「知ってた。」

『え、あるじわかったの？すごい！』

『すごい』

見事なフラグ回収です本当にありがとうございました。

「たまたまさ、しかし魔物も出るとなると明かりで帰って呼び寄せてしまうな…消しとくか。」

一応明かりがなくても薄暗いだけで見えないわけではないからな。

その代わり相手はこっちに居場所を教えている。その証拠にあつちに火の光がある。おばけキャンドルめ、恨むなら頭の灯火を恨むんだな。

「ゲゲゲゲ？」

「ゲゲ。」

「ゲゲ？」

「ゲツゲツゲツゲツ。」

なんか話が盛り上がって大爆笑してるな。まあ、何言ってるかさっぱりだが。

『スー達がやる〜。』

『やる。』

「よし、罨も近くにないようだし天井から奇襲をかけるんだ。」

『わかった〜。』

『うん。』

スーとライムがそろそろと天井に登りおばけキャンドルたちの頭上にステンバニー、ステンバニー………GO!!

スーとライムのスキル伸縮自在により伸ばされた体を素早く振るいおばけキャンドルたちからナイフを奪う。

「ゲゲゲゲゲゲ！」

「ゲゲ!?ゲゲゲ。」

まあ上からなにか落ちてきて武器落とされたらそれはびつくりす

るよなく。

おぼけキャンドルに足りないものは、それはくくくレベル、攻撃力、防御力、素早さ、賢さ、容姿！

そしてエなによりもオーーーーーー！！ランクが足りない！！  
はい、瞬殺です。何しろレベルとかランクとか差が開いてますも  
ん。

『終わったくはいこれく』

スーがドロップ品を持ってきた。

「ご苦労様。よし、次行くぞ。」

『うん。』

へ 暗視を取得しました へ

暗視……ナイトビジョンか、これで結構薄暗くても見やすくなる！  
可能性さんマジパネエツス!!!

暗視を使うと全体的に黄緑色に変わる。暗視ゴーグルをつけた時  
と同じか、夜のサバゲーで鍛えられた洞察力が唸る。しかし勝てな  
いんだよなああれつて。

さて、前方からドラキーが15体こちらには気づいていない……  
多くね？これまで戦ってる相手は多くて3体ほど、いきなり5倍か  
よ。普通のDランクの冒険者ならここで逃げるだろうな。だが俺達  
は違う。主にステータスに差がありすぎるからこの程度の数、雑魚に  
違いない。

「ん？」

なんか2匹だけ色が違うな……

||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ドラキーコマンダー ♂ LV2

ランク：E

HP：58／58

MP：34／34

攻撃力：32

防御力：25

素早さ：40





そうだな、後で新しい魔法を使ってみるか。並列思考に並列行動があるし多分合成呪文も作ることができるだろう。ドラクエファンでよかった！ゲームにアニメ、漫画、全部見てたしあらかたの合成呪文は頭に入っている。ふふふふ、楽しみで仕方がない。

『あるじがなんか、悪い顔してる〜。』

『なにか悪いことを考えてそうな顔ですね。』

『やばそう。』

上からスー、レム、ライムである。

え、そんなやばい顔してた？

「ただ新しい魔法ができるかもしれないと思ってたんだがな、そうか、じゃあこれは後でこっさりやっておくとするよ。」

『さすが主様、考えてることが違いますね！』

『あるじ、面白いことするの？じゃあスーもやるー!!』

『おもしろそう。』

上からレム、スー、ライムである。

この手のひら返し、カワイイから許す！

つと、雑談してたら新手だ、奥からおおありくいが4匹、ちょうどいい。

「じゃあ新しい呪文、になるかどうかは分からないがやってみる。少し離れててくれ。」

『は〜い。』

『わかった。』

『わかりました。』

さてと、今回用意しますは右手にメラミ、左手にヒヤダルコ。このふたつを合わせます。するとなんとということでしょう光輝く弓と矢ができたではないですか!!

ーバシユツ!!

威力はこの通り、火と氷により反発するエネルギーを矢にして放つ呪文メヒヤド。

光並みの速さで飛んでいき当たると消滅、までは行かなくとも相当痛いはず！だが今回は消滅したようだ。

これがやりたかった。男の憧れ、合体魔法!!!

〈魔法合成を取得しました〉

〈無魔法を取得しました〉

「よっし!できた!!」

『何あれ!すごい、すごい!』

『ほえ』

『.....』

うんうん、やっぱり良いな合成魔法!やってみてよかった。

『スーもやってみたい!』

「もちろんスーが呪文を覚えたら教えてやるぞ。」

『わたしも!わたしも!』

「もちろんだ。」

『主様!私も、お願いできますか!』

「任せなさい。」

非常にいい気分である。ちょっとキャラが崩れるほどに。

あ、階段がある。これで迷宮は終わりか?確か全5階で最後がボスのフロア、ボスがないからすんなり行けるはずだ。

~~~~~

階段を降りると地下洞窟?のようなところだ、地底湖みたいなものもある。

「ここがボスがいたところのはずだが:旅の扉はあるか?」

『んくくく、あ、あっちのほうが薄く光ってるよ!』

『ひかってる。』

多分出口だな。旅立ちの扉攻略完了だな。

迷宮のその後の龍介

俺達が渦に入るとまた視界がグワングワンし始めた。あく気分悪っ！

「つとと…」

『ぐわんぐわん』

『ぐるぐる』

「お疲れ様です。ギルドカードを拝見いたします。」

「ああ、これでいいか？」

「はい、リュウスケ様ですね、確認いたしました。このあとはどうされますか？」

「ああ、素材を換金したいんだが、どこでできる？」

「換金でしたらあちらのお出口からでいただいで受付の方で行っております。」

「わかった、ありがとう。」

「またのご利用お待ちしております。」

さて今回の迷宮での成果はFランク魔石130個、Eランク魔石2個、かぜぎりの羽35本、毛皮28枚、薬草50枚、ナイフ18本、コムモリの羽52組？個？、そんなもんだ。ドロップ率の差がおかしいんだよなく、全くでない時ともつきり出るとき・・・ホント、俺の幸運どうなってんだか。

魔石は魔道具の燃料に使うからなく取っておくとして…薬草もとつとくか。あとは売っても良いな。

で、受付に着いたが…お、最初に受け付けてくれた人だ。

「ここで素材を換金できると聞いたんだが？」

「あら？たしかあなたはリブロさんのところの……」

「リュウスケだ。」

「ああ、そうそうリュウスケくんね、素材の換金だったわよね？」

なんか最初あった時と雰囲気と言うかしゃべり方？ちがくね？ま、フレンドリーでいいか。

「ああ」

魔石と薬草以外を全部出す。

「こ、こんなに？確かDランクだったわよね？」

「そうだが？」

「何当たり前みたいなのよ、普通こんなに持つてくるDランクはいないんだから。」

「で、結局いくらになるんだ？」

「はあ、えーつとかぜきりの羽が1本600G、毛皮は800G、ナイフが200G、コウモリの羽は340Gね。品質がともいいから少し色をつけておいたわ。合計64,680Gね。」

「……確かに。」

「こんなに品質がいいのは久しぶりよ、もっと持つてきてくれてもいいから頼むわよ。」

「ああ、わかった。」

「あ、でも一気に持つてこられると少し困るかも、値崩れしそう。「程々にしとく。」

ま、アイテムボックスで保存できるし問題無いだろ。

「さてと、暇つぶしに書庫にでも行くか。スーたちはどうする？」

『んー森であそんどくー。』

「よしわかった、じゃあゲートを開くぞ。」

もちろん人がいないところでこっそりとだ。

「よし、書庫は確かこっちだったな。」

~~~~~

〽

「すまない、本を読みたいんだが。」

「はい、では10,000Gをお預かりします、退出時にお返ししますのでご安心ください。ですがもし本を破損した場合はお返しすることができませんので、ご了承ください。」

「ああ、わかった。」

さてと、どんな本を読むかな………お、この世界の料理本、おお

？こっちはこの世界について書かれた本か、ん？ほうほう、まあ、ス  
テルたちからあらかた聞いているから良いか、パラパラ見たがだいたい  
どうやって作ったとかしか書かれてなかった。神々についてもある  
な、ほうほうこの世界には9柱の神が居るのか、邪神？なんかおぞま  
しい姿をしているとかすつごく忌み嫌われてる描き方されてるな．．．  
敵対しているとかすつごく忌み嫌われてる描き方されてるな．．．  
〈 念話のレベルが上がりました 〉  
〈 念話のレベルが上がりました 〉

まさかの2連チャン

《アーちゃんはそんな子じゃありませんよ!》

『うおつと、いきなりびっくりさせるなよ……』

《ああ、すいません、ちよつと邪神ちゃんについて悪い知識が入ったら  
困るので補足をと思ひまして。》

『悪い知識というとこの本の内容は間違ってるのか?』

《ええ、人が言う邪神は勝手にそう名乗っている魔王級の魔物です、本  
当の神とは違います。本当に邪神アーちゃんは心優しい子で、うちに  
呼んだりもしています。たまに魔物の管理をして普段は家でくつろ  
いでます。私達とも普通に交流しますし可愛い子です。あ、それとマ  
ヨネーズ、ありがとうございました、エレナとルーも喜んでました。  
それで…実は……》

言いよどむシヤル……まさか?

『マヨがなくなったのか?』

《はい、お恥ずかしい限りです……》

渡したのは昨日の今日な気がするんだが?

『……レシピを渡そうか?』

《ホントですか!?もしそうしてただけるなら嬉しいです!》

むちやテンションあがつてるよ……

『じゃあ後で送る、邪神のこともわかったありがとうな。』

《いえいえ、やっぱり友人が悪く思われるのは嫌ですからね。それで  
は……》

『ああ。』

ふう、なるほど、この邪神は本当の邪神じゃなかったのか。なんか災難だな……………

お？これは魔法についての本、こっちはタイトル「伝説の賢者」？ほむほむ、簡単にまとめると一人の大賢者がいてその賢者は見たこともない数多の魔法を使い、また放たれたどんな魔法も効かない障壁を作りだし人々を守った英雄のような存在らしい、しかしある時からパツタリと姿を見せなくなった。その賢者の残した魔法の本は今もどこかに残っているとか無いとか。

半ばお伽噺のようなものだが面白いな、もしあるならぜひとも見つけてみたいものだ。

タイトル「勇者と魔王」……………ほう、お伽噺か、むかしむかしあるところに魔王がいました、魔王は多くの人を支配し苦しめました。そんな時現れたのが、勇者ルーシム。ルーシムはこの後数多くの魔物と戦い数多くの人々を救いその途中で魔法使いのオグマ、僧侶のレナと出会い更に多くの功績を残す。あるときは山に現れたドラゴンを倒し、またある時は魔物に侵略されつつある最前線を守り更に押し返す。それはそれは強かったそうだ。それから数年後、ついに勇者ルーシルは魔国領（現在の瘴気の大地）にまで前線を勧めた。その頃には魔法使いは魔導師、僧侶は賢者へと職業が変化していた。さっきの本の賢者つてのはこいつのことかもな。そして魔国領へと進軍し死闘の末、ついに魔王を討伐することができた。魔王の最後の言葉は、「我が死んでも第二第三の魔王が……………グハアッ!!」らしい。定番かよ。こうして世界に平和が訪れた。

だいたいこんな感じか。まあ、魔王級の魔物とか瘴気の大地に居るっぽいしこの魔王が言っていたこともあながち間違っていないな。

おっと、もうすぐ日が暮れるな、そろそろ帰るか。

）

さてと……………宿のに戻ってルームに行く。……………風呂、いや温泉入り

たいな……よし。

|||||

湯の間 Lv1

次のレベルまでの必要魔力

0/300

現在の効果

疲労回復（微）

昼夜の追加

|||||

作った。思ったより嬉しい効果だ。景色はそうだな……部屋にはいるとそこは更衣室、そしてさらに奥へ行ける扉、扉をくぐると洗い場と温泉、なんと半外風呂みたいだ。温泉部分だけ外になって開放感がある。そして緩やかな山の頂上にあるようだ。と言っても風呂以外はおくまで背景のよう下山しようとした途中で透明な何かに阻まれた。しかしここからの風景はとても素晴らしい。東京都の青ヶ島に似てる地形だな、もちろん建物も何もない緑あふれる島のようだ。今は夕焼け、赤く染まる空、いやあ絶景かな絶景かな。

早速はいる前にスーたちを呼んでこよう、広さ的に全部のスライムたちが入れるかもな。

「お〜い、スー、ライム！風呂にはいるぞー！」

しばらくすると森の奥からスライムご一行が出てきた。

『お風呂〜？』

『おふろ？』

「ああ、風呂だ。温泉だ。」

『温泉？』

『??』

「温泉は地面から出るお湯だ。しかも普通のお湯とは違って効能というのがあるんだ。」

『へ〜。』

『ふ〜ん。』

「結構広いし他の皆も連れて来い。」



現在の効果  
神への供物

|||||

レベルは上げてるんだが効果が増えないな……ん、不思議だ。

とりあえずマヨネーズのレシピを祭壇に置き、シヤルに届くように祈る。

《あく!!これがレシピですね!ありがとうございます!!家宝にします!》

『いや……そこまでのものじゃないからな、なくしてもいつでも書けるから。』

《大丈夫です。いま不滅と帰巢本能の効果を付与しましたのでどこでなくしても私のもとに帰ってきますし壊れません。》

『すごい無駄遣いな気がする。』

《まあ、なかなか使う機会無いですし。ここぞという時に使わないとそれこそもつたいたいじゃないですか?》

『そんなもんか。じゃ、ちゃんと届けたからな。』

《はい!あのくそれと、マヨネーズを使ったレシピってどんなのがあるか教えてくれませんか?私達はとにかくかけて食べているんですけど、もうちよつと応用がほしいというか……》

『あくそれもそうか、ちよつと待ってろ。』

《はい。》

そうだな、キャベツマヨ玉子焼きとか?マヨタマベーコンパンも良いな。あとは……ツナマヨ!綱があるかわからんがあるなら行ける。あとはこつちで醤油と味噌を見つけたか作るかしないといけないしなく。ま、神だし何とかするだろ。

とりあえずそこそこの領のレシピを送った。

《こ、こんなに!マヨタマベーコンパン?照り焼きマヨ?ツナマヨ?すごいです!ありがとうございます!》

『お、おう。醤油や味噌があるかわからないがまあ、なんとかしてくれ。あと、マヨネーズは食べ過ぎると太るぞ。』

《だ、大丈夫です!神様、太らない、これが世界の理です。》

『お、おう。じゃ、またな。』

《はい、ありがとうございます。》

さて、本格的にご飯どうしよう。ポテトで……生コロッケ！これだ！

そうと決まれば早速。

まずポテトを蒸します。そしてポテトの皮を剥き潰していき細かくした鶏肉とキャベチーを炒めたものを追加してコロッケの形にします。そしてパン粉を………パン粉？……あゝ黒パンをヒヤドでこおらせて削ります！そして炒めます！これで大丈夫かな？そして炒まったパン粉をコロッケの形にしたポテトにふりかけ上からマヨをかけます。完成！生コロッケ！

「できたぞ〜」

『わ〜い！なにこれ〜？』

『ころっけ？』

「これは生コロッケだ。美味しいぞ〜」

『『いただきます！』』

パクリ……うまいなく。ポテトとマヨのマツチは最強だ。鶏肉もいい感じに肉汁出してて美味しい……

『おいし〜〜!!』

『おいしっ！』

うんうん、スー達が可愛くてこれだけでご飯4杯はいけるよ。

『『ごちそうさまでした！』』

いや〜うまかった意外と黒パンのパン粉うまかったな。これは連日続いても行けるな。ぶっちゃけもうレパートリーが……これと野菜炒めぐらいしか思いつかないのがでかいな〜。

はあ、もう寝るかな。お休み〜。





「ん？ああ、どうしたサザン、機嫌悪そうだな。」

「ああ、聞いてくれよ。昨日折角狩ったアルミラージをよお、おおくちばしに搔つ攫われたんだ！」

「おおくちばし？」

たしかあの嘴がでかい頭から足が生えた？

「おおくちばしっていうのはな、茶色くて頭から足が生えたような見た目でな、足が速い魔物だ。」

大体あつてるな。あれって肉食か？ま、そこら辺はそいつの適応力つてやつだろうな。

「やつぱり周りには気をつけとかないとな。」

「ああ、全くだ。おかげで3匹も盗られちまった。大損だ。リュウも気をつけろよな。」

「ああ。そうしとく。」

多分、気配察知でどうにかなると思うが肝に銘じておかなきゃな。

……ふと思つたんだが……従魔って職業につけないのだろうか？

なので聞いてみた

「え？従魔も職業につけないか、ですか？」

「ああ、誰か試した奴はいないかと思つてな。」

「そうですね、ここらへんじゃ聞いたことないですけど……やってみます？」

「お願いできるか？」

「ええ、ただもし職業につけなくても料金は返しませんからね？」

「わかった。」

今回挑戦するのはスー、ライム、レムだ。スーは変わってないとして、ライムとレムが出てきた時はシリカが驚いたり悶たりしてた。ま、影から魔物が出てきたり天使がいたらしそうなるよな。

「それでは、いきます。適正ハ閲ク覧」

まずはスーから。

やつぱハロワに聞こえるんだよなあ。

『あるじく、なんかでた。』

「お？ということは従魔も職業につけるのか。で、どんな職業だ？」

『んくとね、武闘家でA、あとはF。』

「よくやったぞ、スー。」

『えへへ』

しかしなんて物理特化。しかしMPも多いから呪文を使う物理アタッカーに化けそうだな。

「まさか、従魔が職業につけるなんて…大発見ですよ！これが広まれば発見者のリユウスケさんは有名人ですよ！」

まあたしかにそうだが……

「だが断る！」

「なんでです？」

「もし職業につけるのがスーだけだったら、俺の従魔だけだったらどうする？もしかしたら他の全魔物使いを敵に回すかもしれない。もしこの子達だけだったら、お偉いさんや科学者がこぞって欲しがるかもしれない。そうするとデメリットしか無い。だから広げるのはやめておいてくれ。」

「もつたいなくないですか？」

「そうだな、シリカが考えたってことで、ある程度の魔物使いに教えて試してみたら良い。めんどくさいことになるのはゴメンだ。別に名声はいらないさ。難易度の高い依頼をやっていれば名声は上がるもんだろ？」

「え、私ですか!?!?……んくくく………わかりました、ですが、ギルマスとサブマスには本当のことを伝えておきますよ？」

「ああ、そうしてくれ。」

そして次はライムの番だ。

「適正<sup>ハ</sup>閲<sup>ロ</sup>覧<sup>ツ</sup>」

『おく、なんか、でた。』

「お、ライムは僧侶で適正Bか。」

『かいふくは、まかせてね。』

「元からそのつもりだ。頑張ってくれよ。」

さすがホーリースライム、癒やし特化。だがうちのライムは超火力

型でも行けるんですよねえ。

最後はレム。

「適正閲覧」

『…えへ、主様…』

「どうした?」

『くノ一エッグって…なんですかね?』

「……………忍○ま?」

『……………さあ?』

「くノ一エッグという職業は、盗賊の派生系と言われていますよ。闇に身を潜めたり、投擲をしたりと、あまり盗賊とは変わらないんですけどね。」

「へへレムにピッタリ?だな。適性もBだし。」

『なんか微妙です。』

きつと将来はニンジャだな。

さてここでステータスの確認だ。

|||||

スー ♀ Lv17

種族：バトルスライム

職業：武闘家

ランク：E

HP：249 / 249 → 60

MP：167 / 167

攻撃力：203 → 30

防御力：195 → 30

素早さ：190 → 10

賢さ：118

器用さ：192

幸運：60

称号：魔法の神の加護

闘神の加護

悪食



称号：光の神の加護

SP：25

え、え!?!レムにステータス大幅に抜かれてるよ!うわ〜なんかシヨック……

スーは今回、格闘術が上がってLv4になってる、あと正拳突きの特技を覚えていた。

ライムは回復魔法上がり、ベホイマ、ベホマラー、キアリクを覚えた。更に補助魔法も上がってフバーハにマホトーンを覚えてるな。

ベホイマ

回復量：285〜999（賢さ依存）

消費MP：50

ベホマラー

味方全体のHPを85〜110回復する

消費MP：45

キアリク

毒、猛毒、麻痺、眠りを回復する

消費MP：7

フバーハ

味方全員にブレス系の攻撃を軽減する霧を張る魔法

消費MP：12

マホトーン

敵の魔法を封じる魔法

消費MP：6

普通に強い。

レムはダツシユと闇耐性、攻補助魔法が上がってるな。更に奇襲のスキルを取得していた。

攻補助魔法が上がって新しくメダパニーマを覚えている。

メダパニーマ

深く混乱させる魔法

消費MP：12

||||||||||||||||||||

こんな感じか。

「ありがとうな、それじゃあ帰るぞ。」

「依頼を受けていかないんですか？」

「ああ、今日はゆつくりすると決めただ。」

「本当にこの事をリュウスケさんが見つけたと広めなくても良いんですか？」

「ああ、問題ない。めんどくさいことはゴメンだ。ただ、面白いことは首を突っ込んでいくがな。」

「程々にしてくださいね？」

「わかってるさ。」

~~~~~

今日スライムたちと遊ぼうと思ったのは、息抜きもあるがリングもどきを食べに来たかかったと思っていたのもある。

||||||||||||||||||||

スライム森林 Lv7

次のレベルまでの魔力

0 / 1400

現在の効果

平原・森の最適な環境維持

昼夜の追加

果実の生成、成長促進VI

普通のスライムもたま〜に分裂してたけど。

2匹目は、毎度おなじみメタルスライム。素早さ、硬さともにアツプして火魔法も覚えている。

3匹目は、メガスライム。ビックスライムよりも、もう一回り大きくなったスライム。こいつも分裂のスキルを持っている。縮小というスキルも持ってた。

スレィムベスたちは、レベルが20を超えている個体がいるにもかかわらず進化の兆しがない……ここで打ち止め？

もしそうだった場合、スキル上げに力を注いでもらうことになるな。頑張つてほしいものだ。

そしてスーたちもレベルが上がっている。

|||||

スー ♀ LvMAX → 3

種族：バトルスライム

職業：武闘家

ランク：E

HP：288 / 288 → 39

MP：180 / 180 → 13

攻撃力：232 → 29

防御力：215 → 20

素早さ：208 → 18

賢さ：133 → 15

器用さ：206 → 14

幸運：60

称号：魔法の神の加護

闘神の加護

悪食

SP：75 → 15

|||||

|||||

スライム ♀ Lv4 → 3

種族：ホーリースライム

職業：僧侶

ランク：D

HP：76 / 76 → 14

MP：171 / 171 → 29

攻撃力：63 → 13

防御力：70 → 12

素早さ：55 → 11

賢さ：134 → 23

器用さ：121 → 20

幸運：59

称号：光の神の加護

SP：40 → 15

|||||

心なしかスーはHPと攻撃、防御。ライムはMP、賢さ、器用さが多めに上がってる感じがするな。職業補正か？

魔物使いの俺は、多分どれかが特別多く上がったこと、無いぞ？泣きそう。

つと、スーが進化できるな。よし

|||||

進化先

・スライムナイト ▽

ランク：D

・デュエルスライム ▽

ランク：D

・チャームスライム ▽

ランク：D

|||||

お、おお……どないしよお……

……………チャームスライムでスーがぶりっ子になったら俺は生きていけないと思う。デュエルスライムは……………すぐく早死しそうなんだよな……………てなわけでスライムナイトでいこうとおもう。

「スライムナイトにするぞ？スー。」

『ん？いいよ』

スライムナイトを選択つと。

するとスーの頭の上にナイトが出てきた。

『う〜……………』

「スー？どうした？」

『これ！邪魔！』ーブン!!

スーがナイトの部分をぶん投げたつて……………

『ええええええええええええええ！』

ん？ライムは向こうで見てる、レムは影の中……………他のスライムはこっちを見ていない……………じゃ、この男の子のような声は？

『つてて……………私を邪魔者扱いとは、種族としてどうかと思うよ。』

うん、さっき聞いた男の子の声だ。こいつが喋ってたのか……………つて

「お前喋れんのか!？」

『主、はじめまして。私は、スーの頭上のナイトです。』

「ああ、よろしくな。というか……………分離してて大丈夫なのか？」

『普通は分離なんてしないと思うんですが……………どういうわけか分離しますね……………』

「ちよつと鑑定して見るぞ？」

『はい。』

|||||

ナイト ♂ L V I

種族：縛薙よ縞。縞い（亜種）

ランク：D

HP：235／235

MP：20／20

た。

警告がなかったら危なかった……

〈 警告のレベルが上がりました 〉

『あゝ、避けられちゃった〜』

「さすが、全然わからなかったぞ。」

どうやら、気配を遮断してたみたいだな。

『むく…悔しい!』

そう言いつつ正拳突きを放ってくるスーはすごいと思う。

結構スライム側が減ってきたなナイト、スー、ライムたちはもちろんいるとして、残ってるのはあと十数匹かな？

レムも頑張ってくれている。

「さて、そろそろ終わらせようか。」

『はい!』

『うん!』

『うん。』

ライムが魔法を放ち、ナイトが斬りかかり、スーが殴ってくる。スーの突きを左手で受け流しつつ、右手の剣でナイトの剣を受ける。

魔法は………身体強化で耐える!耐えたらすぐ回復。

そしてスーに対しメヒヤドを放つ。

〈 光耐性のレベルが上がりました 〉

〈 並列思考のレベルが上がりました 〉

〈 並列行動のレベルが上がりました 〉

しかし避けられる、が少しかすったよう動きが遅くなった。

とりあえずスーは置いておこう。まずはナイトだ。

ナイトに向かって一気に駆け出し斬りつける。

—ギヤリインツ!!

つと、ぎりぎり受けられたが問題ない。

俺はインベントリから炎の剣を出し左手に装備する。これは盗賊を壊滅させた時の戦利品だ。

並列思考、行動と身体強化をフルに使い二刀流で息もつがせぬ猛攻。

「ガキキキキッ！ガキンツッ！」

ついにナイトの剣を弾くことができた。そして首を挟むように剣を交差させる。

『ま、参りました……………』

ナイトが言う姿が消える。負けを認めても転移するんだな。便利。

へ 二刀流を取得しました へ

これでは、ライムとスーだけ。他のスライムは全部レムが相手をしたようだ。

「レムは、ライムの相手を。」

『わかりました。』

レムが影に沈んでいく。ライムの方を見るとちようどライムの影から出てきているところだった。

「これで回復役がいなくなったな、スー」

『あるじ、手加減、してね？』

「…それは、無理だな。」

……………ちよつとグラときたのは内緒

『ちえ〜。じゃあ行くよ！あるじ！』

「よし来い！」

互いに距離を詰める俺とスー。スーは伸縮自在による正拳突き、俺は隼斬りで迎え撃つ。

—キキキキンツッ！

なんでスライムと剣の接触で金属音がするのだろうか。不思議でたまらない。

何よりも全部弾かれたのが驚きだ。まさか手？触手？を4本伸ばしてそれぞれ正拳突きを放ってくるとは…

賢く育って俺は嬉しいよ。つとそんなことしているヒマはない。

そうこうしている間に次の拳（？）が飛んできている。

へ ダッシュのレベルが上がりました へ

—キキンツキキキンツッ！

いや〜、どうしよう、素早さもあまり変わらないからどうしようも

ない、ならば！二刀流に啞えてメラも混ぜ込む。

『えっ、ちよつと、きついく』

それでもしつかり弾いているんだよなあ。とここで勝機！ヒヤドで足元を凍らせてからの回し蹴り！スーが飛んでいった方向へダツシユで距離をつめヒヤダルコで固めメヒヤドで押し切る！スーの姿は……ない。転移したようだ。

レムたちは……相打ち？誰も居ないんだが……

へレベルが上がりました へ

へダツシユが縮地法に変化しました へ

終わったみたいだな。

「お疲れ様。」

『さすが主、強かったです。』

『うくまけた〜』

『私とライムは相打ちでした。』

『相打ち……悔しい……』

「よし、じゃあ晩飯にするか！」

『やった〜』

『楽しみです。』

『うん。』

あれ？ナイトって食べれるの？

『一応この中身はスライムですから食べることはできますよ。』

衝撃の事実。

さて、明日は依頼を受ける。よし！じゃ飯を作ろうかな。

あ、一応全部のステータスを見ておこう。

|||||

リユウスケ・ササキ 男 Lv29 →3

種族：人間 15歳

職業：魔物使い

HP：417 / 417 →26

MP：346 / 346 →20

攻撃力：284 →20

から奥にかけて調査をする調査員の護衛を頼みたい。

※先着3組(残り1組)

報酬：1組120,000G

|||||

ん？なんか増えてるな。Dパランクパーティー？なんだこれは。

「すまない、このパーティーっていうのは何だ？」

まあ、ある程度予想はできるがな。

「はい、パーティーとは、2人以上で活動されるパーティーたちを、分かりやすくまとめるために作られた制度です。Cランク以上からはパーティー名も申請できます。そして、パーティーにもランクがあり、実績によつて上がっていきます。しかし、ある程度高いランクと低いランクでパーティーを組むことになった場合、実戦試験によつてパーティーのランクが決まります。場合によってはメンバーのランクが上がることもあります。」

「なるほどな、よく分かった。ありがとう。それじゃあ…この依頼を頼む。」

「はい。アルミラージュの角の採取でございますね………はい。受理いたしました。近頃、魔物のレベルが高くなってきましたのでくれぐれも、お気をつけ下さい。」

「分かった。」

いつか俺もパーティーを組むことがあるのかな………当分1人でもいいか。スーたちもいるし。

—ドン…

いきなりローブ男がぶつかってきた。

「あ、すまない。」

「ぐあー!!いてえー!!いてえよお!!親分!ベルド!」

「おい!メテツラ!大丈夫か!」

ローブがいきなりゴロゴロしだし、駆け寄った細身の男に絡まった。いったいどうしたいんだ。

「おい!待て!」

バルディツシユを背負った、パズ○ラのタイタン男が、絡まったローブを解きながら叫んだ。

パ○ドラのタイタンがローブを解く……シニールなり。

それに、立ち去ろうとしてないんだが？

「何だ？」

「何だじゃねえ。てめえ、うちのかわいい子分達に怪我させといてそのまま行こうって言うんじゃ無いだろうなあ!!」

「だから済まない」と謝罪で済んだら衛兵はいらねえんだよ!きちつとオトシマエつけてもらおうか!ちよつと訓練場にこい!」

テンプレk t k r!

~~~~~

「俺達に目をつけられたこと、後悔するんだな!」

「相手が悪かったな坊主。俺たちのパーティー名はブルーオーガって言うてな、赤いオーガも真つ青になることで有名なんだ!」

「後悔しても、もう遅いぞ!」

三人が叫ぶ。後悔するのかしないのか……いったいどうしろと。

あと絶対怪我してないだろ。怪我してゴロゴロしてたやつ、普通に参戦してるし。

「おい、ブルーオーガ(笑)のガンズ達が新人の子供とやるらしいぞ。」

「まじかよ、あいつらまた新人ボコボコにして楽しんでるのか?」

「あの新人、登録から数日でDに上がったらしいぞ。」

「うわくまじかよ。その事、ガンズは知ってるのか?」

「あの顔見てみるよ、完全にナメてる。知らないだろ。」

「それで、どつちにいくら賭ける?」

「そうだな。ま、期待の新人と言ってもCには勝てないだろ。ガンズに3,000Gだな。」

外野もそこそこ集まってきてるな。賭け事もあるのか?

それに、どうもこのガンズってやつは俗にいう新人潰らしいな。

……お?サザンたちだ。あ、こつちに気づいた。











―ブンツ！ブンツ！

バルディツシユの振りも大振りになり避けやすくなっている。もう良いかな？

―ガキツ……ギヤリインツ!!!

オレはバルディツシユを受け止め弾き飛ばす。そしてメラを出せるだけ出す。もう出せるだけ。自分の限界に挑戦。

もちろん圧縮しています。

1、2、3、4、………18、19、20。20発。これが今の並

列思考の限界。

相手はちようどバルディツシユを取るところだ。

これをくぶつける！

―ボボボボボツ、ジユウウウウ!!

弾ける地面、舞う砂埃、溶ける音。砂埃が晴れるとそこにもう人影はなかった。

「……………」

皆唾然。

「オレの勝ちでいいよな？」

「オオオオオオオオオオオオ!!」

「すげえ！すげえぞ坊主！あんな魔法始めてみた！」

「あああ！オレのGがあああ！」

「へへへ、残念だったな。こっちは儲かったぜ！」

いやはや、まあ、暇つぶしにはなったかな？

この後冒険者達にもみくちやの質問攻めにされた。なので即効で逃げたわ。

~~~~~

さっさと北門を抜けて森へ！来た。今はお昼ごろ。上やくそうとアルミラージを取りに来ています。

今連れているのはスー、ライム、レム、ナイト。もし森中腹の敵がそこまで強くなかったら、まあ強くないと思うけど、そしたらルーム

な……ここで野宿でもしとくか。
ルームに入るから野宿……と言うか……んー宿泊になるのかな。

森に行く龍介 2

おはよう！いい朝だね。空から角のはえたウサギが降ってくる朝がいい朝とはいえない？……………その通り！

全く、朝飯食つて外でたらアルミラージが上から飛んで来るとはな……………全く今の御時世、治安悪すぎんだろ。

でも飛んで火に入る夏の虫、探さなくても向こうから来てくれた。身動きの取れない空中からだ。

……………よく考えると最高だわ。向こうからゴールドが飛んで来るようなもんか。

ちなみに朝飯は、昨日狩ったウサギを薬草とともに焼いた炒めもの作ってみた。美味しかったです。

薬草の天ぷら作りてえな。上薬草でやると、うまいんだろうなあ。ジュルリ……………

さて、今日は少し森の奥に行こうかな。上やくそうを見つけないきな。な。

~~~~~

ん、薬草しか無い。(現在389枚)

上薬草って見つけにくいものなのか？それとも採り尽くされたか？たまくに採られた、と言うか、かじり取った跡？があるからなあ……………

……………これホイミで生えてくるんじゃない？

試しにホイミ。

お、生えた。よっし。これで上やくそうが……………これ薬草じゃん……………これ薬草じゃん!!

上やくそうどこだー！

こうなったらとことん奥まで行ってやる！

「くけーっー！」

~~~~~


森に行ってきた龍介

「よし、今日はこのくらいで帰るか。スー、ライム、手伝ってくれてありがとうな」

『は〜い。』

『やっぱりお肉は、焼いたほうが美味しい。』

アルミラージの毛皮についていた血や肉片などをスーとライムに掃除してもらっていた。

もちのろん、肉は焼くに限る。この世界の生肉、鳥、豚は無理だとして牛は……どうなんだろうな。

よ〜し、内蔵……内臓……どうしようかな……あ……

スライムが食べてた。気がついたらなくなってたわ。内蔵が……ない……いや、何も言うまい。

よし、帰ろう。

「よ〜し、帰るぞ。ルーラ。」

~~~~~

あたりが光につつまれ、目の前は帝国の北門だった。

「相変わらず便利な能力だ。」

「お、リュウじゃないか。依頼受けて森に行ってたのか?」

「ああ。リブロは行く先々に居ると思うんだが気のせいか?」

「………気のせいだよ。」

「そうか。」

今の間、何でしようかねえ。

「そう言えば聞いたよ。リュウ。Cランクの冒険者を3人相手にして勝ったって?」

「それがどうかしたか?」

「いや、もうちよつと、こっう、喜んでいいと思うんだけどなあ〜」

「いや、あいつらのレベルを見た感じ、Cランクなりたてだっただろ? ノーカウントだよノーカウント。」

「それでもすごいと思うけどなあ…」

「物足りない感はある。」

「そうか、リュウは大物になるな。」

「ほめても大量のスライムしかでないぞ?」

「ははは、スーちゃん並のがいつぱい居るとしたらちよつと困るね。鑑定が効かないけど、強くなってるね。」

わかるもんなのかな。

「わかるのか?」

「ま、ある程度ね。ほら、門番してると結構人と接するからね。自然とわかるようになるさ。」

「そんなもんか。さて、もういいか?」

「ああ、ありがとう。」

さて、まずはギルド、その次、武器屋のおっちゃんとかだ。

食料は、とりあえず今は十分だな。

~~~~~

「これで依頼達成だ。」

「うわあ、また大量に持ってきましたね。ええつと、リュウスケさんはアルミラージの角ですね。」

「ああ、あと上やくそうの依頼も頼む。」

「こつちも多いですね。Dランクでこの量なかなか無いですよ?」

「そうか? 結構向こうから襲ってきてな。薬草は、鑑定があるしな。簡単だ。」

「ほんとすごいですよ。えつと、合計で102,000Gになります。」

「ああ、ありがとう。なにか新しい依頼は入ってないか?」

「そうですねえ…あ、武器屋のギガスさんから鍛冶に使う材料調達の依頼が来てますね。Dランク以上です。」

「お、ちよつどいい、その依頼、誰も受けてないんだよな?」

「はい、これから掲示板に貼るところです。」

「じゃあ、それを受けたい。」

「わかりました、詳しいことはギガースさんのところで説明するらしいです。なので今日か明日、ギガースさんのところに行ってください。」

「分かった。あ、おおくちばしもあるんだが、これって食べる場所あるのか?」

「おおくちばしはですね、足がとても美味しいんですよ。」

「へへ、結構筋張ってそうだがな。」

「それが意外と柔らかくて美味しいんですよ。」

「へへ、それはいいことを聞いた。今度やってみる。頭はどこか食べられるか?」

「頭は、脳みそが美味って聞きますね。」

脳みそか、確か美味しいってネットで見たことあったな。

「あ、そういえば爪とかあるんだが売れるか?」

「はい、一本800Gで買い取っていますよ。」

「じゃ、これも頼む。」

「はい、おおくちばしの爪が60本ですね。48,000Gです。」

「確かに。それじゃまた頼む。」

「はい、またのご利用、お待ちしております。」

~~~~~

「おっちゃん、いるか?」

「ん?おお、リュウスケか、どうした?」

「おっちゃんの出した依頼を受けたんだよ。」

「お、そうか、ちょうどいい。お前以上の強さがないとちいと厳しい材料なんぞな。」

「それ結構やばいんじゃないか?」

「なに、お前さんなら、命にかかわるような厳しきじゃないと思うぞ。」

それに、その分報酬も弾む。」

「それなら良いけどよ。そうだ、おっちゃん、ちよつと自分の工房持つ

たんだが、技術がないんだ。俺に鍛冶の基礎を教えてくださいな？」

「簡単な気持ちじゃ、鎚は振れないぞ？」

「そうだな。この魔物が闊歩する世界で生きるために自分にあつた武器を自分で作るために鎚を振る。これじゃダメか？」

「…まあ良いだろ。そういえばリユウスケ、歳いくつだ？」

「15だが？」

「かく、見えねえな。ほんとに成人したての子供かよ。目が本気だな。」

そう行つてギガスは豪快に笑う。

「鍛冶を教えるのは依頼を達成してからだ。本当に基礎だけでいいのか？」

「ああ、基礎さえわかれば、あとは自分で広げていくさ。自分でやるからこそ新しい発見があると思うからな。」

「よし、じゃ、依頼の内容だ。」

「ああ。」

「今回リユウスケに頼みたい素材は、ダツシユランの鱗だ。」

「恐竜型の魔物か。」

「なんだ、知っていたのか。」

「ある程度はな。」

「今回、発注していたはずなんだが、どうも注文ミスのように普通より少なく届いてしまつてな。」

「それで獲ってきて欲しいと。」

「ああ。この前鉱山に行つてただろ？」

「行つてたな。」

「山の手前から辺に分かれ道なかつたか？」

「あ、たしかあつた気がする。」

「鉱山に行かずそつちの道を行くとな、草原があるん。その草原にダツシユランがよくいるんだ。」

「ダツシユランの肉は食えたりするのか？」

「ダツシユランは煮込みがうまい。焼くのもいいが、ちよつと硬いのが特徴だ。」

「要る素材は鱗だけでいいのか？」

「そうだな、角もできれば欲しいな。もちろんこれも報酬に上乘せだな。」

「分かった。じゃあ、明日行ってくる。何体狩って来ればいい？」

「5,6体いれば十分だ。奴らの群れがそのぐらいだからな、多分すぐ集まるだろう。」

「そうか。」

「それと多分大丈夫だと思うが、ダッシュランは1体でEランクだ。囲まれたらDランクパーティーもやばくなる。くれぐれも気をつけろよ。ま、Cランクパーティーを1人で圧倒するお前さんなら楽だろう？」

「なんだ、知ってたのか？」

「もう、ここら辺じゃ有名だぞ。Dランク1人がCランク3人を相手に勝ったってな。」

「そうか、なんか照れるな。」

「ま、その調子だと当分死なないだろ。」

「簡単に死ぬつもりもないがな。じゃ、明日持ってくるぞ。」

「ああ。報酬は持ってきてからだな。」

「わかった。」

~~~~~

さて、さつと宿に帰ってきた。ルームに新しく作った工房に入る。

~~~~~

工房 Lv1

次のレベルまでの必要魔力

0 / 400

現在の効果

疲労軽減 (小)

設備レベル1

~~~~~


疲れにくいらしいな。設備は、黄銅でできたハンマー等だ。もつとレベルをあげよう。

||||||||||||||||||||

工房 Lv3

次のレベルまでの必要魔力

0/800

現在の効果

疲労軽減(大)

設備レベル3

||||||||||||||||||||

設備が鋼になった。後なんかここにいるだけで体がすつごく軽くなる。これはいつまでも鍛冶ができそうだ。

で、ちよつとやりたいのが魔道具作り。

確かランタンには 魔石 光ヲ 灯ス ツて書いてあつたな。何

で、何を、どうするって感じか？

……………どうやって文字を書こう……………指先に魔力をためて……………濃くして……………凝縮して……………

へ 魔力操作のレベルが上がりました へ

ナイフに刻む。

あつ…できた。けど、どうやら書ける面積はその物の表面のみと。

重ね書きも無理と。

これは指だと無理があるな。細く書きたいな。魔石を鉛筆状にしてみるか。

—ガリガリガリガリ……………ガリガリガリガリ……………ガリガリガリガリ……………シュツシュツ……………

こんなもんか。さてやってみよう。お、書きやすい。

これで長文も問題ないな。と、言うかまず描いて使えるかどうか。とりあえず へ 魔力1 水1L 出ス へ

これで行ってみよう。

魔力を5流してみる。

—ジャッ

……蛇口だな。ナイフ形蛇口だな。次は……あれ!?これ文字消せないわ。仕方ない次のナイフで:

へ 魔力10 直径10cmノ水球 分速10mデ飛バス
グリギリ入ったんだがこれで行けるか?

—ボンツ!

……わお……Fantasy……んく楽しいね。ランタンを見習って描いてみたが、めんどくさいから文章で書いてみよう。

へ 魔力を20消費して50cmの水球を直線に秒速10mで飛ばす。く

よし。

—ボツ!

お、すげえ。これでも行けるのか。でも疲れる。まあ肉体的には疲れないが、精神的に疲れたな。だって消し方わからないから。間違えられない。—ピキツ

ん?—パキイン:あ、ナイフが砕けた。

えくつと……:教えて!—ステルさくん

《はいはくい。呼んだ?》

『ああ、なんかナイフが砕けたんだが。』

《あ、それね。ランクが足りないんだ。》

『ランクか。それは考えてなかった。』

《あの長文だと多分CかBくらいのランクが要るよ。その他は多分1回が限度だよ。》

『そうか、分かった。あとさ、これって結構自由度とかいろいろガバガバだよな。』

《ガバガバというと?》

『例えば 魔石 光ヲ 灯ス って書くと、どのくらい光るのかわからなくないか?』

《魔石の場合はその魔石ごとに明るさを決めているんだ。魔力の場合にはなんやかんや気分で決めているらしいよ。》

『適当か!』

《うん、適当だよ。みんなそんなもんさ。》

『なんか、色々イメージが崩れるわ。』

《仕方ないよ。だって魔道具職人皆あやふやなんだもん。なんだよ光ヲ 灯ス ってどのくらい光らせたいのかわからないよ！つてルーが愚痴ってた。ま、古代文字って言われてるし。書ける人間も極々一部だし、仕方ないといえれば仕方ないんだけどね。》

『あとなんで日本語なんだ？』

《ほら、日本語っていっぱいあるじゃん？平仮名、片仮名、漢字。組み合わせもいっぱい。使わない手はないね。》

『たしかにな。じゃ、細かく書けば皆の負担も軽くなるし、こつちもいい効果がつくと考えていいな。』

《そうだね。いや、神は処理速度は早いけど曖昧なのはちよつと苦手なのよ。》

『でもよ、このナイフで行けるのはどのくらいなんだ？』

《最初の水出す奴。あれくらいなら余裕で行けるよ。》

『分かった。じゃ、できるかぎり曖昧にならない程度に書いとくよ。』

《ありがとう。あと、あの魔石鉛筆、なかなかいいアイデアだったよ。》

さて、念話も切れたことだし寝るか。

あ、風呂入らなきゃ。

~~~~~

|||||

湯の間 Lv7

次のレベルまでの必要魔力

0 / 1400

現在の効果

疲労回復（大）

昼夜の追加

神経痛、筋肉痛、関節痛の回復

関節のこわばり、冷え性の回復

健康増進

## 美肌効果

|||||

すごく……体にいいです。このお湯に入ってたら一生健康な気がします。

特に関節を重点的に治しに来てるのがなんとも、後美肌。地味に嬉しい。美肌だからね多分ニキビも予防してくれるだろう。前世ではニキビに悩まされた。あれは本当に、ついつい潰しちゃうんだよ。

あく温泉は心と体の洗濯やなく夜景も綺麗だし。言うことなしやん。明日はちよつと腕だな。今のうちに英気養つとかないな。

## 龍介のダツシユラン狩り

おはよう。今日は珍しくスー達が起きていない。とりあえずぶにしとくか。

—ぶにぶに、ぶにぶに。

いやあ、このスベスベプニプニ感がたまらんな。

『ん、ん、おはようあるじ。』

『おはよう、あるじ。』

「ああ、おはよう。」

『今日は遠くにいくんでしょ?』

「ああ、この前の山より少し遠いかな?」

『新しい、食べ物。たのしみ。』

「ダツシユランか、図体がでかい割に足が速い記憶があるが、実際の所見てみないとわからないな。」

『私を見た記憶がありますよ。たしか青い体をしたでっかいトカゲのようなものですよね?』

「だいたいあつてる。やばい技は持ってなかった気がするから、ある程度は楽だと考えていいだろう。」

『ふくん、じゃあ楽しい時間になるね!』

「ああ、なにか面倒なことが起こらなければな。」

あ、フラグさんは還つてどうぞ。

一応この前の道順は覚えてる。けど、足がなあ。歩いて行つてもいいが……馬車……馬……どこかで買えないか宿の人に聞いてみるか。

~~~~~

聞いてみたところ、近くで馬と馬車を売っている店があるらしい。早速そこへ行って買おう。相場も聞いてきた。

1, 100, 000Gもあれば良い馬車と馬が買えるらしい。今の資金でも十分に買える。これで少しは楽になると言いが。っと、いろ

いろいろ考えてるうちに目的地に着いた。

「いらっしやいませ！今日はどういったものをお探しでしょうか？」

「1,000,000Gほどで買える馬車と馬がほしい。」

「かしこまりました、ではまず馬の方から見ていただきましょう。こちらへどうぞ。」

そう言っつて連れてこられたのは裏にある馬小屋。

「ちようど最近いいのが入ったんですよ。こいつとかどうですか？」

ふむふむ

|||||

馬 ♂ Lv1

種族：馬 5歳

HP：50／50

MP：50／50

攻撃力：50

防御力：50

素早さ：50

賢さ：50

器用さ：50

幸運：50

|||||

すごく、整理されています。

どうせならレベルも5だったら良いのに……

「他のも見せてくれないか？」

「はい、かしこまりました。」

ん〜♂・♀ともに多少レベルに差は有るが基本的には同じか。

|||||

馬 ♂ Lv10

種族：馬 3歳

HP：130／130

MP：85／85

の抵抗を受けにくくすることができる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

お？

「この2匹は？」

「ああ、この2匹ですか？この子たちは双子の馬なんですけどね。どうにも昔何かあったみたいで、人間不信ってやつですよ。お客さんを怪我させてしまふんです。しかも2匹をある程度離すと、とても暴れるんです。世話できるようになるまで時間がかかってとても苦労しましたよ。」

「そうなのか。それは、苦労したんだな……」

ちよつとなでようとしてみる。

あ、耳を後ろにしぼって、口を突き出し、歯をむき出して、攻撃的な表情……

ん、とりあえず撫でる。

―ブワツ！

あ……手のひらザツクリ行つたー！

「お客さん！大丈夫ですか!？」

「ああ、大丈夫だ。ホイミ。」

加護の力か？

うん、そんな感じだ。どうしたものか……優しく撫でると美は落ち着いたりするってネットで見たけど……

腕にホイミをかけながら手を伸ばし撫でる。

「お、お客さん!？」

「グツ……大丈夫、大丈夫だ。別に危害を加えようなんて考えた無い。大丈夫だ。」

「……………」

よしよしよし。よしよしよしよしよし。

「ブルブル……………」

なんとなくだが、信じてくれたか？

「驚かせてすまなかつたな。この2匹、買わせてくれ。」

「ほんとうに良いんですか!？確かになんかいきなりおとなしくなつて

ますけど……」

「多分大丈夫だ。馬車も合わせていくらだ？」

「助かります！実は結構な客を怪我させて困っていたところなんですよ。なのでお安くしておきますね。そうですね……馬車合わせて850,000Gにしときますよ。」

お、結構安くなってな。

「安くなるのは良いんだが、そんなに安くしてよかったのか？」

「はい、やっと飼い主がでてくれたんです。エサ代も馬鹿になりませんし。買ってくれてありがとうございます。」

いま、本音出てなかった？ま、いいか。というわけで、足ゲット。しかも結構良い馬車だ。コネストーガ幌馬車に似たもので広い。いい買い物したよ。

で、草原に行きたいんだが、馬車の操作はネットで見ただけで初めてなんだが……外で練習するか。

えくと一応、すっかり忘れてたけどスキルの習得をできるようにスキルポイントがあつてだな。その中に御者というものがあつてだな。いや、別にネット知識だけじゃダメだったとか無いから。うん。とりあえず取得、取得。

へ 御者を取得しました へ

お、こうやって操作するのか。なんかやんわりわかった。いや、元から知ってたけど、知ってたけどな！

~~~~~

さて、結構様になってきたかな？この2匹の持っている風の影響は、どうやら馬車にも適用されるみたいで、全く風の影響を受けなかった。

空気の抵抗を無くせるからスピードも出るし、風のおかげで目がいばしぼすることも無い。しかもこれ、飛んできた物がある程度、外らせることができるらしい。

落ちてきた木の葉が、不自然な動きで後ろに流れて行ったり。飛ん









## 龍介のダツシユラン狩り 2

おはよう。今日は草原手前で宿泊。ちょこつとダツシユランを狩って。さつきと帰ろう。鍛冶を教えてもらうんだ。

「おはよう、皆。」

『おはよ〜』

『ん〜。おは…：よう。』

『おはようございます、主様。』

『おはよう、主。』

スー、ライム、レム、ナイトがすでに集まっていた。

ナイトもだんだん俺達との生活に慣れてきて言葉遣いも柔らかくなった。

「今日はダツシユラン狩りだ。まあ、よっぽどのことがない限り、大変なことにはならないと思うが安全第一で頼むな。」

『は〜い。』

フラグがたつた気配がしなくもないが、気にしない。

~~~~~

で、草原に着いたは良いけど……………

「何も、いないな……………」

『いないね〜』

『いない。』

『確か、鍛冶屋の話ではすぐ見つかるという話だったよね？主。』

「ああ、確かそうだった。」

ちなみにレムは、ルームでスライムたちの相手をしている。遊んでるか訓練しているか。最近よく相手してるからスライムたちの育ちがとてもいい。

色々進化して数と種類が増える。紹介は後日。

「しかし、ほんとに何もいない……………：気配なし。」

『みあたらない。』

『しばらく待ってみたらどう?』

「そうするか……………」

てなわけで、ピクニック気分で部屋でサンドイッチ作ってこよう。
あ、そういえばワンルールのレベルがMAXになった。

|||||

ワンルーム LvMAX

次のレベルまでの必要魔力量

—/—

貯蓄MP : 15

現在の効果

最適な温度、湿度の維持

魔力消費による家具の生成 ▽

庭を追加

冷蔵庫の中身が劣化しない

料理の旨味向上(極)

|||||

|||||

生成可能家具

ベット : MP 20 消費

ダブルベット : MP 25 消費

タンス : MP 30 消費

テーブル : MP 40 消費

椅子 : MP 10 消費

壁紙変更 : MP 5 消費

(ランダム)

目覚まし時計 : MP 5 消費

低反発マットレス : MP 100 消費

低反発枕 : MP 80 消費

冷蔵庫 : MP 200 消費

薄型テレビ : MP 500 消費

|||||

料理にブーストかかります。あと最後にすごいのきたな。薄型テレビって……………番組何が有るん。

この世界、天気予報やニュースが流れてたらどんなに楽なことか……………

こつちの世界に来て雨降ってないと思うけど。大した事件なかったけど。

台所で作ったのはお手軽なサンドイッチ。

ほんと、お手軽で助かるわあ。今日はちよつとおおくちばしに肉を使つてみた。ちよつとつまみ食い。うん、たしかに柔らかい、肉汁もたっぷり……………こんな上等な肉、日本じゃ食べたことなかったなあ……………

さあて、作り終わったし、皆で食事を楽しもう。

―ガチャ、ガンっ!!

「ガッ……………ガアアアアア!!」

―バタン!

……………あれ……………あれれれ?いま、ドアに鼻先ぶつけたのって……………ダツシユラン?今のダツシユラン?

おかしいな……………もっかい見るか。

―ガチャ

「「グルルルル……………」」

―バタン!

アイエエエエ! 色違い!? 色違いナンデ!?つと、取り乱した……………てか増えてるし……………

うん、絶対角と体の色が違う。え〜つと……………テラノライナーじゃなかったっけ?

ちらつと鑑定しよう。

―チラッ

うわ、まだこつち見てるよ……………

|||||||

テラノライナー ♂ Lv4

ランク:D

死んじやうレベルだ。

とりあえず……レム、呼んどくか。

「ライム、扉開けたらすぐ目潰しにデインを頼むな。」

『分かった。』

「3、2、1で開けるぞ。思いっきりやるんだ。」

これで、ただ出て倒すよりも、ライムに多くの経験値が入れば良いんだが……

「3……2……1……!」

―ピカツ!バリバリツ!!

「ガアアア!!」

「ガ……ガア……ガ……」

今のうちにササササツと。こう見ると、なかなかに禍々しいな。青黒い角に、灰色とオレンジの体。

でも、この魔物……乗り物的存在だったと思うんだけど……

「ライムは後ろで魔法で補助と攻撃、たまに回復を挟んでくれ。俺も回復はするから焦る必要はないぞ。スー、ナイトはいつも通り接近戦だ。レムはライムの護衛。それで大丈夫だよな。」

『余裕』

『大丈夫。』

『大丈夫に決まってるよ、主。』

『もちろんです、主様。』

なら安心だ。んじや、あちらも準備終わったっぽいし、行きますか。

あのむつちやレベルの高いやつは俺がやるとして。スー、ナイトで1匹ずつ、十分やれるな。

「ガアアアアアアアアア!!」

うわっ、ちょこつとぶるつときた。威圧か?んじやこつちも威圧。

―ブワッ

「!?」

「グルルルル……」

へー、他の2匹はなんかびびったっぽいけど、あのレベルの高いやつは怖気づかずか……伊達にレベルは高くないね。

「スー、ナイト！今のうちに攻め立てろ！」

『よいしょ〜！』

『せえええええええい！』

その時、全員の体の周りを薄いベールが包み込んだ。これは、フバーハか？さすがライム。ブレス対策バッチリだ。さらに、黄色と水色の光にも包まれる。スカラとピオラか。これで硬さと速さにブーストがかかる。

「ガアアアア！」

「」

テラノライナーがその重そうな体格には似合わぬ速さで走ってくる。そして大口開けて近づいてくる。なので足払いをかけながら受け流す。

ーヒュオオオオオオオオオ！

しかし意外と身軽なようで、テラノライナーはすぐに体勢を立て直し、その口から冷たい息を吐いてきた。いや、これ氷の息か！地面が、草が少し凍ってやがる。

だがフバーハがかかっているので冷たい程度ですんでいる。でもすこし動きが鈍くなるな。どうもブレスは口の中で魔力を練って変化させているらしいな。じゃあ、その口塞いでやるよ。

俺は、すぐさまヤツの下に潜り込み特大のアップパーをかました。ブレス吐いてる途中でこれされるとどうなるか。もちろん口の中が大変なことになります。逆流して内蔵がぼろぼろになることも有るとか無いとか。

「ヒュー……ヒュー……」

「な、なんかゴメンな？」

今適当にぼろぼろになるとか言ったけど実際苦しそうだな。ところで、スーたちは？

あ、スーがテラノライナーをタコ殴りにしてる。角と体の革を大事にして！大事な素材だから。

ナイトは……まあ、余裕そうだな……あれ!?てか角どこ言った!?あいつの角がないんだが……あ、レムが回収してるみたいだな。あれ？

あの角……両方共へし折られてない？いたそく……

あ、こつちも復活……とまでは行かないか……なんか顔色悪いし、いや、実際どうか知らないけど。

「ガ……ガアアア!!」

「うわっぷ……びつくりさせんなよ……」

今度は紫色の息を吐いてきたな。なんか肌がピリピリするけど……毒だよねこれ。耐性あるけど。

毒が効かないとわかると、今度は突進してきた。するといきなり頭を下げて、角でかち上げてきた。

これはちよつと驚いた。ま、受け止めて、足払い、転がって無防備になった喉にすぐさま剣を突き立てる。

「ガハッ……ガハッ……グ……グアアアア！」

「おつと。」

また氷の息と思ったら今度はヒヤダルコ混ぜてきた。こいつ、かつこいい技使うじゃねえか……

俺はメラミで暖を取りつつ、テラノライナーの口にシウウウーツ!! からのアツパーで口をふさぐ!超!エキサイティン!! 3次元アクション! バトルオーム、ツ○ダオリジナルから。それに追撃するようにデインの嵐。

「ガ……ガ……ガ……ガア……」

あ、口から黒い煙吐いて白目向いて倒れた。

スー、ナイトたちは……あ、知ってた。

スーが相手していたテラノライナーは、顔面が顔面じゃなくなってる。所々の焦げ跡はライムの魔法かな。角は、へし折られてるな。顔は角と牙が採れれば問題はない……はず!

ナイトは……おお、この首の断面、迷いが……一刀両断だ!さすが剣術Lv4だ。技術が違う。

へレベルが上がりました

確認確認

|||||

リユウスケ・ササキ 男 Lv34 →5

賢さ：297 → 10
器用さ：353 → 12
幸運：74
称号：闇の神の加護
SP：40 → 10

☆龍介のダツシユラン狩り 3

一応、テラノライナーの血抜きをしつつ昼食。血抜きの仕方は……以下略

昼食：おおくちばしのサンドイッチ

美味しかったです（まる

味見したときも思ったけど本当に柔らかい肉だな、スー達も美味しい美味しいと声を上げていた。

きっと、料理スキルと部屋の効果、なんやかんやで肉が予想以上に柔らかくなって頬がとろけるほどになるんだな。

あの硬かった黒パンも柔らかくなってるし。どうなってるんだ俺の部屋は。

詳しくは知らないけど。

で、ダツシユランが出ないんだが？なに？物欲センサー働いてんの？

お！気配察知に反応！数も5匹、ダツシユランか！！振り向くとそこには………

|||||

とさかへび ♂ Lv2

ランク：E

HP：85／85

MP：27／27

攻撃力：44

防御力：25

素早さ：67

賢さ：22

器用さ：13

幸運：33

|||||

|||||

とさかへび ♂ Lv5

器用さ：17
幸運：43

とさかへび ♂ Lv1

ランク：E

HP：83 / 83

MP：25 / 25

攻撃力：40

防御力：23

素早さ：65

賢さ：20

器用さ：11

幸運：21

「シヤ〜」

「シヤ〜」

違う！お前らじゃないっ！―スパパパパン！！

は〜……………かれこれ数時間粘っているが……………いないな……………

え〜つと……………どうしよう……………よし、寝よう。もう、これはあれだ、

スライムの森で昼寝だ。

確か魔物は自然発生。ならば待つ。スライムたちと遊んで寝るわ。

〜……………

ふあ〜……………夕方か……………夕方……………やべっ……………急いでダツシユラ

ン狩らなきや……………

―ガチャ、ガンっ！！

「ガッ……………」

―バタン！

うわ〜……………なんかデジャヴ……………あ〜……………今のは……………

ダツシユランだな……

―ガチャ

「コ「グルルルル……」」

ん、聞いてた通り、5匹ぐらいだな。

―スパパパパン!!

はい、一丁上がり。依頼完了。ぬあく……やっと終わったよ……んく今日持つていくっておっちゃんに言ってるから悠長に帰ってられないか……しゃーなし、ルーラ使うか……

「よくし、そろそろ帰るぞく、キングとクイーンをつともう来てたか……」

「ブルルルル。」

「よくしよしよし、ルーラで飛ぶときは浮遊感が有るけどびっくりするなよく」

「ブルルル。」

よし、馬車にもスー達や俺のおやつ用のムダンラの実をぎつと4箱ほど積み込んだし、と言つても……割と一瞬でなくなるんだが……何しろスー、ライム、ナイトで一箱ずつ、俺とキング、クイーンで残りだ。

でもスー達が足りない駄々こねるから結局残りも食べられるんだよなあ。カワイイから許す。

「ルーラ」

よくし、北門に到着。さっさとおっちゃんところに行つて渡してくるか。

~~~~~

「おっちゃん、いるかい？」

「リュウスケ。随分遅かったな。」

「しようがないだろ、何しろダツシユランが出てこなかったんだ。」

「珍しいことも有るんだな……ということは失敗……なわけないよな？」

「もちろんだ、最後になんとか鉢合わせな。」

「おお、よし！助かったぞ。これで注文通りのものが作れる。品質も最高だな。」

「それとな、テラノライナーって知ってるか？」

「たしかダツシユランの上位種で、その素材はいい武器と防具、薬にすることができ、それに肉もうまいと聞くぞ。まさか！」

「そのまさかだ、ここに3体ある。」

「ぜひ買わせてくれ……と言いたいところだがよく考えたら今回の依頼で金を使いすぎた。それはギルドの方に回してくれ。」

「それは残念だ。」

「つと、依頼の報酬だな、後でこの紙をギルドに渡せば依頼達成になる。報酬はここに用意してある。ダツシユランの革5体分で300,000G、長い角10本、短い角5本で105,000Gだ。」

「……………びったりだ。ありがとう。肉は明日回収しに来るぞ。」

「ちやつかりしてんだな。なに、こつちもいい素材をもらってホクホクだ。それで、鍛冶のことなんだが、明日でもいいか？今日中にこの素材で注文の品を作りたくてな。」

「ああ、わかった。それでだ、こいつを見てくれ。」

俺はこの前作った水を1L出すナイフを出す。

「こいつは……………この前のナイフじゃないか？」

「これに俺が鍛冶をやりたい経緯がある。魔力を流すと水が出てくるんだ。」

「なっ!?魔道具?……………まさか作ったのか？」

「ああ、ちよつと古代文字には詳しくてな。やっぱ、自分にあつた武器ってほしいよな。」

「なるほどな。まあ、なんだ、あんまり人に話すんじゃないぞ?どこぞの馬鹿な貴族が目をつけるかわからん。」

「なに、そのときは蹴散らして逃げるの一手だな。」

「そんなに甘いものじゃないぞ、貴族ってのは。下級ならまだしもな。」

「ま、秘策が有るんでね。」

ルームにこもるだけ。

「そうだ、これ食べてみるか？近所で採れた果実だ。」

「……………最近……………歳のせいで目が悪くなったか？それ幻の実じゃねえか？」

「そうだな、幻らしいな。」

「いや、幻らしいなって……………そんな簡単に……………ムダンラの実だぞ…これ1ついくらすると思うんだ!？」

「タダ。」

「タダ……………普通、これ1つで800,000Gはくだらないぞ、多分……………たしか数年前のオークションで、これより一回り小さいのが出たんだが、あれは確か500,000Gで落札されてたな……………こんな上物、貴族に見つかったらあの手この手で奪いに来るな……………」

「……………もったいねえな……………」

「また欲しくなったら、格安で売ってもいいぞ。」

「そうさせてもらおう。じゃ、これは今夜のデザートにもらつとくよ。」

「よし、じゃあ明日の昼頃に教えてもらいに来る、でいいか？」

「そうしてくれると助かる。」

よし、じゃあこの紙をギルドに持ってきますか。

~~~~~

「リュウスケさん、こんばんは、今日はどのような御用でしょうか。」

シリカが120%の笑顔で話かけてくる。

「依頼達成の紙を持ってきた。あとテラノライナーも。」

「テラノライナーなんて一年ぶりですね。」

「ただ解体をしてないんだ。ギルドでそういうのつてやってるか？」

「はい、解体は承っております。テラノライナーはDランクの魔物ですので1匹30,000Gですね。」

「5匹たのむ。」

「わかりました。では後で倉庫に持って行ってください。カルロさんに伝えておきます。」

「分かった。角はすでに取つてあるから買い取つてくれるか？」

「はい、では見せておられますか？」

「ああ。」

俺はインベントリから角を取り出した。

「へへ、とても質がいいですね。長い角6本と短い角3本で201,000Gですね。解体料を引いておきましょうか？」

「よろしく頼む。テラノライナー3体の解体料の90,000Gを引いておいてくれ。」

「はい、分かりました。それでは解体料を引いて111,000Gです。」

一応依頼、見ておくか。えへつと、真新しいのは……特に無い……か。

それじゃ、倉庫に届けに行きますかね。

~~~~~

「お、リュウか、話は聞いてるぞ。テラノライナーだつてな。珍しい魔物を取つてきたな。」

そこにはカルロと4人の従業員がいた。

「じゃあ、ここに三匹置いてくれ。」

「分かった。」

じゃ、3匹を置いていきますか。

「お、おお……なんか、一匹すごく顔がボロボロのやつが要るんだが……」

「ヒデエ……」

「どうやったらこうなるんだ……」

「あ、それはスーがやったやつだな。」

「ああ、この前のスライムか。」

そうそう、スライムならそうなるから。

「まず尻尾を落とすんだ！せーのっ！」

「1！2っ！1！2っ！」

「そういえばリュウ、内臓はどうする？」

「腸は全部とつといてくれ。残りの内臓と肉でまかない飯を作るぞ。」

「内臓って……うまいのか？」

「ああ、きちんと処理すれば食べられる。食感に癖があって好み人それぞれだがうまいと思う。」

「よくし、聞いたか！リュウが珍しい飯作ってくれるってよ！」

「2！ゴチになります!!」

「よし、尻尾落せたな。次は肛門線と睪丸、その他もろもろ肉の質を落とすものを摘出だ。」

「2！はい！」

「次は皮だ。剥けく！」

「2！はいっ！」

「内臓く、丁寧に取りだせく」

「2！はい。」

「後は部位ごとに切り出せ！」

「2！はい。」

「終わりました。」

「よし。終わったそうです！カルロさん。」

「リュウ、終わったようだ。」

早いな、一時間も経ってないぞ……

「ありがとう。じゃ、焼肉の始まりだ。」

すでに用意していたフライパンにきちんと処理をしたハツ（心臓）、レバー（肝臓）、マメ（腎臓）、ハラミ（横隔膜）のようなもの、サガリ（横隔膜）のようなもの、テール（しっぽ部分）などを焼き、皆に振る舞った。

「いやく、うまいな！まさか内臓がここまでうまいとは……」

「これは簡単に捨てられんな。」

「ハハハハハ！」

「リュウ、ありがとうな。こういうことが有るから倉庫番はやめられ



ないんだよな。はっはっは！」

「飲み過ぎじゃないか？仕事に響くぞ。」

「なに、今日の仕事はこれで終わりだ。きちんと倉庫の品物の確認も終わっている。あとは寝るだけだ。飲め飲め！ハハハハ！！」

よし、もう今日は飲もう！

## 鍛冶とか学ぶ龍介

ふあゝあ……………ここどこだ……………

……………あ……………倉庫か……………結局あのまま、寝落ちしたのか。

「うくん……………もうお酒はやめるから……………あと一杯……………」

「が……………ご……………」

「やめろーそれは俺の肉……………むにやむにや……………」

……………ん……………結構速く起きてしまった……………とりあえず寝ているスー、ライム、ナイトを回収して退散だ。

もし、誰かに見つかって怒られたらたまらんからな……………よく考えたら誰に怒られるんだろ……………サブマス?……………ちよつとブルツときた。

おっちゃんには、とくに何時行くとか約束してないから今から行こう。

……………

「おっちゃんー!いるか?」

「お、来たな。しかい速すぎだろ。何時だと思ってるんだ?」

「いや、わからん。」

時計持っていないし。と言うかあるのか?

「いま朝の6時だぞ……………」

「え……………そんなに早かったか。」

「まあ良いさ、ちようど暇していたところでな。そこにダッシュユランの肉が入ったカバンがある。結構ギリギリだったぞ。早くもって行ってくれ。」

「わかった……………終わったぞ。」

「じゃ、始めるか。」

「お願いします、師匠。」

「やめーや。その……………照れるな……………」

おっさんの照れる姿とか誰得。

「まあ、冗談はさておき」……………「……………とりあえず教えてくれ、師匠。」

「お、おう。もちろんだ。俺の技術を叩き込んでやるから覚悟しろよ。」

おっさんの照れる姿とか誰得。

「もう火はあるから、そうだな……………どうのナイフ作ってみるか。ここに銅の地金がある。これを熱してハンマーで叩く。この時地金を熱した時に出来た皮膜を叩いて取り除く。最後に水で濡らしたハンマーで叩く。この後また炉の中で熱する。取り出してナイフの形に叩いていく。高い温度ほど成形しやすいが、金属が痛むから切れ味に支障が出る。気をつけろ。」

「なるほど……………」

「低い温度だとアイケとかキズが出やすい。キズが出る手前の微妙な温度具合で鍛接するのが良いナイフを造る要因だ。そしてこの自動ハンマーで中子部分を造る。」

へへ便利なものが有るな。

「加工されたナイフは自然にゆっくりと熱を取る。これ焼きなましっていうんだ。これは歪みを取るための作業な。焼きなまし後のナイフは表面が酸化皮膜で覆われている。これをハンマーで叩いて取り除き酸化被膜を取り除いたナイフは自動ハンマーで粗叩きをする。粗叩き後、磨いてきれいにする。磨きではみ出た地金をここで削る。裏面にむらが出来ない様に表面から何百回もハンマーでならして仕上げていく。冷間鍛錬と言って包丁を水平に打ちしめるのと同時にゆがみを修正する技術があつてなこれは経験が必要だ。そのあと見本のナイフに沿って調節。この時出来たねじれ、歪みをもう一度修正する。ヤスリで綺麗にして油気や汚れを取り去ったナイフに焼きむら防止の為全体に泥水を塗る。これは、水に入れた時すぐに水を引きつけ、気泡を防止し早く均一に焼き入れを行う為だ。焼き入れは金属の硬度を高める為に必要な作業だ。」

地味に説明口調なのが気になる……………

「なんか余計なこと考えてねえか？」



「なるほどな。」

「よし、午前はこのくらいにしとくか。もうすぐで12時過ぎだ。」

「もうそんな時間か……おっちゃん、時計ってどこで売ってる？」

「目の前の魔道具屋。」

「近所さんか。時計は魔道具か。」

「ちよつと見てくる。」

場合によっては自分で作るし。

「いらつしやいませー」

「時計をちよつと見せてほしい。」

「はい、時計でしたらあちらになります。」

「ありがとう。」

え〜つと、時計は、これか。へ〜安いものから高いものまで。お〜、大きいの中から小さいのまで種類あるな。

時間は日本と同じ24時間か。ん？こっちは……日めぐりカレンダー？自動？まじかよすげえな。あ、これで月とか一年の長さとかわかる。日本と地が買ったら恥ずかしいしな。え〜つと……

火、水、氷、風、光、闇、魔、闘の8つの月、それぞれ40日の320日……か……で今は風の月の39日か。

だいたい23日にこっちに来たのか。一応これも買つとくか。時計は、……15万か……この銀の装飾、なかなか細かくておしやれだな。モチーフは茨とドラゴンか……茨から開放させる瞬間のドラゴンが描かれている時計。

よし買つちやお。合わせて20万か。

「これとこれをくれ。」

「はい、合計200,000Gになります。」

これでちよつとだな。

「ご利用ありがとうございますー！」

~~~~~

「お、帰ってきたか。その時計を買ったのか、結構高かったろ。」

「まあな。でも気に入ったから買った。」

「最近の若いものは金持つてるんだな……」

「色々報酬が割高だったんだ。」

「そいつは好景気だな。不景気にならないよう気をつけろよ。」

「そこら辺はわからんがな。」

「で、今日はどうする？基礎は教えたが。」

「何かあったほうが技術って有るか？」

「そうだな……」

鍛接、金属を接合する接合法の一種な。これのポイントは

① 芯までの十分な加熱

② 酸化被膜の除去と酸素の遮断

③ 片刃刃物・三枚打ち、三層の両側が軟鉄で、真ん中に鋼が入っている状態だ。この場合、カイサキ部分、溶接を行う母材間に設ける溝のことだ。これから中央を切っ先に向けてノロ、地鉄の一部が酸化して底の部分に固まって付着したものだ。これを絞り出す様に打ち、両サイドをまんべんなく打つ。割り込み鋼付け、地金を割って金属を入れる製造方法だ。この場合、中央部分を打ち、刃先側をまんべんなく打つ。

④ 最初の段階ではコバ側を打つときは充分に赤めて優しく打つ。

⑤ 慌てずスムーズに手早く作業を行う

火造り、金属を加熱して可塑性をもたせ、必要な形につくり上げることだ。ポイントは

① 温度を徐々に下げて作業していくこと。

② 素材の厚さを出来るだけ均一に伸ばしていくこと。

③ 金属板を表から打って成型したりで素材に傷を付けないこと。

④ 捻れ等を作らないよう作業をすること。

成形は自由だ……ぐらいだな。」

けっこうあったな。

「わかった。今日はありがとうな、おっちゃん。」

「いや、なんとも行儀の悪い弟子だった。まったく。だが、このくらい物覚えが良けりや、文句なしだ。いいモン作れよ。」

「じゃないと習った意味が無いだろ。あ、そうだ、ムダンラの実どうだった？」

「あんな美味しいもの久しぶりに食ったぞ。いい思い出ができた。もういつ死んでもいい……」

「おっさんは絶対長生きする人間だろ。しぶとそうだ。」

「失敬な。こちらとただの老いぼれだぞ？」

「老いぼれが俺の三倍の鎚カンカン言わせてる人が老いぼれとは言わねえ。」

「はっ、鍛冶屋はな、これぐらい振れねえとやっていけんぞ。」

絶対ウソだあ……絶対ウソだあ……

「じゃ、また何かあったら頼りにしとくよ。」

「おう、借金と貴族の問題以外なら相談に乗ってやるぞ。」

「あ、石炭や金属ってどこで買える？」

「ギルドで買えるぞ。あとは商会とかだろ。俺がよくお世話になってるのはイナリー商会だな。会長のネオアーム・ストロング・サイクロンジェット・アームストロング・イナリーとは知り合いでな。」

「完成度たけえなおい。」

「ん？どうした？」

こつちが聞きたいわ！どうした！どうしてそんな名前になった!!

「い、いやつい、いつもの癖がな……」

「そうか。で、そのイナさんとは知り合いでな。割と安く提供してもらってるんだ。紹介状書こうか？」

「そうだな、一応もらっておきたいな。」

「じゃ一筆書いとくわ………ほれ、気が向いたら行ってみろ。多分助けになるはずだ。」

「わかった。」

~~~~~

特に利用していない宿に帰ってきました。やっぱりルーム使うとなると、あるていどプライバシーの保護される宿に限るね。







SPについて話a……合えない龍介 1

side:????

『諸君！いまこそ我らが立ち上がり……新しき時代の扉を開くときではなからうか?!』

そう！魔物の、魔物による魔物のための世界を……しもふりにくを毎日！朝、昼、夜、食べられる世界を！そんな世界をわたしは諸君に、約束する!!であるからしてまずは、人間の国を、滅ぼす！この国を起点に、魔物大国を作る！見よ！この哀れなる人間どもを！おのれの欲望のままに生き、しあわせの国などという甘言にやすやすまどわされるおろか者を！聞け！わが同胞たちよ！たとえ、かつての古き魔王が滅びようともこのジャミラスがいるかぎり！魔はほろびぬ！我を崇めよ！われをたたえよ！そして今ここに我らに生贄をたてまつらん！』

「二」ガアアアアアアアアアアア!!「二」

ふつつつつふ、ついにきた！我が天下を取る時がきた！このジャミラスさまがな！はっはっはっはっはっは!!もう、こんな森からはおさらばだ。我はここから、人間どもの、世界の王、神になる!!

『ジャミラスサマ！シュツゲキノジュンビガデキマシタ。』

『よし！いますぐ出撃だ。』

『カシコマリマシタ!』

各地から集めた、我の部下たちはどれも強者。今日！ここから我の魔王としての人生が始まるのだ！

~~~~~

side:リュウスケ

現在、ギルドにきています。なぜかって？この国を魔物が攻めてきてるからです。

〜三時間前〜

「あゝ、速く起きすぎた………」

現在朝の4時。スー達もまだ寝てるな。レムは立ったまま寝て疲れないのか？。そういえばナイトは鎧を全く脱がないな。食べるときも甲冑の隙間から触手出して食べてるし。風呂のときも脱いででなかったな……

中身が………気になる………ただのスライムなのか、それともイケメンスライムなのか。

―チラツ………

う、宇宙が……見えた？………いや、何も見なかった。何も見ませんでした。

いや、スライム達のさわり心地、抱き心地は良いなくひんやりスベスベ。ギガスライム、メガスライムは本当にでかいからな、俺が上に飛び乗っても問題ない広さだ。

さて、スライム楽しんだし、そろそろスー達起こして……石炭買いに行くか。あ、まずSPの割り振りをせねば。

ドンドンドン！「リュウ！起きてるか？」

ん？今の声、サザンか？

「あ、やっぱりサザンか。」

「おお、リュウ！一時間後ギルドに来てくれ。なんか緊急事態らしいぞ。」

「緊急事態？」

「内容は、ギルドで説明されてる。んじゃ、俺は他の知り合い回ってくる。確かに伝えたからな。こなかったら怒られるぞ。」

「わかった。じゃあな。」

「おまえ、それ、宿かりる必要有るか？」

「その道で使うより宿で使ったほうが厄介事少ないだろ？」

「そういえばそうだったな。」

「そういうことだ。それじゃ、準備してくる。」

「おう、じゃあな。」

さくて、スーたちは起きたかな？

『あ、あるじ。おはよう。』

『む……おはよう……』

『おはよう、主。』

『おはようございます、主様。』

「ああ、おはよう。いきなりだがギルドに行くぞ。」

『どうしたの？』

「何かあったらしい。詳しくはわからないが……ちよつとめんどくさそうだ。」

冒頭に戻ります。

~~~~~

お、ギルマスだ。

「あくあく、聞こえるか？聞いているかもしれないが今魔物の大群がこつちに向かつて来ている。魔物大氾濫だ。」  
スタンピード

緊急依頼で大騒ぎだもんな。

「それを阻止するために、今から敵の情報とおおよその動きをクリスが説明する。リュウは、ちよつとこつちに来てくれ。じゃ、後はよろしく。」

「それでは、こちらで説明しますね。」

「リュウ、向こうの部屋で話そうか。」

さて、何か怒られるようなこと……倉庫？いや、あれは俺悪く……無いよな？

「リュウ、実はこの国にいる魔物使いはお前だけなんだ。それで従魔の戦力が聞きたい。もちろん情報は公開しない。誰にも話さない。ついでに、これが終わったらランクを上げる特典付き。」

「……………193匹。」

「……………は？」

「敵のレベルにもよる戦闘に出せるのは75匹だな。」

「……………もつかい聞くぞ？今、何匹従魔がいる？」

「193匹、戦えるのは75匹。」

「ちなみにレベルは？」

「ちよつと待て、呼んでくる。」

スライムの森から召集。

「うーむ、思っていたよりレベルが高いな。スキルレベルも高い、こんなに育ったスライムを見たのは久しぶりだな……………なあ、このスライムベスを門の上に配備させてくれないか？今回、魔術師が少なくな。門の上から遠距離で攻撃できる数が揃っていないんだ。」

「わかった。ただくれぐれも、怪我させるなよ。あ、スライムコマンドーも2匹つけとく。」

こつちに情報流せるしな。

「おお、助かる。もちろんポーション、MPポーションをしつかり準備している。安心してくれ。」

「俺はどうしたら良い？」

「えーつと、適当に魔物切り捨てれば良い……………んじやないか？」

「適当だな……………ま、楽で助かるけど？」

「ああ、斥候からの情報だと敵さんのランクはDとA、現在Bランクの魔物は7体確認されている。Aランクは1体だ。だが今いる冒険者で十分に対処できる数、レベルだ。もちろんBランクは俺やほかの高ランクの冒険者が相手をする手はずだ。」

「魔物の中にスライムがいたかわかるか？」

「いや、スライムは報告に上がってないな。だが、もし従魔を出すつもりならあまりおすすめはしないぞ？乱戦になるからな。間違えて攻撃されても文句は言えないぞ。もちろん貸してもらった従魔たちには指一本触れさせんなー！」

んーやつぱり危ないか……………

「わかった、じゃ、適当にやつとく。」

「おう。回復役は必要か？魔法使いも回そうと思えば回せるぞ？」

「いや、回復と魔法も自分でなんとかなる。」

結構余裕……………かも知れない。

「いやー、久しぶりに暴れられる。楽しみで仕方ないぞ。がはっはっはっは。血沸き肉踊る戦いの始まりだなあ!!」

「本当に脳筋か……………サブマスの苦勞がしみじみわかる気がするぞ……………」

「そうです。これでもけつこう大変なんですよ。」

!?…………びつくらこいたあ…………

「いつの間に……………」

「ギルマス、配置終わりましたよ。リュウスケさん、きようは頑張ってくださいね。功績によつては国王から褒美もでるそうですよ」

「それは……………気になる……………」

「やっぱお金かな?魔道具かな?領地とか貴族とかテンプレだけど……………」

「ま、そういうわけだ、しつかりやれよ?褒美全部俺らが、かつさらってちまうぞ。」

「そんなことはさせないさ。うちのスライムが、全部かつさらうさ。」

何このちよつとしたレクリエーション空気…………

~~~~~

で、いま門の前に来ている。今も魔物は接近している。だいたいどんな魔物が居るのかわかってきたな。

えくつと、グリズリーにあばれうしどり、スモールグール、スカルライダー、バーサーカー、あくましんかん、サイレス、ジャミラス……………フア!?あの大演説ジャミラスか!?

「魔法!用意……………撃て!!」

—カツ!!!

数十人の様々な属性の魔法が飛び交う。

「弓!用意……………放て!!」

—ヒュンツ!ヒュンツ!ヒュンツ!

数十人の弓使いによる矢の猛攻。全体の5分の1仕留められた感じかな?

近接戦で稼がなきゃな。

SPについて話a……合えない龍介 2

「へへへ、おもったより高ランクの敵はいないんだな。Dランクが6割ぐらいじゃないか？こんなに楽なら俺たちはあんまり働かなくて良いかもな。」

「まったくだ。俺はこの戦いが終わったら彼女と結婚する予定だったからな、助かったよ。」

「なんだ、お前もか。俺はなこの戦いが終わったらすぐ、告白する。」

「ははは、じゃ、なおさら死ねないな！」

「はっはっはっは。」

あ………思いつきり死亡フラグですが………ご冥福をお祈りします。

「全員！突撃ー!!!」

「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」」」

たしかに見た感じ奥の方に、おそらくBランクのバーサーカー2体、あくましんかん2体、サイレス1体、悪魔の騎士2体と、多分Aランクのジャミラスが居るだけで後はDとCランクだし……まいつか。

いつちよやりますか。身体強化と縮地法。盛大に使ってみよう。

~~~~~

side: ジャミラス

『ジャミラスサマ!!ワレラノ5ブンノ1ガヤラレマシタ!!!』

『分かっている……ここまで予定通りだ。シールドこぞうを担がせろ!』

『カシコマリマシタ!!』

やべえ、人間やべえよ………5分の1がやられた?こんなはずでは………し、しかし、シールドこぞうで大丈夫のはずだ。うん。いい感じのところまで我が前に出て1つ話せばすぐにでも人間は降伏するだろう。

~~~~~

位置について、よ〜い……

「ん？お、リユウ。何やってんだ？」

つとつとつと……

「サザン、と……おっちゃんか。」

「ああ、で、何やってんだ？」

「いや、スタートダッシュをだな。」

「他の奴らのテンションがおかしいからって流されるなよ……：……：……
他の奴らは冒険者家業で色々と経験を積んでそのけんけん場いける
と思つてDランク、Cランクを狙うんだ。良いか？魔物のCランクと
Bランクには大きな力の差があるんだ。高ランクの人間じゃないと
対処できないレベルだな。」

「わかった、気をつける。」

「というわけで、位置について、よ〜い……：……：……ドン!!」

ードンツ!!

周りの景色がすごい勢いで流れる。身体強化＋縮地法で体に負担
をかけずに連続で使えている。

あ、先頭抜いた。そしてこのまま先頭の魔物を追い抜き魔物の軍勢
の中へ。

へ 縮地法のレベルが上がりました へ

「そ……いやっ！」

ードゴオオオン！

あ、メラミ撃つて着地地点整地しようと思つたらクレーターできた
……まいつか。

着地してすぐさま威圧。

「!?!」

「ガ……：……：……つ?!」

威圧で周りの魔物たちの動きを阻害して隼斬りで首をほろり、ほろ
りと落としていく。

「っ!？」

「終わりだ。」

がら空きになった胴体、盾で防ごうとするがそれを右手のハヤブサの剣で阻止し、炎の剣で中心を突く!しかしバーサーカーはしぶとく上から斧を振り下ろしてくる。しかしこれは炎の剣、魔力を流し中から焼けば、攻撃どころじゃないだろう?

「ヒヒッ……ヒヒヒ、ヒヤハハハハハ……ハ……」

終わったな。インベントリに追加だ。そういえば、魔法って手からしか出せないんだらうか?

「Bランクが1体倒れたぞ!!」

「「オオオオオ!!」」

「このまま押し返せええええ!!」

びつくらこいたあ……いつの間にか前線が押ししてるらしい。

「お、Bランクを倒したのはリュウカ。はっはっは、まさかとは思ったが本当にやるとはな。」

「ギルマスか……うわあ……」

右手に持ってるのは……バーサーカーと悪魔の騎士の頭……うわあ……ギルマス強え……

「さすがギルマス。勝てる気がしないな……」

「まだまだ、若いのに負けるつもりはないぞ。次は、あいつだな……」
どうやらあくまはんかんたちに目をつけたようだ……ナクム。

~~~~~

side: ジャミラス

『ジャミラスサマ!!バーサーカーニタイに、アクマノキシガイツタイ、アクマシンカンガニタイ、ヤラレマシタ!!』

『むむむ………仕方ない!我が出る!お前も来い。』

『ハッ!カシコマリマシタ!』

ふふふ……人間どもめ、恐怖のどん底に陥れてくれる!

『聞け!!愚かな人間どもよ!!……』







攻撃力：478  
防御力：469  
素早さ：589  
賢さ：797  
器用さ：432  
幸運：80

しかし、ジャミラスは何で全部受けたんだろうか？

~~~~~

side：ジャミラス

イタイイタイイタイイタイ！なぜ、やつが魔法を全部受けたんだろうか……

プライドが、この私のプライドがああああ！！！！

しかしこの人間は何だ……普通の人間とは違う、まれに見る高ランクの冒険者というやつじゃないか？

まずい、非常にまずい……このままでは……このままでは……

悪い癖だ、弱い者に対しては最初どうしても手を抜いてしまう……そのつけが今回ってきたのか？いや。まだいける。ここから巻き返すことなぞスライムの核をひねるほど簡単だ。ふふふ……
我はやれる！

~~~~~

side：リュウスケ

『ふ、ふふふ……フハハハハ！』

何だ？頭おかしくなったか？

『人間にしては強いな、だがな。人間は所詮人間、お前は我に殺される運命だ。もうお遊びは終わりだ。』

「へえ、そのぼろぼろな体で？」

『ほぞけ。』

くつ、腐つても、焼けてもAランク、心なしか速さが落ちた気がするが……やっぱり早い重いのに2連チャン……

でも、まあ、全力出せば……行けるかな？

『ハア！はっ！ハアアア!!ハッ!!ガアアアアアアア！』

「クツ！ふん！は！おおおおああああああ!!」

ーギン！ギャリイーン!!ボンツ!!ゴオオオオ!!

『ハア……ハア……ハア……』

「フー……フー……」

やべ……ベホイミ……ベホイミ……

いったい何十分斬り合ったか……そろそろ……精神的、身体的にきつい……

『ここまで耐えた……人間は初めてだ……光栄に思うが良い……』

「それはどうも……そろそろ……その首よこせ……」

速く終わらせよう……ふく……体力の心配はない……なら、

防御を捨て、真っ向から切り伏せる!!

「ハアアアアアアアアアア!!」

『オオオオオオオオオオオ!!』

ふー……ふー……グッ……アドレナリン？のお陰であまり痛みはないが、ヤバイ気がする……なんか、体の芯から……力が抜けるような……やつは……ジャミラスは……

『ナラヌ……我が負けることは……断じてならぬ！朝昼晩に霜降り肉が食べられる世界を創るのd……ゴフツ……グ……グアアアアアア!!』

そう叫ぶとジャミラスは上半身と下半身が泣き別れた……よし……おわ……ったな……あく疲れた……ねむいな……とりあえず……休みたい……



## 魔物を撃退したその後

おい！この川の渡し賃6万円ってどういうことだ!!  
「はっ!？」

……………あれ？俺、今、何に乗ろうとしてた?……………

「お、リュウ、起きたか。」

「ああ、サザン……………俺……………何時間眠ってた?」

「2日だな。」

「そんなにか……………魔物は?」

「すべて殲滅した、ジャミラスが倒されたら蜘蛛の子を散らすようだったぞ?よくやったな。」

「そうか……………ギルマスは?」

「ん?ギルマスなら隣の部屋に居る。呼んでくるか?」

「ああ、よろしく頼む。」

「わかった。」

さて、無事ジャミラスは倒した。レベルも期待できそうだ!

|||||||

リュウスケ・ササキ 男 Lv59 →25

種族：人間 15歳

職業：魔物使い☆

HP：626／626 →174

MP：603／603 →217

攻撃力：485 →164

防御力：506 →177

素早さ：501 →184

賢さ：495 →192

器用さ：559 →190

幸運：\*\*\*\*

称号：シャルムとタイステルの加護

戦闘狂





「治療されたお前が運ばれてきてな、このベットに寝かせたらスライムたちがスタに潜り込んでな。好かれてるな。」

「本当にな。で、報酬とかどうなった？」

「ああ、ギルドからはリユウをBランクにあげることに決まった。」

「何か試験とか有るのか？」

「えー……………確か、貴族からの依頼が増えるからある程度気をつけるように。以上。」

「なるほどわからん。」

「貴族の中にはな、やっぱり平民をとことん下に見るやつってのがあるんだよな……………確か、貴族至上主義……………だったか？」

「なるほど、つまりぶっ飛ばせと。」

「全然分かってないな……………ま、明らかな貴族の不正やら何やらがギルドであつたら、ある程度守ることはできるが……………その後外で闇討ちされても知らないからな？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「は……………その命知らずはどこからくるんだ？」

「生まれつき。そういえば、国王からの報酬ってどうなった？」

「Bランク以上の魔物を倒した人にそれぞれ500,000G、その中でも特に活躍した人に王様がささやかな願いを叶えてくれるらしい。もちろん、今回の活躍した人のトップはリユウだ。」

「これで違かったらさすがに落ち込むぞ……………」

「で、国王に会いに行ってもらうんだが……………ま、皇帝陛下に会って、話聞いて、お願いを言うだけだ。」

「簡単だな。」

「ああ、ま、陛下が結構絡んでくると思うが頑張れよ。あと、終わったらギルドに顔出してくれ、カードの更新するから。」

絡んでくる？

~~~~~

いや、まさかこの部屋が王城の中にあつたとは思わなかった。な

んでも皇帝陛下の配慮だそうだ。

「ここが王の間です、くれぐれも無礼がないように……と言いたるところですが、陛下があれなんで、いつも通りで大丈夫です。」

門番みたいな人が説明してくれるが、一瞬苦虫を噛み潰したような顔が見えたのは気のせいだろうか。

「それではどうぞ。」

よし、何頼もうかな

王の間はよく画像でも見るような、レッドカーペットの道に左右に白い柱、左右の天井からは金刺繍や銀刺繍の施された……垂れ幕？でよかたつけ？そして部屋の奥にはよく見る王の椅子、そしてそこに座る30代位の人物、皇帝陛下か。そしてその脇に立っているのは……リブロ？

「おお、リュウスケよ死んでしまうとは情けない……仕方のないやつだな、お前にもう一度機会を与えよう！」

戦いで傷ついたときは、宿屋に泊まって傷を癒やすのだぞ？再びこのようなことが起こらぬよう僕は祈っているぞ。」

「……………」

死んでませんよ？

「父さん、リュウスケが固まっています。あと死んだんじゃないかと、死にかけただけです。」

「いや、皇帝家に代々伝わる……なんだ、間違えたなこれ……じゃあ、気を取り直して……よく来たね。君がリュウスケだね？息子から話は聞いているよ。Aランクの魔物を倒したんだってね。いや〜見たかったな。」

ノリ軽いなく……と言うかいまリブロ、父さんって言った!?

「え、え〜つと、お初にお目にかかります。え〜つと……」

「あ〜、もうちよつとリラックスして、リラックス。深呼吸深呼吸。堅苦しいのは苦手なんだよね。」

は〜ふ〜、は〜ふ〜……

「リュウ、落ち着いたか？」

「ああ、多分。と言うか、リブロ、王子だったんだな。」

「まあ、そうかな？最近警護の仕事しかしてなかったからだんだん自分が王子だつてこと忘れるよ……」

「こうやって一般の人と一緒に働くことによつて平民の辛さ大切さを学んでもらつてるんだよ。あ、これ王家に代々伝わる掟の1つね。あと、聞いていると思うけどリュウスケに褒美を与える。何がほしいか言ってみ？」

「魔導書とか、禁書とか面白そうなものがあれば見てみたいです。」

「わかった、おい！許可証をもつて来るんだ！あと報奨金600,000Gもだ。」

「はい！」

お、いま皇帝っぽかった。

「こういうときははしつかりした王になるんだけどな………どうしてこう………絡むんだろうか………」

「馴染みやすい皇帝陛下でいいんじゃないか？」

「馴染みすぎるとまずいことも有るんだけど………」

「お持ちしました！」

「よし、リュウスケ、これが許可証、これさえ見せれば書庫の中層の閲覧ができるよ。」

中層つてなんぞや。

「この城の書庫は上層、中層、低層、最下層に分かれていて、下に行くほど危険なものが多いんだ。」

「なるほど。」

「その許可証があれば王の間にも自由に入れるから、何か困ったことがあつたら来てね。………たまに遊びに来てくれよう？」

「いつか娯楽を作るつもりでいるからそのときにまた来ますよ。」

「そういえば忘れていたが、リバーシとか将棋とか作るのは異世界定番だよな。」

「それは楽しみだ！そしてコレが報奨金の600,000Gだよ。この国を守ってくれてありがとう。」

「ありがとう、リブロ。」

「そうだ、リュウスケの従魔たちを見せてくれないか？ギルドマス

ターのグランがとても助かったと言ってたからね。ぜひ会いたいね。」

王様つてちよつとフレンドリー過ぎね？まあこつちとしても助かるけど

「良いですよ、え〜とと……」

「何が問題があつたかい？」

「え〜、今から起こることは他言無用でお願いできますか？」

「ああ、もちろんだ。秘密は守るよ。つと、じゃあ人払いをしなきやね。」

陛下が手をたたくと警護の人が部屋を出ていった。

じゃ、ルームから出すか。

『あるじ〜！大丈夫だった〜？』

『心配した……』

『心配しましたよ主様』

『大丈夫みたいで安心したよ、主』

上からスー、ライム、レム、ナイトだ。心配かけたな。

「心配かけたな、大丈夫だ。レム、陛下に紹介するからベス達呼んできてくれ」

『わかりました』

「え〜と、右からスー、ライム、ナイトです。さっきの黒いゴーレムはレムと言います。いまスライムベス達を呼びに行ってもらっています」

「へ〜よろしくね。僕はこの国で王様をやっているんだ」

『よろしく〜』

『よろしく』

『よろしくね』

『主様、連れてきましたよ』

「お、ちようどよかった。さっき紹介したんだけど。この国の皇帝陛下」

「よろしくね」

『よろしくお願ひします』

「で、このスライムベス達が今回活躍した子たちです」

「へく、こんなに従魔にしてる魔物使いは初めて見たけど、皆かわいいね」

「ええ、大事な家族ですよ」

「うんうん、よし、じゃ今日はこのくらいにしてお開きにしようか。娯楽の話、楽しみにしてるよ？」

「完成したら一番に持っていきますよ」

「リユウ！僕の方もよろしくね！」

「もちろんだ」

明日はリバーシを作ってみるか。

や〜つとSPの消化ができた龍介

そういえば、ギルドに顔出さなきゃな。あ、全く気づかなかっただ、俺の服違うじゃん！

うーん、あんまり覚えてないけど俺のみかわしの服ボロボロだったと思うしな……とりあえずギルマスに聞いてみるか。

「おい、あいつが……………」

—《「ああ、Aランクの魔物を倒した……………」》
「……………二つ名がつくつてよ……………」

ん？…なんか噂されてる？

「あ、リュウスケさん！大丈夫だったんですか!？」

「ん？何のことだ？」

「何のことだつて、重症で運び込まれたつて聞きましたよ？」

「それなら、この通り大丈夫だ。それでギルマスに呼ばれてるんだが……………」

「はい、奥の部屋に通すように言われています。あちらへどうぞ。」

ん〜、二つ名？

「お、来たな。」

「ああ、まず聞いておきたいことが……………俺の服つてどこに有る？」

「あく、あれな、損傷が激しくてな、治るかわからないが一応修理に出してるぞ。」

「そうか。ありがとう。で、今回呼んだのはランクアップのことか？」

「ああ、あとな、お前に二つ名が。」

「二つ名？」

「そうだ、今回一番活躍したからな。ちよつと他の冒険者達にアンケートを取って見たみたんだ。」

「結果は？」

「死神、狂戦士、バーサーク無慈悲な炎、ジェノサイダー魔物の壊滅者まあ、これくらいかな」

……………この世界の冒険者つて……………良いネーミングセンスしてるよな!!!

「どれが良い？この二つ名は一生掲げるものだ。発表もするからな、

「ランクが高い魔物ほど美味しいとは言うけどな……………これはな……………筋張ってそうだよな……………」

「たしかに。」

「話が変わるが、お前のみかわしの服……………あれは流石に修復不可能らしい、知り合いの裁縫師に頼んでみたが、無理だそうだ。」

「そうか……………」

「それでな、その知り合いの裁縫師がな、悔しいから自分に新しい服を格安でコーディネートさせろといってきたな、どうする?」

「そうか、じゃあ、よろしく頼む。」

「わかった、明日の朝、また来てくれ。地図を渡す。」

「今日じゃダメなのか?」

「今日はダメだ。治ったばっかだろ?今日は無理すんな。」

「今日は皆過保護だな。ギルマスにも言われたぞ。」

「なにしろ、今回一番の功労者でもあり重傷者でも有るからな。ま、今回はおとなしくしとくんだな。」

「そうしとく。素材ありがとうな。」

「なに、お安い御用よ。おい!その箱はそっちじゃない!そっちだ!」
さて、宿に帰ってSPの振り分けについて話し合いますか。

~~~~~

ふふ、なにげに今日はつかれたな……………さて、スキルをあげるか新しく取得するか。

最初のスキル取得にいるポイントはだいたい20ポイントだな……………げ、神圧?ふああああ……………300ポイントって……………ん、ここは無難に手持ちのスキルをあげるか……………

どうやら、経験によつて必要なSPが違うようだ。

……………縮地法と、威圧、料理、スライム生成のレベルあげるか。

縮地法Lv3、威圧MAX、料理術Lv4、スライム生成Lv3。こんな感じかな、これで消費SP137



『主、呼んだ?』

「SPで新しいスキルかレベル上げをしようと思ってな。なにかあるか?」

『ん、自動回復?』

「あくテラノライナーのあれか?」

『うん。』

「え、つと……」

お、あつたあつた。え、自動HP、MP回復……ふあー。50ポイントか。

「HPかMPのどっちかしか取れないらしいが、どうする?」

『ん……HP、かな。』

「よし、他には有るか?」

『ん、闇魔法。主みたいな魔法が打ちたい。』

「そうかそうか。じゃあしつかり練習しなきゃな。」

『うん。』

「じゃあ次、レムを呼んでくれ。」

『わかった。』

レムはあんまりSPが無いからな、1つ覚えるかあげるぐらいしかないか。

『主様、お呼びですか?』

「ああ、新しいスキルかレベルをあげようと思ってな。ただ、あまり溜まってないから使わないのも手だな。」

『そうですか、でしたら私はやめておきます。』

「そうか、わかった。じゃあ、ナイトを呼んで来てくれ。」

『わかりました。』

『主、呼んだ?』

「ああ、スキルレベルとかあげたいんだが、何かあげたいのとか新しくほしいのとかあるか?」

『耐性がほしいな、え、つと、物理と斬撃が良いな。』

「よしわかった。じゃあ森に行くか。」

他のスライムのスキルも上げなきゃな。遊びながらちよちよいとあげるか。耐性系と自動回復系を確実に取らせるようにするか。

はく、やくつとSPの消化ができたくく



## リュウスケは新しい服を発注する

ふああ〜……………あ、スライムの森で寝落ちしちやっただか  
……………

スライムの布団……………結構良いな……………  
え〜つと……………まずはギルドだな。

~~~~~

「なあおい！ぜひ、うちのPTに入ってくれ！頼む！」

「いやいや！君はぜひうちに！」

「何をいつてるのよ！彼は私達のPTに入ってもらおうのよ！」

「いやいや……………」

「なにを……………」

……………よしなんか……………いい感じで言い合いしてるし、このま
ま倉庫に行こう。

「おお、よく来たな。これが道順だ。そこまで遠くはないが少し迷い
やすいから気をつけろよ。」

「ん？結構入り組んでるな。」

「ああ、隠れた名店？ってやつらしいぞ。本人曰く。」

「なるほどな。」

「ま、ちよつと癖があるが腕はいいんだ。安くしとくように言ってお
いたから安心して任せていいぞ。」

「わかった。」

え〜つと……………ギルドの倉庫を出て……………そのまま真つすぐ、次の十
字路を右に行つて……………

「おい、ガキ。ここを通りたければ有り金、全部置いていつてもらおう
か？」

なんかおじさん出てきた……………けどちよつと地図から目を離すと
割と迷いそうだ。

「うるさい。」

「何だと！この野郎、ガキだからって手を抜くとても思ってるのか？」
「うるさいって言うてんだ。」

「ちっ、じゃあ仕方ねえよなあ……」

はく、そんなカツコつけて指ポキポキならしてるけどあれって指太くなるらしいしあまりやらないほうが良いんだよな。指が太くなる以外にも幾つか症状があったっけな。

「ほら、全部置いてくべラッ!!!」

はくほんとやめてほしいな。まじで道わからなくなるから。

えくつと……こつちを曲がって……こつちに行って……

「おい、ちよつと待て。」

「ん?」

「ここを通ったのが運の尽き、荷物全部おいとあべしつ!!」

あ、こつちを右で後は真っ直ぐか……

「花園 エリザベス」↑店の名前

……
ここ本当に服屋?

「……」

「あら?お客様?」

店の前で掃除していたのは中肉中背の男……ただ
……ピチピチの女物の服を着ている……

……ここ本当に服屋?

「? どうかしたのかしら?」

「あ、カルロの紹介で来たんだが……」

「あら、あらあらあら、じゃあ貴方が巷で噂の死神りゅーちゃんね
?」

……りゅーちゃん?

「りゅーちゃん?」

「貴方の名前、リュウスケちゃんでしょう?だから、りゅーちゃんよ。
私はエリザベス。魔服職人よ。エリちゃんって呼んでね?」

「そう言いエリザ…………エリちゃんはとてくねくねしている。」

「それで、え…………エリちゃん、が見た感じ、みかわしの服はもう治らないのか?」

「ちよつと難しいわね。何しろ服に染み込んだ文字が途切れてしまつて、これを元に新しく作り直すことならできるわよ?」

「染み込ませる?」

「あ、みかわしの服みたいに布製の魔道具のことを魔服というのよ。魔道具は剣、鎧、アクセに魔力で文字を刻むけど、魔服は魔力の文字を染み込ませるの。これをエンチャントと言うの。魔道具でも使う用語なんだけね。このみかわしの服には、防刃に、耐熱、耐魔法、速度上昇の効果がついてたからちよつと…………いえ、とてももったいなかつたわねえ……………」

へくそんなのがついてたのか。

「それで今回新しく作ってくれるんだよな?」

「ええ、もちろんよ。こんな高い技術が使われた服はなかなか見られないわ。ここでなくすには惜しいもの。わたしの全力を持って新しく作ってあげるわ。」

「ありがとう。そういえばこんなものが有るんだが……………」

「これ、ジャミラスの毛皮?」

「わかるのか?」

「ええ、過去に何回か扱ったことがあるの。耐火と耐魔法にとても優れてるのよ。……………よし、これとみかわしの服でりゅーちゃんの新しい服を作つてあげるわ。お代は安くしとくわよ?カル口からも頼まれているしね。あ、ちなみにこのくらいかかるわよ?」

ふむふむ……………60万G!?

「割引でこの値段か……………すぐく大変なんだな、魔服作り……………」

「ええ、大変よく。何しろ文字を生地に馴染ませるのに特殊な液体を使って1日から2日、かかるんだから。」

「なるほどな……………じゃあ服ができるまでどのくらい待てばいい?」

「そうね〜……………4日、つてところかしらねえ。」

「わかった、じゃあ4日後にまた世話になる。」

「ええ、貴方みたいな可愛い子なら、いつでも待っているわよ?」

「また何か魔服が欲しくなったら来るさ。」

「アクセも売ってるから今後もご贖罪によろしくね♡」

「じゃあこれ、60万G、これからもよろしく。」

「ご来店、ありがとうございました〜」

~~~~~

道にまだ転がっていたゴロツキ二人がまだ転がっていたので詰め所に連行。詰め所で正当防衛で返り討ちにした人からの剥ぎ取りがOKだとわかったので財布をもらい(数千Gしかはいてなかったから詰め所の人たちに串焼き振る舞った)宿屋に帰宅。そして、

|||||||

木工場 Lv3

次のレベルまでの必要魔力

0/900

現在の効果

設備レベルIII

疲労回復(小)

効率強化II

|||||||

つくったつた。リバーシ、将棋、チェスを作るのに必要なもの、それは木材と加工する場所!

……………リバーシはプラスチックが良かったんだけどな……………作り方わかるけどめんどくさいしな。

……………木材はスライムの森の木材を使用。ムダンラの木材って名前……………高級品らしい。まいつか。

さて、工場の中身はあれだ、俺が高校生の時似通ってた工業高校にあった工場だな。

工具室にパネルソーにボール盤、旋盤、送材車付帯鋸盤、縦挽き昇降盤、横挽き昇降盤、手押し鉋盤、ベルトサンダー、ルーター、自動鉋盤、集塵機、倉庫……お！自然乾燥できるベランダまである！………ん？集塵機？え、これ木くずとか自分で処理するパータン？うわあ………いや………レベルが上がればワンチャン！でも今日はもういいや。さて、木を伐採しにーピピピピピピーうわ！びっくりした！

え？ギルドカードから？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

リユウスケ・ササキ

人間

職業：スライムマスター

ランク：B

連絡：着信あり 非通知

〈出る〉 〈切る〉

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ーピピピピピピピピピピ

………切る、ポチツとな。

ーピピピピピピ………

………

ーピピピピピピピピ

切る。

ーピピピピピピピ………

ーピピピピピピピピピピ!!!

………出るか。

ーガチャ

何この無駄に電話を意識した効果音

「おいーリユウ!!お前なんで切った!」

「いや、非通知だったから。」

「あ………それはすまんかった………」

「で、ギルマスが直々にどうした?」

「いやな、そういうえばBランクからの特典の通話のやり方を教えてなかったと思ってるな。」

「それを教えるのに通話を使ってたら意味くないか？」

「結果良ければ全て良し。」

「あ、はい。」

「でな、連絡先の追加の仕方だがカードを重ねるだけでいい。するとカードが点滅する。それで終わりだ。今、俺とクリスのを入れたからな。何かあったら連絡を超越せ。」

「遠距離でも入れられるんじゃないのか？今みたいに。」

「あ、これは、まあ、ギルマスの権限だ。普通はできない。」

「なるほどな、わかった。何かあったらまたな。」

「ああ。」

—ガチャ

ふむふむ……………

||||||||||||||||||||||||||||||||

リュウスケ・ササキ

人間

職業：スライムマスター

ランク：B

連絡先：▽

||||||||||||||||||||||||||||||||

||||||||||||||||||||||||||||||||

電話帳

・グラン ・クリストファー

||||||||||||||||||||||||||||||||

なるほどな、じゃ、続きをしますか。

~~~~~

ふうふうん！

—ズパン!!パキパキバキ!

「倒れるぞ〜！」

―パキパキバキバキ！バサア……………

ふう……………これで4本目そこそこな大木だからなこれくらいでいいな。いや〜、一発で根本を一丁両断するのは楽しいな。でも倒れる方向がわからないのはきついな。スライムたちも見に来てるからちよつと危険だったかな？いや、余裕で避けれてるから良いか。問題は伐採しすぎるときに何が起こるかかわからないってことだな……………気になるのが、伐採した切り株が消えることなんだよ……………これは、また生えると予想して良いのか……………ま、一本あたり直径2、3mはあるのを選んだからたまにしか取りに来ることはないと思うけど……………あ、ムダンラの実はすでに採集済み。

後はインベントリにしまつて工場に移動だな。

~~~~~

さて、まずは皮むき。アク抜きとかホントはしないといけないけど時間かかるからな……………とぼす。

で、送材車付帯鋸盤を使い木材にしていく。厚さは……………50mm(5cm)でいくか。

―シユラシユラシユラシユラ……………シユイイイイイン！

これで最後つと。ふ〜結構できたな。幅は200mm(20cm)長さは10m超えてたやつもあつたからな、分割して400枚、500枚ぐらいか？

これぐらいあれば十分だろう。ん？もうこんな時間かよ……………時間経ちすぎて昼飯食い忘れたわ。というかもう晩飯だわ。

じゃあ後はこれを全部、長い時間をかけ天日・影干しによる自然乾燥だな。

材の根元を天にかざし頭の方を地面の方にする。これで材木が水分を下から吸わない。雨が降つたりするかは別だが……………

で、この時出た不要周辺材だけど、チップにして紙にできる

………ただし、俺が作れるとはいっていない。けど一応とつとく。

『あるじ〜！木が生えたく〜！』

「木が生えた？」

『うん！切った場所にね〜バサア！つて生えてきたよ〜？』

「なんて便利設計………」

これでも多分木材枯渇はなくなったな！





1マス4cm×4cmで、9マス分＋余白（左右に1，5cm）で39cmの板が要るんだが、普通に足りないな。

たしか、工具室はあるんだっけ？じゃ、工具もあるよな。無いと工具室の意味が……………

……………うん、あつた、でも、こんな今の時代ではハイテクなものが出てきて良いのだろうか……………

いや、でもこの前、小学生の工場見学でうっすら覚えていた車製造の工場作ろうとしてERRORってなったもんな……………くっ、ここにも知識量がつ！

でも良かった、高校生の頃のことだからこの工場はよく覚えてる。

今回、板を接合するために雇い実やといざねを使おうと思う。木材に別の材料を接合する方法だ。

それで雇い実にするときにビスケットという木のはっぱのような形の板を使って繋いでいく。今回は厚さ5cm、幅19，5cm、長さ39cmの板を二枚作って繋いで縦横39cmの一枚の板を作る。

で、この溝を作るのにトリマーという工具を使う、小さな丸鋸みたいなやつだ。木端こぼ、板材などの両端の側面のこと、それにいくつか溝を作ってそこにボンドを入れビスケットを入れる。これでビスケットはボンドの水分を利用して膨らみ、組み合わせたときにできるズレを極力なくす。加工した面にもボンドを少しはみ出るくらいつけ、固定、乾燥させる。

けど、どうしてもズレが出る、だからベルトサンダーでズレを無くす。

マス目を刻んで、将棋盤ができた。で、駒の方だが、大きい駒は6個、小さい駒は34個の計40個。持ちやすいように大きめに作る。小さい方は高さ3，5cm、幅3cm。大きい方は高さ4cmで作る。

よし、あとは駒名だ。王将、玉将を各1個。角行、飛車を各2個。金将、銀将、桂馬、香車を各4個。歩兵を18個。それぞれの駒に文字を書いていく。我ながらうまくかけた。もちろん、裏書きもしっかり書いた。我ながらいい仕事したよ……………

最後はオイルフィニッシュ……………と思ったけど……………あるえ？こ

れ、もう仕上がってないか？

……よし……スベスベだ………おわり！

じゃ、後片付けを………

「あれ？」

『主、どうしたの？』

「いや、木くずの掃除をしようと思ったんだが、木くずがないな………」

『それならさつきこの子達が食べてたよ？』

「え？それは、助かったが木くずなんて食べて大丈夫か？」

『『『『美味しかった!!』』』』』

あ、そう。

「じゃ、スーたちを連れて大通りでも見て回るか。他の子達はお留守番だ。お土産持って返ってくるからな。」

『『『『は〜い!』』』』』

~~~~~

「つい昨日入荷したばかりのウサギの串焼き、だ！安いよ安いよ！」

「果実ジュース！果実ジュースが安いよ〜！」

「ふかし芋！美味しいふかし芋はいらんかい？やすくしとくよ〜！」

さすが大通り、すごく賑やかだ。

「いい匂いだな。何かのタレを使っているのか？」

「お、ボウズ、これはなうちに昔から伝わる秘伝、と言うほどでもないが特別なタレだ。」

すごくいい匂いだ。これはあたりだな、きつと！スライムたちのお土産におびつたりだ。

「この串、いくらだ？」

「130Gだ。いくつ買っていく？」

「そうだな、200本あるか？」

「にひゃっ………ちよ、ちよと待ってる………大丈夫だ、今から焼くか

ら30分ほど待ってろ。」

「ああ。それじゃ、少し見て回つとくぞ。」

「ああ、そのうちに焼き上げとく。」

んじゃ、適当に見回りますか。」

お、あつちにはケバブみたいなのか！これもお土産決定だな！この
アクセサリー……かつこいいな……でもちよつと似合わないな
……

あゝ果实ジューズうめー！

「あれ？リュウスケさん？」

ん？あれは……

「シリカ？ギルドの仕事は大丈夫なのか？」

「今日は休みなんですよ。リュウスケさんは？」

「装備を新しく作ってもらってな、その関係で数日休みだ。」

「そうなんですか。あの、一緒に周りませんか？」

「ああ、いいぞ。ただ、ちよつとあそこで串焼きを焼いてもらってるんだ。それをもらった後からでいいか？」

「はい、では一緒に行きましょうか。」

「そうだな。」

「お、ちよつど焼けたところだ。これが200本の串焼きだ。こんなに買ってくれたやつは初めてだな。今日は店じまいだな。それで代金のほうが……26,000Gだな。」

「えくと、これで……ちよつどだな。ありがとう。」

「こちらこそ！またよろしく頼むよ！」

「それじゃ、行くか。」

「はい！実は、行きたいと思っていたお店があるんです。一緒に行きませんか？」

「そうだな、行ってみるか。」

「こつちですー！」

えくつと……そつちを曲がって……そつちに行つて……チン
ピラが出て、倒して。

あれ、こつちの道つて……

「花園 エリザベス」

……やっぱりか。

「ここ、すごく有名なんですけど、場所が場所で、しかもなかなか教えてもらえなくてですね……」

「確かに昨日も二人ほど絡まれたしな。」

「もしかして、さっき言ってた新しい装備って？」

「ああ、ここで作ってもらおう事になってる。」

「でも、よくここを知っていましたね。私、昔から行きたかったんですけど、やつとこの前、知り合いに教えてもらったんですよ」

「ああ、一昨日カルロに教えてもらった。」

「カルロさん………知っていたなら教えてくれても良かったじゃないですか……」

『はっ！邪悪な気配!!』

哀れカルロ………

「あら？りゅーちゃん、まだ装備はできてないわよ？」

「いや、今日は知り合いと一緒に来たんだ。」

「あら彼女？ゆっくり見ていつてね？」

「ちよつ、そ、そんなじゃないです！」

「からかうのはやめてくれ……」

「装備の方はまだまだ……そうね、あと2日くらいかかるわね。」

まあ、時間かかるって言ってたしな。

「一応聞いておきたいんだが、いまどんな状態だ？」

「ちよつと文字が染み込むのに時間かかってるわね。もうみかわしの服とジャミラスの毛皮を合わせた布はできたんだけどねえ。こればっかりはどうしようもないわね。」

「そうか。ま、何日でも待つき。」

「そう言ってくれると助かるわ」

「あ、リュウスケさん！こっちに来てみて下さいよ！」

「彼女とはどんな関係なの？もう行くところまで行っちゃった？」

「別にそんなじゃないぞ？たまたま会って、連れてこられた。それだけだな。」

「身も蓋もないわねえ……………ここでプレゼントの一つでも買ってあげたら?」

そうは言うけどこういうの初めてで、どうしたら良いか……………は、恥ずかしいというかなんというか……………

しかしこつちがシリカの素なのか?すごくイキイキしてる。

「?? どうかしましたか?」

「あ、いや、いつも見てる受付のときと随分違うなと思ってな。」

「まあ、折角の休日ですしね、それに知り合いと周るのって楽しいじゃないですか。」

「そうだな。」

「あー!これもかわいいー……………けど高い……………」

シリカが見てるのはネックレスチェーンに小さく淡いピンク色の宝石があしらわれた綺麗なネックレスだ。

「その分、効果が強力なのよ?それは物理耐性と防刃の効果がついてるわよ。」

「へ〜そうなんですか。」

高いと言っていた割には目が離せていない。

「欲しいのか?」

「え、いや……………欲しいんですけど、ちよつとこれを買っちゃうと今月の給料の8割が無くなるので……………」

「エリちゃん、これいくらだ?」

「156,000Gよ。」

「これでちょうどだ。」

「はい。確かに。」

「はい、プレゼント。」

「え、え!?!いい、良いんですか?」

「まあ、なんだ、こつちに來てから結構世話になってるしな、そのお礼だ。」

「こ、こんな高いもの……………いい、いただけません!」

「ちなみに、不備がない限り返品は不可よ。」

「だそうだ。俺は他に渡す相手が考えつかないんだ。受け取ってく

れ。」

よく考えたら女性の知り合いってシリカしかいなかったな
……………ソウダネ、エリチャンモダネ……………

「そ、それじゃあ……………あ、ありがとうございます……………」

「初心^{うぶ}ねえ。」

「からかうなよ……………」

「りゅーちゃん、ここらへんは日中でも物騒だから、しっかり送っていかのよう？」

「じゃあなんでこんなところに店を構えるんだよ。」

「それは私の夢が知る人ぞ知る名店にすることだからよ。現にいまそ
うなってるでしよう？」

「たしかに。」

「ほら、もうそろそろ日も落ちるし、私もこれからりゅーちゃんの服を
作らなくちゃいけないから今日は店じまいよ。またいつか来なさい。
安くしとくわ。」

「ああ、わかった。」

「またよろしくね〜」

もし軽く生産できるものだけできたら、自分の店を持つのも良いか
もな。

「リュウスケさん、今日はありがとうございました。こんなプレゼン
トまで貰って。」

「いや、日頃のお礼だからな。今日は楽しかったし、お互い様だ。」

「おれで、あの……………連絡先交換しませんか？お礼もしたいですし
……………」

「あれってBランク以上じゃないと使えないんじゃないか？」

「ギルドの職員は特別に使えるようになってるんです。緊急のとき
とかによく使われますね。」

「へ〜、じゃあ交換しとくか。」

「はい〜」

シリカと俺のギルドカードを重ねる。すると淡い光が灯り消えた。

|||||

リュウスケ・ササキ

人間

職業：スライムマスター

ランク：B

連絡先：▽

|||||

|||||

電話帳

・グラン ・クリストファー

・シリカ

|||||

「ありがとうございます！あ、ここで大丈夫です。家がもうすぐ近くなので。」

「じゃあまた今度な。」

「はいっ。」

あゝ、もうこんな時間か………宿に帰ってスライムたちにお土産あげるか。

~~~~~

「ただいま。」

『おかえりなさい！』

『』『』『お土産!!』『』『』『』

花より団子ってか。

「これがお土産だ、全員分あるからな、皆で分けろよ。」

『』『』『は〜い!!』『』『』『』

「お、うまいな。」

『おいし〜!』

『』『』『おいしいね』『』『』『』

これはほんとにあたりだな！ご飯が欲しい………お米ってどこに有るんだろう………そもそも有るのか？



課題が多いな……明日は王様に将棋もって行かなきゃな。

さて、風呂入って寝ようかな。そういえば温泉のレベルも上がったんだ。

|||||

湯の間 Lv9

次のレベルまでの必要魔力

0/1800

現在の効果

疲労回復（極）

昼夜の追加

神経痛、筋肉痛、関節痛の回復

関節のこわばり、痔疾、冷え性の回復

健康増進

切り傷、火傷の回復

販売機Ⅱの追加

|||||

はいk t k r!

自動販売機k t k r!!

牛乳、コーヒー牛乳、フルーツ牛乳、まだレベル2だからちよつと品揃えが少ないけど風呂上がりに牛乳が有るのと無いのと全く違う

!

ちなみにお値段700G……クソ高え……ビンか!?ビン

がこの時代がないからってそんなに高くしなくてもいいじゃないか

!

あ、美味しい!フルーツ牛乳おいしいな。

全員分買うと14万Gぐらいするんだけど……ま、良いか。

こんなに美味しいなら700Gでもうなずける。

ビンも何かに使えそうだし、これは洗って保存だな。







馬鎧の頭、顔全体を覆う仮面には角付き、前足の膝には棘、ちよつと刺々しい具足、ちよつと黒に染めたらそれだけで禍々しい何かになりそうだ。かつこいいい！

直で木材を着せるのは流石に酷だから木材の裏にいつかくうさぎの革とか使ってみたりした。これが結構しつくり来て満足してる。

「ブルルル……」

クイーンはあまりお気に召さなかった様子……

嫌なら別に良いや。正直、これなくてもキング達強いからな、気が向いたらつけてもらおう感じで。

しかし、ムダンラの木材で作った武器……一般の銅の剣よりも硬い。

何回か銅の剣に打ち付けてみたけど刃こぼれなし。大木るときはこんな硬さはなかったはず……

伊達にレア度Aじゃないってことか……

パンジャンドラムは……ほら、ハムスターが走ってガラガラ回転させるやつみたいな感じでスライムが中にはいつて走れる、ちよつとした遊び用に改造した。

『あはははは〜！これおもしろ〜い!!』

『スーさ〜ん！速く変わってよ〜！』

『『『変わってよ〜〜！』』』

この通り、引つ張りだこである。意外と気に入ってくれて助かった。

ちなみに、俺もスーと一緒にパンジャンドラムに乗ってみた………回転に目が回って酔った……うつぶ………

あれから数刻……

コロシアムのレベルを上げ、ステージに村が追加された。現在、バトルロワイヤル形式で訓練中。

あまり殺傷能力の高くない木製の武器と獲得経験値上昇のお陰で、簡単にスキルレベルを上昇させることができている。

この訓練によって剣術、斧術、槍術、槌術、鎌術、鈍器術、棍術、暗殺術といったものが取得できることがわかったけど、スキルの説明は

剣術とあまり変わらなかったので割愛します。

そしてスライム達には何か一つの武器に絞って練習してもらっている。流石に全部取って器用貧乏になったら困るからな。結果、格闘術と何か1つの武器術を習得し、皆を強化することができた。

スーは全部の武器を使って、全部のスキルを取得した。レベルも高  
いから中途半端に終わることはないだろう……さすが自慢の子！

ナイトは槍術、格闘術、鈍器術を取得。

レムは鎌術。レベルも4となかなか高い。

ライムが意外に槌術。小柄なライムが巨大なハンマーを振り回す  
光景は……撲殺天sおつとこれ以上はいけない。

俺は、鎌術をちよつと……死神の二つ名をもらったからな。ちよつ  
と死神感を出したかった、テヘペロ。

訓練を続けて経験を十分に積めた所で、陛下に将棋を持っていこ  
う。

ただ時間がちよつと……今の時間は午後6時……まいつか。

~~~~~

「リブロ、陛下に約束のものを持ってきたぞ」

「約束のもの、ことは新しい娯楽だね？今、父さんは暇してると思うか
らすぐに行こうか！」

城の警備をしていたリブロに知らせるとすごい笑顔で謁見の間へ
連れてってくれた。

さすが王子、手続きも何もなく顔パスで謁見の間に行くことができ
た。

「父さん！今大丈夫ですか？」

「ああ、リブロか、もちろん大丈夫だ。どうした？そんなにワクワクし
たような顔をして」

「リュウが約束のものを持ってきたんです！」

「なんだって!?待ってたよリュウスケ！それで？どんなものを作った
の？」

「故郷の遊びで、将棋って言うてな。ルールは……えっと、説明書をか
くの忘れたんだ、それで何かに書き留めといてほしいんだが……」

「すぐ書き留めさせるよ。リブロ、羊皮紙とインクを……」

「はい、すでに準備できています」

「よし、じゃあ説明してくれ」

「ああ。将棋の駒は玉将（玉）及び王将（王）、飛車（飛）、角行（角）、
金将（金）、銀将（銀）、桂馬（桂）、香車（香）、歩兵（歩）の8種類
で、それぞれ動ける範囲が決まっている。それでそれぞれの駒に動け
るマスが決まっています……」

えくつと、このくらいか？基本ルールに、持ち駒、後反則……うん。

「ルールはこのくらいだな」

「なるほどね、なかなか頭を使うんだね。こんなに簡単なのによくで
きた遊びだ。頭の体操にもってこいだね。早速、相手してもらえるか
い？」

「もちろん」

さて、いつちよボコボコにしますか。

「王手だよー」

「ぐっ………参りました………」

最初の数戦はよかった。だが、どういうことだろうか……あれから
ずっと勝てない！ボコボコにされたー！うそくん……陛下強すぎい
！

「本当に面白いね。リュウスケ、ぜひよかったら、これを僕に売ってく
れないかい？」

「もとよりあげるつもりで持ってきたんだ。代金はいらない」

「こんな良いものをもらってお金を支払わないのはさすがに申し訳な
いよ。ぜひ、代金を受け取ってくれ」

「そこまで言うならありがたくもらうよ。他にも作るつもりだからそ
の時はまたよろしく」

「ああ、楽しみにしとくよ。それで、物は相談なんだけどね？これを国
で作って販売してもいいかい？」

「ああ、良いぞ」

「もちろんタダで、とは言わない。売上の何割かを……え？良いの？」
「別に良いぞ？」

「あ、そう？なんかこう……もうちょっと粘つてくれても良かったんじゃない？ほら、売上の何割もらうのか、とかさ」

「そういうのはそつちで決めてもらって構わない。お金はそこまで困ってないしな。どうせならお金より家がほしいところだ」

「じゃあ、明日までに手配しとくよ」

「それは助かる。家を買いたいと思っていたけど、金額がいくら掛かるのか分からなかったから迷ってたんだ」

「これで、交渉成立だね。明日また来てよ。警備の人に話通しとくからさ。」

「ああ、成立だ」

よっしゃ！家ゲット！

「この時……まさか将棋が数百年以上たったヒューマ帝国で、劣化せず、1つの駒も欠けること無く、国宝として存在しているなんて知る由もなかった……」

かどろかはわからない……

「?? 何か言ったかい？リユウスケ」

「いや、何でもない」

一回こういうこと言ってみたかったんだよな。

さあ、帰ろうか。

何気ない龍介の日常 3

「おっちゃん、いるか?」

今日、俺がギガースの元を訪ねたのはイナリー商会の場所について聞いたためだ。あのすごく完成度が高いイナリー商会の店長?に会いに行こうとしたけど、そもそも場所を知らなかった。

「おん?リユウか、どうした?」

「イナリー商会の場所がわからなくてな」

「あく、そういえば教えてなかったか?えくつとな、城までの道で貴族街と平民街の境界あっただろ?」

「ああ、あのでっかい橋がかかってたやつか?」

「そう、それだ。その端を渡ってすぐ右にでっかい建物なかったか?」

そんなの……………あつたかな?

「あつたような、なかったような……………」

「ともかくあるんだ。ま、見たらわかると思うぞ。結構でかいからな。」

「なるほど、わかった」

「あ、もし商会に行くなら、これも持っていつてくれ」

「この武器たちか?」

ギガースが持ってきたのは鉄の剣15本。

「鉱石や燃料を安く売ってもらってるからな。こっちはその対価に剣を納品してるんだ。それは今月分の剣だな」

「なるほどな。わかった、しっかり届ける」

「よろしくな」

~~~~~

で、橋に来た。途中、また串焼きのおじさんがいたから50本焼いでもらった。お仕事お疲れ様です。

それで?イナリー商会はと言うと…………

「でかいな……………」

多分4階位あるんじゃないか？ちなみに平民街は、基本2階建てが多い。貴族街も見た感じ、3階建てがちらほらあるかな？つて感じだ。そう考えると4階建ては珍しい。

中に入ると受付があり、何人かが受付を行っている。

その受付の1つに暇してそうな男がいたので話しかける。

「ちよつといいか？」

「んあ？ボウズ、ここに何のようだ？」

「おつちや……あ、ギガースから紹介状をもらってきた、それに納品の剣を預かってきている。」

「紹介状か、ちよつと見るぞ……!?……ボウズ、ちよつと待ってろ」

そう言うとその男は急いで奥の方に消えていった……いったい何が書いてあったんだよ……

「ボウズ、4階の一番奥の部屋に来てくれ。そこの階段から一番上に行ける」

「ああ、わかった」

4階の奥には明らかに高級そうな扉があった。そこまで装飾のない扉だがまたそれが良い。

ノックを……

「どうぞ、入ってきてください」

扉の奥から鈴を震わすような美しい声が聞こえてきた……ノックしてないのに分かるんだ……気配察知かな？

中に入るとケモミミな女性がいた。金色の毛並みの狐耳！金色の

狐尻尾………k・t・k・r!!

獣人だ！獣人だ!!夢にまで見た獣人！全然エンカウントしないから不安だったんだ！ああ、そのもふもふな耳、もふもふしたい！もふもふしたい！もふもふしたい！毛並みはどんな感じなんだろう？どうにかしてさわれないだろうか？いきなり触ったら流石に「おまわりさんこいつです！」だろう。この世界では衛兵さんかな？テンプレでは親しい関係の人にしか触らせないってのが有るが………どうなんだろうか？

「……………もふもふしたい……………」

「えっと……あの………」

「はっ！……あつ、え〜つと……ネオアーム・ストロング・サイクロン  
ジェット・アームストロング・イナーリってのは、あんたか？」

あゝ、あまりの感動ともふもふ衝動で固まった。

「……………」

「? どうした？」

「はっ！……あ、いえ、名前をフルで呼んでくれる人はごく一部な  
もので。さらに初対面で覚えてくださっている人は初めてなもので  
……………」

どうやら相手もフリーズしていたらしい。

「えっと、じゃあ改めまして、ネオアーム・ストロング・サイクロン  
ジェット・アームストロング・イナーリです。イナーリ商会の代表を  
しております。皆様からはイナリと呼ばれています。どうぞ、宜しく  
お願いしますね。死神、リュウスケさん」

「よろしく。で、これがギガスからの品だ」

「はい……………確認しました。ありがとうございます。それで、今  
日はどういった御用で？」

「紹介状をもらってたのを思い出したんだ。そのついでに燃料を買っ  
ていきたいと思ってるんだ」

「石炭ですね。どのくらいほしいんですか？」

日本のアマゾンでも石炭の物価がキロ2,000円ぐらいだったと  
思うんでけどこっちはどうか？

「そうだな……………100キロくらいか？」

「……………100キロとなりますと、285,000Gですね」

ふむ、キロ2,800Gくらいか、ま、妥当だな。値下げ交渉しと  
くか。

「もう少し安くなったりしないか？」

とりあえず言ってみる。

「ええ、良いですよ？え〜、220,000Gでどうでしょうか？」

「意外とすんなり値下げするんだな」

「ええ、最短でBランクに登り、数日前にリュウスケさんが持ってきた

素材はとても品質がよく、それを安く仕入れさせてもらってるんです。このくらい値下げ、どうということはありません。もちろん、常連となつてくだされば、更に嬉しんですけど?」

「まあ、仲良くやっていきたいとは思っているさ。あと馬鎧って買えるか?」

「ええ、もちろんです。馬を見せていただいて、寸法を取り作ることもできますし、自動的に大きさを換えられる魔道具にもできますよ?」

「魔道具、か?……いくらぐらいだ?」

「1つ600,000Gです」

「む、ん?……今回はやめとく。ちょっとGが足りないな」

「そうですか、それでは石炭20キロだけですね?……はい、手配させましたので一階の受付でお受け取りください」

「ああ、また何かほしいときは、お世話になるぞ」

「これからも、イナリー商会をよろしくお願いします。それと、これをお持ちください」

「ん?これはなんだ?」

「会員証のようなものです。これを従業員に見せれば割引ができますし、何かの時に後ろ盾になることを示すものにもなります。ぜひ相談しに来てください」

「……初対面なのにどうしてそこまでするんだ?」

「そうですね……強いて言えば、匂いですかね?貴方はとても人を引きつけるような匂いをしています。それに、益はあっても害がある匂いが全くないので信用に値しました」

「やっぱ、獣人ともなればその自慢の嗅覚で善悪を嗅ぎ分けることができるのだろうか?」

「そうか、じゃあ、無下にはできないな。ありがたくもらっておくよ」  
「そうしてくれるとこちらも助かります」

~~~~~

そう!石炭を買ったのは鍛冶をするためだ。

☆何気ない龍介の日常 4

「リュウスケさんですね？お待ちしておりました。どうぞ、こちらへお越しください」

「ああ、ありがとう」

城の門番に通されたのは謁見の間ではなく、少し小さい部屋。だが、それでもやっぱり王族の住む城なんだと感じさせる雰囲気がある。なんというのか……金に物を言わせていない豪華さ、とても言ったかんじか？

「リュウスケさん、ようこそいらっしゃいました。私は今回、物件を紹介させていただきます、イナリー商会、リアルエステート部門のセールと言います。今日は人気の高い4つの物件を紹介させていただきます。代金は、国に請求しておくように言われておりますので、ご安心ください」

「ああ、よろしく頼む」

「まず1つ目なんです……」

紹介された家の間取りを見せてもらったが、どれも良い物件だった。

1つ目は、大通りにある貴族街と平民街をつなぐ橋の手前にある家。イナリー商会の近くにある2階建ての家で庭付き。貴族街が近だけあって家具とかも充実しているらしい。

2つ目は、北門を抜けてすぐで、1階建て地下付き。地下を作る技術があるのに驚きを隠せない……

3つ目は、ギルドのすぐ横、2階建て。ギルドへのアクセスが簡単、武器屋も近い。

4つ目は……城の部屋、三食昼寝付き。

まず、城は無い、確実に。だって色々距離がありすぎるから不便で仕方がない。

ギルドの横……の横に酒場があるしうるさそうだからパス。

北門は……何もなさそうだし……

貴族街よりの家が一番便利で良さそうだな。

「この家で頼む」

「はい、承りました。では、この契約書にお名前と血印をお願いします」

契約書は、まあ簡単に読むと、この家の持ち主ですよって証だな。権利書？みたいなの？

「……………はい、確認いたしました。すでに家の掃除は済ませています。こちらは、家主のリユスケさんがお持ちください。もし紛失した場合、イナリー商会のリアルエステート部門へ何か身分証を持ってお越しくください。再発行することができません。これが貴方のお家の鍵です。では、よい生活をお楽しみください」

「ああ、ありがとう」

「ではこれで失礼します」

よし！マイホームゲット!!あ、装備受け取らなきゃ……………今は5時か、大丈夫だな、多分。

~~~~~

「へいへい君！有り金、全部置いて　ブベラツ！」

……………どうしてこう……………

「いい子だから財布を　ぴぎやつ!!」

本当に……………

「ぐへへへ……………君、かわいいね〜俺と　ひぎやああ!!」

曲がり角曲がるたびにチンピラが絡んでくる……………

「治安悪すぎだろう!?!衛兵は何してる!!」

「りゅーちゃん、いきなりそんなこと言われても困るわねえ……………この時間帯はどうしてもこんなのが増えるのよ……………」

「まあこいつらは痕で詰め所に連れて行くとして、装備を受け取りに来た。できてるか?」

「ええ、もちろんよー！最高の出来になったわー！」

えりちゃんが詰め寄ってくる。女装した男に詰め寄られても、嬉しくない!



「それで、その装備は？」

「これよ！」

そう言っただけでえりちゃんが出したのは……上から下まで真っ黒な服になっている。しかも深めのフード付き。そういえば、死神の服装がこんな感じだな。

「この服の名前は、リーパーの装よ！」

リーパーの装か、割といい感じの名前。

「それでこの服に付けたエンチャントは、防刃に、超耐熱、耐冷、超耐魔法、速度上昇、自動修復よ。新しく耐冷と自動修復がついて、ジャミラスの毛皮のお陰で耐熱、耐魔法の効果が上がったの」

「効果が上がることがあるのか？」

「素材が何かに優れていて、その部分を伸ばすように作るとたまに、ね。私もこんなにうまくいくとは思わなかったわ」

「それで、服が黒くなったのは？」

「それが、最初は普通の黄緑色だったのよ？でも服を作ってる最中、いきなり黒に染まっちゃったの。なんでかしらね？でも、これはこれでもとっても良いと思うのよ」

「確かにな」

「気に入ってもらえて嬉しいわ！新しくつけた効果は聞いて分かると思うけれど、一応説明しておくわね。耐冷は寒さに強くなるわ。自動修復は、装備者の魔力を使って自動で修理してくれる優れものよ」

「へー、今までとは大違いだな」

「もちろんよ。なんとたって素材の品質が上級で、私も予想外なほど文字を染み込ませられたもの。その服は、りゅーちゃんの働きの印でもあるんだから、もし無くしたりしたら……」

えりちゃんの目が鋭くなる。思わずつばを飲み込んでしまうほどの圧だ。

「したら？」

「最高級の素材で服を作っただけ……あ、その時の素材は全部りゅーちゃんが自分で調達してきたね？」

「ぜ、善処します」

「あ、珍しい素材が手に入ったら持ってきてね？リーパーの装の強化ができるかもしれないからね」

「わかった、それじゃあこいつらを詰め所に連れて行くか……………」

「あゝ、すっかり忘れていたわね……………」

チンピラ3人で14,000Gの儲けです。んゝ……………何とも言えない！もつと金持つとけよ！あ、金があったらこんなどこにいないか……………

さあ、新しい家に帰ろう。

~~~~~

家に到着した。雰囲気はこう……………なんて言おうか……………葛の絡まるレンガ造りの西洋建築、よくいえばそこそこ文化財的な価値を持つてるかもしれない豪邸。悪くいえば……………ちよつと朽ち欠けてるな。だが壁、床、天井ともにしっかりとしており、とても綺麗で、内装は無いそうです……………なんてこともなく、すごく良い。玄関にホール、書斎、客間、アンティークな家具、ベットもふかふかで気持ちがいい。低反発とは、また違った気持ちよさがある。さて、庭とかを見て回りたけれど辺りは相当暗くなっている。けど寝るにはまだ早い……………ならば遊ぶしか無いっしょ……………の前に、家の庭にレムのゴーレム生成で作ったゴーレムを配置し、もしもの時に備えとこう。家を持ったらかかが侵入してくるのは、もはやテンプレ。

で、思ったのが、ゴーレムたちを訓練の相手に使えば対人戦完璧なんじゃない？

ゴーレムの武器は……………とりあえず無いから、素手だな。

それでちよつと思つたことが。

「レムが作ったゴーレムつて、立ち位置的にはどんな感じなんだ？」

『立ち位置、と言いますと？』

「レムみたいにタイム状態なのか、つてことだな」

『それは……………タイム状態みたいですね』

へゝ、そうなのか

「じゃあしつかり面倒を見るんだぞ？ゴレムたちの主として誇れるようにな」

『もちろんです。主様のスライムたちに負けない、最強のゴレムたちを作ってみせますよ』

あ、スライムとゴレム……両方とも競争的な感じで成長していくビジョンが見えた！

この後、レムが更にストーンマン、ハイドゴレム、ビッグゴレムを生成した

ハイドゴレムはやや細身、で灰色、少しゴツゴツしている。潜伏能力が高いらしい。

ビッグゴレムは、その名の通りでかいゴレム。普通のゴレムと比べると頭2つ分ぐらい飛び出てでかい。

レムは少し時間をかけ、全部でゴレムを10体、ストーンマンを5体、ハイドゴレムを4体、ビッグゴレムを2体生成した。

ハイドゴレムを家の警備に回し、後をコロシアムに配置。門番的な？雰囲気完璧。いつか鉄騎兵みたいなゴレムも生成できるのだろうか？

さて、訓練という名のお遊戯を始めますか！

スライム陣営はバトルスライム13体、ビッグスライム5体、スライムベス10体、ホイミスライム2体、スライムコマンダー3体で編成されております。

対するゴレム陣営は、ゴレム4体、ストーンマン2体、ビッグゴレム2体、ホイミスライム2体。

ゴレムの数が明らかに少ないのはレムの疲労のためだ。ホイミスライムがいるのは、回復がないってのは流石に不公平かなと思つて。

あとスライムは武器なしだ。

まず、ゴレム1体がスライム何体で対処できるのかわからないから、ゴレム1体VSスライム5体でやってみる………結果、スライムの勝ち………レベル差、考えてなかったな

そもそも、ゴレムのレベルがバラバラ何だよな………とりあえず、

生成した種族内で一番レベルが高い個体には赤い布を渡してリールダーにしとこう。なんかかつこいい。

「それじゃあ、両者、位置について……………始め!!」

『『『『わ~~~~~!!』』』』』

「『『『……………』』』』」

ゴーレムが地面を揺らしながら走り、スライムが地面を滑るようにうごき、衝突する。

ゴーレムの攻撃!

ミス!スライムには当たらない!

バトルスライム達の攻撃!

ゴーレムに平均23のダメージ!

ゴーレムは死んでしまった!

(保健室(死にかけると飛ばされる部屋なので保健室)に飛ばされた!)

ストーンマンの仁王立ち!

スライムたちの狙いがストーンマンに移った!

ビッグスライム達の体当たり!

ストーンマンに平均17のダメージ!

バトルスライム達の攻撃!

ストーンマンに平均15のダメージ!

ストーンマンは死んでしまった!

ストーンマンの痛恨の一撃!

バトルスライムに96のダメージ!

バトルスライムは死んでしまった!

ビッグゴーレムの爆裂拳!

ビッグスライムたちに平均57のダメージ!

ビッグゴーレムの踏みつけ!

バトルスライム4匹に56のダメージ!

ホイミスライム達のベホイミ!

バトルスライム2匹のHPが74回復した!

ビッグゴーレムの叩きつけ!

バトルスライム4匹に46のダメージ！
バトルスライム2匹は死んでしまった！

ちよつとドラクエ風？な実況を試してみたんだけど、どうかな？似てるかな？

本当に死んではない、けど軽く死にかけてるから相当痛いと思う
………ゴレムとスライムに痛覚が有るか、と言われると自信ない
けど………

攻防ともに互角、すごい戦いだ。

重量感のあるゴレムに対し、スピードで攻めるスライム、いい感じに訓練になるじゃないか。

やっぱり、1対1だとスライムがきついのかも……いや……結構いけるな。

で、なんだかんだで最後に勝ったのはスライム陣営、でも結構消耗している。残っているのはバトルスライム数匹とコマンダーだけだった。

と、ここで我が家の車、キングとクイーンの登場。

自分たちも戦ってみたいようなので、バトルスライム5体とやらせてみた。

結果はキングたちの圧勝、疾走で走るキング達にバトルスライム達が追いつけず、ヒット&アウェイでジリジリ削られていった。

|||||||

キング ♂ Lv20 →3

種族：馬 3歳

HP：181/181 →21

MP：130/130 →18

攻撃力：126 →16

防御力：112 →12

素早さ：150 →24

賢さ：140 →17

器用さ：115 →13

幸運：90

龍介の魔物捕獲大作戦!

早朝、ギルドに依頼の確認に来ている。

見たこと無いモンスターは基本タイムで行こうと思ってるが、お金は大切ですからして。

「リュウスケさん、あの、この前はありがとうございました。高いものまでもらってしまって……………」

「いや、なんだ、ちよつとした感謝の気持ち? みたいなものだから気にしなくていいぞ」

「そういう訳にはいきませんよ? いつか、お返しをさせてもらいます。昔からおばあちゃんに、受けた恩は返すように言い聞かされましたから」

「そうか、じゃあいつか美味しいもの食べさせてもらおうかな」

「はい! 最近、お気に入りのレストランがあるのでいつか行きましよう!」

「その時はよろしくな。それで、なにか森関係の新しい依頼はあるか?」

「そうですねえ……………これなんてどうです?」

|||||

B以上

珍獣探索

森の奥に住むと言われている珍獣の探索

可能ならば捕獲。素材も可

報酬: 100,000G

捕獲の場合: 1500,000G

素材の場合: 500,000Gから

|||||

「この珍獣ってのは有名なのか?」

「はい、森の中心付近に湖があるんですけど、そこで極稀に見られる魔物らしいです」

「へ〜……………見た目は?」

「それが結構まばらなんですよ……ただ、皆さん口をそろえて言うのが『とても美しかった』ですかね。あと、『目を離すと一瞬でいなくなった』とも言っていますね」

となると、相当気配遮断が高いのか、まだ知らないスキルか？

「高ランクの冒険者は一度は目にすると言われていますが、それも一瞬……捕まえようとする気を起こす前に煙のように消えるようなんです」

「なるほどな、それなら捕獲した時の報酬も領けるな」

「そうなんです。ちなみに森の奥に行くのに半日はかかりますよ。他にも受けられますか？」

「ああ、もちろん。あと簡単な討伐系はあるか？」

「えー、Cランクの依頼でオーク討伐がありますね」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

C以上

オークの素材

オークの肉を持ってきてほしい

報酬：1kg 8,000G

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「これ、部位はどうするんだ？」

「オークは部位がないんです。どこも一緒らしいので」

「わかった、じゃあまた今度よろしくな」

「はい、お気をつけて！」

~~~~~

森の入口到着！じゃ、キングとクイーンはスライム森林でお留守番。

この森で出てくる魔物はある程度、勉強済み。

森の浅いところでは、前回森に行った時にでてきた、スライム、いかくうさぎにファアラット、ももんじゃ、はなカワセミ、きりかぶおばけ、キヤタピラーなど



中層では、アルミラージ、おおくちばし、アイアンタートル、じんめんじゆ、マンドラゴラ、マンイーター、よろいムカデなどなど  
深層では、ストロングアニマル、キラーエイプ、モーザ、ヘルホー  
ネット、さそりアーマーなどなどなど

………懐かしい名前があるな………ストロングアニマルとかテリ  
ワンぐらいでしか聞いたこと無い気がする………

しかし、中層からなかなか殺しに来てる気がする………でもランク  
事態そこまで高くないようだ………最高でBランクらしい。余裕、と  
までは行かないと思うが行けなくもないってところか。

さて、仲間を増やしますか！

|||||

いつかくさぎ ♂ Lv 4

ランク：F

HP：18 / 18

MP：21 / 21

攻撃力：10

防御力：5

素早さ：26

賢さ：17

器用さ：11

幸運：22

|||||

|||||

いつかくさぎ ♀ Lv 3

ランク：F

HP：19 / 19

MP：17 / 17

攻撃力：14

防御力：12

素早さ：38

賢さ：15

器用さ・13

幸運：44

||||||||||||||||||||

よし、今度こそ餌付けでタイムするぞ！

まず、ニンジューとキャベチーを取り出します。与えます。しばらく待ちます……………もう少しあげます。

警戒心がなくなったと感じたらタイムします。はい、終わり……………簡単すぎる……………初依頼のときの失敗は何だったのか……………

||||||||||||||||||||

フアーラット ♀ Lv1

ランク：F

HP：17／17

MP：11／11

攻撃力：8

防御力：12

素早さ：7

賢さ：11

器用さ・13

幸運：54

||||||||||||||||||||

できました！黄緑色の毛皮に身を包んだモコモコした小魔獣、フアーラット。かわいい。

三つ目の妖怪的な怖さ・不気味さの方が際立つかも知れないが、普通に可愛い。

目がくりくりしていて、完璧小動物。

ま、スーたちの可愛さには勝てないがな！

さて、必死こいて体当たりかましてくるこの可愛い毛玉、どうやってタイムするか……………

「キュ……………キュウ……………」

あ、疲れて目を回した……………今だ！タイム！

へフアーラットのタイムに成功しました〜

「良いか？今日からお前は部下で仲間だ。皆、仲良くな」  
いつかくうさぎとファールラットが頷く……………よし、次、行くか。

~~~~~

あのあと、いつかくうさぎを2匹、ファールラット3匹を追加でテイムし、現在はなカワセミときりかぶおばけに囲まれております。
頭部が真つ赤な花になった見目鮮やかな鳥の魔物、はなカワセミ。
自前の薬草をつかてHPを回復してくるきりかぶおばけ。しかも
尽きることがない。

~~~~~

はなカワセミ ♀ Lv1

ランク：F

HP：12 / 12

MP：11 / 11

攻撃力：9

防御力：10

素早さ：23

賢さ：14

器用さ：12

幸運：57

~~~~~

~~~~~

はなカワセミ ♀ Lv2

ランク：F

HP：14 / 14

MP：13 / 13

攻撃力：11

防御力：13

素早さ：26

賢さ：13

器用さ・15  
幸運：59

きりかぶおぼけ ♂ Lv2  
ランク：F

HP：23 / 23  
MP：11 / 11  
攻撃力：27  
防御力：18  
素早さ：12

賢さ：10  
器用さ・21  
幸運：88

特殊スキル  
・自給自足：薬草 Lv1

きりかぶおぼけ ♀ Lv3

ランク：F

HP：29 / 29  
MP：16 / 16

攻撃力：21  
防御力：24  
素早さ：22  
賢さ：14

器用さ・11  
幸運：50

特殊スキル  
・自給自足：薬草 Lv2



素早さ：28

賢さ：10

器用さ：22

幸運：33

|||||

やせいの ももんじやが あらわれた！

白い体毛に覆われた身体に、トサカとニワトリのような嘴を持つ魔獣。もふもふでかわいい。これがこのモンスター、ももんじやの特徴だ。

「もじや~~~~~！」

勢い良く毛玉が飛びかかってくる……そして尻尾を振りかぶって……

「よつと」

……というところで捕まえる。

パリツとしてとても質が悪い感じがする……毛繕いはどうした！  
まあ、野生だとこんなもんか。

「もじや！も……もじや……」

あ、ぐったりした。諦めたかな？ティム！

へ ももんじやのティムに成功しました へ

よし！

ももんじやでしつぽ団を作るの、良いかもな……たしか、あれってスライム達の敵だったんだよな……でもあのゲームとは違うからな、共存は确实だな。

よし、次は中層だな。







—ボウツ—

—キイイイイン…ボウツボウツボウツボウツボウツボウツボウツ

おく……あ、やっべ、森が燃えてる！ウォータースライム！君に決めた！

—ジュくくく……ブスブス……—

森から出したウォータースライムが、体内に貯蓄している水を勢い良く噴射し鎮火する。

危なかつた、もう少しで大火事だつた……おのれ、アイアンタートル！この人でなし！……人でないな……

とりあえず魔法は、もうやめるとして……そうだ、ひっくり返そう！

炎の剣を取り出します。縮地で目の前にでます。

〈縮地法のレベルが上がりました〉

縮地法のレベルが上がります。

炎の剣を、アイアンタートルの下に入れます。

お好み焼きをイメージしながら、持ち上げてひっくり返します。

あとは上から押さえることで、地面にトゲが刺さるようにします。

以上、リユウスケの3分クッキングでした！

はい、1匹1分、合計3分。調理完了！

〈アイアンタートルのタイムに成功しました！〉

〈レベルが上がりました〉

よし、じゃあ地面から抜いて……抜い………てっ！抜け………ない………ッ!!

ふんっ！………抜けた!!

………ふく………正直焦つた………このまま置いとこうかとも一瞬考えた………

おお、アイアンタートルがものすごい勢いで首を振ってる。それだけ速はやめてくれと言わんばかりのウルウルした目で………もちろん冗談だ。森でゆっくりしておいてもらおう。

よし、この調子で頑張るぞ！









グリズリー ♀ Lv2  
ランク：D

HP：174 / 174

MP：73 / 73

攻撃力：139

防御力：60

素早さ：64

賢さ：35

器用さ：67

幸運：15

|||||

「グルルルルル………」

さて……魔圧つての使ってみるか。

えくつと………目の前の2匹に対して、魔力200を乗せていってみよう。

「グル……ル……グ………」

ええ!?!グリズリー達が白目を向いてひっくり返った!?!えくつと

………これは屈服でいいよね?タイム!

へグリズリーのタイムに成功しました

へレベルが上がりました

はい。魔力200でこれか………格下の格下だったからってのもまあ有るかもしれないけど………これはなあ………ま、いつか。

|||||

リュウスケ・ササキ 男 Lv61 →2

種族：人間 15歳

職業：スライムマスター

HP：638 / 638 →12

MP：617 / 617 →14

攻撃力：496 →11

防御力：520 →14

素早さ：5 1 3 → 1 2

賢さ：5 0 8 → 1 3

器用さ：5 7 0 → 1 1

幸運：\*\*\*

称号：シャルムとタイステルの加護

戦闘狂

闇の神エレナの加護

光の神ルーの加護

魔物の心友

スライムの理解者

SP：3 3 → 1 0

スー Lv 1 2 → 3

種族：強スライム

職業：武闘家

ランク：D

HP：3 8 9 / 3 8 9 → 2 1

MP：2 5 9 / 2 5 9 → 1 4

攻撃力：3 3 2 → 2 3

防御力：3 0 5 → 1 9

素早さ：3 0 2 → 1 7

賢さ：2 3 3 → 1 4

器用さ：2 9 0 → 2 1

幸運：6 0

称号：魔法の神の加護

闘神の加護

悪食

SP：2 0 → 1 5

一緒にいたスーもレベルが上ってる。





年越しスペシャル？

「……………10！ 9！ 8！

7！ 6！ 5！ 4！ 3！ 2！ 1！ ゼロツ！」

—ヒュルルルルル…ドゥゥン!!—

「Happy New Year!! 年が明けたよ！今年もよろしく！」

「……確か寝てたはずなんだが？……」

—ヒュルルルルル…ドゥゥン!!—

そう、俺はたしかに風呂に入って飯を食って、就寝したはず。なのに気がついたら？カウントダウンしてるステルが目の前にいた……大玉の花火も上がってるし

—ヒュルルルルル…ドゥゥン!!—

「なんでここにいるんだ？」

「気にしたら負け！年越し特別編だからね！」

「?? 何言ってるんだ？今はそんな時期じゃ、と言うかアレフガルドにそんなのあるのか？」

「作者の世界の時期の影響です！はいこれ、お年玉！」

「あ、ありがとう」

あれ、なんやかんやで丸め込まれた？いや、お年玉はうれしい、けど味のり3枚はひどいと思う……

「よく来ましたね。龍介さん」

「ああ、シャル、今日は正月なのか？」

「どうもそうらしいですね、よくわかりませんが……あ、料理もありませんので、楽しんでいってくださいね」

「ああ、ありがとう。おう、カニか、何日ぶりだろうなく、ジュルリ……」

「沢山あるのでどんどん食べてくださいね、従魔たちも呼んでいいわよ？」

「結構な数になってるが、大丈夫か？」

「全く問題ないわよ、腕がなるわね！」

すごい勢いで料理が運ばれてくる。しかもどれもうまい！よし、皆でてこい！

『すごい！あれも、これも、それも全部美味しい〜！』

『うん……美味しい……』

『こんな美味しいの初めて食べたよ！』

『食べられないのが残念です……』

「あ、ちよつとまってるね……ホイ！」

「一体何を……!？」

レムが人になった！生身の人に！

「魔法でちよちよいのちよいつてね〜期間限定だけどね」

「主様！美味しいです！物が食べれます！すごいです！」

さすが神、何でもありだな

「おや？君が例の異世界人クンかい？」

「ん？誰だ……ですか？」

「あ、敬語なんてのは無しにしようよ、シャル達に接する感じでさ！ここにいる神たちは、そんな細かいこと気にするほど心は狭くないよ！」

「そうか、じゃあ改めて、龍介だ。よろしく」

「ああ、よろしくね！あたいは火の神をしているフレアっていうんだ、さあ今日は、宴会だ！食べまくろう！」

「ああ」

すごく、引っ張ってく人だな。熱血上司な感じがする。あと、ジャーマンアイリスの香りがした。

~~~~~

「あれ〜？皆遅いな〜」

「皆？他にも呼んでるのか？」

「もちろん！全部の神を呼んでるよ。でも遅いな〜」

と思つた矢先

「こんばんはあ〜」

「あはははは！こんばんは〜」

「……………」

「こんばんは」

「こんばんは〜！だよ？」

「あ、あの、こん、ばんは……………」

ぞろぞろと人が入ってきた

「よく来たね！こっちの子がこの前話した龍介だよ」

「あらあ、この子ねえ？私はあ、水の神レイクっていうの、よろしくねえ〜」

「あはははは！風の神アネモスよ！よろしくね！お兄ちゃん！あははははは〜！」

「……………闇の神……………エレナ……………よろしく……………」

「私は氷の神フロス、よろしく」

「光の神ルーだよ？これからもよろしく！だよ？」

「じゃ、邪神アルマ、です。あ、あの、よ、よろしく、おねがいましたゆ……………します……………」

「佐々木龍介だ、よろしく。好きに呼んでくれて構わない」

まさかすべての神に会えるとは思わなかった。今夜は楽しい夜になりそうだ。

~~~~~

「こらく龍介え！あたいにもつと酒を持ってこ〜い！」

「本当にこのお酒おいしいわねえ〜……………うふふふ……………」

「おにいちゃあん、もつとお酒持ってきてえ！」

「見た目完全に俺より年下なんだが大丈夫なのか？」

「お兄ちゃん！人を見た目で判断したらめ！これでも神様なんらよ〜！」

「そ、そうか」

「んふふふ〜だから早くお酒！持ってきてえ〜」

悪酔いしすぎだろ……

「シャル、お酒の追加をたのむ」

「すみません、竜介さん。折角来ていただいたのに……」

「いやいいよ、前世でも似たようなことしてたし」

毎年正月は親族にこき使われていました

「早く〜お酒え〜!!」

「はいはい、ちよつと待っててください！じゃあ竜介さん、これをお願いします」

「ああ」

これが後数時間続くのか……俺って客人じゃなかったっけ？

~~~~~

「いや〜今日は楽しかったね〜」

「ステル、今度からいきなりこんなところに呼ぶなよな、流石に驚く」

「しようがないじゃないか、作者の急な思いつきで急遽たてられた企画なんだから」

「今日は良く分からないことばかり言うな………いつものことか」

「それはひどいとおもうな〜」

「でも今日は楽しかったよ、酔った神達にむっっちゃ絡まれたけど……」

「おいおいエレナ！もう潰れちゃったのかい？あたいは、まだまあだ行けるよお？なあなあもつと飲めよ！っか〜！やつぱ三岳はうめえなあ!!」

「もう………無理………」

「あはははは！フレアが3人になってる〜！あはははは！」

「私はですねえ〜、最近やることがあ、ありすぎてですねえ〜……たいへんなんれすよお〜……むふふふう〜」

まだやってる………

「面目ない……酒癖だけ良くないんだ……」

酒癖が悪いというレベルじゃないぞ。

何故に説教受けたり、魔法ぶつけられたり、服が消えたり、首が飛んだり、あり得ない力で抱きつかれたりせにやなんのか！首が飛んだときは本当に何が起こったかわからなかったぞ！

「それじゃ、そろそろ返してくれるか？」

「そうだね、じゃあ送り返すよ、今年も」

辺りがまばゆい光に包まれる。

「あ、ちなみに起きるとこのことは覚えてないから！そこんところよろしくー」

〈称号：魔法の神シャルムの飲み仲間 を獲得しました〉

〈称号：闘神タイステルの飲み仲間 を獲得しました〉

〈称号：闇の神エレナの飲み仲間 を獲得しました〉

〈称号：光の神ルーの飲み仲間 を獲得しました〉

〈称号：火の神フレアの飲み仲間 を獲得しました〉

〈称号：水の神レイクの飲み仲間 を獲得しました〉

〈称号：風の神アネモスの飲み仲間 を獲得しました〉

〈称号：氷の神フロスの飲み仲間 を獲得しました〉

〈称号：邪神アルマの飲み仲間 を獲得しました〉

〈称号が統合され 称号：神々の飲み仲間 を獲得しました〉

え、ちよ、まつ……………

~~~~~

……………ふあ~~~~…なんか変な夢見たな~~~~うん、ももん  
じやとファアラットののもふもふは最高だな！











~~~~~

へ じんめんじゅのタイムに成功しました へ

やり過ぎた！いや、じんめんじゅの葉っぱをスパスパ切ってたけ
なんだ！決してじんめんじゅ達の不思議な踊りでMPを持ってかれ
た腹いせじゃない！その結果、じんめんじゅ全員がひっくり返った。
もちろん、タイムした後で回復魔法をかけ、フツサフサにしておいた。
フツサフサだ。

もう少しこころへんをうろうろしてみるか。あと3種類ほど残っ
ているからな。

しかしこの森は良いな。ジメジメしてるわけでもなく、木が多すぎ
るわけでもなく、少なすぎるわけでもない、その木々の隙間からこぼ
れ出る光は柔らかい。生物にとってちょうどいい環境ってやつだな。
いや、気持ちがいい。

ー ドスツ！ドスツ！ー

……アルミラージくんよお、空気読んでくれよお。こっちはせつか
く森の気持ちよさに浸ってたってのに。

と言うか、それって一撃必殺なのかね？外したら確実に死ぬと思う
んだけど？

あ、涙目だ。いやもう、本当に、何してんの？タイムするけどさあ。
へ アルミラージのタイムに成功しました へ

さて、と……次行きますか！と思ったらあちらさんから来てくれた
らしいな。

食虫植物のような姿のモンスターのマンイーターか。

|||||

マンイーター ♂ Lv12

ランク：D

HP：127 / 127

MP：207 / 207

攻撃力：97

「……………ブツ……………ブブツ……………」

「ヒュゴ〜……………ヒュゴ〜……………」

はっはっはっはっ！これは酷いなっ！あっはっはっはっはっ！

失神・痙攣・過呼吸の三拍子、これはひどい……………タイム……………

へ オークのタイムに成功しました へ

へ オークコマンドアのタイムに成功しました へ

オーク達がちよつとビビってる。まああんなことがあつた矢先だからな……………いやあ、本当にひどい事件だった……………

ま、やったの俺ですけど。

魔圧はいいな！タイムしやすいし、何より楽だな。でもCランク中盤のやつが魔力200で気絶、痙攣、過呼吸となると、Bランクの最初らへんまでは通用しそうだな。

よし、オーク肉の依頼も終わったし心置きなく探索できる。オーク2体で肉340kgはでかい。

どんな魔物でもどんとこい！

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ストロングアニマル ♂ L V 1

ランク：B

HP：695／695

MP：273／273

攻撃力：567

防御力：423

素早さ：626

賢さ：287

器用さ：398

幸運：37

スキル||||||||||||||||||||||||||||||||||||

・ブレス L V 3

―バリバリバリ!!―

イメージは落雷、嵐の日によく見る落雷だ。結果は、奴らのHPを300ほど削り取った。つおい。

「このくらいでちょうどいいだろ？あとレムは敵全員にデバフ、ライムは俺達にバフだ」

『わかりました』

『わかった……』

敵にはレムからのルカニ、ラリホーマ、メダパニ。ついでにライムのマホトーン。

俺達にはライムからのスカラ、ピオラ、バイキルト、フバーハ。

準備万端！さあ殺ろうか！

「ギッ……ギヒヒッ……」

「ZZZZzzz……」

「ヒヒヒッ……ヒヒッ……」

「ガア……グルウ……」

混乱と睡眠で結構弱体化できた。ということとは？

「スライム達カモン！寝てるやつを瀕死まで追い込んで。スー達は混乱してる奴を。その内の1匹は俺がやる。くれぐれも殺すなよ？」

『りようか〜い』

よし、じゃ、混乱してるストロングアニマルをやりますか。魔法のレベルを上げたいから、レベルの低い魔法を使っていこう。

氷、光、闇、無属性のレベル低い、でも全部叩き込んだら死ぬよな。

氷と光で行くか。

「ヒヤダルコ」

冷気が地面を駆け巡り、氷柱が混乱してフラフラなストロングアニマルの腹に突き刺さる！

「ライデイン」

掌から青い稲妻が迸る！稲妻がストロングアニマルの体を貫き、焦がす！

へ 光魔法のレベルが上がりました へ

へ レベルが上がりました へ

残りHP25！あつぶねえ………混乱は、解けてるな。タイム！

へ ストロングアニマルのタイムに成功しました へ

よし、まず一匹、回復回復………ほかはどうかな？

あゝスライムたちの攻撃でモーザ達が瀕死だな。タイムタイム。

へ モーザのタイムに成功しました へ

回復してつと。スーは？

『それぞれそれぞれそれぞれそれぞれそれえ』

「ガッ……ギッ……ゴッ………ガフッ………」

お、おう、どこぞのスタンド並の連打。いつか時も止めそうだ。

へ キラーエイプのタイムに成功しました へ

よし、回復つと。レムはと言うと。

『ふんっ！』

「ゲハッ！……ガハッ………」

ストロングアニマルの真下の影から出てきて内臓に大ダメージ！

予め、影縫いで動きを止めて、フルボッコにしていたらしい。さすが

がNINJA………NINJAか？

へ ストロングアニマルのタイムに成功しました へ

ちよつと早く回復させないとジリジリとHPが減っていつてる！

ふう………ライムとナイトはキラーエイプか。

『セエイッ！ハッ！』

『ドルマー！ホイミー！ドルマー！』

「ウギイイイ！ウギイ！」

いい感じにコンビ組めてるようだ。

ナイトが前衛、キラーエイプの攻撃が当たりそうになるとライムの

魔法でそらす。

『これでっ、終わりっ』

「ギ………ウギイ………」

お、キラーエイプが倒れた。まだ息はある。タイム！

へ キラーエイプのタイムに成功しました へ

あゝ、スーが進化できるレベルに上がったか。後でだな。

「とりあえず皆、ルームの中で休んでろ、おつかれさん」

クマ。あ、一匹湖に落ちた!?

とりあえずダウンしたさそりアーマー2匹とヘルホーネット2匹をタイム!

へ さそりアーマーのタイムに成功しました

へ ヘルホーネットのタイムに成功しました

えくつと……えくつと……どうしよう……

ーピカッー

まぶしっ!?!……え、湖の中から……おっとり系青髪お姉さん?どっかで見えたような……んく正月?うっ頭がっ……

『貴方が落としたのはあ、この霜降り肉ですかあ?』

「……いや、違います……」

『ではあ、このおじいさんですかあ?』

「いや、それも違います……」

『ではあ……このヘルホーネットですかあ?』

「あ、はい、それです……」

『正直者ですnee、ではあ、この瀕死のヘルホーネットとお、ダンジョンエビを贈りましょう。無事に勝てたらですけどお?』

「えっ、そう来るの!?!」

マジデカ!ここにきてDQM1的なイベントか!後ここダンジョンじゃneeよ!

龍介の魔物捕獲大作戦！ 5

|||||

ダンジョンエビ ♂ Lv1

ランク：A

HP：854／854

MP：570／570

攻撃力：764

防御力：1023

素早さ：442

賢さ：504

器用さ：583

幸運：99

スキル |||||

・格闘術 Lv3

魔法

・回復魔法 Lv2 ・補助魔法 Lv3

|||||

フアー————ツ！

防御力たつかいなく。1000超えるやつ始めてみた……

「ピュイイイイイイ!!」——ブオンツ!!——

あつぶな！あまりの防御力に驚いてたら拳が飛んできた。

相手の攻撃力は俺の防御力より高いんだ、気を抜いたらマジでやばい、かも知れない……攻撃を受けたこと無いからわからないけど……

ふ〜……………よつしや！かかって来いやおらー！

「ピュイイイ！」——ブンツ！ブンツ！——

「受け……流し！」——……キイン！キインツ！——

っ!?きちんと受け流せたはずなのに攻撃が重いっ！しかし！……ここで引いては戦士の名折れ！……戦士じゃないけどっ！

——キイイインツ！——

剣が弾かれた。こ、こいつ……やっぱ硬え!!しかもかすり傷か。
ノーダメージよりはマシだが……

|||||

ダンジョンエビ ♂ Lv1

ランク：A

HP：850／854

MP：570／570

攻撃力：764

防御力：1023

素早さ：442

賢さ：504

器用さ：583

幸運：99

スキル |||

・格闘術 Lv3

魔法

・回復魔法 Lv2 ・補助魔法 Lv3

|||||

なんか、泣けてくる……今ので4ダメージか……魔法だと結構いつてくれるか?いつてくれるよな?

「デイン!ヒヤダルコ!メヒヤド!」

デインを目に当て、ヒヤダルコで足止め、メヒヤドでダメージ! やったか?……つてこれフラグなんだろうけどさ。

|||||

ダンジョンエビ ♂ Lv1

ランク：A

HP：628／854

MP：570／570

攻撃力：764

防御力：1023

素早さ：442

「ふっ、はあっ！」—ドゴオツ！—

「ビゲエ……」

やっぱ正拳突きは良く効くな、体の奥に響くからか？攻撃力二倍は伊達じゃないな！

正拳突きでうずくまつてる所悪いが、背中がから空きだZE☆メヒヤド！

「ピ……ピイイイ……」

「これでラスト！メラガイアー！」

—ボゴオオオオンツ！！—

「ピ……ピイ……」

|||||

ダンジョンエビ ♂ Lv1

ランク：A

HP：8／854

MP：517／570

攻撃力：764

防御力：1023

素早さ：442

賢さ：504

器用さ：583

幸運：99

スキル |||

・格闘術 Lv3

魔法

・回復魔法 Lv2 ・補助魔法 Lv3

|||||

さすが俺！しかし、補助魔法のLv3を持てるってことは一応、こいつもマホトーン唱えられたんだよな……

そう考えるとなかなかやばかった。いい相手だったよ。

へダンジョンエビのタイムに成功しましたへ

へレベルが上がりましたへ

よし！俺もライムもレベルがMAXになった。まあレベル差もあつたしな。経験値は多かつたのが見て取れる。

『お見事です。ではあ、約束通り、そのダンジョンエビとお、このヘルホーネットを差し上げましょう。』

「あ、はい。ありがとうございます」

『敬語なんて今更いりませんよお、一緒にお酒飲んだ中じやないですかあ〜』

飲み会……………神様……………正月、ああ！思い出した！

「あ、ああ、思い出した……………たしかに、そんなことがあつたな」

『思い出しましたかあ？これからもよろしくお願いしますねえ？』

「ああ、よろしく」

へ 称号：水の神レイクの加護 を取得しました へ

まあ、そう来るよね〜

「あ、そうだ、少し聞きたいことがあるんだ」

『？ なんですかあ？』

「いま、珍獣の探索してるんだがまったく出会わなくてな。ちよつと困ってるんだ」

『珍獣ですかあ？ん〜……………よくわかりませんねえ、ここら辺には珍獣と呼ばれるようなあ、珍しい魔物はいませんよお？』

「そうか、ならもう少し自分で探してみるさ」

『ああ、擬態能力が高く、すごく臆病な魔物ならあそこに……………』

「えっ」

そう言つてレイクが指差した先には、荒削りな水晶の角が生えた馬がいた。

|||||||

イリユージョンホース ♂ Lv33

ランク：B

HP：654／654

MP：517／517

攻撃力：364

防御力：323

ど、まだ家のキングやももんじやたちの方が綺麗だ。もしかしてこの角かな？いや、くでもなあくもしこれが例の珍獣だったら連れて行かれるか？うーむ……ま、人には秘密の1つや2つ、あるよね！黙つとけば問題ナツシング。

「しかし、逃げないんだな」

『きつとお私といえるから安心してらんでしようねえ』

「いまなら普通にタイムできるか？」

『多分大丈夫でしょう。さあ、こつちにおいで』

すると、今まで水を飲んでいた野生のイリユージョンホース達が、まるで飼いならされた馬のようにレイクに顔を摺り寄せている。

『さあ、タイムOKですよ』

「タイム」

へ イリユージョンホースのタイムに成功しました へ

へ 称号：レイモス森林の制覇者 を取得しました へ

これが森林の名前か。よし………（息を大きく吸い込んで）………レイモス森林、制覇！いえくすい！パチパチパチく………さあ帰ろうか。

「そろそろ帰るとするよ」

『そうですかあ？それではわたしも、お家に帰るとしますう。あ、マヨネーズありがとうございましたあ、とおつても美味しかったです。日本の物はなかなか手に入らないですからねえ』

「それはよかった。そんなに日本産の物は手にはいらぬのか？」

『地球の神はあなんだかんだ頭が硬いですからねえ、そのくせうっかり勇者召喚させてしまったり、面白そうだから勇者召喚に応じて遊んだり……まあ、竜介さんがいるから安心ですう』

なんか真顔で聞き捨てならないようなことが……まいつか。この世界じゃ勇者召喚なんて………無いよな？魔王がいるし可能性も………こういう時、人族の王様とかが召喚しそうだけど……あの皇帝はないな、うん。

「そうか、またなんか作ったら送る」

『よろしくお願ひしますう。それではあ』

「ああ、またな」

レイクが笑顔で手を振りながら湖に沈んでいく……つおい！親指を立てながら沈むな！どこのT800だ！

……さて……帰ろつと、ルーラー！まだ寝るには早いからな……あ、進化先決めなきやな。

龍介の魔物捕獲大作戦後

北門手前に到着。いや〜ほんと、ルーラは便利だな。

そして北門でリブロに冒険者カードを見せようとしたら、顔パスでOKだったことに驚いた以外、とくに変わったことはなくギルドに到着。

「リュウスケさん、相変わらず早いですね。森の奥に行っていると、もう少し時間かかると思うんですけど」

「ああ、森には強くてな。お陰で特やくそう、特毒消し草もたっぷりだ」

「普通、こんなに取ってくることは無理なんですけど、もう慣れました」

そう言いつつ、シリカが苦笑い……………一体どうしろと…………

「それでオーク肉が70kg何だが、これは倉庫の方に持っていくか？」

「ええ、お願いします。倉庫の方に連絡しておきますね。それで、珍獣検索はどうになりました？」

情報か、どんなのがいたってだけでいいか。

「一応隅々まで探してみたつもりだ。で、森の中心部の湖できれいな馬がいた。聴いてた魔物の情報の中にもなかったし珍獣じゃないかなと思っただけ、鑑定もすることができたんだ。」

「それはすごいですね！どんな生物だったんですか？実は私も少し興味あるんですよ〜」

「イリユージョンホース、それが俺が見た魔物の名前だ。気配を消す能力がとても高いようで、鑑定した次の瞬間にはいなくなっていた」

「そんな魔物がいたんですね。…………とても重要な情報、ありがとうございます。」

シリカが素早くメモすると、ほかの受付の人が袋を持ってきた。

「これが今回の依頼料、それと薬草類の報酬、合わせて350,000Gですね。オーク肉の報酬は、すみませんが倉庫で確認が取れてから

- ・スラツピー×11
- ・ウォータースライム×10
- ・アシッドスライム×7
- ・ジユエリースライム(赤)×8
- ・パラサイトスライム×3
- ・ギガスライム×3

獣系

- ・いっかくうさぎ×6
- ・アルミラージ×6
- ・ファアラット×4
- ・グリズリー×2
- ・オーク×2
- ・オークコマンダー×1
- ・ストロングアニマル×2
- ・キラージェイプ×2
- ・イリユージョンホース×2

虫系

- ・よろいムカデ×3
- ・ヘルホーネット×3
- ・さそりアーマー×2
- ・ダンジョンエビ×1

鳥系

- ・はなカワセミ×3
- ・おおくちばし×4
- ・モーザ×2

植物系

- ・きりかぶおぼけ×4
- ・じんめんじゆ×5
- ・マンイーター×3
- ・マンドラゴラ×3

ドラゴン系

・アイアンタートル×4

スライム達の数が増え、新しくジュエリースライムとパラサイトスライムが増えた。

ジュエリースライム（赤）はスライムベスから進化、特殊スキルに宝石生成がMAXで付いていて、早速、消しゴム大のルビーをポロポロ出してた、しかも加工済みのやつ………しかもこれ、人間で言う老廃物だつてよ！老廃物が宝石とか、なんてリッチな……そのせいで絶滅危種らしいけど……ランクはC、スライムベスから進化したらしい。個人差があるのか？それともベス達に目指すものがあるのか………

パラサイトスライムはその名の通り、寄生するスライム。宿主に寄生して、養分をもらい外敵から身を守る。ランクはDで、スライムから進化。

どうやら支配権を奪ったりもできるようだ。なんで分かるかって？本人に聞いたからだよ。実際に寄生させたわけではない！ちよびつと、ほんのちよびつと考えたけど………

ギガスライムは皆さんご存知、メガスライムから進化。更にでっかくなってる。メガの何倍だろうか？5、6倍はあるな。やっぱり縮めるらしい。しかし重さは変わらない。つまり、普通のスライムだと思つてて舐めてたら死ぬってことだな。

~~~~~

よし！じゃ、スーとライムの進化を決めよう！  
まずはスーだな。

~~~~~

進化先

・凶スライム ▽

ランク：C

・キングスライム ▽

耐性スキルもレベルが上がり、新しく爆炎、麻痺、毒、石化、混乱、気絶の耐性を取得していた。

強い（確信）

『すごい！なんか武器が使いやすくなった気がする』

「器用さも上がってるし、スキルのレベルも上がってるからな」

『これでもつとあるじの役に立てるね！』

「ああ、とつてもたのもしいぞ」

『えへへ』

なにこの子、かわいい。丸い体をくねくねしながら照れているみたいだ。なにこの子かわいい。

いや、こんなの見たら、もうなでなでスリスリするしかないっしょ！

~~~~~

なでスリが長引いた！二時間ずっとなでスリスリしてた。ライムのツツコミがなかったらそのまま寝てただろうな……

『主、進化先を決めた』

「ちよつと待ってる、どんなのに進化するのか確認するから」

『ん』

|||||

進化先

・エンゼルスライム ▽

ランク：C

・ベホマスライム ▽

ランク：B

・ダークスライム ▽

ランク：C

|||||

Bランクの進化先がある！……けど、エンゼルスライムが良いと思うな。ホーリースライムと来たら次は、エンゼルだろ。

「エンゼルスライムか？」

『ん、エンゼルスライムになりたい』

|||||

ライム Lv1

種族：ホーリースライム ↓ エンゼルスライム

職業：僧侶

ランク：C

HP：213 / 213 → 10

MP：396 / 396 → 30

攻撃力：182 → 10

防御力：230 → 20

素早さ：221 → 20

賢さ：392 → 30

器用さ：365 → 20

幸運：59

称号：光の神の加護

SP：115

|||||

ライムの背中の羽が大きくなり、頭上の金の輪が神々しく輝いている！

この金の輪は光の集合体のらしい。少し散らばって、すぐ集まる……ちよつと楽しい……

しかも今回の進化で回復魔法がレベル4になり、ベホマとベホマズンを、覚えてた。

『主』

「ん？どうした？」

『なでて………』

「え？」

『なでて………』

もしかして、さっきのなでスリに嫉妬して？愛い奴め……なでくりまわしちゃうー！



あゝかわええのおゝかあわええのおゝすべすべやのおゝあゝ癒や  
されるなあゝ



ナム弾の3倍。ちなみにこの弾は、1発あたり魔力100を消費し作成。

魔力を爆発させて発射する仕組みだ。弾も魔力だから打ち尽くして弾を補充する動作が省けるしなかない出来じゃないか？

シリンダーの中に弾を作ればいいだけだし。

ちよつと試し撃ちしたいな………ルームで試し撃ちをしよう、そうしよう。

地面に小さめの木材で作った適当な的を置いて、引き金を引き絞つて……

―ズダアアンツ、ズダアアンツ、ズダアアンツ、ズダアアンツ、ズダアアンツ！―

すこし、腕が痺れた………あく、身体強化つけときやよかつたな。でもすこし痺れただけだから身体強化でカバーできるな。これな、ロマンあふれる。

投げ捨てるのと溶けて消えるのもいいね、そういう演出にしてるんだけど大好きです。

へ 爆炎魔法を取得しました へ

マジか

……少し……話がそれたな。それで、この特技を使えば魔力の玉が作れることが分かった。これ、魔力の塊で魔石の代わりになるんだ。試してみたから分かるんだが魔石とほぼ同じように使える。魔力を使いきったら消えるのが欠点かな？言ってみれば水みたいな感じだな。

この魔力の玉の場合は使い切ると溶けてなくなる。電池みたいな感じに使えるな。これはもう電池の形に作り替えるしかないな。

というわけで電池の形にしました。よくある単三電池、これ1個に魔力600を込めてみた。これを作れるときに作っていいこう。

でだ……そうだな、浄水器兼手押しポンプ、いや圧力式を作ろう。えつと、仕組み的には水車みたいなポンプで水を吸い上げて、空気の圧力がかかったタンクっぽい奴に入れる。レバーを引くと水が出る……ん、ちよつとめんどくさいな………普通に、スイッチ押したらポ

ンプが回り始めて、水を吸いだし、その途中で浄水、水が出てきて安心して使える。よし、このプランでいこう！

~~~~~

というわけで作った。頑張つて熱した板材を円筒状に丸め込み、突合せ部分をたたき接合。できるだけ真円を作るのが1番きつかった。途中で鍛冶のレベルが4に上がってくれて助かった。レベル4になつたとたん、真円が作りやすくなつた気がする。それをつなぎ合わせて……あ、井戸の深さ見てなかった……えくつと？約50mか、んじやパイプは45mぐらいで、それで井戸の入り口に小型のポンプを取りつける。もちろん、魔力電池を付けて、浄化と水を吸い上げることを自動でしてくれる。あとは、バルブをひねるだけで水が出るといふ簡単な仕組みだ。

これで台所に水を運ぶのが楽になつたな！

・

ぶつちやけ、台所に水を出す魔道具を作ればいいんだが……そこは気にしないこととしよう。

次は、トイレ……だが、トイレはやつぱ陶器じゃないといけない！なので、陶芸スキルを取ってみた。レベル3まで。だが材料がない！……今日はあきらめよう……さすがに無理だ……

あの洋式便所の材料はわかるんだよなあ、長石、陶石、粘土を水に混ぜた泥漿でいししょう、泥水を作らなきゃいけないし、普通に材料たんねえわ。粘土はあるかもしれないが長石と陶石がな、あるかわからん。

またいつかということだ。

……木製つてのも、考えたが……やつぱなじみの白い便器がいいよな。またいつかということだ。

次は、なんだつけ？ああ、浴室！浴槽はムダンラの木材をふんだんに使用、そうだな……水をためて風呂を沸かす、ここまです自動で

してくれるようにしよう。

そうと決まれば加工だ。きちんとサイズを測って、2400×1200×600mmで浴槽のフチが広く、見栄えのする型の浴槽にしよう。板厚は30mmで、こう、ちよちよいのちよいつと……

~~~~~

会心の出来っつのはこういうのを言うんだろうな。もうつるつるで輝いて見える。

簡単に操作できるように、風呂場に1つ。魔力でつなぐような感じで、2、3個廊下に設置しとこう。ワンタッチで水を溜めて、沸かしてくる。水の量や温度も設定できるようにしよう………完璧だろこれ。

あとは排水、これは既にある排水溝を使うとして、排水時に水をきれいにするようにしよう。排水による環境問題って結構有名だったからな。この浄化装置は厨房でも活用しよう。

あ、トイレにもつけとこう、消臭付きで。

最後は厨房か？まず、蛇口を作らなきゃな……… | カンツカ  
ンツジュ~~~~~ | …… 結構時間かかったけど、できたぞ。

あとはこれをこう………水が出る魔道具(蛇口ver)の完成。右の青いハンドルをひねると冷水、左の赤いハンドルをひねると温水がでるようにした、これで寒い冬の水洗いも楽になる。するかどうかは怪しいが……スライムが全部掃除してくれてるし。

しかし、魔力で日本語を書くだけでここまで便利になるとは……魔法さままだな。コードの代わりにもなるし。

えーつと……なにしよう……ちよつと遅めの昼飯食べて……  
そうだ、菜園作ろう。

その前に、庭にきりかぶおぼけとじんめんじゆを配置。擬態してもらって侵入者対策だ。ここまで改造したんだ、誰が嗅ぎ付けて来ても可笑しくないからな。異世界あるある、買った家に侵入者が入る。

ついでに菜園の管理も任せよう。

そうと決まれば、さつそく種、もしくは苗を持ってこなきやな。  
どこから？森からだな、ついでに森関係の依頼もうけて行くか。

~~~~~

おつ、またオーク肉の依頼があるとは……昼だから残ってないかと思ったら運がいい。

「あ、リュウスケさん、指名依頼が入ってますよ」

「指名依頼？」

指名依頼ってあれか、貴族とかお偉いさんがしてくるあれか？

「はい、ええつと……依頼主はリブロさんですね。依頼内容は会ってから話すそうです。報酬も会って渡すらしいみたいです」

リブロが？珍しい……のかな？普通に呼んでくれたらいいのにな。

「それは日付とか決まってるのか？」

「いいえ。日程はリュウスケさんが決めてほしいそうです。いつにしますか？」

「明日で」

「ではそう伝えておきますね。今日は依頼を受けに来たんですか？」

「ああ、またオーク肉を持ってくる依頼を受けたい」

「はい、わかりました。この前のオーク肉、とつても質が良かったってカルロさんが喜んでましたよ。またよろしくお願いしますね」

「ああ、もちろんだ」

何かを依頼されたなら最善のものを、これ基本。客に悪いもの渡すとかそもそも信じられん。

んじやま、さつさと薬草の苗？なんていうんだろう……薬草を土ごと持ってくればいいか。

龍介の家、やや魔改造しようとしたら……

森の深層に到着。時刻は午後3時、早速オークの声が聞こえる。

「プギ、プギッ」

「フゴフゴ」

「プギギギギッ!」

オークが3……いや、4匹。お肉が歩いてる、じゅるり……なんか焚火囲んで楽しく駄弁ってるっぽいな。

「プギイ……?」

あ、なんか一匹が震えてる、なんでだろうな。

ここは、タイムしたオーク達（野生のオークと区別するために我が家のオーク1、2と呼ぶ）に引き付けてもらって、というかオーク達にやってもらおうかな。

オーク達、出番だ!一応ムダンラの木材で作った槍を持たせている。

「フゴフゴ、プギイ?」

「フゴ、フゴゴ」

お、堂々と出ていくね。ここいいか?って感じで我が家のオーク1、2が近づく。もちろん最初、相手のオークも警戒していたが少し会話すると心を開いたようで、焼いていた肉とかを差し出したりしている。

「フゴフゴ」

「フゴッ!」

「フゴゴ、ブヒブヒ」

「フゴブヒフゴゴ」

「プギイ……」

「フゴゴ」

「ブヒィ〜」

なんか会話してるな、新しい王が生まれたのか!?とか、その王が横暴?とか、これ美味しいなとか……新しい王?オークキング?

―ドスツ―

おっ、相手オークが肉を取ろうと目をそらした。その隙に我が家のオーク1が突き刺した。心臓一突き、これは相手オークも完全に油断してたはずだ。

同族に対して躊躇いもなくやるとは、魔物の世界って世知辛い。お、残りの二匹が急いで立ち上がった。

「ゴフツ……」

「ゴギツ!!」

だが準備が遅い。すでに戦闘態勢な我が家のオーク1、2がそんなの待つわけがない。我が家のオーク1が、すぐさま引き抜いた槍で相手の頭を貫く。

残り2匹になってしまったオークは勝ち目がないと思ったのか、一目散に森の奥へ逃げようとする。が、我が家のオーク1、2が投げた槍でこれまた頭を串刺し。戦闘終了。

このオーク達はタイムしてからあまり時間は経ってないはずだが、スライム達との訓練でそこそこのレベルが上がっていた。正直、ここまでするくらいとは思ってなかったが、強くなったな。

しかし気になることが1つ、オークの王が生まれた？ ふむ、我が家のオーク達は全く知らなかったようだが、わりと前から力を蓄えてきていたらしい。これは一波乱の予感。とりあえず上薬草見つけて帰ろう。

~~~~~

「プギイツー!」

「フゴー・フゴー!」

——スパッ!スパッ!——

「ゴギツ!!?」

なんか、オークが多くね? あ、ダジャレとかじゃなくてマジで。これで、31匹目。全部4、5匹のグループで徘徊しており、オークコマンダーもいたな。

「フゴブヒイ……」





ズインベントリに回収。

オークメイジはタイムだ。あ、まだ何かやりそう。

「……ギイツギイツギイツ！」——ボウツボウツボウツ——

またか。今度は3発、でも球のスピードは速くない。鼻歌歌いながら打ち返せるレベルだ。

「プツギイ！プツギイ！」

あっちい！あっちい！って言ってるのか？わっかりやすいな。あ、バテたっぽい。

「タイム」

へ オークメイジのタイムに成功しました

よし。さて、話をしよう。オークキングでも出た？

「フゴフゴ、ブヒフゴブヒ、フゴツフゴツ」

ほうほう、簡単に言うとな数カ月前、オークジエネラルが生まれた。そのオークジエネラルは力を求め日々鍛錬を積んでいた。そんな時ジャミラスが現れ、オークジエネラルに何かの宝玉を使う。するとジエネラルが苦しみだし、オークキングに進化した。そのキングはジエネラルの頃とは性格が打って変わり、傲慢、強欲。オーク達をこき使っている。

そして最近、ジャミラスが魔物たちを連れ何処かに行ってしまった。キングの雑用が減ってしまった。なので新しい雑用を見つけるためか王が支配勢力を伸ばし始め、深層の一部を支配した。

ジャミラス……お前ってやつは………死んでからも迷惑なことしかないな。

今は、その支配した深層から中層に進出、2日後には初層に進出しようとしているらしい。準備ができたなら、そこらの村を襲って帝国を落とすという。

これあ大変だ！と言っても、どうすればいいのか……1回帰ってギルドに報告か、ここで根絶やしにするか……いや、時間的に帰ったほうが良いな。

今は7時、辺りは割りと暗くなっている。上やくそうの苗も手に入ったし、ギルドに説明して帰るとしよう。

ルーラ！

~~~~~

ギルドに入ると、少し慌ただしい。オークのことがもう報告されてるのだろうか？

「あ、リュウスケさん！少し聞きたいことが有るんですけど」

「そうか、ちょうど俺も報告することがつてな。そっちから教えてくれ」

「はい、実は朝、森に行く必要のある依頼を受けた冒険者グループのいくつかが傷だらけで帰ってきました。中層にオークの群れが出てきたと言うんです。リュウスケさんは深層に行っていましたよね？どうでした？」

「やっぱりオークのことか。まあ、それ以外問題になるようなこともないか。」

「やっぱりそのことか。確かにオークは増えてるな。この短時間で30匹と戦った。大体4、5匹のグループだ。この前と変わったといえばオークメイジがいたな」

「オークメイジっすか？森にオークメイジが出るとなると、オークが勢力を伸ばしてることっすね？」

「ん？なんだ？ごついガントレットを着けた桃色ベリーショートのお姉さん？うん、お姉さんははずだボーイッシュな感じが思いっきり見て分かる。」

「ああ、どうも。カルネっす。気軽に読んでくれてかまわないっすよ」

「カルネさんはAランクで、氷姫の二つ名を持ってるんです」

「氷姫なんて柄じゃないって言ってるんすけどね、ともかくよろしくっす。死神くん」

「ああ、よろしく。それでオークのことなんだが……オークキングだ。2日後には初層に進出しようとしているらしい」

「オークキングっていったらAランクの魔物じゃないすか！どこから

そんな情報を持ってきたんすか？」

「従魔からの情報だ」

「そういえば死神くんって魔物使いだったっすね。使役者つてもっと非力なはずっすのに、死神くんからは強者の匂いしかしなっす。コレはもはや一種の詐欺っすね。」

「ええ、リユウスケさんは詐欺レベルで強いです。断言しますよ」

この扱いはなんだろう。断言しなくてもいいじゃないか……………

力量により軽くなり、硬さ、切れ味が増す。

※持ち主以外使えなくなる古代文字が刻まれています。

所有者：リユウスケ・ササキ

|||||

死神つぼく真つ黒な鎌の完成。鉄を叩いてる途中、黒に染まった時はビツクリした。世の中不思議が絶えないな。

ついでに持ち主を限定する文字を刻んだ。持ち主以外が使おうとすると重さが500倍になるよう設定した。

他の人が持つぐらいならセーフ、実際に振るうとアウト基準で設定。

早速試し切りするために100の魔力を込める。……重さが10分の1くらいになったかな？刃にもうっすらと魔力が漂っている。さっそくムダンラの木に一閃。

スパンツと切れた。木を切ってる感じじゃなかったがハヤブサの剣も同じくらいの切れ味なんだよな。ハヤブサの剣のほうがまだ軽いし。

次は半分の魔力、300込めてやってみるとさらに軽くなる。鉛筆かペンくらいの重さか？

斬りつけてみる……ん……確かに軽かったが切れ味にあまり違いがあるように思えない。

最後に全力の魔力600。もう自分の体の一部みたいな一体感までも感じられる。刃に漂っている魔力も激しく刺々しい。ムダンラの木に横薙ぎの一撃。

……？ 確かに刃は通ったはずだが……ん？

木に一本の横線が、その後ゆっくりとずれて木が倒れる。よくマンガやアニメである切れ方だ。

ピシッ……ズズズズ……って感じの。

その断面は極細目のヤスリで研き上げたかのような光沢がある。ハヤブサの剣でもここまでの芸当はできない。

はっはっはっ、ますます化け物のレベルが上がったな。

メイン武器はこつちにしようかな、この方が二つ名に合ってるし。

大鎌はインベントリにしまっけていつでも素早く出せるようにしようとして、もう寝るか。

今日はもう疲れた。明日のためにしっかりと睡眠を取りますか。

~~~~~

一方その頃、ギルドでは……

「あ〜、やっと終わったぞ……もう書類は見たくねえ」

ギルドマスター、グランが昨日までの分の書類を一掃し終わったところであった。

「今日の分そこに置いときましたよ。今日中に確認しといてください」

しかし、書類を一掃してまつさらになったはずの机の上に、いつの間にか置いたのか書類の山が築かれていた。

「ちよつと待てクリス、いつの間に置いたんだ!? さっきまで何もなかった机の上にこんなに……ん? おいこれ……」

「オークキングが出現したかもしれないと言う報告書ですな」

「ちよ、おまつ、そんな大事なことで速く報告しなかった!」

「報告しようとしたら『今はそんな物、見る暇はない! 置いとけ! 後だ、後!』って言ったのはギルドマスターですよ?」

「あ、そうか……なら、問題……無い」

問題大有りだ。この人をギルマスにしたのは間違いじゃなかろうか。そんな考えがクリフの頭をよぎるのは何回目だろうか……頭がいたくなつてきそうだ。

「なるほど、森でオークが増えてる……オークメイジも確認されてるのか。キングは確認されてないんだろ? ジェネラルじゃないのか?」

過去、オークジェネラルが現れた時、その力に引きずられてなのか、メイジは出現する。もし本当にキングが現れたとなると、ジェネ

ラルも現れているだろう。

「リュウスケさんが従魔を使って集めた情報です。詳しく報告されていますし、そもそもリュウスケさんが嘘をつくメリットが無いと思います」

「確かに、オークキングが出たと嘘をついても意味がない……か。だとしたら信じるか。明日話をするんだろ？その時にもつかい訊いても良いかもな」

「そうですがどうやって情報を入手したかなどは教えてくれないでしょうね」

「まあ、そう飯のタネのこと話さないよな」

グランの口から長い溜息が漏れる

「オーク500、上位種50ほど……道中他の魔物に遭遇するとして……Cランク以上の冒険者はどのくらいいる？」

「Cランク200名、Bランク25名、Aランク私合わせて5名ですね」

Cランク冒険者の強さはピンからキリあるが、Cランクのオーク相手だと1体あたり2人がかりだろう。Bランクの冒険者となれば同じランク帯の魔物と互角に戦える実力を持つものが多い。Aランクまで行ったものは何かしらの特殊なものを持っており、1人で大隊を壊滅させられるほどの強さを持つ。Sランクは師団だ、と言っても職業によって力量は変わってくるが……

「Cランクを連れて行くと、確実に犠牲は出るよな………」

「かもしれないね。一気に責められるとすぐ壊滅するでしょう」

「人数が多すぎても移動に時間がかかる。Bランクから実力があると思うやつ10人を選ぶ。これで15人。十分だろ。明日の昼までに物資を集める。そして15人を召集、情報共有したのち出発で、いいな」

「はい、手配しておきます。ギルマスは出ないので？」

「お前……知ってていつてるだろ？あんなだけ泣かれたばかりなのにまたやっちゃったなら1周回って減給待ったなしだ。いや、いつそやめて旅に出るか？」



「国の防衛力の3割が削れるのでやめてください、グラン元帥」

「元帥なんて副業だ副業。俺は冒険者が本職だつてのに、国の重要人物がホイホイそとに出て行って何かあったらどうするんだー!とか言われてもな?危険があつてこそその冒険者だろ?」

「私に愚痴らないで下さい。泣き落としとか、押しに弱いギルマスが悪いですよ?」

「いや、皇帝にやめないでくれって泣かれて、やめられるわけないだろ?」

グランはヒューマ帝国ギルドマスターであり、防衛騎士団の元帥であつた。

## 龍介VSオークキング 2

俺はハイドゴーレムに起こされる事によって朝を迎えた。

「どうした?……何か鳴ってる?」

ハイドゴーレムが頷く。なんで会話ができてるといふと、俺もよくわからん。何を伝えたいかがうっすら分かるって感じ?ともかく分かるんだ。

—ピピピピピピ—

||||||||||||||||||||

リユウスケ・ササキ

人間

職業：スライムマスター

ランク：B

連絡：着信あり クリストファー

〈出る〉 〈切る〉

||||||||||||||||||||

そういえばこんな機能あったな……すっかり忘れてた。

—ガチャ

「もしもし?」

「クリストファーです。リユウスケさん、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「早速ですが要件をお伝えしますね。今回、オークキングに関する情報を提供してくださって本当にありがとうございました。今回の件について、ギルドマスターと相談し、Bランク10名、Aランク5名でオークキングを討伐することが決定し、リユウスケさんにも参加してほしいんです」

「なるほど、わかった。何時に行けばいい?」

「13時にギルドの受付に私の名前を出してください。奥の部屋に案内されるはずです」

「了解」

「よろしくお願いします」

―ガチャン

13時ね、今は8時。適当に時間を潰すか。きりかぶおばけ達が集めた特やくそうを受け取った後、皆で食事。

イナリ商会で買い忘れた食材の補充に商店街へ。これで暇つぶしだ。

~~~~~

「おばちゃん、卵20個と小麦粉を10kg、塩、胡椒、砂糖を300gくれ」

イナリ商会で食材を仕入れたのはいいが、忘れ物が多すぎて笑いがこみ上げてくる。

商店街の八百屋のおばちゃんの店で調達。

「あいよ、合計で8,600Gだよ。そういえばあんた、最近有名になってきたみたいだねえ、巷で噂だよ？成人したての子が最速でBランク入りってねえ。でも気をつけるんだよ？冒険者は危険と隣り合わせなんだから。オークキング討伐、行くんだろ？」

「ああ、わかってるさ。しかし耳が早いな。昨日今日の話だろう？」

「おばちゃんは噂話に敏感なのさ、誰よりも……ね」

相当自信があるんだろう。ニッコリサムズアップしてきた。

「それじゃ、最近なにか面白い噂ないか？」

「実は、とっておきがあるんだよ。なんでも皇帝陛下が面白い娯楽にはまってるらしいんだよ。しかも、ハマりすぎてちよつと寝不足らしいとききた」

「へ、へえ、それは面白いな……陛下は一体どんな娯楽にハマったんだろうかなあ」

「そこまではどうしてもねえ……」

おばちゃんが悔しそうにため息をはく……しかし、心当たりがありすぎる……あの人そんなことになってるのか……

「そうか……また面白い噂があつたら教えてくれ」

そう言いつつ、料金ぴつたりを渡す。

「それじゃ、次もとびつきりのを用意しとくさね」
不敵におばちゃんは笑った。

~~~~~

あれから、串焼きを買ったり、オーク肉と野菜を黒パンで挟んだケバブサンドのようなものを買ったりして時間を潰し、ギルドへ向かう。

「サブマスターに呼ばれて来た」

受付にギルドカードを提出しクリスの名を出す、受付がすぐにカードを何かの道具に当てる。

「はい、確認いたしました。こちらへどうぞ」

中は学校の教室ほどの広さで、すでに10人ほどが集まっていた

「死神くん、昨日ぶりっす。やっぱり呼ばれたっすね〜」

「ああ、カルネもか」

「あたりまえっすよ。なにせ国内にいる数少ないAランクっすからね」

ふふんと誇らしげにカルネが胸を張る。たしかAランクは5人だけっけか？

「残りの4人はどんな人なんだ？」

「1人は死神くんもよく知ってる人のはずっすね。もう1人はちよつと薄気味悪い人っす」

「後の2人は？」

「仲のいい夫婦っすよ。旦那さんのほうは尻に惹かれてるっすね〜。見てて飽きないっすよ〜。多分今回全員紹介されるんじゃないっすか？」

「それは会うのが楽しみだな」

「お、クリス先輩が出てきたってことは、もうそろそろ始まるっすね」

全員揃ったのか、部屋にクリスとギルマスが入ってきた。

ギルマスが説明するみたいだ。

「皆集まったようだな、それじゃ、オークキング討伐の説明を行う！」

「「おーっ！」」

テンションが上りまくった冒険者、うるさく叫びざわつく。

「静かに!!」

おお、クリスがよく通る声で場を制した。

「今回のオークの勢力は約550。その内、50匹が上位種だ。知つての通り、オークキングが確認された。オークキングはAランクの魔物だが、今回、討伐隊に選ばれた君たちの中にはAランクの冒険者が5人もいる。つまり、おもったより楽な作業になるということだ」

場がどつと沸いた。なんだろうな? カリスマ? スキル? わからんが行けるような気にさせる力があるよな。

「さて……なぜ15人の少数でオークの討伐に行くのか気になっていると思うが、理由はいくつか有る。1つ、大人数をまとめるのは大変だ。2つ、大人数で行くと時間がかかりそれだけ疲労する。3つ、ぶっちゃけCランクが殆どのオークに実力のある15人が負けるはずない。4つ、結構な数の冒険者出したら残った依頼の処理に困る」最後の最後でぶっちゃけたな、今までのが全部台無しだ!

「ギルドマスター?」

「あ、いや……………最後のは冗談だ。ゲフン……………Cランク以上の冒険者を総動員しようとしたんだが、人数が多すぎることに、Cランクでは少なからず犠牲が出ることを考え、実力のあるBランク10名、更に帝国内のAランク5名で行くことに決まった。クリスが選んだお前らだ! 必ずオークキングを討伐しててることを信じている!」

お、終わりみたいだな。この後、クリスから物資の説明、動きについての説明があり、解散となった。俺は残るように言われたんだが……………

「リユウスケさん、今回の情報提供ありがとうございます。少ないですが情報料として500,000Gをお渡ししますね」

「いや、気持ちで十分なんだが……………」

「ま、貰つて困るものでもないだろ? 子供が遠慮するんじゃないやねえ。もらつとけ」

まあ、そう言うなら貰つとこうか

「それだな……あく、やっぱ良いや」

グランがなにかを言おうとして止める。なんだよ、気になるじゃないか！

「なんだ？ 気になるな……言いたいことが有るなら言ってくれ」

「あく、実はな、従魔を使って情報を仕入れたっていったらどう？ 具体的にどうやって手に入れたのか聞きたかったが……」

俗に言う”冒険者の言えないこと”ってやつに入るだろうから訊くのをやめたそうだ。

だが、今回はオークメイジをタイムして訊いただけだ。つまりオークさえタイムしてしまえば分かること。

「オークをタイムして訊いただけだが？」

「そうだよな……単純には教えて……なるほど、その手があったか……って簡単に教えてよかったのか？」

「別に隠すことでもないだろ？」

「それは、なにが命取りになるかわからんだろう？」

確かにそうグランが心配するのも分からんでもない。

だが……

「別に1つ知られたところで痛くも痒くもないさ。隠し球はまだまだあるからな」

「末恐ろしいな」

「褒めてもスライムしかでないぞ？」

スライム放出！

「褒めてない！ あと結構な数のスライムだな！」

「まあ、いまでも増殖してるからな」

「とりあえずしまってくれ」

「ああ」

「しかし、なるほどな、オークから聞いたとなれば納得だ」

~~~~~

オークキング討伐には明日の朝出発。夜に奇襲を仕掛け討伐。次

手紙もついてきた

〈HAPPY・VALENTINE!〉

これだけだ。向こうの世界ではバレンタインかく……こうやってチョコもらうの……初めてだな……グスツ

龍介VSオークキング 3

まあ、チョココレートスライムのことは置いて……明日はオークキング討伐。

しかし、ジャミラスめ……どうやってオークキングに進化させた？何かを与えて進化……進化……

進化の秘法？進化の秘法か!?あいつがやりそうなことだ……となると今回のオークキングは偽物か……

《そ、そうなんです!》

っびっくりしたあ……

《あ、あの……すいません!い、いきなり話しかけて……本当にすみません!》

『えくつと……確か邪神のアルマだったか?』

確か魔物の管理だっけ?こんな小さな子が頑張ってるなとも思っただけど、神だから実際の年齢は違うんだよなあ……複雑。

《は、はい!覚えててくれて嬉しいです!》

『少し前だったら忘れてたかも……それで?いきなりどうした?』

《じ、実は……進化の秘法が、っ……作られたんです!》

『やっぱり進化の秘法……となると、非常にまずいことになるな……』

《はい。ほ……本来、進化の秘法の、さ……作成方法は500年前に滅んだはずなんです!》

『滅んだ?それは、ステル達が?』

《いいえ……ヒューマ帝国の王が、ですね。すこし、昔話しをしましよ……》

時は510年ほど前のヒューマ帝国。ある日、体に埋め込むだけでレベルが上がり、人外じみた力を入れることができる宝石が作られた。作成者は帝国専属の錬金術師エドガンという男。なんでも、急に頭のなかに作成方法浮かび上がったと……怪しすぎるだろ……

進化の秘法(その時はレベルジュエリーと呼ばれていた)はすぐに帝国の冒険者たちに広まり、Aランク級の冒険者が続出した黄金時代となった。

しかし、人間はまだその秘宝の恐ろしさを知らなかった……

進化の秘法を使い始めて3日ほど過ぎた頃、国の近くでB、Aランクの魔物が続出した。それと同時にB、Aランクの冒険者が減っていった……

魔物が冒険者の行く先々で出現していたため、その魔物と戦い敗れたと思われる。だが魔物が出ることに1人、また1人と行方不明になっていったため、流石におかしいと感じた皇帝が調査に乗り出した。

行方不明者をリストアップし、調査をすすめると行方不明者全てが進化の秘法を使ったということが分かった。

そこで進化の秘法を使ったものたちを集め、調査を始めようとした所、冒険者の1人がいきなり叫び出した。

その直後、体が膨れ上がり、骨が飛び出では戻り1匹の魔物へと変化した。

幸い、冒険者が集まっていたこともあり、無事に討伐することができた。それと同時に、進化の秘法を使った冒険者に絶望を与えた。

皇帝はこの件を解決するため、錬金術師エドガンに進化の秘法の除去方法を問い詰めたが、エドガンは……

「除去方法など考えておるわけなからう。このような素晴らしい力をなぜ除き去ろうとするのか……儂には理解できない。それに、これはまだ完成品ではないのだ……これが完成すれば世界を支配できるほどの力が手に入る……」

……と言うのみでそれ以上話さなかった。錬金術師エドガンは研究に執着し、その力に取り憑かれ狂っていた。

それを見た皇帝はすぐにエドガンの研究をやめさ、すぐに研究所を調べさせた。

すると、認識阻害のかかった地下室への扉が発見され、中には進化の秘法とそれについて詳しく書かれた書類が乱雑に置かれ、地下室の至る所に黒い袋があり、中には女性だったものが……

そう、錬金術師エドガンは実験に人間を使っていたのだ……と、言うより若き乙女の魂を使い進化の秘法を作っていた。

それは、失踪したとされていた女達であった。

実は、数ヶ月ほど前から若い女が失踪する事件が続いていたのだ。これを証拠に皇帝はエドガンを大量殺人、非人道的な実験を行ったとし、牢獄へ監禁。3日後死刑になるはずだった……………

皇帝は、エドガンが本当に進化の秘法の除去方法を知らないのか、もう一度聞くように命令していたが、翌朝……………皇帝に知らされたのは朗報などではなく、エドガンの死という悲報。

エドガンを牢に入れた日の夜、何者かにより牢が破られ、次の日の朝には頭のない体が……………

結局、エドガンから情報を聞き出すことはできず、振り出しに戻る。

それから約10年後……………国の錬金術師全総力をあげてついに……………ついに進化の秘法を打ち消す宝石を作り出すことができた。錬金術師達はこの宝石をルビーの涙と命名し、もう残り少なくなってしまう進化の秘法を埋め込んだ者たちを救い出すことができた。

皇帝はすべてが解決した後に研究所を爆破、進化の秘法と、その作成方法もろとも処分を行った。もう二度とこのようなことが起こらないよう厳しく口外を禁じた。

こうして10年に渡る進化の秘法による悲劇は幕を下ろした……………

《こ、こんな感じですね……………それで……………進化の秘法は……………その、本来の進化の道を歪める危険なものなので……………できれば早急に処分したいんです……………》

『なるほどな……………わかった、オークキングを討伐した後は碎けば良いのか?』

《ぜ、絶対に……………碎かないでください!碎いてしまうと……………瘴気が溢れ出ます。な、なので、龍介さんの祭壇に……………おいてください……………回収します》『わかった、まかせろ』

《あの……………あ、ありがとうございます!》

アルマとの通信が切れる。

さて……………進化の秘法はやっぱり危険な代物だったか……………後、たしかDQの進化の秘法の完成形には黄金の腕輪があるはずだったが

……昔の人は知っていたのだろうか？

まあ、この世界での進化の秘法は違いかもしれんが……ともかく進化の秘法は回収の後祭壇へ……か。

思ったより事態は深刻かもしれんな。500年前の悲劇の再発か……勘弁してほしいね。

おっともう10時か……明日のために寝よう。その前に従魔たちと風呂じゃ！

キングとクイーンその他従魔たちと十分に

龍介VSオークキング 4

『あるじ〜！おきて〜！おき〜て〜！』

『主……おはよう……』

「ああ……おはよう……」

ふぁー……あと2時間で集合時間か、あー、スライム達はかわいいんじゃない。

日課のスライムパラダイスの後、飯食って、またスー達と戯れて、気がつけば集合まで30分……もうちよつとだけ戯れさせて……

ぷにぷにぷにぷに……ポヨンポヨンポヨンポヨン……

『んふふ〜くすぐりたいよ〜』

『くすぐりたい……』

『主は容赦ないな〜』

ナイトが呆れた口調で食器を片付けている。

「いや〜ほんとスーとスライムのスベスベプルプルの手触り、人をダメにするよ……それがわからないとは……」

『主、僕も一応スライムなんだけど……ど、どうかな？』

「どうかなって……鎧着てるじゃん」

『あ、そうか……』

あれ、すごく落ち込んでる？

「でもな、最近鎧に艶が出てきてるよな。カッコいいぞ。おまえは、自慢の従魔だ」

『ぴかぴか、カッコいい〜』

『ナイトは……カッコいい』

『み、皆……あ、あり……がと……』

お、照れてるな〜？かわいいやつちやなく

『主様！わ、私は！私はどうですか？』

「レムか？レムの深い黒色がかっこいいし、何より綺麗だな」

『綺麗……くふっ、くふふふ……主様に綺麗って……くふふふ』

……うん……レムの意外な一面が見えた気がする……

……あと10分だ、やべえ！

~~~~~

「はあ…はあ…」

「ギリギリつすねえ、死神くん。はいこれ、今回の討伐隊に支給される物資つす」

なにしてんだと言わんばかりの顔で、カルネが食料と簡易テントを渡してくる。

「ああ、ありがとう……ちよつと……スライム達と……遊びすぎた」

「朝からお楽しみつすね」

「ま、そんな感じだ」

「否定しないつすか……上級者つすね……やっぱりの樽は本当だったようつす」

最後の方、よく聞き取れなかったがなんか勘違いしてないか？

まあ、一日中撫で回してても飽きないけどな！

「カルネ？もう行く時間だ。速く準備を……ん？君は……」

そう言つてカルネの後ろから顔を出したのは、腰に稲妻型の剣を黄色髪の男。どこかリックと同じような優しい雰囲気を感じられる。と言うかリックに似てる？けど何か違うような……

「あ、エッジさん。死神の二つ名で有名なリュウスケくんと話してたつすよ」

「ああ、よく噂で聞いてるよ。俺はエッジ。エッジ・エルネストだ。カルネと同じAランク冒険者だ」

「リュウスケだ、リュウでいい。少し聞きたいんだが……リックつて知ってるか？」

「リックなら俺の弟と同じ名前だね。もしかして、知り合いか？」

十中八九そうだろうな……

「多分な。俺の知ってるリックは港町から来てたはずだが、どうだ？」  
「確かに俺達の故郷は港町エフニアだね。そうかあ。冒険者になったのか……冒険者みたいな危険な仕事はしないつて言つてただけだなあ……」

「ゼータとサザンと一緒にこの国に来てるぞ？」

「はえ、昨日この国に帰って来たばかりだったから知らなかったよ。どこに泊まってるのか知ってる？」

「たしか……鶴翼亭だったかな」

「なんだ、僕達と同じ宿じゃないか。ありがとう、今度会いに行ってみるよ」

「エッジ、どうしたの？速く行きましょうよ」

「ああ、ちよつとまってくれ。弟がこの国に出てきてるみたいなんだ……ああ、紹介しとこう。彼女は俺の自慢の嫁、パラネラだ。パラネラ、この子がリュウだよ。死神リュウスケ」

「パラネラよ、よろしくね。噂をよく聞いてるわよ、なんでも……スライムが愛人ですって？」

「その噂を流したやつについて、詳しく。ちよつと首を……話し合いをしなきゃいけないかった」

「とんでもない噂が流れてた……彼女は、エッジと同年、おそらく30代くらいで、腰まで伸びた深紅の髪、同じく深紅のローブに、赤いオーブのはまった杖を持っている。まさに絶世の美女と言ってもいいほどの女性だ。」

「ともかく、よろしく」

「綺麗だろう？うちの自慢の嫁だぞ。な？な？美しいだろ？もつと褒め称えてくれたまえ！」

「何この人熱意が違う……」

「また始まったつすね……エッジさんの嫁自慢」

「いや、本当にパラネラは可愛くてなく？こう、後ろから脅かしたりするとなく『ヒヤッ』とかいってさ、本つつつつつつ当にかわいいよ！な？そうおもうだろ？」

「あ、ああ。確かに綺麗だ。うん」

「エッジさん？そう言うのは、本当にやめてって前々から言ってるよね？大人として恥ずかしくないの？そんなに燃やされたいの？その髪の毛すっぱり燃やしましょうか？」

「すいませんでした……もうしませんので、さん付けと髪の毛は勘弁

してください……………」

燃やされるの自体は良いんだ……あと、DO☆GE☆ZA……綺麗  
だな……………」

「あははははーこれっすよこれーこれがないとエルネスト夫婦って気が  
しないっすよねえ」

「いつもこんな感じなのか？」

「そうっすね。これが自分たちの先輩、エツジさんとパラネラ姉さ  
んっす。いい人たちっすよねえ」

「そうだな」

「そうだろう、そうだろう。もっと尊敬してくれたまえ君たち。特に  
うちの嫁を……………」

「エツジ……？」

「ひえっ」

あ、まだ頭下げてる。これが平常運転だとパラネラも大変そうだ  
なあ……でも、楽しそうにしてるし、本当に仲が良いのがにじみ出  
てるな。こつちも負けてられないな。スライムLOVE。撫でまくろ  
う。

「死神くん、別に……張り合わなくてもいいっすよ？」

何故ばれたし……………」

~~~~~

なんか視線を感じる……気配察知には特に変な……変な？……変
だな……後ろにうつすら気配が……

「ヒヒヒッ……お前が最近調子に乗ってるって新人か……………」

「っ!？」

びっくりしたく、なんだこの薄気味悪い人物は……ボロ布をま
と、顔には包帯、痩せすぎな体。腰に短剣を数本、まさに暗殺者な風
貌をしている。

「ほう……まさか気づかれるとはな……ヒヒヒッ……………」

「お前は誰だ……………」

「なに、気にするな……少し気になっただけだ……」

そう言うのとガリ男は離れていった……なんだったんだ？

「やっぱりあの人は好きになれねえっす……」

カルネが嫌悪感丸出しで近づいてくる。

「結局……誰だったんだ？」

「あの人はローグさんっす。アサシン系の職業で不気味な人っすよ……最近、良くない仕事にも手を出してるみたいっす」

「ほく、よくない仕事……ね」

暗殺を生業にしてそうだったもんな。まあ、人を見かけや噂で判断するのはどうかと思うが、気を付けとこう。

「それでは皆さん！そろそろ出発します！くれぐれも気をつけて下さい！」

クリスを先頭に15名の少数精鋭がオークキング討伐に乗り出す。

進化の秘法、その進化の道を歪める力の恐ろしさを目の当たりにするのは、まだ先の事であった……

龍介VSオークキング 5

「左方にオーク2，メイジ1。他敵影なし。右方、オーク3のみ」

「そうですか……では、そちらのグループでオークとメイジを、そちらでオーク3匹をお願いします」

「了解」

「任せてー」

現在、Bランク3人を1グループとし、3つのグループを作って行動している。その内の1つは斥候班で、ローグをリーダーとし周囲の索敵を行っている。ちなみに現在地は中層辺り。

俺？俺はカルネヤクリスと同じソロだ。と言っても、今のところTEAMしたヘルホーネット達に偵察に行ってもらい、斥候の手伝いをしただけなんだが……余談なんだが、エツジ達夫婦は二人でいちやいちや行動するらしい。

え？なんで俺がソロか、だって？魔物使いだからだよ。

……この言葉万能だな。今後も使おう。

「後方からマンイーター5！」

「リュウスケさん、お願いします」

「わかった」

こんな感じで、たまに仕事が回ってくる。

「スー、ナイト、ライム、GOー」

『は〜い！』

『お〜！』

『スカラ、ピオラ、バイキルト……ドルマ、ドルマ、ドルマ、デイン、ドルマ』

「「「「〜ツツ!?」」」」

ライムが補助呪文で俺とスー、ナイトの防御力、素早さ、攻撃力を強化。その後1匹ずつに攻撃呪文。なんでデインを1発混ぜたのか、不思議でたまらないがこの際いい。

殆どのマンイーターは、ライムの攻撃のおかげで怯んでいるが、俺が対峙した2体のマンイーターは怯まなかったようで、触手を振るい

攻撃して来た。しかし今更そんな攻撃が当たる俺じゃない。バフもかかってるしな。

上、右、右、左、下、左、右、！触手が鞭のように四方から襲い掛かってきた……が、その全てを大鎌で切り落とす！

「~~~~ツ!!」

すべてを切り落とすと、もうマンイーターに為す術なし。縮地で1体のマンイーターの目の前が出る。

離れていたはずの俺がコマ落ちしたように消えて、気がついたら目の前にいたとしたら、それはもう驚くだろう。そこへ、大鎌による真下からの切り上げ。跳ね上がった大鎌は弧を描くようにしてマンイーターを分断した。

一瞬にして仲間が死んだ、次は自分だ。そう考えたのか、マンイーターがとつた行動は逃走。今回は、無理に仕留める必要もないので放置。たまにはこういうことでもいいだろう。

一方、スーは……

『びゅ~~~~ん!』

「~~~~ツ!?!」

地面が弾けた。スーが弾丸のような速さで地面すれすれを飛ぶ！スーが通り抜けた後には、スーと同じような大きさの風穴が空いた2体のマンイーターの姿が……

おそらく、豪腕のスキルで地面を弾き、その時に乗った勢いそのままマンイーターにぶつかり、悪食で削り取った……ってかんじかな？うまく説明できないが、そんな感じだろう……

ナイトは……

『しっ!はっ!せいっ!でりゃ!』

「~~~~!!」

襲い来る5本の触手！それを難なく切り裂くナイト選手！これはマンイーター選手劣勢だ！

「~~~~!!」

おおつと!?!ここでマンイーター選手、新しい攻撃だ！これは……地面が溶けています！酸です！マンイーター選手の強力な酸による

攻撃だ！これはさすがのナイト選手も厳しいか？

『ちよつ、主！恥ずかしいからやめてよ！』

「あ、聞こえてた？」

『バツチリと』

それは失敬、失敬。酸攻撃は意外だったが、少し相手の攻撃方法が変わったくらいで負けるナイトせん……ナイトじゃない。

少し時間は掛かったが、問題なく倒すことができた。

へレベルが上がりました

「ご苦労様です」

「いや、どうってこと無いさ」

「こつちも終わったぞ」

「こつちもです」

Bランクグループ1、2もちょうどオーク達を討伐し終わったらしい。この分だと、予定よりちよつと早く目的地に付きそうだな。

現在は中層、なのに出会う魔物はオークが主。つまり、中層はほぼオーク達に支配されていると言っているいいんはずだ。このまま放っておくと大変なことになっていたな。本当、ギルドに報告しといてよかった。

「少し休憩したら、また進みます。回復をしつかり行ってください」

「いや、死神くんかつこよかつたつすね。あ、これそこで採れたフルーツです。よかつたらどうぞです」

「ああ、ありがとう」

「なかなかの強さの従魔達だね。しかも皆、仲が良さそうだな」

スー達と休憩していると、カルネとエツジが相変わらずのフレンドリーさで話しかけてくる。

「でも、魔物使いとは似ても似つかない戦い方ですよね」

「今までにないタイプだね。俺が知ってる魔物使いは皆、魔物の後ろに隠れて戦ってばかりだと思っただけだ」

「なんか、普通に戦ってたらこのスタイルに収まったただけだが……そんなにおかしいか？」

オンラインゲームとかだと、召喚獣と共に戦うとかロマン溢れて

いたが……そうか、よく考えたらドラクエの世界じゃ、魔物使いは後ろで高みの見物だったな。

「そうでもないさ。むしろ魔物に任せず前に出る姿勢！むしろ好きだね。でもうちの嫁さんの方が100万倍好きだね！そういういえば昨日の夜になく「はい、そこまでよ。ちよつとエツジに話があるからしばらく待っててね」いだだだだだだ！痛い！痛いって！」

ああ……うん、読めてたよ……だってエツジの後ろにずっとパラネラがいたもの………たぶんこうなることが分かっていたんだろかなあ……

「もう、エツジはこれが癖になってるんじゃないか？なんかハアハア言ってたぞ」

「パラネラ先輩自慢をしてるときは大体あんな感じじゃなかったっすか？でも、もしかしたら、そうかもしれないうすねえ………あれ？なんかエツジ先輩の威厳が……」

「それは、初めて嫁自慢と茶番見せられたときに地に落ちたな」「先輩………」

休憩を取っているとはいえ、死の危険と隣り合わせなのは変わらない。少なからず、精神をすり減らしている状態だ。こんな時にエツジみたいなムードメーカーがいたら、また変わってくるのかな。

「それではそろそろ、出発しましょうか。エツジさん、真面目におねがいしますね？」

「俺はいたって真面目だ！真面目に、真面目な妻の自慢話をガツ!!ヒデブツ!!」

パラネラの右フック、左ストレートが綺麗に決まった……ほんと、懲りないよな。

龍介VSオークキング 6

パラネラの見事なパンチが決まったその少し後、オーク達の中に、まるで何かに操られたかのような、ふらふらとした動きで森の侵略を始める者が増え始めたことに気づいた。

「おかしいですね……………」

クリスはその不可解な動きをするオークを前に呟く。

「これは酷いな……………」

「顔が酷いわね……………」

「何かに憑かれたような、そんな感じっすね」

エッジ達やカルネ、他の冒険者達もこの異変を感じ取っているようだ。

「何か、ゾンビのような、いや……………洗脳?」

「死神くんも、そう考えるっすか……………」

しばらく様子を見てみると、その不可解なオークが別のオークに近づき耳元で何かをつぶやく。次の瞬間、今まで普通だったオークがいきなり痙攣し始め、倒れる。少しすると起き上がるが、その表情は虚ろで、さっきのオークと同じように何かをブツブツとつぶやいている……………ちよつと家のオークを出して通訳してもらおう。

……………通訳した結果『全テハ、オークキング様ノ為ニ』だった……………洗脳されてるう!まごうことなき洗脳だあ!

しかも常につぶやいてるときた。これはオークキングが何かをしたということではない……………

「どうやら……………オークキングの影響らしい」

「それは、このオークからの情報ですか?」

「ああ、少し翻訳してもらった。結果は『全テハ、オークキング様ノ為ニ』を繰り返してららしい」

「今回のオークキングは……………今までのと少し違うようですね。これは警戒度を引き上げる必要がありますね」

……………ん?オークの胸部に黒い塊がある……………急におかしくなったオークには耳に黒い塊……………

龍介VSオークキング 7

「進化の……秘法？」

「聞いたことないわね……」

「知らないっす」

「ひひっ……しらねえな……」

「知らないな（わ）」×9

皆知らないか……

「進化の秘法……どこかで……」

クリスがそうポツリと呟く

「進化の秘法は、500年前……簡単にレベルが上がるアイテムが錬金術師によって作られた物だ。その副作用は、進化の道をゆがめられ魔物に変化してしまう。その頃のヒューマ帝国の皇帝が解決したんだが……今回のオークキングはその進化の秘法が使われている」

「ああ、たしか、城の資料に似たような本がありましたね……たしか題名は……500年前の悲劇……」

たしか、アルマも言ってたな。悲劇って。

「おそらくそれだろう。そして、これは超劣化進化の秘法。これを埋め込まれた奴は自我を失って、本体に操られる人形になる」

「なんて恐ろしい……」

Bランク冒険者達の顔に不安の色が見え始めた。しかしAランク組はこれと違ってなにも無し。むしろエツジは『楽しみが増えた！ 楽しくなってきたー！』って顔してる。リックと比べるとやや熱いな。

「でも、どこからそんな情報仕入れたっすか？」

まあ、気になるよな……どうい言う言い訳をしようか……あつ「知り合いに教えてもらった、とだけ言っておこう」

「ほえ……いい伝手をもってるってことすか？羨ましいっす」

死神くんは面白いことだらけっす！ビツクリ箱っすね！とカルネのテンションが謎に高い。え？なに？オークキングの影響か？Aランクって戦闘狂ばかり？

「別に、伝手の5個や6個、普通だろ?」

「伝手は普通、1つや2つ。空間魔法持ちの魔物使いで、本気を出す素振りが見えないっていうので十分お腹いっぱいよ」

パラネラが呆れたようにため息をつく。

「リュウ! 帰ったら頼みたいことがあるんだ」

エツジがテンション高いまま絡んでくる。頼みたいこと? 手合わせか?」

「帰ったら是非とも手合わせしてくれ! リュウみたいな魔物使いは初めてだからね」

やっぱりか。変なフラグにならないければいいが……

俺、帰ったら手合わせするんだ……うん、フラグになるかよく分からん。

「無事に帰れたら、な」

「縁起でもないことを言わないでくれよ。絶対に無事に帰れるさ」

「今回の敵が、何回も復活するAランクモンスターだったとしても?」

「……きつと、おそらく、たぶん……皆! 手足の一本や二本、覚悟しとこう」

自信無くしてんじゃん! 弱気じゃん!

「じゃあ、死神くんはオークキングに勝てないって思ってるっすか?」

「そんなわけないだろ? 戦うのが楽しみでしようがないさ」

「どんな強者にも勝負を挑む、その域に達したらAランクは目の前ですよ」

なるほど、つまりAランクは少なからず戦闘狂と……むしろ戦闘狂じゃないとなれないのか?」

「それで、その知り合いの方は何て言っていたんですか?」

ま、気になるだろうな。

「ざっくり説明すると、ジャミラスの置き土産で、進化の秘宝が使われた。500年前の再来にならないように回収したい、って感じだな」
「それは……」

「信用できないのはわかる。だが、壊すと瘴気を振りまくらしくてな、徹底的に浄化しないとイケないんだ。それができるのは彼女達だけ

降臨、つまりそういうことか。

《そういうこと。これで証明できるね！でも調査させるのはちよつとやばいかな……この件が終わったらすぐ祭壇にその子連れてきてね》

『了解、とりあえずオークキングをしばき倒してくる』

《よろしくね、君が協力してくれてアルマも喜んでるよ》

それは良かった。

ちなみにこの間0.5秒らしい。去り際にステルが教えてくれた。

「ま、何はともあれ、オークキングを倒さなきゃな」

「そうですね。とりあえず作戦通りにいきましようか」

龍介VSオークキング 8

作戦は単純明快、夜中に奇襲をしかける。オークの住処によって細かいところは変わるが、基本、Bランク3人+Aランク1人のグループを3つと、Aランク2人+俺+従魔達の計4グループ。内1グループはローグ率いる隠密に特化したグループだ。俺のグループに至っては戦えるスライム達を大量に投入する予定だ。

奇襲のタイミングは草木も眠る丑三つ時、オーク達は見張り以外、皆寝静まった時。隠密グループが速やかに見張りを排除し、俺たちが攻めこむ。ざっくり言うところこんな感じだ。まだオークの住処まで距離があるし、時間もある。

「とりあえず、作戦通りに行くと考えていてください」

「しかし、今回いくらかオークを狩っているだろ？警戒されてるんじゃないか？」

そう、今回俺たちは道中でオークを狩っている。つまり、あつちからしたら行方不明者が出たってことだ。警戒されてる可能性が非常に高い。オークキングも馬鹿じゃないんだ。きっと警戒しているだろう。

「今はなんとも言えません。ですが、詳しいところを考えるのは、住処の詳しい情報が集まってからでも遅くありません。またその時考えましょう」

「……………しかし、増えてきたな」

「ああ、まただ」

時間がたつごとに増える半進化獣：オーク。強力な洗脳で痛覚を気にせず、1度2度復活する死を恐れない兵士。厄介この上ない。しかも本体のオークキングはそれ以上と思われるときたもんだ…………あれ？

「なあ、もしオークの住処に劣化進化の秘法が使われたオークで溢れていたとしたら…………」

「したら？」

エツジ……………わかるだろ！よく考えるんだ！

「自由に操れるし自我がないんだ……となると睡眠なんていらぬし……させないんじゃないか？」

「……………ありえる……………」

「ありえるわね……………」

「ありえるつすね……………」

「……………とりあえず、倒しましょうか……………」

確かに超劣化進化の秘法モンスターは増えたが、さすがAランク冒險者。その戦いは目を見張るものがある。進化の秘法云々を差し引いても負ける気がしない。

カルネは氷魔法なのか、特殊スキルなのか分からないが、自分のガントレットに冷気をまとわせて戦うようだ。カルネが殴った箇所は瞬く間に凍りつき砕け散っていた。その温度の低さから、カルネに細氷が出来てキラキラ輝いて見える。氷姫の二つ名も領けるな。

エツジは稲妻形の、威圧的な形状で幅広の片刃剣……………おそらく稲妻の剣。その剣に電気がバチバチツと走ったかと思うとエツジがオークの向こう側にいた。一般人には瞬間移動したように見えただろうが、俺にはしつかり見えた。足に電気を纏い走りだし、オークに触れるところが。纏うというより電気と融合していた？ならあのスピードも領ける……………か？速そうなのは分かったが体の負荷がヤバそうだな。

エツジが接触したオークは焼け死んでいる。理由は簡単、オークの体に高圧の電流が流れたっぽかったから。さらにさらに雷を飛ばすこともできるようだ。かすただけでも厄介なようで、オークは感電。その後すぐに仕留められていた。

パラネラは火魔法を使う魔法使いのようだ。メラを少し圧縮し着弾した瞬間に爆発するというオリジナルを混ぜていた。さらに、メラを細かくしてバギと混ぜて炎の竜巻を作っていた。この世界にもいたんだな、呪文をそのまま活用せずオリジナルを使う人。

ローグは……………高レベルの潜伏能力で後ろからバックスタブが得意のようだ。武器はナイフを2本、素早く後ろに回り込み、声も上げさせず仕留める。さすが、暗殺者な見た目してるだけはある。動きに無

駄がない。

クリスは回復専門で、例えどんな怪我でも直してた。しかも補助魔法、光魔法も使えるようでライムと一緒にバフをかけまくってた。意外だったのは杖に魔力をまとわせて殴ってた事だな。殴られたオークは場外へ……もちろん頭だけな。脳筋かつ！と思っただけどAランクは脳筋の集まりだったの忘れてた……

~~~~~

オークの住処から100mほど手前、時刻は夜12時。オークの拠点は意外と大きく、丸太を使った簡易的な防御壁、泥を乾燥させたブロックで作られた家……いっちょ前に集落してる。しかし、意外なことに見張りはほとんどいなかった……えっと見張りは……20でその全てが準進化獣か……たったこれだけ？よほど自分に自信があるのか……畏か、ただのアホか……一体どっちだ？

「これは……」

「畏……にしては……」

畏にしてはあからさますぎるか？だからといって何も考えなしつてわけじゃないと思うが……

「家のオークを集落に入れてみるか？同族だからうまく情報が出せるかもしれない」

「それはやめときましょう……うっかり場所がバレるかもしれません。この少なさで特に動きが見られない場合は奇襲を仕掛けてみましょう。時間まで怪しい動きや怪しい所などがあつたら報告お願いします」

となると、このまま待機だな。スライム達のモチベーションあげるために全員なでとくか。かわええのおく、かわええのおく

「今の死神くんの顔、すごく犯罪級っす」

失礼な……そんなわけないじゃないか！

## 龍介VSオークキング 9

あれから時間が経ち、大雑把にオークの拠点を把握することができた。まず普通の家とは違う一回り大きな家。これは多分オークキングの家だろうと判断。更にオークが武器を持って家の中に潜んでいることがわかった。何で分かったかというところ、定期的に家から半進化獣：オークが顔を出して周りの様子を確認しているからだ。バレバレすぎて逆に、それすらも罠かと感じるレベルだった。罠じゃないとしたのは、すべての家のオークが警戒のため顔を出したからだ。

このことから少し作戦に変更があった。本当は隠密中心でオーク達に悟られず、と言うか見張りを排除しつつ攻略しようとしていた。だが、ほとんどのオークが家の中で待ち構えていた。となると、隠密しながら奇襲しても効果が薄いと判断した。ならば、俺のスライムベス達を大量に配備し、一斉にメラミを使い燃やし尽くすのが楽だろうということになった。パラネラがオークキングの家にメラゾーマを放つのを合図に、ベス達が一斉に撃つ。そこから始まる殲滅戦……のはず。

今回参加させるスライムは、スー、ライム、ナイト、ベス60匹、コマンダー6匹、ホイミスライム12匹。あとスライムじゃないけどレム。ベス10匹にコマンダー1匹、ホイミスライム2匹を付けて、しっかり回復、統率できるように指示した。

「良いか？皆、そろそろ時間だ。あの家にメラゾーマが当たった時、他の家に一斉にメラミを撃つんだぞ？あと、常にいのちをだいに、だ。危なくなったら逃げてくるんだ」

『『『『』はーい！』』』』』

ちなみにベス達の中には、火魔法のレベルが4でメラガイアーまで使える子がいるが、60匹もいるんだ。メラミで十分だろう。まだ手の内は隠しときたいし、MPが足りない子もいるしな。

「じゃあ、それぞれ持ち場へつけ！」

ベス達がポヨンポヨン跳ねながら持ち場に付くために移動する。後は、レベルを5にあげた気配察知を駆使していち早くキングを討伐



直径が7メートルを超える炎球。その炎球から炎が飛び出しては取り込まれ、また飛だす。まるで太陽のプロミネンスようだ。かつこいい。その炎球が速くも遅くもないスピードで、でかい家に直撃する。

月の全くない夜を巨大な火柱が明るく照らす。それと同時にいくつかの家から小さめの火柱が上がる。メラゾーマと比べると小さい火柱なだけでだが……

「一応成功だな」

「気配察知の範囲にかかった家から反応が全部消えた。確実に死んだな……あ……」

「どうした？」

「復活した……のよね？」

「ああ。すっかり全部復活した」

「めんどくさいな（わね）」

「全くその通り、だがうちのベス達が燃やし尽くすだろう」

ちなみに今も火柱は上がっている。気配察知で見ると反応が出たり消えたりしている。それが2、3回続くと反応がなくなった。

「反応が消えたな」

「スライムベス……強くないか？」

「他の家にも撃ち続けてるわね……魔力は底なしなの？」

「自慢の子だ」

実は魔力具現化で作った魔力の塊は、飴のように舐めることによって魔力を回復できるんだ。

「それじゃ俺たちもがんばるか。パラネラの勇姿を目に焼き付けるためnツ~~~~」

「ふざけてないで、速く行くわよ！」

相変わらずかつ！くそうイチャコラしやがって！ん？気配察知の端っこに強力な気配が？これは……

~~~~~

side : オークキング

我はかつてオークジエネラルだった。我は力を欲していた。必死に特訓をした。なりふり構わず特訓した。しかし、成長に限界を感じていた。力がほしい！家族を、同族のすべてを守れる力が！そんな時、我の前にやつは現れた。

『力が欲しくはないか？魔物の国を作るためにその力を振るわないか？そのままではその才能が潰れてしまう。それが許されて良いはずがない！お前はもつと強くなるべき存在だ！』

結果、我はジャミラスの話に乗った。彼が渡してきたものは拳大の黒い石。これを埋め込まれた瞬間、体中に激痛が走り、死ぬかと思っただ。しかし、体の底から力が湧いてくる。オークキングに進化した。なんでも出来るようナ気がする。これで、すべてヲ支配すル、支配出来ル。オークの王として。すべてを統括シ、世界ノ王ニなれル……

『ハハハ！良いぞ！その調子だ！そうだ！魔物の魔物による魔物のための国をつくるんだ！ニンゲン共を駆逐するんだ！』

人間、ソウダ、奴らがイる限り、我の天下はコない。人間は弱いくせに、よく群れる。弱いくせに、ソノ勢力をは広イ。我はこの森の、極一部シカ支配できてイないのに……自分はこんなニモ強いのに……納得できナイ……

シカシ、まだ我が配下ノオーク達が弱い。強くするためにはどうスルか……我の力をかシテやればいい……黒い石の欠片を……これで最高の力が手に入ツタだろう？強化オークヨ、我のためニ働け、我は王ダ！いずれコノ世界の支配者、魔王、いや霸王ニナルのだ！

あれから数週間ゴ、ジャミラスは人間を攻めに行クと言つて、帰つコナかった。人間に殺られたんだロウ……あいつは弱かった、タダそれだけだ。我は違ウ。まだその時期ではナイのだ。

配下からの報告デ、強化オークが帰つてコないようだ。森の魔物に殺られタカ、人間に殺られたか……どちらにセよ、使えない……強化されたのに殺られるトハ、オークの恥さらしヨ。我はそんなヘマはしない。念のため、強化オーク達の見張りを強化シ、残りは各自家で待機。マあ、もう少しで人間ノ村が手に入るのだ。それを起点ニ世界へ

……

そうほくそ笑んでいると、視界が赤く染まった……

龍介VSオークキング 10

はっはっはっはっ……どこへ行くというのだね？オークキングさんよお？

察知の隅に写り込んだ気配はやっぱりオークキングだった。大人2人分を越える身長、出た腹、切り株で作られた王冠、青色の毛皮、赤黒く染まったマント……なんか、すごくだせえ……しかし、背中に背負った大剣はかつこいいな。黒いバラが彫り込まれた刃、バラから紫のオーラが滲み出てるのが得点高いぞ。

そんなことは良いとして、とりあえずオークキングの足元に向かって大鎌を叩きつける。爆ぜる地面。直前にバックステップで武器を抜くオークキング。取り巻きとおぼしきオーク達もそれぞれ武器を抜く。

そう簡単に殺らせたはくれないよな……

|||||

進化獣：オークキング 6 ♂ Lv40

ランク：A

HP：1224 / 1524

MP：453 / 453

攻撃力：735

防御力：853

素早さ：402

賢さ：100

器用さ：302

幸運：25

スキル |||

・ 剣術 Lv4 ・ ダッシュ Lv3

・ 豪腕 Lv2 ・ 格闘術 Lv2

・ 並列思考 Lv1 ・ 並列行動 Lv1

・ 気配察知 Lv3 ・ 性欲増強 LvMAX

ルーム発動！俺の横にシンプルイズベストな扉が生えてくる。

「ムっ!?何だソレは！」

「さて、なんだろうな？」

従魔達カモン！メタルスライムを中心にオークキング以外を各個撃破！

すでに我がメタルスライム達の防御は1000を超えている。ちよつとやそつとでは傷はつかないはずだ。ホイミスライムも付けてるし、MP回復飴玉も持たせてるし、いい経験値になるだろう

『レム、出てこい！』

『お呼びでしょうか？』

『他の従魔達の援護を頼む』

『それでは主様の援護が……』

『俺は………やばかったら頼む』

「ソイツらは何だと聞いている！答エろ！」

「うるさいな……その質問、今はじめて聞いたぞ？ほんとに完璧で崇高なのか？」

「黙レ！群れるシか能のない劣等種が！」

「そんなことはどうでもいい。どっちが劣等種かは……命のやり取りで決めよう」

「ふんっ！命のやり取りなんぞする必要もない、我ノ勝ちに決まってるー！」

「そんな余裕丸出しでいいのか？ヒヤダルコ、メラガイアー」

通常の3倍の魔力を込めたヒヤダルコ発動。その凍てつく冷氣は、草木を芯まで凍らせる……が、オークキングの体の芯までは凍らせられなかったようだ。それでも膝の位置まで厚い氷が覆う結果となった。

次にメラガイアーを唱える。その掌大の火球は酸素を混ぜ込むことよつて高熱となつており、あまりの熱量に数メートル離れた草木まで燃え、炭と化す。消化は後でやればなんとかなるなんとかなる。しかし、近くで戦っている従魔達に影響はないようだ。オークジェネラル達は熱そうだがな。それをオークキングに投げつける。

「又、おオおおおおお!?」

あ、氷割ってけた。しかし甘い!

「爆ぜろ!」

そう叫んだ瞬間、拳大の火球が大爆発を起こす。なぜかっていうと……まあ、そう設定したんだけど。いや〜いけるもんだね〜、時限式。

進化獣：オークキング 残機5

「お、おのれ……小賢しい!その、ような手を使うことでは勝てない劣等種ガ!」

「チョットナニツテルカワカラナイ」

ステータスの賢さ||リアルの賢さじゃないってのがよくわかるなあ

龍介VSオークキング 11

「フンツ!!」

「おっと、危ない危ない」

「劣等な種族ガ!その余裕、いつまで毛続くと思っナ!」

「意外と紙一重だったりしてな」

「見え透いタ嘘ダナ。シカシ、そのスタミナがそう長く続くワケがない!我と戦ったことを後悔しながらシネ!」

ちよつと、あからさま過ぎたかな?でもこいつ、そればつかしか言わないんだけど……愚か、劣等、余裕はないぞ、そればかり。そのくせ奴の剣はかすりもしない……あいつの素早さが俺より低いからなのか、剣術のレベルが俺の方が上だからなのか分からないが、オークキングの攻撃が鈍く見える。

「はあ……ハあ……ば、バカな……我が……人間なんゾにい……」

こいつ絶対キングになってから自身の訓練とかしてない系だな。俺はまだなにもしてないぞ?巨体を制御しきれてないだろ。

つまり太りすぎ。息が上がってるのがその証拠だろう。もしかして……ステータスって、体の鈍りとかで下がったりするのだろうか?

そろそろ反撃したいんだが……剣が邪魔でなかなかいい手が出せない。俺はあの剣がほしい。なぜなら、かっこいいからだ!黒薔薇の大剣。なんか、ダークな感じって良いよね。中二病だつて?大いに結構。人は誰しもかっこいいものに惹かれるものだろ?特に男はさ……

「ヒヤダルコ」

てなわけで、また足止め。

「っ!!またか!先ほど効果がナかつタのを忘れたか……!?!」

「そりゃあな……さつきと同じわけないだろ?」

魔力をさつきの倍にした特性ヒヤダルコだ、よく味わえ。

「ぐおおオオお!」

6倍の魔力だ。さつきとは比べ物にならない冷氣だろう。こつちは全然わかんないけど……その証拠に、オークキングは胸まで凍って

つまり、オークキングの天下は、このオークの村でしか続かない。

「まさに、井の中の蛙だな」

「何を訳の分からぬコトを……」

「要するに、お前は政治を知らなすぎるってことだ！」

「我を愚弄するか!!」

怒りで我でも忘れたのか？大剣を地面に突き刺し、何のひねりもない突進をかましてきた。もちろん、当たってやる必要はないので避け、大鎌でオークキングの腹に付いている3分の1の肉を大幅カット。

—ボトツボトボトツ！—

その傷口から血と臓物がこぼれだし、地面をぬらす。

「ぐ、ふっ……ぐあア、あ……」

やったね！ダイエツト成功。ただ、お前はもう死んでいる。とどめの一撃、相手の頭蓋骨は碎ける。

進化獣：オークキング 残機3

「おおオオオオオ!!シねえ！」

大剣をつかみ、地面ごと振り抜くオークキング。目潰しか。

「死ね！死ね！シネ！しねええエエー！」

「そんなに声を出していると、目潰しの意味を成さないんじゃないか？」
目潰ししてるのに前から大声が聞こえてきたら、斬つてくれって言ってるようなものだろ。それに

この目潰しで目を瞑ることになっても、俺には気配察知がある。つまり、何をしようと詰みってことだ。

いまだ、同じところに大剣を叩き続けているオークキングの後ろにステンバニー……ステンバニー……

「GO」

「ぐっ……」

投擲した魔鉄のナイフがオークキングの喉を貫く。せめての足掻きか、オークキングが大剣を投げようとするが、途中で力が抜けたように下がる。

「がっ……ゴフツ、ぐ……ぐボツ……」

俺は大鎌を水平に振り抜く。数秒後、ゆつくりとオークキングの頭が地面に落ちる。すぐに頭は溶け、体が再生する。

進化獣：オークキング 残機2

さて、ラストスパートだ。

龍介VSオークキング 12

オークキングの残機は残り2。スライム達がジェネラル達を無事に撃破したようで、オークキングと俺を取り囲むように様子をうかがっている、というか完全に観戦してる。あ、仲間の冒険者の姿もみえ………できるだけ近くで見たくて前に出てきたスライム達に揉まれて後ろの方に流れていった。従魔大放出してるからなあ。その数は400を越えてる……ビッグスライムに挟まれてたけど大丈夫かな?……なーむー

「……お前は……慕われテいるのだな……」

「当たり前だ。俺の家族だからな」

「……家族、カ……我は……力で負け……そして、上に立つ者トしても負けているのだな……」

なにか諦めのような、そんな目をしたオークキングが遠い空を眺める。そして剣を地面に突き刺し、座り込む。

「何の真似だ?」

「殺セ。我の負けだ……お前には何モかも負けている。力でも、王としても、負けている。もはや勝ち目はない。殺すがいい」

潔く敗けを認めるか。数十分前とは大違いだな。これで仕留めれば、依頼は完了が。だが………

「断る」

「………なぜだ。まさか、見逃された弱き王として、このまま生き恥をさらせと言うのか?」

「そうは言わない。何しろ、お前は俺がタイムするからな。王じゃなくなる。俺の仲間だ」

そもそも、討伐しなくてもオークキングの脅威がなくなれば依頼は完了だろう。

いやー、負けを認めてくれるなら簡単だ。運が良い。

「………それこそなぜだ?我など、お主と比べれば弱……」

「何を言ってるんだ?それを言うと、周りのみんなは俺より弱いぞ?」

「ぐ、そうだな……」

「生きたくないのか？殺せと言っているが、内心死にたくはないだろうか？」

死にたいと思う人でも、心のどこかで生きたいと思っている。だから、いざ死ねる瞬間が来ると、躊躇うんだ。感情があるものはみなそうだと思う。

「ぬう……」

「それに、強者に従う。よくある話だろう？しかも、厚待遇だと思うぞ？」

「……そうだな……」

そう言うと、オークキングは剣を取り、こちらへ預け跪いた。これは騎士の誓いの儀式。オークキングの肩に剣の刃を置き誓いの文句を唱える。

「謙虚で、誠実であり、礼儀を守れることを誓うか？」

「誓う」

「裏切ることなく、欺くことの無いことを誓うか？」

「誓う」

「弱者には常に優しく、強者には常に勇ましくあることを誓うか？」

「誓う」

「己の品位を高め、堂々と振る舞うことを誓うか？」

「誓う」

「家族を守る盾となり、家族の敵を討つ矛となることを誓うか？」

「誓う」

「汝が騎士である身を忘れるな。我、汝を騎士に任命す」

「ありがたき幸せ。この身、朽ち果てルまで貴方に忠誠を……」

「タイム」

へオークキングのタイムに成功しました

オークキングに剣を渡す。ふー、ネットサーフィンしててよかった。じやなきやこんなにスムーズにいかなかった。問題は、進化の秘法……これだけを浄化出来るのか？浄化したらオークキングも死にました！じや洒落にならない。

『終わったんだね』

「ああ」

ナイトが血に汚れた鎧を拭きながら近づいてきた。なぜか不機嫌だ。

「どうした？」

『別にいい。ただ、先を越されたなああって』

ああ、誓いの儀式か。

「じゃあ、俺に剣を預けてくれるか？」

『!! 喜んで!』

ナイトが剣を渡してくる。先ほどと同じ質問をし、こう、締めくくる。

「汝が騎士である身を忘れるな。我、汝を騎士長に任命す」

『!?!?!?!?!この身朽ち果てるまで、たとえ朽ち果てたとしても貴方に忠誠を誓う』

「満足か？」

『清々しい気分だよ、主。力が湧いてくるみたいだ』

「そうか、それはよかった。それじゃ戻るか」

こうしてオーク達の脅威はなくなり、わずかに残っていたオークをティムつつ、クリスのいるであろうオークの集落に向かった。そこで事情を説明し、夜が明けるのを待つて帝国へ帰った。

翌日、国に着くと俺と、ギルマス、サブマスが城に呼び出され、オークキングの脅威がなくなったことを説明した。

その時、証明としてオークキングを出したがこれが驚き。あんなに太かった体がほどよく筋肉がついたスリム体型になり、白銀の鎧に身を包んでいた。剣も白くなっていた。話を聞くかぎり、ルームの中でアルマが出てきて進化の秘法だけ浄化していったらしい。俺にありがとうと言っていたとか。種族はオークパラディン、Aランクだ。

どうやらナイトも変化し、ルーンナイトになったとか。ルーン、まあ日本語なんだけど……それを空中に綴ったり、物に綴ることによってそれを発現させられるとか。ちなみにBランク。

このあと解散した。

かはちよつと……使ってみないとわからないかなって感じ?』

レベルが1なのが原因か?これは日本語を教えなきやな。

「それじゃ、今度日本語の勉強だな。良かったよ古代文字が俺の国の言葉と同じで」

『古代文字が母国語ってことは主は古代人?』

「いや、普通の人間だ」

『普通……?これだけの従魔家族がいて普通?あり得ないと思うよ?』

『主は規格外』

『うん……まさに、人外の粋……』

スーとライムまで失礼な。俺ほど人畜無害な人間はいないだろう。

『人畜……無害?!』

……そういうことにしといてくれ。

それはそうと、今回の戦いで進化した個体が非常に多かった。

・スライムマデユラ×13

・クイーンスライム×6

・ジュエリースライム(青)×6

・ジュエリースライム(黄)×4

・オークナイト×1

・オーク魔術師×1

・刺突ウサギ×2

・ポイズンキラー×2

・メタルスコピーオン×1

・ディープバイター×4

ざっと説明すると、スライムマデユラはマデユライトとか言うものでできたスライムだ。

クイーンスライムはその名の通り、スライムの女王。

ジュエリースライムは赤と同じ。定期的にその色の宝石を生み出すらしい。

オークナイトはオークの騎士。オークパラディンの部下になる。

オーク魔術師は多数の呪文が使えるようになったメイジの亜種らしい。パラディンの部下予定。

刺突うさぎは刺すことに特化した突進うさぎ。

ポイズンキラーは二種類の毒を使うハチだ。

メタルスコープイオンはサソリアーマーのメタルバージョン。硬いメタルスライムほどじゃないらしい。

デープバイターは始めてみるが海に閉じた魔物らしい。

こんなもんか。あくそういえば明日、朝早くに皇帝に呼ばれてるんだ。リックが持ってきた指名依頼のやつだっけか？もう寝なきや……ギルドで報酬も受け取らなきや。明日は多忙……かな？ああ、エッジとの勝負が……シリカとの食事が……多忙だな。

龍介、兵士の訓練に付き合う 1

早朝

「ん？なんだ？客？こんな朝早くに？」

俺はいつしかのよう、ハイドゴーレムに揺すられ目を覚ました。

「どうやら客人らしい。」

「久しぶり、でもないかな。リュウスケ」

「……………皇帝陛下……………なんでこんなところにいるんです？」

「来ちゃった」

「来ちゃったって……………」

「護衛とかは……………」

「多分今も王のいない城を警備してるんじゃないか？これでも元Aランクの冒険者だったからそれなりに戦えるし大丈夫だろう？」

……………頭いたくなってきた。問題しかないぞ。皇帝がこんなアクティブに動いて良いのか？あと皇帝何歳だよ。若く見えすぎだ……………」

「……………父さん？」

「!?……………リブロ……………お前いつの間」

「皇帝陛下をリュウスケ宅にて発見、後確保。至急、輸送隊を手配。ほら父さん、重臣達がお怒りですよ。明日まで説教は覚悟しててください」

「ん、……………む……………!!」

さすが、慣れているのか逃げようとした皇帝の全身をロープで素早く梱包。しかも、口に布を詰める徹底ぶり。この縄……………キラキラしてるぞ？魔道具か？しかし、すばやい。ミノムシ皇帝の出来上がりだ。さすが、リブロ。親の扱い方がわかってる。

「やあ、リュウ。久しぶりってほどでもないかな？」

「ああ、数日前にあったばかりだな。今日は指名依頼の話か？」

「そうだよ。城の兵士の訓練に付き合っただけなんだ」

兵士の訓練か、うちのスライムの訓練にもなりそうだな。まさに

WIN・WINの関係だな。

「この依頼の報酬は……」「わかった。それはいまからか？」……決定が早いね。報酬次第かなとか考えてたよ」

「なに言ってるんだ、友人の頼みを聞かないわけないだろう？なんなら、報酬も10Gでもいいぞ？」

「わかった、そこまで言うならそうしとくよ」

「お、おう」

男にい、二言は……ない……もうちよつと高く言えばよかつた……

~~~~~

連れてこられたのは城の奥、その扉の1つをリブロが叩く。

「団長、リュウを連れてきました」

「ご苦労。入れ」

リブロに続いて入る。そこには紫髪の女性が優雅なティータイムを過ごしていた。

下着で……

「団長、またそんな格好で……」

「ああ、すまない……どうもこの開放感がやめられなくてね」

「それにしても、自分の部屋でリラックスするために服を脱ぐって、どうなんですか？」

「そこは、人それぞれよ」

「良いから服を着て下さい」

また、なんか特殊な人だな。ん？他に特殊な人は誰かって？、エツジだな。

「驚かせたわね。それで、貴方が最近噂のリユスケ君ね？はじめまして、ヒューマ帝国防衛騎士団団長のバルバロッサよ」

服って……ビキニアーマーかよ！下着姿とあんま変わんねえな！それでも謎の防御力を誇るんだろうけど……

「死神のリユスケだ、よろしく。リュウと呼んでくれ」

「そうさせてもらおうわ。それで今回の件は聞いているわよね？」

「兵士の訓練に俺の従魔達を使いたって話だろ？」

「ええ。貴方の従魔達はみんな質が高いつて評判なのよ？特にギルドの冒険者達に」

へー、そうなんだ……まあ、俺の自慢の子達だしな。

最近また連携がうまくなった気がする。スライム達だけでなく、他の魔物達との連携もだ。

従魔達が今までより仲良くなっており、その従魔の生息地に遊びに行ったり、一緒に訓練したりしているらしい。

そういえば、キングとクイーンが進化していた。デミホースだったか？馬と魔物の中間らしい。称号に絶滅危惧種がついていたことから、きつとこの2匹だけなんだろう。これからも精進していつてほしい。

## 龍介、兵士の訓練に付き合う 2

ヒューマ帝国防衛騎士団、約900名で構成される軍。主に国の治安維持に力を入れていて、その約6割がごく普通の騎士団をしており、残りの4割が私服警官のような感じで市民に紛れ込んでいるらしい。これにより約95%の犯罪を未然に防ぐ事ができているらしい。その割に裏道に入ると絡まれるんだが……これが残りの5%か………

ちなみに今日、訓練するは100名である。

「皆整列したわね？今日はゲストとして、最近活躍中の死神リュウスケに来てもらったわ」

俺の登場に団員達がひそひそと騒ぎだす。

「死神？あんな子供が？面白くない冗談だな」

「バツ！お前、知らないのか？たしか数百の魔物の首だけを斬り飛ばす、首コレクターだとかいったっけ？」

「いやいや、たしかスライムに恋愛感情をもつ変態じゃなかったか？」

「いやいやいや、ただちょっと態度がでかいだけで実力のある根は優しい子だと聞いたぞ？」

「その噂は初耳だな」

後であいつらには話をしなくちやな。誰が斬首好きの首コレクターでスライムに欲情する変態だったって？

「静かに！リュウスの従魔は非情に優秀で、先日魔物が攻めてきた時にも活躍し、今回のオーク討伐にも大きな活躍をしているの。さらに！今回の活躍でAランクになるらしいわよ」

「Aランク？」

「……俺は初めから分かっていたさ。あの子供がAランクになる逸山だつてな……」

「「お前さつき完璧に知らなかっただろ！」」

「……それでは今日の訓練の説明をする！今回は実践を想定したものを予定しており、闘神の加護のかかったこの場所で行う。死なないからと言って、命を粗末に扱うことがないように！」

「サー・イエス・サー!!」

100人全員による返事は凄かった。返事は気にしたら負けだろ。そういった感じで訓練が始まった。と言うか、俺Aランクになるの？初めて聞いたんだが……

—ピピピピピピピ—

「ちよつと失礼、—ガチャツツ—もしもし?」

「おう、リユウ。昨日はご苦労だったな。突然なんだが明日、お前Aランクになるぞ」

通話が繋がるなり、グランがそんなことを言った。

唐突すぎて笑えない。

「俺も今さっき聞いて驚いてる」

「お、もう聞いたか。確か……」

ギルマスの声が遠くなり、何かペラペラとめくる音が聞こえる。何にクエストを受けたか確認でもしているのだろうか?

「あったあった。騎士団の訓練に付き合ってるんだったな。しつかり鍛えたやつてくれ。最近どうも気の抜けたやつが多くなってな……」

「ん?ギルマスは騎士団と何か付き合いがあるのか?訓練とか」

あの戦闘狂のギルマスのことだ、きっと戦いたいがために騎士団の訓練に参加でもしているんだろう。

「そうだ。俺は副業として騎士団の元帥をやってるからな。たまあに訓練に付き合ってるぞ」

「元帥……騎士団の頂点だよな。副業って……」

「まあ、そうだな。元帥になれば強い奴らと戦えると思ったんだが……正直微妙なところだ。それに書類仕事も増えるしよ……」

副業でなんでもものをしてるんだ……この戦闘狂が書類仕事とか……苦行だな。

「何度、やめようと思ったか……」

「辞めないのか?」

「皇帝に辞めないでくれって泣きつかれた。そこまでされて辞める訳にはいかんだろ?」

陛下の泣き顔……見てみたい、今度リブロに聞いてみよう。

「まあそれはさておき、明日の正午。謁見の間な」

「ギルドじゃないのか?」

「Aランクはいわば英雄の域なんだ。皇帝陛下が直々に渡すんだ。他の貴族への宣伝にもなるしな」

「正直、貴族とはお近づきになりたくはないんだが?」

貴族至上主義みたいなのが少なからずいるだろうし、めんどくさくなるに決まっている。まあ、そうじゃない貴族がいるのも解るが……

「気持ちにはわからんでもないが、うまくやっていくしかない。諦めろ」

慈悲はないんですか!

「じゃ、そう言うわけだ……おい、クリス……その紙の山はなんだ? 昨日と一昨日の書類? ……くそ、一体いつになったら終わるんだ……これで3徹はいくぞ……」

そういつてギルマスとの通話が切れる。おおかた、サボっていた分だろう。自業自得だな。

しかし……元帥か、ギルドマスターと併用か……そりゃ書類云々で潰されるに決まっている。

「リュウ、もう良い?」

「ああ、大丈夫だ。ん?」

バルバロッサが俺の通話が終わった頃合いを見計らって話しかけてくる。右手には血のように真っ赤なハルバード……アマゾネスだな。じゃなくてその武器からなにか漏れてるような気配が……

「そのハルバード、何か特殊な素材を使ってるのか?」

「いい目をしているのね、鑑定でも使ったの?」

「いや、勝手に鑑定を使うのは失礼だと思ってるんでな。そういうことはしないんだ」

「意外と紳士なのね。正解よ、これはマデュライトをふんだんに使ったオーダーメイドのハルバードなの」

マデュライト……スライムマデュラの素材か?

「マデュライト? スライムマデュラのか?」

「あら、よく知っているわね。そうよ、このハルバードはマデュライト

の効果を利用して、一定範囲の味方に効果が及ぶようにしたハルバードなの」

「魔道具なのか？」

「準魔道具ってやつね。普通の武器以上、魔道具未満ってところかしら？もちろんピンからキリまであるんだけどね」

「はじめて聞いたな、最近できたのか？」

「そうよ、魔物の素材を使って武器を作っていたら偶然できたらしいんだけど、つい最近確実に作れるようになったらしいわ。魔道具には劣る劣るけど、値段は安い方だから、買ってみたいんじゃない？紹介するわよ？」

なるほど。しかし、そんなものがあつたとは。つまり素材の能力を活かす武器か。これはいつか作るしか無いな。

「いや、俺の武器はもう揃えてるから大丈夫だ。必要になったらまた頼む」

「それもそうね。それじゃあ、兵士たちの訓練を始めましょうか。まずは10対10の訓練から始めるわ」

「ああ、最高か普通か最弱か。どれからが良い？」

「そうね……まずは無難に最弱からおねがいできる？」

「よし、それじゃ始めよう」

訓練スタートだ

## 龍介、兵士の訓練に付き合う 3

「それでは、訓練を始めるわよ！訓練終了の条件は勝つこと！勝てば次の訓練まで休んでよし！また、5回連続で負けると特別訓練よ！心してかかるように！」

バルバロツサの号令で兵士のための地獄の訓練が始まる。

訓練その1

兵士10人VS進化したてのスライム達9匹＋スライムコマンダー

「そっちの2匹を頼む！こっちは任せろ！」

「グツ！腕をやられた！」

「回復します！ホイミ！」

「連携が厄介だが……思ったより余裕だな」

「おい！何が簡単だ！こっちのウォータースライム、剣を切り刻んでくるぞー！」

「がんばれ。ほら予備だ」

「おい!？」

この時兵士達を相手するスライム達は、連携がやっとなれるようになったレベルの子達。まだ経験浅め。その点、兵士たちはよく連携が取れており、流石に低レベルのスライム達に遅れは取らなかった。中には、魔物を相手にしたことがない新人もいたようで、多少怪我はしたようだがきちんと回復魔法が飛んでいた。

あと、余裕とか思ってる奴、今はまだ弱いスライム達だぞ。これから地獄を見るかもな……ふっふっふっふっふ……すでに数人、苦戦をしているらしいが。

この訓練による成果は、スライムが進化して従魔が増えたこと。新しい種類……と言って良いのかわからないが、スライムナイトが6匹、スライムブレスが4匹増えた。スライムブレスはドラゴスライムの進化系だ。スライムナイトはスライムからの飛び級。

訓練その2

兵士10人VS中の上のレベルのスライム達5匹



「おいおい……このスライム、ビッグにしてはでかくねえか？」

「多分、メガスライム……」

「マジかよ。初めて見た」

「お？こっちはメタルスライムだ！よっしゃ、経験値いただッ……」  
「！！！！」

人が真横に飛ぶ光景なんてそうそう見れるもんじゃないよな。あ、でもこの世界じゃ割と普通にできるな……特にAランクとなれば尚更か？

「……おい、今の見えたか？」

「いや全く。気がついたらあいつが吹き飛ばされてたな。メタルスライムってこんなに早かったか？」

「人が真横に飛ぶなんて、まさか元帥以外にもこの芸当ができる人間……いや、モンスターだったか、ならそこまで驚くほどでもないか」  
「あ、それもそうだな」

ギルマス………いつたいどんな訓練を………まあ、無双してるんだろうな。兵士をちぎっては投げちぎっては投げ………容易に想像できるぞ。

「でも元帥とかの訓練よりは幾分かマシだよな」

「まあ、きついけどそこまで勝ち目がないわけじゃないな。元帥との訓練に比べれば、まだまだいけるな」

「あの訓練はもげる。地獄だ」

あのおっさんマジでどんな訓練してるんだ!?

「Aランクかあ………憧れるなあ」

「すごいよな。あの年でAランク。いつか俺も」

「お前にAランクなんてもったいない。Cランクで十分だろ」

「割と普通の評価!?!」

なんか、周りからの視線がきらきらしてるんだが……ちよつと、いやすごく視線が痛い。

注目されるって、むず痒いな。

しかし、これでも勝つグループが出てくるか。1つや2つ、脱落が出るかと思っただが……さつきからちよくちよく出てくるギルマスの

訓練の影響がこんなところにまで！

「なかなかやるでしょう？うちの兵士達」

「ああ、これも団長様と元帥様の指導が立派だからだな」

「よしてちようだい、恥ずかしいわねっ」

「ぐっ！げほっげほげほっ！」

ちよつと、バシバシ背中を叩くのをやめてほしいんだが。あ、HPが少し減ってる……：……：……：……：……：……

しかし、千人ほどで国1つをほぼ完璧に守っているだけはある、兵士達の技量は目を見張るものがある。もともと犯罪が少ないっていうのもあると思うがそれは置いておこう。

メタルスライムのくだりだけを見るとバカやってるようにはしか見えないが、きちんと勝利を納めているあたり流石だとおもう。スライムだからとバカにしちやいかんぞ。中の上に位置するスライムはD、Cランク冒険者並の技量を持っているはずだからな。

訓練その3

兵士全員VS俺、スー、ライム、レム、ナイト、その他高レベル従魔

俺ら、最強メンバーによる訓練。訓練？どちらかと言えば蹂躪？きつといい経験になるだろう。ギルマスとはまた違った地獄、見せてやる！ちなみにこの訓練だけは団長も参加するらしい。

「メラガイアー」

「「ぎやあああああ!!」」

まずは高火力で一掃。今ので約3分の1が別室送り。

『えい！えいえい！とりやつ！ぽーい！』

「グッ」

「このスライム、いったい幾つの武器を扱うんだ!？」

スーは体内収納を使い、体の中にしまっていた武器を取り出したり仕舞ったりしながら戦っている。剣、斧、槍、槌、鎌、棍、暗器を巧みに使い一撃必殺。鎧袖一触で兵士たちを打ち負かして行っている。

『……バイキルト……：スカラ……：ピオラ。ギガデイン、ドルクマ。ベホイミ、ライデイン。ベホマラー』

「くそっ。あのスライム、ヒーラーなのはわかるが……攻撃的すぎる！近づけねえ」

「おい、周りにバフまでかけてるぞ！急いで何とかしろっ」

「何とかしろって言われても……飛んでるし……魔法も避ける、いたいどうしろって、うおおおおお!!?」

「気をつけろ……影に、なにかいやがる……影に何か刺さった瞬間体が……動かなく」

「おい……くそっ厄介な」

ライムが上空で淡々とバフをかけ、魔法をばらまく。それはよそ見をした兵士を浄化し、浸食しする。さらに、ライムに注目が集まっている間に、影泳で影の世界に潜っているレムが影遁・影縫いで足止め。ついでと言わんばかりの影遁・影刃。これは本当に厄介だろう。何しろ気が付くと動けず、刺される。例え刺されなくてもライムの呪文の餌食。ここら一帯の兵士は、いわば詰みの状態。

『自分もまだまだ、負けてられないな……』《疾風迅雷》《一刀両断》  
《金城鉄壁》  
きんじょうてつへき

「はやっ」

「鎧がっ」

「足がっ足がああー!」

ナイトがルーンで綴った文字は四字熟語。四字熟語は4文字で濃い意味を持つ。つまり、こういう戦い方にぴったりのことだ。疾風迅雷で素早く動き、一刀両断で断ち切る。金城鉄壁で守りを固める。金城鉄壁は、非常に守りの堅いことのとえで、金や鉄のようにきわめて堅固な城壁の意から来ている。つまり、すごく固くなる。無敵、とまでは言えないのかもしれないが、ほぼ最強に近いと思う。

これは……俺の順番がない……最初の一発だけだぞ？俺が活躍したのって……ひどくね？もうほとんど兵が残って、あ、団長残ってるな。よし、戦いじゃヒヤッハー！



「二」なら殺られてくれ!!」

「断る!」

「二」鬼!! 鬼畜! 人を人とも思わぬ人外!!」

酷い言われよう……度を超える訓練はここまで人を変えるものなのか……教訓だな。

「ヒヤダルコ!」

—ツルツ— 「っ!?!」

はい、二人転んだ! 今です!

「死にたくなかったらすぐに体勢を立て直すのよ! ツ!?!」

残念、転んだ二人にとどめを刺すと思っただろ? バルバロッサがコケた様子をチラリと見て、すかさず立て直すよう指示する。その一瞬、一瞬あれば呪文を1つ唱えられる。

つまりどうなったかというと……

「二」あっ「二」

メヒヤド飛ばしたらハルバードの刃の部分が消えた。別に刃を狙ったわけではない。そう、運が悪いことに、いや、実際の戦いで言うと運が良いことにか? 胴体に向かっていたメヒヤドの軌道上に偶然、ハルバードの刃が入り込んでメヒヤドと衝突したんだ。するとなんとということでしょう! 消える刃! それ同時にハルバードの柄の部分に亀裂が生じ、砕け散る。数秒間、ダイヤモンドダストが赤くライトアップされたかのような幻想的な空間を作り出した。

「……………」

「二」……………」

「……………150万Gが……………ああ……………ぐすつ……………」

しばしの無言の後、バルバロッサの口から漏れた言葉と嗚咽、それのみが静寂のなか響き渡った……

~~~~~

あの後謝り倒して、とりあえず弁償するまでの間に合わせとして新しい武器を作ることを約束し、ルームに引きこもった。20代ほどの

美人さんのマジ泣きは罪悪感ゲージが限界突破した。

何を作ろう……：ハルバードなのは確定だが……：どうせなら魔道具にしよう。少なくともあのハルバードに負けないようなものを作らないとな。

—カンカンカンカン—

—ジュ~~~~~

つと、まあハルバードを作るのまでは簡単なんだ。鍛冶スキル4レベルの効果で、どこをどうすればいいか分かりやすくなったからな。ちなみに魔鉄を使っている。

次は何の文字を刻むか。

《魔石を使用し半径20mの味方全員に筋力増強(大)、疲労回復(大)、HP自動回復(大)の効果をつける。効果の続く時間は魔石の質によつて上下する》

よし、これでいい。ハルバードの中央に魔石をはめる穴を作っていた。魔力を込めると切れ味が鋭くなり、魔石をはめると範囲で効果がつく。穴の大きさは……：穴あき包丁みたいに刃にそつて大きさを違う穴を作っておいた。うん、これで完成。早速渡しに行こう。

龍介、兵士の訓練に付き合う 5

「というわけでお納めください」

すぐにバルバロッサに渡しに来ました。

「リブロ……これはどういうことかしら？ 私には前の斧よりも高性能の物が見えるんだけど？」

「ええつと……リユウ……それは？」

「なにつて、新しい武器を買うまでの繋ぎの武器？ 新しい武器を買ったら売るなりなんなりしてくれ」

「それを売るなんてとんでもない！」

びつくりしたあ……いつでも作れるんだが……

「むしろ、私がお金を払うレベルなんだけど……」

えっ、薄々前のより強くないかなとか思ってたが……そこまでか？ 鎌にも刻もうかな？

「言い過ぎだろ、だってこれ……」

《魔石を使用し半径20mの味方全員に筋力増強(大)、疲労回復(大)、HP自動回復(大)の効果をつける。効果の続く時間は魔石の質によつて上下する》

こんな効果だ、強力だが欠点もある。

「魔石の質が良くないと効果時間が短いぞ？ いちいち、戦闘中に効果が切れたら変える、なんてしてられないだろ？ だからといって長い時間効果を求めると出費もかさむ」

「なるほどね、納得した、何て言うと思ったの？ いい？ こんなに！ 効果の高い！ 武器は！ 迷宮産でしか！ でないと思われてるのよ！ はあ……はあ……」

「お、おう」

そんな息切れするほどか……そうかあ、やつちまったかあ

「じゃあ、他言無用で、な？」

「……はあ、分かったわ。でもこれ、私がお金を払わなきゃ釣り合わないわよ？ あのハルバードの3倍の値はするはずよ」

へー、3倍か。良い値段するんだな。

「そこまでか……まあいいか。それじゃあ、後は150万Gを少しづつ返す形でいいよな？」

「ちよちよちよつ、待って待って。話聞いてた？あれの3倍よ？3倍！こんなの貰ってさらに、お金ももらったら罪悪感で死ぬわよ！お金は大丈夫！」

「そうか、それなら良いんだが……」

よかった、150万なんて大金、何週間かかるか分からなかったからな。

「そうだ、リュウ。この話、父さんの土産話にしても良いか？」

「大丈夫だ、好評しないよう頼む」

「分かった。しかしリュウはなんでもできるんだな。その内、賢者の石とか作ったりしてるかもな」

「怖いと言わないでよ、それこそなかなかお目にかかれない代物じゃない」

笑顔がひきつってますよ、お二人さん。賢者の石か、たしか錬金でレシピアがあったような……

「レシピアなら……」

「……………」

楽しいな雰囲気が一瞬にして砕け散りました……てへっ

~~~~~

「お？雨か……」

訓練が終わり、外に出てみると……何ていうか、シヤレ乙？な言い方をすると、太い針金のように光る雨の線？全然シヤレ乙じゃなかった。

つまり近年稀に見る超大雨。近年稀って言うか、この世界では初だけど……

傘……傘？そういえばこの世界に傘は……無いよな……道行く人々は手持ち物で守りながら大急ぎで帰り、出店を出していた人たちは大急ぎで商売道具を片付けている。出店には簡易的な布で屋根ら



しきものはあるが……ただ布だから余裕で染み込んできている。水の染み込みにくい布とか誰も考えなかったのか？これは売れるな………心のメモ帳にメモメモ。

そんな俺は対策済み。実は傘の骨組みを作っている。なぜ骨組みかという……ウオータースライムをまとわせるためだ。ウイータースライムは体内に大量の水を収納できる。つまりいい感じに傘になれる。

壊れる心配もほぼなく、水はリサイクル可能、まさに一石二鳥。

次の日、傘らしきものを売り始めた店が出たのは言うまでもない……そりや大雨の中自分だけ被害受けずにゆっくり帰ってたら真似しようとするよな……特許も何も無いもんな。しかし！まだ地球の傘には遠くおよばない。耐水性、耐久性、重量………こういういたものを試行錯誤するのってすごく楽しいし、ついつい改造たくなる。帰ったらスライム傘の改良だな。

## 龍介、兵士の訓練に付き合った後

団長の武器消滅事件の翌日、ギルドにオーク討伐の報酬を受け取りに来た、のだが……………

「あれ？リユウスケさん、今日はお城に行くんじゃないんですか？報酬も式典で渡されるはずですよ？」

「あ……………」

シリカに言われて気づいた……………そういえば！昨日のゴタゴタですっかり忘れてた！

「やっべ、忘れてた。始まるまであと何分？」

「だいたいあと、20分ですよ？間に合いますか？」

「間に合わせる！」

「あつ」

「ん？」

シリカが何か言いたそうな目でこちらを見ている。なんだろうか。

「ああ、いえ、そのまた今度で大丈夫です」

「そうか、じゃあまた明日な」

急いでいかなくは……………という時に限って道が込みまくるって  
ステルのせい 神の悪戯か……………はたまたステルのせい悪魔の罠か……………

《ちよつとーそれ全部僕のせいになってるよね！そんなことは……………全くしてない……………よう・悪魔じゃないし！》

『なんで不安気味なんだよ！はつきり否定してくれよ！』

ええい、こうなったら！魔力具現化を使い地面から魔力の柱を生やし、そののに乗って屋根へ。NINJYAのように屋根の上を軽やかに爆走する。身体強化と縮地を混ぜることによって、いつもの4倍は速く移動できる。どこぞの赤い大佐もびっくりだろうな。

~~~~~

side：シリカ

「はあ……………」

また誘えなかった。ネックレスのお礼に食事にと約束したものの……リユウスケさんは忙しそうだし、誘いにくいなあ……

「もしかしなくても、好きな人をなかなか食事に誘えなくてもややもやしてる顔やんねえ」

「ふえ!?ちよつと!からかわないで下さいよ!べ、別に好きとかそんなんじゃないで、たしかにかっこいいか思いますけど、それにもややとか……」

「いいねえ、若いやんねえ。これを期に真心込めた手作りでもごちそうしたら?男の心を驚掴んで叩き潰せるのは愛情というスパイスやんね」

ああ恥ずかしい……いつもこの先輩はからかってくる。特に恋愛が関わってくるとどこにでも湧いて出る。それに、わしづかみは分かるけど叩き潰したらダメなんじゃ?

「ああ……なるほど……」

「あれ?もしかしなくても本気にした?」

お礼だから、自分の精一杯のものを出さなきゃいけないよね。リユウスケさんもまた明日って言ってたし……よし!明日、チャレンジしてみよう!頑張るぞ!

「あれ?もしかしなくても、おいてけぼりやんね……」

~~~~~

side: 龍介

「よつと」

ギリギリセーフ!

「リユウ!早く、こつちだ!後5分だぞ!何処行ってたんだ?」

リブロが呆れ顔で聞いてくる。その気持もよく分かる……昨日伝えられたばかりなのに遅刻ギリギリだもんな。

「昨日のゴタゴタで頭から抜けてた。本当、間に合ってたよ……」

「ああ、確かにあのインパクトはデカかったなあ……でも良いものが見れたって団員の皆は喜んでたぞ?」

「ま、否定はしないな」

後から聞いた話では、団長の泣き顔はめつたに見れるものじゃないらしく、団員の間で結構噂になっていたらしい。団長を泣かした少年がいると……はい、犯人は私です。私がやりました。いやほんと、わざとじゃないんです！悪気はなかったんです！

「リュウは百面相が得意なのか？ははっ、面白いな」

「いや別にそういうわけじゃ……ちよつと昨日の罪悪感に押しつぶされてた」

「ああ、うん……あ、着いたぞ」

その扉は、いつもの……いや、いつもよりピカピカになっている。見の間の扉。まるで、この日のためにこの輝きを取り戻した……いや、これ以上はやめておこう。なんか恥ずかしくなってきた、自惚れるな俺！慢心、ダメ、絶対。

「また百面相してるぞ、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。安心してくれ」

なんか、今日は感情が表に出やすい日か？これはいかん。式典中に顔に出たらたまつたもんじゃない。

でも、顔に出るようなことって……厄介事か？そうになったら嫌だなあ。

「こういうめでたい時、たいていなんか問題が起きるんだよな」

「やめてくれ、これ以上俺たち兵士の仕事が増えると疲れる」

リブロは苦笑いしてるが、こういう時は決まって事件が起こるんだよな。さて、1級フラグ建築士になるか、フラグクラッシャーになるか……それはまさに神の味噌汁神のみぞ知る

《いや、知らないけど？あと、家の味噌汁は天下一品だよ》

『あんた神だろ、しつかりしろよ！後で味噌汁ごちそうしてくれ』

《運命関係はちよつとねえ、得意じゃないんだよ》

『じゃあ何が得意なんだ？』

《得意……得意なことねえ……破壊？これでも闘神だから》

『闘神は破壊神に分類つと』

《そのメモ帳をすぐに渡しなさい、いい子だから》

回収された!? 神権乱用だ! 返せ!

ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる 1

side:愚者

「おい、準備はできたか？」

「ああ、完璧だ」

リュウスケが城に着く数時間前、とある貴族の家の一室に彼らはいた。

彼らは過激な発言でやや問題視されている者たちである。

彼らの考えは、国をもっと豊かにするために各国に戦いを仕掛け物資や領地を奪うべきだということ。人間至上主義と貴族至上主義のハイブリットで、

「今の王は腑抜けだ！平和、安全を気にしすぎなのだ！少し過激な提案をただけで降格、ふざけるな！」

貴族その1がテーブルを忌々しげに叩く。ワインの入ったグラスが揺れ、綺羅びやかな金の装飾によって悪趣味感がかさ増しされたテーブルが軋み、パラパラと金の粉が剥がれ落ちる。

「おい！このテーブルは140万Gもしたんだぞ！もっと丁寧に扱え！」

この家の主人である貴族その2がその1の態度に腹を立てテーブルを大事そうに擦る。明らかにぼったくられているであろう家具を大事そうにしている貴族その2を一瞥し、貴族その3が口を開く

「まあ落ち着けて。それより、しっかり手配はしたのだろうか？」

「ああ。アレの目標はしつかり定めてある。後はその時、あの言葉を言えば、現皇帝は死ぬ。あとはうまい具合に王子を操り……ふっふっふ……完璧だ……」

「これで国がさらに豊かになるぞ！」

貴族その1、2は俗に言う……感情のままに行動するバカであった。

「しかし、もし失敗したらどうする？」

「そんなことがあるわけ無いが……今回Aランクに上がる冒険者に罪をなすりつければいい」

「その手があつたか！」

貴族その3の提案に納得し、安心してワインを楽しみ始めるその1、その2。今回の首謀者である貴族その3は一見、冷静沈着、用心深そうに見えるかもしれないが……

(これで、復讐ができる！全てはあの皇帝が悪いのだから自業自得だ！ただ、少し気になるのが今回の式典の主役、Aランクに上がる餓鬼だが……噂を聞けば数週間でAランクになったと……ふんっ、運が良かったのか、うまいこと皇帝に取り入ったに違いない。そうでなければ魔物使いなどという役立たずな職がAランクになどなれるわけがない。皇帝もろとも消し飛ばしてやる。それに切り札もある。明日からが楽しみだ……ふっふっふっふ)

貴族その3は明日からの豪遊に妄想を膨らませながら禍々しいネツクレスをもてあそぶ。

やはり、蓋を開けてみれば考えなしのバカであつた……

ここで少し考えてみよう。過激な発言で降格までされた危険思想の人間を、好き勝手させるだろうか？監視の目はあるのではないかと。

彼らはまだ知らない。自分達が監視されていて情報が筒抜けだということ。自分たちが地雷原で踊っているということ。その地雷を踏み抜くのにそう時間はかからなかつた……

~~~~~

side：龍介

謁見の間に入ると大勢の豪華な服に身を包んだ人たちがズラツと並んでいた。やばい、こうなつてくると緊張がやばい。

奥の椅子には、成人した息子がいるとは思えないほど若くみえる皇帝が座っている。だが今回はその隣に女性がいる。すごく幼い、中学生1年と言っても過言ではないほどの見た目の幼さ。娘さんか？ずっと微笑んでいる。

「リュウスケよ、今回の件、大儀であつた。その功績を認め、冒険者ラ

ンクをAランクにすることをここに宣言する！」

「ありがとうございます」

く校長先生の話並に長いので割愛く

「それじゃゲフンゲフン、リュウスケ、こちらへ」

いま、確実に素が出たな。言われた通り、皇帝の前へと歩みでる。その時、警告スキルが反応した。あまりにも突然のことだったので大鎌で守ることしかできなかった。だが、しっかりと陛下達は守った。いったい、何が起こったんだ？普通に右手が痛いんだが……

「何だ今のは！」

「魔法!? 一体誰が！」

どうやら、魔法が飛んできたらしい。ああ、やっぱりな。こういうときってイベント起きるのがテンプレだよなあ。

へ 称号：巻き込まれ体質 を獲得しました へ

マジカ☆

ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる 2

いつつ……左手がヒリヒリいたい……

「リュウ……お前左手が……」

「ん？左手？確かに痛いがそんなに驚く……ほどじゃ……」

あつと？これは、驚く……自分でも驚いた。怪我に気がつかないと、痛みを感じないって本当なんだな。大丈夫だ、安心しろ俺！たとえ左手を吹き飛ばされようと回復魔法で生やせる！けど……いてええええ!!くそっ！怪我を認識したからか痛みが！痛みをスルーするんだ!……すこしましになった？痛みをスルー出来るとは……スルー力、恐ろしい子!

「すぐに救護班をよべ！リュウ！すぐに僧侶がくる！」

「ま……て、リブロ……大丈夫だ……ライム！スー！ナイト！オーク軍団！」

ちよつと大丈夫じゃない、けど回復のスペシャリストのライムがルームから出てきたらこっちのもの。ライムにも再生のイメージは教えており、効果は薬草や魔物で実証済みだ。安心して任せられる。スーたちは他の兵士たちと一緒に皇帝陛下を守ってもらおう。

『主……すぐに生やす。ベホマ』

「手が、再生している!?!リュウ、これは?」

「そういうものだと思ってくれていい。ライム、助かった。しかし、手を吹き飛ばすほど強力な攻撃……一体誰が……」

「どうしますか?陛下」

皇帝を守っている兵士の1人が警戒をしながら訊く。

「うむう………どうしよう………ともかく、貴族たちを別室へ!1人ずつ聞き込みをしろ!」

とりあえず兵士達が陛下の周りを固めているから安心だとは思いますが……まあ、また攻撃が来ても完璧に弾いてやるがな。

「「あの……」」

貴族たちが別室に移動してる中どうしようかと悩んでいると、その貴族達の中から3人の女性が出てきた。

しろ、合言葉を言えば設定した場所に隠蔽された魔法弾飛んでいく……さては、この日のために作ったな？合言葉はいららないと思うが……

「連れてきましたー！」

しばらくすると、先ほどの兵士がとある人物を連れてきた。連れてこられた人物はご老人。でもまだまだ若いもんには負けんと言わんばかりのオーラ？そんなものがにじみ出てる気がする。

「ふおつふおつふお、この年になって、まだこき使うつもりかのう」

「そこを何とか、お願いします」

「ふむ、どれみせてみい……たしかに、このネックレスは説明が偽造されておるな。効果は“ポイントを設定し、合言葉を言うとその場所に光と火属性の魔法弾を飛ばす”か。これを作ったものは相当、国を恨んでおるかものお。だが、なぜ合言葉を作ったのかはわからんが……」

やっぱりそう思うよなあ。ピンポイントで狙えるし。あと合言葉の方は疑問に思うのはよくわかる。スイッチ式とか他にあったと思うんだが……理由はまだあとでわかるだろう。

「このネックレスは何処で？」

「はい、先日トンニール侯爵様から頂きました」

「私はリ चीン様から」

「私もです」

「すぐに捕縛だ！絶対に逃がすな！」

「はいー！」

これで解決か？すればいいけどな……この女性たちは隠蔽された魔法弾をどうやって認識したのだろうか？俺はとっさのことで何が起ったのかわからなかったが……これが才能、か？

「ところでおぬし、今回Aランクになるといいう魔物使いの若造かのお？」

「ああ、そうだ」

「ほうほう……なかなか出来ておるではないか。同じ魔物使いとして応援してるぞ」

む、この人も魔物使いだったのか……てつきりガツチガチの戦士か
と思った。

ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる 3

「リュウスケ……すまなかつた!」

陛下が突然、頭を下げる。

「おやめください!一国の王が冒険者に頭を下げるなんて」

「馬鹿者!ここで頭を下げずに、どこで下げるといふんだ?こういうところをしつかりしないと人としてダメだと思ふぞ?」

「も、申し訳ありませんでした!」

一蹴された大臣らしき男がすぐに引き下がる。さすが陛下、やる時はやる男、そこにシビれる!憧れるう!と、まあそんな話は置いといて……

「こればかりは唐突で、どうしようもなかったと思います。だから謝罪は大丈夫です。ところで……Aランクのカードを貰ってもいいですか?」

このままだと時間かかりそうなのでズバツとつつこむ。皆ポカーン……今、このタイミングでそれを言うかね?という感じで見られた。だって、ねえ?結局このゴタゴタで今日の所は無し!とか言われたら困るしねえ。

「この非常事態に何を「はっはっはっは!」陛下!」

「いや、さすがリュウスケ。流石だな。我が道を行くといったところか?……後、この喋り方もうやめていい?何気に疲れるんだけど……」

「陛下……もう私は知りません!お好きにどうぞ!」

あくあ、大臣(誰かわからないから決めつけ)が怒って出てっちやつた。

「ここには関係者しかいないからあのモードで話す意味がわからないね、うん」

うん、俺は陛下がどうしてこんな性格なのかわからない、うん。

「はい、これ」

そうやって渡されたギルドカードは赤、しかもタダの赤じゃない。メタリック加工された赤だ。これは胸熱展開!受け取ると金属の重

量感。高級感が5割増しになった気がする。プラスチックだった普通のクレジットカードがワンランクもツーランクも上になった、そんな感じだな。

「それじゃ、このカードの特典の説明をしよう。まず、公爵と同等の発言力を持てる、だからといってどうなるかと言われると微妙だけど……まあ、理不尽に貴族の一言で裁かれる事が無くなるね。そんなこと事態無いと思うけど……信じたいけど、何事にも異例の事態はあるから頭に入れといて。それに、書庫の低層までの閲覧が可能になった。これは嬉しいんじゃないか？」

「おっ、本当ですか？」

「マジでマジで」

これは嬉しい、時間がなくて書庫に全然行けなかったが有るだけでも嬉しい。

「あとは、大きな商店で割引くらいかな、50%くらいだっけ？」

半額！これも嬉しい。そろそろ足りないものを補充しなきゃなと思ってたんだ、助かる。

「このくらいかな？このカードさえあれば、わりと何でも通るからくれぐれも気をつけてくかってくれ。カードの乱用が見つかった時は……確かギルドから永久追放だったかな？リブロ、確か過去にいたよな？」

「たしかあれは……」

「そこら辺は気をつけているので安心してください」

「信じてるよ」

流石に「Aランクだぞ！ありったけの酒と金を寄越せ！」とかやるほど腐っているつもりはない。

そんな時

「ん？」

「リュウスケ？どうした？」

「今揺れたような……」

—ズウウウウン—

「あ……」

「リブロ、気づいたか？」

「ああ、たしかに今揺れた」

「揺れたな……」

『オオオオオオオオオ！コノヨヴナグニ、アルイミナドナジイイイ！』

トラブルさん、今日は出番が多いですね。

ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる 4

side：愚者

貴族が各部屋にとりあえず待機してもらっているその頃、男は憎々しげに家具にあたっていた。この時点ですでに器物破損という犯罪のような気がするが、彼はそんなことを気にする暇などなかった。

「クソー・まさかあんなところで計画が失敗するとは……このままだと罪が公になり、処刑も時間の問題か……くつくつく……しかし私にはこれがある。これさえあれば……」

—コンコン—

「なんだ」

「カンジダリウ侯爵、少し別室でお話をおきかせ願えますでしょうか？他に皆様にもあの時の状況をお聞きしているんです」

「ああ、わかった」

そうしてカンジダリウ侯爵が連れてこられた部屋には、すでにトンニール侯爵とリチーン侯爵がいた。もちろん、ただいるわけではなく、縛られた状態で、だ。

「何だこれは！一体どういうことだ！」

「カンジダリウ侯爵、演技はおやめください。すでに貴方も共犯者だということとは分かっています。おい！捕縛しろ！」

(やはり、バレたか。仕方ない、これを使うか)

この時、リユウスケが見ていたら、兵士が何を考えて伝えたのか疑問に思っただろう。理由としては相手が侯爵だったから、ということがあったのかもしれない。しかし今回、わざわざ共犯だと分かっていることを伝えたことが仇となった。

カンジダリウは自分の胸にさげているネックレスをちぎり、そこに ついている黒い宝石のようなものを飲み込む。その突拍子な行動に兵士たちはあつけにとられるが、気づいたときにはすでに遅かった。カンジダリウの体が膨張し、形を変えていく。それは巨大な黒いスライムのように形を変えていった。その時、トンニールとリチーンも取り込んでいた。そうして生まれた身勝手な化け物は、自分の意見を聞

ツモリハナイ！」

「……………」

ああ、キマイラに向かっていく兵士が蹴散らされている。幸い死者はいないようだが……

「スー、ライム、レム、ナイト、準備だ！オークたちはそのまま陛下をお守りしろ！」

「仰せのままに。陛下の守護はおまかせください！」

『あるじ、なんかこの人？いちばん左の人？その人いがい戦いたくないみたい』

『……泣いてる』

『1番右の頭は気絶してるね、なんか可愛そうになってきたよ』

うむう、たしかにナイトが言った通り、1番右の顔以外戦う意志がない、けど体の支配権は1番左のものか……自分の意思とは関係なく罪が重なっていくとは悲しいな。

なんか、やりずれえ……

ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる

5

「ヨワイ！ヨワイゾ！シロノヘイシハ、コンナニモナンジャクダツタカ！」

ああ、兵士が全て倒された。幸い、死人はいなさそうだ。重傷者が八割越えているが……

「そこまでにしてもらおうか？化け物」

「オマエハ、Aランクニアガルトウカレテイルコワツパカ。キサマ、ダレニクチヲキイテイル？キサマノメノマエニイルノハ、ジキコウテイダゾ？」

なんだこいつは？もう王の座についた気でののか？頭がお花畑なのか？笑えてくるな。

「すでに王様気取りか？どちらにせよ、お前が王になった所で、反乱か暗殺で終わるのが落ちだな」

「ナニヲフザケタコトヲ。ワレガコノクニヲオサメレバ、スベテノキゾクカイキユウハ、ウルオイ、ワレニカンシヤスルダロウ」

「城下町の人たちはどうするんだ？」

「ハツ、アンナコエダメドモ、シルワケナカロウ。シボリトレルマデシボリトツテクレル」

ああ、わかりきったことだったか。貴族至上主義、自分さえ良ければ、平民は苦しもうが死のうがお構い無し。治らない不治の病。

「ダメだな」

「ナニ？」

「人としてダメだな。ああ、もう人じゃないか？愚王よ？」

「ホザケツ！メラミ！」

メラミが飛んでくる。危ないな！とりあえず切り払う。残りの頭からも放たれたらしいヒヤドと毒々しい玉が飛んでくる。魔力の障壁を展開し、防ぐ。毒の玉は恐ろしい速度で地面を溶かしていることからとても強力なことが分かる。紫色の煙が僅かに出ているから気化すると危ないタイプか？これは早期決着が必要だな。それにしても、残りの2つの頭は完全に意識がないようだ。

MP : 753 / 753
200もHP減ってるよ、笑えるね！

ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる

6

さしずめ、会心の一撃つてところか。あれはイタイだろうなあ……喋ってるところに顎にアツパー、ガツーン！だもんなあ……潜伏力の賜物ですね。相手は舌を噛む！

「アガガガ……オニヨレ……ヒコウナ……」

『これは決闘ではありません、命をかけた戦いに卑怯もへつたくれもありません』

正論です。そうだ、何でボスがタラタラ喋ってる中、待たなければいけないのか？変身シーンも待たなきゃいけないのか？命がかかっているんだ、攻撃しろよ主人公。と思った人も多いだろう。逆に待ってあげないと邪道だろという人もいると思う。だが俺は待たない派だ。

「レム、グツジョブだ！」

「ユルサンゾ！カナラズコロシテクレル！」

最高の笑顔で褒める。いや〜1回やってみてほしかったんだよ。強敵の会話中に攻撃。見事に敵をぶつつんさせたね。

「……ヒヤダルクツツ！」

真ん中の頭がヒヤダルコを唱えかけたので中断させておく。中断のさせ方は、縮地で近づき、大鎌の石突き部分で殴る。刃はついていないが、下から殴れば十分呪文を噛ませることはできる。噛ませたあとすぐに離脱。敵は激怒。

「オノレ！オノレ、オノレ！チョウシニ、ノルナツ!!」

おおっと!?!やべえ、滅茶苦茶に暴れ始めた。ちようどいい、ここで登場しますは、魔力で作られたS&W M500。何度も練習したので流れるとように作れるようになった。早打ちもお手の物。

―ズダンツ！ズダンツ！ズダンツ！ズダアアンツ！―

「ガツッアアアアアアアアアアア!？」

とりあえず、進化の秘法をどこで手に入れたか聞き出さなきゃいけないから、殺すわけにはいかない。

|||||

進化獣：キマイラ 2 Lv10

固有名：トンチーンカン

ランク：B

HP：150／894

MP：223／753

|||||

あつ、そういえば復活権が2回あるんだつた……

―ズダアアンツ、ズダアアンツ！―

本体らしき1番右以外の頭を吹き飛ばす。1番右以外戦う意志がなかったはずだが……虚ろな目をし、アヒヤヒヤヒヤと言いながら呪文を乱発する所を見るに、もう手遅れなんだろう。人間をやめた以上、ためらう必要はもうない。容赦なくいかせてもらおう。

お？ぎりぎり生きている？

「1つ聞かせてほしいことがある、その額のやつ、進化の秘法だろ？どこで入手した？」

とりあえず意識が朦朧としている感じだったので、軽く一発殴る。

「グフウツ……ナ、ナンノコトダ？」

「その額についている黒い奴だ、キリキリはけ」

「フンツ、ナンノコトカサツパリワカランナ」

「ほう、そうか……アシッドスライム、出番だ」

「ナンダ？ソノスライムハ？」

話したくないならそれでいい。ただ、簡単には殺さない。アシッドスライム達に下半身からじわじわ溶かしていつてもらおう。

「さあ、ご飯だぞお」

「ソナナ、ヤメロー！」

みた感じ、あまり痛みはなさそうだ。ただ、徐々に体を蝕まれていく様をみるのは、SAN値がゴリゴリ削れそうだ。あ、残機が減つた。ということは完全復活か。

さあ、第二ラウンドだ。

「!?……ッ！」

head shot! 蛇の頭は吹き飛んだ。この毒は……収納しとこう。一生、日の目を拝まないことを願うよ。

「クソッ! ヒキョウナ!」

「卑怯? お前は命を懸けた戦いをなんだと思っっている? 生きるためには何でもするだろう? 今のお前みたいに。先に飛び道具を、それも激ヤバの猛毒を使ったのはそっちだ、異論は認めん」

自分の事を棚に上げて何を言っているんだこのハゲは。まあ、この世界で銃を唯一使えるから卑怯と言えば卑怯かな? だがこの世界、どんな手でも使って生きてかなきや行けないから仕方ない。そうそう簡単に使うつもりもないしな。ファンタジーぶち壊し、いくない。

「ナンダ!? ソ、ソレハ! ソンナコト……イヤ、イマハ……」

トンチンカンに行きなり立ち止まると、1人でぶつぶつ何かを言っている。

「誰と話しているんだ? まさか、進化の秘法を渡した奴か?」

この世界、念話など離れた人との通信手段は多数ある。進化の秘法をこいつに渡した本人から土壇場で救いの手か?

「……ククク……ハハハ! モヤハコレマデ、ナラバ、スベテミチズレダ! 『ワレ、イダイナルアルジ、エドガンノナニヨリ、チカラヲカイホウス』……コレデイインダロウナ……グッガボツゲボオッ!」

トンチンカンがそう呟くと、口から闇よりも黒い液体を吐き出し始めた。それはトンチンカンを包み、球体へと形を変えた。言うなれば、卵。その卵は紫の煙をまとっている。どう考えても毒です、本当に有難うございました。

『我、偉大なる主、エドガンの名により、力を解放す』……エドガンはいっしかアルマから聞いた、大昔の錬金術師。進化の秘法の作成者がそういう効果をつけた? でも発動のキーになる言葉に『偉大なる主エドガン』を入れる必要が……進化の秘法を使った者はエドガンの下僕? まさか……エドガンは何らかの方法で生きている? 謎は深まるばかり……か。まあ、まずはこの禍々しい卵をどうにかしなきゃ、な。

ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる

8

卵の周りに漂う霧は猛毒っぽい見た目。だから注意しつつ遠くから氷魔法をぶつけてみたが……吸収？消滅？卵にめり込んで音沙汰なし。とりあえず使える魔法を全てぶつけてみるが……変化は見られない。

魔力を100消費して作ったパルチザンを5本投げてみた。刺さったあとに卵にめり込んでいく。

次は兵士から拝借した鉄の剣。投げる。当たる前に溶けた………ほくん……こわっ。もつと魔法をぶつけてみよう。

『……違う……』

「ん？」

「ん？リユウ？どうした？」

いま、誰か喋ったか？

「いや、今誰か喋ったような……」

『もつと……魔力……』

「ほら」

「いや、ほらって言われても……」

リブロには聞こえていないようだ。他の人も首を傾げている。あれ？俺だけ？おいちよつと待て。カルネ！お前いたのかよ！いたなら参戦してくれても良かったんじゃないか？

『あるじ、あの卵からきこえた』

『……卵……喋った……』

え？卵から？

『うん。もつと、魔力、頂戴？』

「うお……ホントだ……魔力か……触ればいいか？」

『うん』

「今のままじゃ、触れられないんだが……」

『あつ、ちよつとまって』

「あ、いや、大丈夫だ」

『？』

俺は魔力1000をバスケットボールぐらいの大きさに固めて、卵に投げつける。

『うまうま、美味しい♪』

「おい！大丈夫なのか？」

「リブロ、心配するな。大丈夫だ。……………多分……………」

『うまうま♪』

あれ？あの卵、天辺白かったかな。黒だったよな？

それに、なんか脈打ってる気がする。これは、良い方向に向かって
いる気がする！

~~~~~

side：卵

その存在は破壊、滅亡そんな感情をこねくり回してできた存在である。もちろんその破壊衝動は計り知れない。

それは壊すことに快楽を、それは生物を壊すことに快感を。生きるものすべての脅威になるはずだった

『……………？』

それは気づいた。何か美味しいものが飛んできたことに。1つはとともスツキリ冷たく、1つはピリ辛。他にもいろいろな味が流れ込んできた。最後に飛んできた5つの魔力。口に運ぶ。

『……………!!』

それは心の底からほつとする甘さを秘めた魔力、今まで食べた何よりも美味しい魔力、奇跡の口溶け。

ああ、美味しい。もつと食べたい。その感情が彼女の破壊衝動を大きく上回るのさそう遠くなかった。

次に飛んできたのは固形物。美味しくない。噛みごたえがダメ。とてつもなく苦い。不味すぎて涙が出てきた。

『……………違う……………』

自分が求めているものはこんなゴミカスみたいなものじゃない。もつとあの魔力を。あの最高に甘い魔力。その魔力の持ち主がそこ

にいる事はすでに把握している。ならば声をかけるのみ。

『もつと……魔力……』

気づいてくれた。これでまた、あの美味しいものが食べられる。心が踊った。もうこの魔力さえあれば他のことなんてどうでもいい。

『……せ、コ……、……、……ワ……』

何か自分以外の声が聞こえるがそんな事を気にしない。頭の隅に追いやる。いや、頭のなかから消し去る。

『ア……ア……』

よし。そうこうしている内に巨大な魔力が送られてきた。甘さが、口の中で広がる。このために自分は生まれてきたんだ。そう感じた。

『うまうま♪』

その存在は破壊、滅亡そんな感情をこねくり回してできた存在、破壊の化身。だが今の姿はどう見ても、とつても舌の肥えたグルメな少女である。

ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる 9

あれから数時間、卵が真っ白になった。心なしか神々しいオーラを放っているようだ。

陛下は安全のため、その他兵士は負傷した者の避難のために別室の移動した。陛下が「タイム出来るかもしれないだろ？みたい！見せて！いや〜だ！みたいみたい〜！」って駄々をこねた、だがリブロがしつかりぐるぐる巻きにして連れて行つた。よくできた息子さんです。

「あんな陛下……初めて見たっす……何か急に親しみが持てるようになったっす……」

そうだろう？・カルネ。

「俺は知っていたぞ？何しろ俺と同じ愛妻家だからな。また今度話に行こうかな？」

「また話に行くの？この前十分話したわよね？また三日三晩ほつとかれると……その……寂しい……から……ね？」

「おお……パラネラ！」

「エツジ！」

そう言うと、2人はひしと抱き合い……お甘い甘〜いキスですか。てつきりまたパラネラが怒るのかと思つたら、照れながら「ほつとかれると寂しい」って……見せつけてくれますな！この夫婦！

「そういうのは二人のときにやってくれ……頼むから……」

「あつ」

エツジは少し気まずそうにし、パラネラは、うつむいてしやがみ込んでしまった。今頃、蒸発しそうなほど顔を真赤にしているだろうな。なぜ分かるかって？耳がこれでもかと言うほど赤いからだよ。あ、エツジがその様子を見てまた顔がにやけてる。この2人はどこでもこんな感じなのかな？陛下とも親しどそうだったし、それに陛下……あんたも重度の愛妻家か……

『とと様、そろそろ出れそう』

「お、そうか。そろそろ生まれるぞ〜」

「お、やっとなすか。モンスターの孵化なんてなかなか見れるものじゃないっすからね。楽しみで夜も眠れなかつたっすよ」

「カルネ、お前さつき立ったまま寝てただろ」

あの後、卵の中身とある程度会話していたが、あのトンチンカンが変化したとは思えないほどいい子だ。

何故、とと様と呼ばれているか聞いてみた。その答えは『魔力ご飯をくれたから』らしい。そして、もつとこの甘味魔力が食べたいらしい。すつごく甘く美味しいと。試しにスー達にあげてみた結果、吸い尽くされた。ルームの子もほしいほしいともう大変で。何か、肌荒れたかな？この数時間で魔法の聖水何本飲んだことか……げえっぷ……失礼。そういう回想に苦笑いしていると、卵からゴンゴン聞こえてきた。いよいよか、生命の神秘。

『ちよつと待って、思ったより殻が硬い。とと様助けて！』

ええ、確かにとても鈍い音がするけどそれ……ドジっ子属性か。悪くない『早く助けてえ！』あ、はい。

この卵、すつげえ堅いのな。割るのに10分かかった。

ああ、やっぱりと龍介はひとりごちる 10

砕くのに10分もかかった卵の殻の厚さは10cm。硬さは鉄よりちよいと硬い。いや、これもう卵と言って良いかすら分からない。ともかく、無事に新しい家族を迎えることができた。新しい家族、それは魔のサソリ。尻尾まで入れると全長3m。でもその姿はややデフォルメされており、かわいい。ごついサソリもいいがこっちもなかなか……

|||||

魔のサソリ ♀ Lv1

ランク：A

HP：2000/2000

MP：4000/4000

攻撃力：700

防御力：800

素早さ：300

賢さ：600

器用さ：400

幸運：80

スキル |||

・ダツシュ Lv3 ・豪腕 Lv2

・気配察知 Lv3

特殊スキル |||

・狂毒 Lv2 ・人化 Lv1

|||||

すごく、すつちりしたステータス。それに？人化ですと？これは熱い。

「さてと、スキルの前に名前だな……」

『可愛いのをお願い。とと様』

可愛いのは……さそり……スコルピオン……スコルピオーネ……アラクラ  
ン……この系統はダメだな。



こういう時に便利なのは花言葉。

むむむむ……………

「よし、決まったぞ。今日からお前はスズランだ」

『スズラン?』

「ああ、俺の出身の花で、意味は『幸福の訪れ』だ。ぴったりだろうか?」

『スズラン……スズラン……うん! 気に入った!』と様、ありがとう  
!』

よっぽど嬉しかったのか、スズランがたまらず抱きついて(飛びついて?) 来る。

おう、いくらデフォルメされていても飛びついてくると迫力が違うな……もちろん受け止めたけど。おお、よしよし。そんなスズランの触り心地はすべすべしていた。

『スーも!』

『ライムも……』

『ちよつとこつ恥ずかしいけど……自分も……』

『あの……私も……な、なでて……』

従魔たちとの戯れの時間だ。外野は黙っていてもらおうか。異論は認めん、俺はこの空間を堪能する!

~~~~~

「そろそろいいだろう?」

ぶつちやけ疲れた。またこのパターン。このまま続いたら筋肉痛は免れなかった。外野の異論は認めんとか言つてごめんな。

『『『『うん! (はい!)』』』』

良かった。

「それじゃ、スズラン。人化を見せてくれるか?」

『うん!』

スズランが体に力を入れるとモワモワと白い煙が立ち込め……

『じゃ〜ん!!』

中から桃色ポニーテールの女の子が出てきた。身長は150cm

位。身長的に娘っていうか……妹？

『かわいい？かわいい？』

「か……かわいいっす!!」

『ええええ〜?!』

あ、カルネに攫われた。はやっ！全然見えなかった……これが可愛い物好きの女子……これは恐ろしい……

というか……渡さないとばかりに威嚇しないでほしい。

スズランが開放してもらえたのは、それから2時間ほど後で、王様が戻って来てもやめないのは流石だと思うよ。まったく、イベント盛りだくさんな1日だった。

龍介の休日 1

あゝ、昨日はつかれた……つかれ

「う……うん……」

『ふあゝ、よく寝た〜』

スーは良いとして……スズラン、お前……服はどうした？あ、あんなところに……いつの間に……

「あゝ……ぬふくもうちよつとだけ……」

んゝこういう状況に驚きや嬉しい気持ちよりも呆れ？ような気持ちしか沸かないのは、娘のような存在だからだろうか？ともかく、親としての気持ちがよくわかった気がする。現世ではまだ15歳程度。精神年齢37歳程度！

さて、朝食を皆で美味しく頂いたところで、今後の予定を立ててみよう。

1、従魔たちと遊ぶ

2、従魔たちと遊ぶ（訓練）

3、従魔たちと遊ぶ（スズランの歓迎会風）

……よし、遊ぶ。これはもう遊ぶしかない。

よし皆！この魔力のボールでサッカーだ！ルールを説明する。

〈ルール〉

・ 基本、地球のサッカーと一緒に

・ 魔法有り

・ 特技有り

これでいいか。念のため試合はコロシウムだな。イナズ○イレブンみたく派手にやってくれ！

第一試合

スーチームVSライムチーム

スーとライムが厳選して組んだスライムチーム同士の戦いだ。

〈スーチーム〉

FW

・ バトルスライム×2

M F

・シャドウスライム×2

・ドラゴスライム×2

D F

・ウオータースライム×2

・スライムマデユラ×2

G K

・ギガスライム

〈スライムチーム〉

F W

・ドラゴスライム

・スラツピー

M F

・メタルスライム×4

D F

・ビッグスライム×4

G K

・スラツピー

それでは、スライムチームのキックオフ。今回大雑把にルールを説明して行われる試合、第一回最高チーム決定戦スーチームVSスライムチーム。それなりの緊張感で行われております。ちなみにオフサイドは無しです。

おっとスーチーム、ちよつと押されているような雰囲気だ！メタルスライムがやはりすばしっこい様子。しかしいい感じに一步も引かない展開です。あーつと、タイミングが合わずボールがスーチームにわたってしまったあ！シャドウスライムがぐんぐん進む、ぐんぐん進む！これは相手にとつてはつらい状況だあ！つとメタルスライムも抜かれたあ！シャドウスライム、影に潜りかわしたあ！オープンスペースができてしまっている！これは間に合わない！ビッグスライムが巨体を広げ遮るが、シャドウスライム、ドルマをボールにまどわせてシュートお！これを待っていた!!その黒いボールはビッグスラ

イムの体をかすめ……ここでメタルスライムが追い付く！ゴールに向かつて飛んでいくシュートに真正面からヘディング!!メタルスライムには魔法は効かないのでこれを難なく止めたあ!!

結構、いい試合じゃないか？みんな楽しそうにしているし、これは流行る（確信）

おく、そうこうしているうちにメタルスライムが追い上げる！ぐんぐん抜く！ぐんぐん抜くう!!メラミをまとわせて蹴り出す!!メタルスライムは燃え盛る炎を解き放った!!ギガスライムは体の面積を極限まで小さくし

その超硬化した体での体当たりで止めようとする！いい感じに止めている！止めている！どうなる？どうなる！

oooooooooooooooooooooール！

いい感じに決まったな。これ、これだよ！これを待っていた。あのシュート！あの攻防戦！超次元サッカー！

この後、ドラゴスライムが天高く舞い火の息とともに放つシュートや、ビッグスライムがその巨体を活かしたディフェンス。バトルスライムによるアクロバティックなカットやドリブル。テンションが上がったね。

最終的に3対2でスーチームの勝利。初っ端から見せてくれますね。これは第二、第三試合も、期待できるな。

龍介の休日 2

第一試合終了！これは本当に熱い戦いだった。様々な魔法をぶつけるシュート。補助魔法による超人外的な、立体で行うボールの駆け引き。攻撃補助魔法での妨害。サッカーコートに大穴が空いた時は焦ったが……まあ予想の範囲だ。ヒヤダルコのこもったシュートにメラミを当てて消滅させた時は……死人が出るかと思った……

第二試合

ナイトチームVSレムチーム

〈ナイトチーム〉

F W

・アルミラージ×2

M F

・メタルスライム×2

・ファアラット×2

D F

・ストロングアニマル×2

・キラージェイプ×2

G K

・マンイーター

〈レムチーム〉

F W

・ハイドゴーレム×2

M F

・ハイドゴーレム×4

D F

・ゴーレム×4

G K

・ビッグゴーレム

レムは自身の仲間のゴーレム達を、ナイトはその巨大なゴーレムを

翻弄出来るようにと体格の小さい者を前衛においてきた。さて、第二試合目……スタート!!

さあ、始まりました。2試合目。レムチームのハイドゴーレムのキックオフによって火蓋が切って落とされました。

ハイドゴーレム、その身軽さを活かしたフットワーク！これはゴーレム翻弄予定のナイトも予想外か!?しかしここで止めたのはメタルスライム！自身に火を纏いボールを掠め取る姿はまさに銀紅の弾丸。すぐさまアルミラージュにパスを繋いでいく。アルミラージュは自慢の角を振り上げゴーレム達にラリホーをかけていった！効果抜群だ！レムチームの半分以上が寝てしまった。これはチャーンズ！攻める！攻める！攻めるう!!

このままビッグゴーレムの守るゴールに辿り着くのかあ!!しかしここで魔法が効かなかったゴーレムが立ちはだかる！仁王立ちだ！これはアルミラージュ、つつい吸い込まれていく!!

あゝ、とられた！惜しい！ここでゴーレムからハイドゴーレムへのパスが続きます。ハイドゴーレムがMFを抜けた！ストロングアニマルが雄叫びで阻止を試みるが聞いていない様子。ボールを蹴り上げ、他のハイドゴーレムと協力し高く飛び上がった！これは防ぎ切れないか!?

その強化された体から放たれたボールは一直線にゴールへと進む。マンイーターは自身の触手を固め受け止める姿勢に入る。ボールが触手に触れ……爆ぜた!?!そして、ゴー……ール！そして前半終了く!!

あれはおそらくイオが込められてましたね。何かと接触した瞬間その進行方向とは逆側に爆発を起こすことで促進力を上げたようです。これはポイント高いですね。いきあたりばったりなのによくやったと思います。回復班、急いでマンイーターの再生を。さあ、後半戦だ！

龍介の休日 3

第二試合

ナイトチームVSレムチーム

「さあ始まりました後半戦。いつもニコニコあなたの後ろに這いよる武神の提供でお送りします」

おいちよつと待て。

「なに?..どうしたのさ?..」

「いや、何普通に武神さんが降臨してらっしやるのかな?とおもって。そもそも、こっちの世界にあまり介入できないんじゃないんかったのか?」

「あの世界は...:..ね。ここはなんかもういろいろ隔離された1つの空間になってるからセーフ。あの世界とはちよつとずれた世界?みたいな?..だから問題なし!」

へ、マジか。ここはもう1つの確立された新しい世界的な?

「そもそも、依代作れば行けなくもないんだけどねえ」

「じゃあそれで観光でもすれば良いんじゃない?」

「それがうまくいかないんだよねえ...:..僕達が降りると異常気象が2、3日起こるんだよ。それも天変地異レベル」

「うん、よくわかった」

「それじゃ、後半戦行ってみようか!」

さあ、ナイトチームのキックオフです。解説のステルさん、この後半戦どう感じますか?

「そうですね、先程のように新しいシユートの開発が勝利への鍵となるでしょうね。出来るだけ、ど派手なのを期待しています」

はい、ナチュラルに心を読んでくれてありがとうございました。さて、いまボールを持っているのはメタルスライムです。ぐんぐん追いついていきます。これはこのまま決めるつもりなのか。おお?全身に炎つを纏い始めた!これは、ヒー○タツクル!そのまま走り抜ける。近づくものはもれなく火傷を負って吹き飛ばされています。これは熱盛!さあいい感じに温まってきました、どうなるのでしょうか

か。現在メタルスライムが爆走しております。目の前にゴーレムが立ちほだかった！ゴーレムは天高く飛び上がり地面に落ちた衝撃で隆起した地面でメタルスライムを吹っ飛ばす。これは痛そうだ！ただメタルスライムは硬いのでそこまで痛くはなかった様子。地面を叩いて悔しがっている。

※隆起した地面はすぐにステルが直しました。万能。

今の技はとても良かったですね。特に大人数を巻き込む辺り超次元していたと思います。さあ、ボールはレムチームに渡りました。

「いまのディフェンスは良かったね。フィールドをよく使った技だと思うよ。メタルスライムのドリブルも良かったが流石に下からの攻撃は無理だったようだね。いい感じの接戦。長く生きてきた僕も久しぶりに胸が踊ったよ」

以上、年月重ねすぎて自分の年齢もわからなくなってしまったお爺さんからでした。

「ちよつと!?!」

さあ、後半戦も残りわずか。このままレムチームが先取したまま終わるのか！それとも起死回生の逆転か！FWとMFを抜けたハイドゴーレム三人はボールを蹴り上げ天高く飛び上がった！三人は右足にドルクマを溜め一斉に蹴りシュート！ボールは禍々しく赤黒く染まりモーニングスターのように鋭いトゲが飛び出ている。その球針体はゆっくり回転しつつゴールへと飛んでいく。素直に思う。これを止められたらもう英雄だな。

と、そうこうしてる内に「熱盛イ!!」……すみません、熱盛と出てしまいました。

ステルはあとで強制キーパーにしてシュートを大量に叩き込んでおきます。

「!?!」

DFのいる場所までボールが到達。もちろんストロングアニマルズは自身の特技を使い止めにはいるが……あ、吹き飛ばされた。メディック、すぐに回復だ！さあ、シュートはキーパーに到達しようとしています。マンイーター、どうする！

「な、なんと、シユートの進行が止まった！どうやら自身の触手にバギを多重に纏うことにより空気の壁を作ったようだ！止められるか！止められるか!?!」

爆発した！砂煙で良くわかりません！どうなった!?

……………いない！マナイーターがいない！ボールは!?!……………

ゴールだ！ゴーーーーール!!

そういえばこれで皆軒並みレベルが上がってるんだよな……………

石二鳥だな。

龍介の休日 4

第二試合終了でございます。

結果：レムチームの勝利

ええ、もう凄い試合でした。特に最後のシュート、あれは俺か古参の従魔しか止められるか怪しかったね。え？どうやって止めるかって？俺だったらライデインかギガデインを固めて巨大な手にして止めてた。多分止められる。きつと、恐らく……

さて、第三試合を初めたいところだが……昼休憩です。よし、ギルドに依頼の確認に行こう。

「じゃ、僕はここで待っとくね。早く帰ってこないと……泣いちゃうよ。」

子供か！良い年したイケメン既婚者が何言ってるんだ、爆ぜろ！

「ちよっ！だからってイオ使わなくてもいいじゃん！」

へ 爆炎魔法のレベルが上がりました へ

ラッキー！イオラ！！

「おまつ!？」

~~~~~

ギルド到着。入った途端ざわざわしていたのがピタリと止んでヒソソ声に。あれが死神とか、あのスライムフェチがとか……おい待てこの野郎出てこい！たたっ斬つてやる！……チツ逃げられたか……次こそ仕留めてやる。

「りゅ、リュウスケさん！」

「ん？シリカか？そういえば何か話があったんだっけか？」

「は、はい。この前のネットクレスのお礼……なんですけど……その……明日って空いていますか？」

「明日？もちろん空いてるぞ」

「それじゃあ明日、そうですね……どこで待ち合わせが良いですか？」  
待ち合わせか……武器屋？いやいや……八百屋？いやいや……こ

こ?う?ん?…友人と出かけるための待ち合わせ場所ねえ…

「あ、貴族街のところの橋とか?」

「良いですね!それじゃあ明日、その場所に…11時に大丈夫ですか?」

「わかった。明日の11時だな。楽しみに待ってるよ」

「はい!」

その時周りから大量の舌打ちが聞こえたり聞こえなかったり。あれ?俺は何をしに来たんだっけ?まあいいか。

~~~~~

美味しい美味しい昼食後の第三試合

〈スズランチーム〉

F W

・ポイズンキラー×2

M F

・よろいムカデ×4

D F

・ヘルホーネット×2

・さそりアーマー

・メタルスコープイオン

G K

・ダンジョンエビ

〈従魔ドリームチーム〉

F W

・イリユージョンホース×2

M F

・はなカワセミ×2

・じんめんじゅ×2

D F

・おおくちばし×4

G K

・モーザ

最後の試合は「スズランの編成したチーVS今回出番のなかった子達で決めたチーム」です。実況は引き続きわたし、龍介とステルでお送りします。

「よろしくお願いします」

それでは今回の編成。スズランは自分と同じ系統の虫系で固めてきた。対するは従魔ドリームチーム。ご覧の通り今までの試合で出られなかった従魔達で話し合った結果組まれたチーム。

「よく考えるとサッカーの試合で馬っておかしいよね」

「何言ってるんだ今更だろ。相手チームは虫系だぞ？」

「それもそうか」

それではキックオフです。先行はドリームチーム。イリユージョンホースがボールを持っています。そんな中ポインズンキラーが飛びかかるがなぜか全く見当違いの方向に向かっていった！何だこれは！

「あくこれは上手いね。見事に幻影を使って混乱させている」

なるほど、見当違いの方向に向かっていているポインズンキラー達は幻影を追っかけているわけか。で、自分たちに効かないのは……大方レベル差とかそんな感じだろう。

さあ、火蓋は切って落とされました。今後の展開に期待です。

龍介の休日 5

三試合目前半。ボールはイリユージュオンホースが持っており、それを奪おうとして幻影に惑わされる者が続出しております。スズランチーム、右へ左へウロウロしております。

「ここでポイズンキラー、周りをよく見ていなかったのか？仲間と頭をぶつけてしまった！これは痛そうですね。まだフラフラしていません」

しかしこれによりイリユージュオンホースの幻影が解けたようだ。しかし時すでに遅し！イリユージュオンホースはゴールの目の前だ！そして……ボールを持ったままゴールに突っ込んだあ!!しかしキーパーはダンジョンエビ。どうやら、幻影は効いていないよう。

さあどうする!?!……突っ込んだ!そんなことは知らんと言わんばかりに突っ込んだ!吉と出るか凶と出るか……はい、もちのろん、凶です。止められました。さあ、ここからスズランチームの反撃!ダンジョンエビからポイズンキラーまでボールが運ばれます。ドリームチーム、空からの攻撃に対処できるのか!?

「ドリームチームにも、はなカワセミがいるからね。ぜひ勝利と言う夢を掴んでほしいです」

ええと……プレッシャーですね。どうボールを奪っていくのか見ものですが……きつと、すごいプレッシャーでしょう。しかし、もたもたしている暇はないようだ。さあ!どうするん……ん?よく見るとうつつら霧が……あ、あまい息!あまい息だ!はなカワセミ達は、あまい息を大量に展開している!

「考えたね。あまい息を空中に大量に散布していたと言うことは……空は彼らの独壇場かな?」

寝て……るな。大きな砂埃を立てて落ちた。これは普通に痛そうだ。メディック!いそいで回復に!……さあ、試合は続けます。見事、ボールを獲得して見せたはなカワセミ、おおくちばしにボールをパス。ボールを受け取ったおおくちばしのギアは既にMAX。補助魔法のピオラを重ねがけて、メタルスライム顔負けの速度で爆走

中。対するはメタルスコープオン、さそりアーマー、よろいムカデ。素早さを上げ、おおくちばしからボールを奪おうとする。しかし、おおくちばしのその軽やかなフットワークは留まるところを知らない。「残像？あのおおくちばし……足捌きがすごすぎて増えて見えるんだけど……」

足さばきが早すぎて、まるでバタバタとアニメのような動きを見せておおくちばし。使っているドリブルはシザーズまたはペダラーダ。内側から外側、また外側から内側へボールに触れずにももを上げることなくボールの横を高速でまたいでディフェンスを惑わすフェイントだ。まあそれも、早すぎて謎の動きになっているが……あんなの何処で覚えたんだ？

「まさかあそこまで使いこなすとは……」

お前か！ いったい何時……昼、か。

となると、他にも教えてそうだな……スズランチーム、どんどん抜かれていく！ ついに最後のよろいムカデも抜かれた！ 残るはダンジョンエビのみ！

ダンジョンエビがシュートを撃たせまいとおおくちばしに立ちはだかる！ おおくちばしは……そのまま突っ込むようだ！ これはイリユージョンホースの二の舞になるのか!?

ダンジョンエビがたまらずボールに飛びつこうとする。するとおおくちばしはボールを打ち上げ、ダンジョンエビの頭上を越して抜けた……シャペウだ！ ブラジルサッカーでは最大の屈辱とされるシャウペだああ!! そしてそのままシュート!! ゴー……ゴール！ 今回はテクニック重視の試合になりそうです。

龍介の休日 6

今まで完全に魔法や身体強化の目立った試合だった分、今回のテクニック重視の試合は一見地味に見える……が面白い。身体強化で普通を超えた動きができる分、誰でも簡単にフェイント技が使える。つまり……

「人人人人人人人人」

▽ 普通にやっても面白い へ

? ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ Y ^ ?」

言われたら!! 言いやがってくれやがりましたよ。べつに絶対! ぜひとも! 確実に! 言いたいとかではないけども! セリフ奪われるのは悔しい……

……気を取り直していきましょう! 三試合目後半戦! 前半は思わぬコーチの入れ知恵によって点を取られてしまったスズランチーム、どう巻き返していくのか見ものです!

「今度は両チームにテクニックを教えたから。ますます、いい試合になる!」

謎の自信いただきました! 一体どこからこんな自信が来るのか、皆目検討もつきませんな。さて茶番はこのくらいにして、スズランチームのキックオフ。早速飛ばして来ているみたいだ。

現在、ボールはよろいムカデが持っている。2匹でパスをしながら追い上げている。そこにイリユージュオンホースがボールを奪おうと突撃してくる。体格差は歴然、機動力はどっこいどっこい。さあどう捌くのか……左へ行くと見せかけ、そこからワンステップを入れて相手の股を抜いて縦に突破した! これは……

「ラ・ボバ、そういうドリブル技。とても地味なのに難易度が高い技だよ。何しろ高いボールコントロールの技術だけじゃなくステップの技術も必要になるからね」

なるほど、さすがG O O g i e 先生。なんでも知ってらっしやる。さあ、前衛を抜けたよろいムカデはその速度が衰えることなくゴールを目指している。しかし! 空からの襲撃。はなカワセミズ。しかし

よろいムカデは自分の体の下にボールを入れ左右へ躲していく！人面樹は……移動族度が追いついていない。ん？よろいムカデが何故かあたふたしている。……あ、ボールがない！一体いつのまに……

「ふっふっふ、僕は見えていたよ！犯人は、人面樹！理由は」

「なるほど、根っこを地面から出してボールを抜き取った、と」

「ちよっ、セリフをお！」

はははは、ナンノコトカナ？ボールを奪ったじんめんじゅ、イリュージョンホースにパスを繋ぎました。その前にさそりアーマーとメタルスコープオンが立ちはだかる。そして二人がボールを奪おうとした瞬間、左右の後ろ足でボールを前後に挟みます。後ろ足の甲でボールを前足のふくらはぎの辺りまで持ち上げて、そこから一気にボールを蹴りあげる。この技はヒールリフト。この足技はとても簡単ではないし、実際にサッカーの試合で使うことはほぼないだろう。

サッカー漫画などでは簡単に使われているようだが、実際に相手を目の前にするの間合いの問題など色々な要素で難しくなる……がしかし、ここでならそれができる！足技としてのインパクトは最高に強い。これは馬がするとすごくアクロバティックだな。ちなみにシヤウペととても良く似ているが、両足を使う所が違う。

奪い奪われボールの争奪戦。有名所のエラシコなどその他もろもろアクロバティックに動いていた。残念ながら後半は共に加点なしという結果に終わってしまったが、拍手喝采。いい試合だった。またいつかこんな感じで遊びたいな。……近いうちにトラブル迷い込んできそうだけど……

「フラグ？」

「やめてくれ、自分でもそう思ってるんだ」

トラブルに魅入られた龍介 1

次の日の朝。若干足が痛いような気がする。筋肉痛か？ホイミ！ふう、楽になった。魔法って便利。

「普通は、そんなこと無理なんだけどね」

「……ステル、いつの間に。それに、世界には降りれないんじや？天変地異が起るとかなんとか」

「この家の敷地内はセーフっぽいんだよね。なんでか知らないけど」

「不思議なこともあるもんだな。さすがファンタジー」

「何だろうね、異常なはずなんだけどそう感じなくなって……これが普通か」

ステルが何かに侵食されたようだ。神なのに紙装甲……か。笑える。

「失礼だな。これでも物理攻守最強の神だよ？たかが精神攻撃ぐらいで……ねえ、シャル？ぐふうっ」

お、シャルも来ていたのか。今の拳は最高に決まっていたな。物理最強の神（笑）も悶絶するほどとは……あいつは良い奴だったよ。

「まさかとは思いましたがやっぱり……身支度するまで待っていてと言ったのになんで先に行くんですか！この前も私に黙って……あ、龍介さん、久しぶりですね。元氣そうで何よりです」

「ああ、久しぶりだな。今日はゆっくりしていつてくれ……と言ってももうすぐ出掛けるが」

今日はシリカと昼食を約束した日。勿論、遅刻なんてできない。「知ってる知ってる。彼女でしょ？」

「いやいやそんな関係じゃない。ただの友達だよ」

「友達……ねえ……ぐっ」

ステルのニヤケ顔が非常にムカつく。だからこの拳は悪くない。しかし、さすが物理攻守最強の神（笑）……まるで壁を殴っているみたいだ……硬すぎるし重い。おっと、こんなことしてる暇はない。そろそろ行かねば。

「それじゃあ、そろそろ出るから。ステル、くれぐれも問題は起こさな

いように」

「龍介の僕に対する認識が良くわかった気がするよ。そんなに問題児じゃないから！」

「安心してください、龍介さん。私がなにもさせませんから、楽しんできてください」

「ぐぐぐ、最近の僕の扱いがひどい気がする」

さてと、貴族街の橋に11時。

~~~~~

貴族街前。シリカが来ない。もしかしたら準備に手間取っているのかも、と思いついたら待っているがやっぱり来ない。

—ヒュンツ！パシツ—

………矢文とは古風な……じゃねえ!!矢文ってことは、果たし状とかそういう類だ。……クソツ!

|||||

女は預かった。

返してほしければ明日の正午〇〇?に來い

|||||

なんて雑なんだ!

## トラブルに魅入られた龍介 2

あの手紙はとある侯爵から、と言うよりその侯爵の息子からだな。実はこの侯爵、先日魔物になったトンチンカンの1人、カンジダリウ侯爵の息子っぽい。何でだ？父親があんなことになった逆恨みか？もしそうなら傍迷惑だな。俺関係ないじゃん……それに一般人を巻き込むなんて。起こってしまったことは仕方がないか……こうなったら行動あるのみ。すぐにシャドウスライム、ハイドゴーストを偵察隊として明日向かう予定の家に潜入させた。もし、シリカを見つけたなら2体をもしもの時のために近くに置いておくつもりだ。勿論、いつ誰が見ているか分からないので確実に人がいないルーム内で作戦会議をした。というか、約95%の犯罪を未然に防ぐ事ができている騎士団はどうした！また残りの5%を引いたのか！そうなんだろう！?

「今から行って取り返してきたら？」

「まだシリカがそこに居るのか分からないじゃないですか。偵察が戻るのを待っていた方がいいですよね？」

ステル達2人も作戦を考えてくれている。あれをしたらどうだろうか、こうしたら良いんじゃないか、こうすればより酷い苦痛を与えながら地獄に落とせるとか……ちよつと待て。

「どうした？」

「話がすごく物騒な方向に向かって行ってないか？」

「??？」

ダメだこの二人物騒だ。

「だって、ねえ？龍介を害しようとするなんて許せるはず無いじゃない？」

「そうですね、龍介さんのお知り合いも巻き込んで悪事を働いているんです。ただじゃ置きませんよ」

嬉しいんだけど、嬉しいんだけども……

「気持ち嬉しいんだが、もつとこう穏便に、な……そりゃあ、ちよつとした事故で四肢欠損やらになるけど殺しはだめだ。あとの処理は国

に裁いてもらうんだから」

「それもなかなかエグいと思うんだけどね……」

殺すのは向こうから襲ってきた悪党とかだけだ。正当防衛ってやつだ。それ以外は基本殺しは無しな感じで。

「とりあえず、俺は陛下に報告しに行くから」

「いってらっしゃい」

~~~~~

城に入るのに顔パスってホント便利。とにかく今日は緊急なので急いで会ってもらえるよう手配してもらった。

「リュウスケ、また何かあった？」

「またって何ですか陛下。まるでいつもトラブルを引き連れているみたいなのじゃないですか」

「違ったかな？」

いいえ、まったくおっしやる通り、トラブルです。

「実はこれを見てほしくて今日は伺いました」

「ん？これは……脅迫状？」

「そんな感じですね。今日ギルドの友人と食事に行く約束をしていたんですが時間になっても来ず、代わりにこれが」

「なるほど、白昼堂々と誘拐か……すぐに犯人を特定させよう」

「あ、犯人なら既に」

「ふっ、早いな。それで？犯人は？」

こうして犯人絶望のカウントダウンは動き始めた。

トラブルに魅入られた龍介 3

「犯人は、ついこの間話題になったカンジダリウ侯爵、その息子です」
「そいつは……たしかカンジダリウの影響で貴族至上主義な言動がたまに出ていた青年か。確かカンジダリウ侯爵の死を聞きつけて、すぐに自分を侯爵にするよう進言してきたのをよく覚えてるよ」

それは……メンタルが強いというか……薄情というか……どちらにせよ不敬な行動じゃないか？

「まあ、権力目当ての無知野郎だったからばっさり切ったけど」

言い方が……しかしそこまでか……これは何しでかすか分らん……そろそろ偵察が……おっ

「どうした？」

「ああ、従魔から連絡がきました。シャドウスライム、出てきていいぞ」

「うお!?!」

すぐさま5匹のシャドウスライムが姿を表す、ように見えたはずだ。この子たちは特に隠密が得意だから、自分には見えていても他の人には見えていないはずだ。多分そのはず。この反応で確証ができてよかった。

「全く気づかなかったぞ……」

「そこそこ隠密能力が高いですから、それに上にいる人もなかなかいいレベルですね」

「ははは、やっぱり分つてた？本当に底が見えないな」

「それに、誰かがここに全速力で向かってきていることも」

「え?」

——ドドドドドドドドツッ！バターン!!——

「やつと会えたく!!、君がリュウスケ君ね！この前見たきりだったから早く喋ってみたかったのよ！よろしく!!私のことはヒノちゃんって呼んでね！」

……え?扉を豪快に開けて入ってきたのはこの前(63話)陛下の隣に座っていた子供さん。

「あら？もしかしなくても、惚れちゃった？いやね〜困っちゃう〜」
えく、何このノリ……こつちが困っちゃうんだけど。

「リュウスケー！妻はやらん！こいつは俺のだ！」

見た目は中学生！中身は大人！その名は、王妃！って……なんですと!?!この人が陛下の妻?!いやよく見たら顔は陛下と同じく整っているし、どこことなく高貴な雰囲気とか感じる気がする。うん。

「母さん、そのくらいにして……こつちが恥ずかしい……」

後ろからリブロが息を切らしながら入ってくる。お前も苦労してんのな……よくわかるよ……

「ま可愛い可愛い家内のことは置いて……確実にやつを確保できるな?。」

「すでに、居場所は把握済みです。人質も無事に見つけ、護衛としてハイドゴールームをつけています。完全に敵が躍っているだけです」

「むくく……喋れると思ったのに……放置プレイなんてくく！」

イヤンイヤンじゃないよ……誰かこの人の相手してあげて！

トラブルに魅入られた龍介 4

陛下に報告が終わった後、あとは何かすること………が………あ、ギルマスに一応言つとかないとな。

「というわけでシリカが攫われた」

「……何がというわけでなのかさっぱりわからんが、大体わかった」

さすがギルマス、すぐに通じるそんなところホント好き。

「つまり、そいつを今すぐ捻り潰せばいいんだな？」

前言撤回、だめだ全然伝わってねえ。仕方がないので、最初から最後まで丁寧に教えてあげた。

途中からクリスも加わりメモを取っていた。この人がいれば問題ないな。

「だいたい分かった。それでリュウ、俺たちにどうしてほしいんだ？」

「いや別に？ただの報告だ。明日シリカが業務に遅れるしな」

「なるほどなるほど………なあ、もうちよつと参加させてくれないか？頼むよ」

一瞬にしてギルマスが orz になったかと思うとすぐさま両肩をつかんでゆすつてくる。ちよつ、力つよつ！

腕がしびれて、指の感覚がなくなってきた………つてマジでヤバイ。壊死！壊死！

「おつととと………すまんすまん」

「勘弁してくれ………」

やっぱギルマスは強い、はつきりわかんだね。しかしその強さをふるう機会はない。また、魔物が攻めて来たときに存分にふるってほしい。とりあえずこれで報告は終わり。救出でき次第ここに報告することを約束し、ギルドを後にした。この後、ギルマスが「ギルドを敵に回した事を後悔させてやるぜ、ヒヤッハー」とか何とか言って、ギルドから飛び出した所、クリスに引つ叩かれてまたギルド内に消えていく光景があったとかなかったとか。さらにその日の夜中、むさい男のすすり泣きがギルドから聞こえたり聞こえなかったり………俺には関係ない話だな。


~~~~~

準備はこんなところか。相手の要求がわからない点を考えると、要求されそうなこと、物は一通り準備したほうがいいよな……金と魔道具……はほとんど持っていないし見せびらかした事も無いから何とも言えないな……

あ、家の魔道具の情報を何らかで聞いてくつてのはあり得るか？もうめんどくせえ、どうせ何もやらないんだし、もういいか。あとは……

「やっぱりアタイは、ここはこうしてこう捻ると結構痛いと思うよ？その癖にあまり体にダメージが……」

「でもここをこうすれば、さらにいい感じのが入りますよ？」

「あだだだだ！痛い！もげる！もげるう!!」

なんでフレアがステルで関節技決めているんですかねえ……ヒールホールド、しかも持続的に回復かけてるし……治って痛めての繰り返しか。恐ろしいな……この世界での関節技は……

もうこの人たちは置いておこう、そうしよう。あとは明日、しっかり思い知らせなきゃなあ……へっへっへっへ……へへへへへ。

## トラブルに魅入られた龍介 5

翌朝

「う〜ん……関節が……関節がツ」

「アタイのほうが〜……もつとうまく〜」

「それはさつきやりましたよう。むにやうにや……」

現場、非常に混雑しております。いったいどうしてこうなったのでしょうか、皆目見当もつきません。

あ、エールが入っていたと思しき樽があります。それに食べた跡が……人の家でよくもまあこんな食い散らかして……よおし、スライム諸君片付け！そう号令をかけるとスライムたちがわらわらと後片付けを始める。食べこぼし、飲み残しを吸収。きれいに皿とコップを洗って収納。いやあ、手際がよろしい。

「はっ……腕はついてる!?!足は!?!」

「大変だったんだな……」

「あ、ああ……それはもう。そのくせあまり痛くないのがつらくて……」

本当に、大変だったんだな。きつと良いことあるよ。保証はしないけど。さて、片付けも終わったな。シリカに付いてる従魔達からの情報はつと……地下牢に入れられてはいるが、特にこれと言ってひどい扱いはされていないか。引き続き奴らの監視とシリカの保護。もし、シリカに何かありそうだったらすぐで救出してきていいぞ。

本当はすぐに助けたい所だが、ここはちよつと我慢してもらおう。これからこういう事を減らすためにも徹底的に叩き折って噂を広めてもらわなければいけない。というか、Aランクに喧嘩を売ること自体頭おかしいと思うけど……

エルネスト夫婦にこんなことしたら、たぶん塵も残らないぞ。カルネなんか氷像作りそうだ。

「あれ?もう時間だっけ?」

「いや、時間は正午だし、まだ時間があるな……」

「大事な人が攫われたのに結構余裕だね」

「そりやもちろん、安全は守られているからな。さつと行つて救出して、犯人には痛い目見せないとなあ」

「隆介、いま般若が運動靴で逃げ出す顔してるよ」

般若も走りやすい装備で逃げ出す……か。俺そんな怖い顔してた？種族とかかわつてないよね？ひよんなことから種族が変わるのはありがちだけど、こんなことで変わったら恥ずかしくてしようがない。よし、人間のままだつた……よかつたあ。

~~~~~

side:シリカ

現場のシリカです。私は今、地下牢にいます。………はあ、ギルドの職員だからいかなるトラブルにも対応できるよう訓練されてはいるんですけど……ちよつとメンタルにビビシ、ヒビが入りつつあります……閉所にずつと1人閉じ込められると、寂しくて死にそうになりますね。そんな中で、自分を保つていられるのはこのスライム達がいるから……ですかね。どこからともなくゴーレムやスライムが現れて、掃除をしたり食事を用意してくれます。それだけ本当に癒しになります。そして、そんなスライムちゃん置いていった手紙が1枚。

~~~~~

ちよつと、犯人潰すまで待つて

~~~~~

書かれていたのはこの一言だけでした。開いた口が塞がりませんでした。(。D。)ポカーンです。リュウさん、これは貸し1つですよ！

トラブルに魅入られた龍介 6

side：シリカ

「おい、出る」

私は、牢屋から出されてとある一室に連れてこられました。ただ気になるのが、こんなにスライムちゃん達がついて来ているのに、なんで他の人は気づかないのでしょうか？目が悪い……わけではないでしょうし……

それで、連れてこられた部屋は……一見、普通に見えますがよく見ると窓に鉄格子。おそらく扉も……いったいどういう目的で作られた部屋なのでしょう？

そしてそんな中、スライムちゃん達は分るんですけど平然と入ってくるゴーレム達はいったい何処から入って…… ―ガチャツ―

……ええ!?普通に入り口から!?ちらつと見えた感じ見張りがいたよ
うな気がするんですけど……ゴーレムがサムズアップしてきました。

……スライムちゃん達かわいい。

~~~~~

side：リュウスケ

いよいよ時間。今いる所は矢文で指定された場所。今のところ近くに人の気配なし……は、時間を守れこの野郎。そっちから誘つて時間通りに来ないとかふざけてんだろ。あれか？貴族だからか？貴族だから時間にルーズでも許されるってか？あくやだやだ、そんな貴族には悪評しか来ないぞきつと。お？こちらに近づいてくる気配……5人か。

「お前がリュウスケだな？」

「ああ、そうだが迎えか？」

「口にきき方に気をつけるんだな。あの女の命が、どうなっても知らんぞ？」

これぞ悪党のセリフ。というか、これまであつてきた人物の3割、下手したら4割が悪党な気がする……

そろそろ悪党のセリフベスト10全部言い切るんじゃないか？

「分った。本当に彼女は無事なんだろうな？」

「当たり前だ。お前がしつかり要件を飲めば、の話だが。行くぞ」

すると男が1人、布をかぶせてきた。目隠し……しかし効果がないようだ！こちら辺はマツピング済みなので。

なんやかんや目的地に着いた。情報通り、カンジダリウ侯爵の家だ。自分の家に敵を招き入れるのは果たして賢明な判断なのか？とか考えたりしたが、相手は俺を敵じゃなく、人質を取られて言うことを聞くしかできない人みたいな認識なんだろうな。しかし気になるのが、どうも見た感じ人が少ない。なかなか大きい家なのに気配が12人しかない。内2人は侯爵息子とシリカだろう。使用人も少なく見積もって2人は要るとして……となると私兵は8人ほど……あ、俺を連れてきた奴らを入れると13人か。どちらにせよAランク相手するには少ないと思う。全員がBランク並か？とも考えたが今いる5人を見てもDランクかCランク位……何か切り札があると考えておいたほうがいいかもな。

「ここだ。入れ。けっして失礼の無いようにしろ」

結構乱暴に部屋に連れ込まれ、目隠しが取れる。目の前でふんぞり返っていたのは、おかつぱ坊ちゃんでした。

偉そうに食べ物を食い散らかしている。正直、もんのすごい量のゴミを蓄えている以外、普通？

「なんだお前？頭が高いぞ？ほれ、跪け平民」

前言撤回、何こいつびっくりした。え？坊ちゃん？いいえ糞餓鬼でした。

「ほれ、どうした？早く跪けよ」

「それより、彼女はどこだ」

「チツ、ちゃんと無事だ。面白くねえな！おい！もつと食い物もつてこいー」

「は、はいいー」

近くに待機していたメイドさんに食べかす投げつけ新しいものを持ってこさせようとする。は？貴様メイドを何だと思ってるんだこ

の野郎もぐぞ。

—ガシャガシャガシャン！—

「おいどうした」

「い、いえ、すいません。急に寒気が……」

おっと、いけないいけない。つつい殺気が……とかあの糞餓鬼に殺気向けたのにその横の私兵さんが焦ってんだ？おっと、話を進めなきゃな。今回は下手に話を進めよう

「それで要求は何なんだ？」

「ん？」

「いや、何を渡せば彼女を返してくれるんです？」

「お前、珍しい魔物を飼っているんだろう？僕に全部寄せ」

……………その喧嘩買ったあ！

## トラブルに魅入られた龍介 7

従魔を寄越せ、つまり大事な家族とも言える存在を渡せと。

「どうした？早く寄こせ。僕が使ってやるんだって言ってるんだぞ？泣いて喜べよ愚民」

「ちなみに聞くが、俺から奪ってどうするつもりだ？」

「口の聞き方がなってないな、まあいいや。簡単な話、剥製にして僕が永遠に楽しんでやるんだよ。珍しい魔物の剥製なら僕も箔が付く」

剥製だと？家のスライム1匹に負けそうなレベルしかないのに剥製とは恐れ入った。自分で倒した魔物を飾るなら、力の証明として箔は付くかもな。

ただ、「その力を振るって見せろ」的な場面が来てぼろが出るフラグが立つんだよな。

さて、こんな馬鹿げた要求飲むわけがない。ここを打開する力はあるので、いまはどうやってこのおかつぱを料理するか考えています。おかつぱは完全放置です。こう、怒り通り越して冷静になった。

《今日のおすすめ：某最強の弟子の技 一覧▽》

いやいやいや、ステル……さすがにこれはダメだろ？押すけどね。

《1・空手、古流空手など

2・柔術、柔道、合気道など

3・中国拳法など

4・ムエタイ、古式ムエタイ

5・ボクシング、裏ボクシング

6・テコンドー、ネコンドー

7・相撲、実戦相撲

8・コマンドサンボ

9・ルチャリブレ、プロレス

10・カラリパヤット

11・ペンチャック・シラット

12・カポエイラ

その他etc



結構あるな……お、ドングリマグナムまである……あれ当たるとやばそうなんだよな。説明は

【指でドングリを弾いて、まるで銃弾のように飛ばすことが出来る技】  
……わお、かんたんネ。でも多分できないヨ。

1. 材料：ドングリ（小石で代用）、圧倒的筋力
2. はじめに、ドングリ（小石）を圧倒的筋力で敵に対して弾き飛ばします。

くらえ！ドングリショット！（小石ver

「人質がどうなっても、ぐっ」

小石は奴の手にあたり、食べていた果物を落とした………そして血がポタリ。

### 3. 失敗。

畜生！外しやがった！お前はいつもそうだ。

この攻撃はお前の人生そのものだ。お前はいつも失敗ばかりだ。

お前はいろんなことに手を付けるが、ひとつだってやり遂げられないわけじゃないがいろいろひどい。

誰もお前を愛さない。

「ききききき、ききききつきき………」

まるで壊れたステレオのようにおかっぱは震えている。どうしたんだろうか、だの掠り傷の筈なんだけど？

「き、貴様あー！何した!!この僕に！僕にイイイ！こ、後悔させてやる。この僕に傷をつけたことを後悔させてやる!!お前ら、殺せ！」

怒りすぎだろ、血管めちやくちや浮き上がってるし。ヒステリーかな？おお怖い怖い、四方八方から槍が飛んできた。なんかおかっぱが、貴様あー！とか、早く殺せエー！とかまだ叫んでる。そんな中、おかっぱの私兵10人が剣と盾をもち迫ってくる………10人？思ったより少ないな。まだ隠れている可能性があるし、警戒は怠らないが、全員Cランクほどか。魔物使い、舐めたら痛い目見るぞ？特に俺はな？

とりあえず、眠ってもらおうか。はなカワセミ達、来い！甘い息だ！

—ブワアアア………—



はなカワセミ3匹による高密度の甘い息。甘ったるすぎでちよつとのが痛い……。もちろんちよいと魔力の壁を作っておかっぱには届かないようにしているぞ。そんなすぐに終わらせたらつまらないじゃないか。H A H A H A……

「うう……。お前……。なにを……」

「ぐぐお……。すう……。ぐお……。すう」

「ぐおーつぶすうー……。ぐおーつぶすうー……。ぐおーつぶすうー……。……」

さて？あなたを守る兵士は、その2人を除き全滅ですよ？さて  
いったいどうやって虐めてくれようか……

## トラブルに魅入られた龍介 8

さて、これでほとんどの兵士は寝た。さあ、お前はどんな行動をする？まあ、分かりきってるけどな。小悪党が不利になればとる方法は1つ……………」

「おい、あの女を連れてこい。こいつの目の前で殺してやる！」

「は、はあ、あの……………本当に……………」

「うるさい！早くつれてこい！それとも何か？僕に逆らうのか？あいつらがどうなっても……………」

「は、はい！すぐに連れてきます！」

どうやら、おかつぱは人質が大好きらしい。脅してる俺、マジかっけえパネエぜ！とニヤケたドヤ顔が主張している。もつと静かに、淡々に、クールにだったならそこそこ格好良かったんだが……………素材がおかつぱ坊っちゃんだしなあ、微妙なところ。だが、シリカを連れてくるよう命じられた私兵さんには申し訳ないな。多分というか、確実に気絶コースだろう。なにしろ、家の戦う諜報部隊が守っているからな。

さて、シリカに関しては置いて大丈夫として……………

「いったい誰を殺すって？」

「ふん、そう余裕ぶつているのも今のうちだ。すぐに泣いて詫びーボツ……………ボ？ひ、ひやああああ！」

ドングリショット、屑鉄ver。おかつぱの右手の小指を吹き飛ばした。うん、コントロールは完ぺき。これでお前の握力はガクツと下がった！これからずっと不慣れた生活を強いられるんだ。まだまだ行くぞ

さつきからチラチラ視線を感じる。おかつぱのじゃないし、その近くの兵士でもない……………得体の知れない何か……………もつと注意深く探してみよう、見・つ・け・た。

くらえ！ドングリショット！（屑鉄ver

「おつと……………」

「誰だ出てこい」





## トラブルに魅入られた龍介 9

なんかあまりいい噂を聞かないとか言われている冒険者と対峙しているんだが、問題があるならギルドが黙ってなさそうじゃないか？  
どうなんだろうか？それよりも……この人30歳なのか……おじいちゃんかと思ってた。

「ヒヒヒッ……お前、虫は好きか？」

そう言うや否や彼の足元がざわざわカサカサと……おいおい、マジかよ！ムカデのような生き物―地球のより太くてトゲトゲしてるけど―とかクワガタのような生き物―顎が刃物だけど―とかかわらわら出てきた。こいつら……かけえ！なんだろう、心をくすぐるカスタムがついてて最高。

あつ、奴がいた、いやがった！Gみたいなやつだ！それもなぜか触覚がバチバチ言ってる。あれは、見た感じ導火線？たしか某美食家のアニメで似たような生物を見たぞ……Gはやばくなったら飛んで来るって言うがこの世界ではどうだろうか……ああ、つらい。とりあえず、はなカワセミ達をルームに戻し、スライムベス達を召集。彼らの大技を見せてやろう。

スライムベス達は俺の周りに陣取ると、半径3メートルほどの範囲にポツポツと火の粉のようなものが舞い始めた。そこに飛んでくるとはGもどき達。しかしその火の粉に触れた瞬間、灰になる。

「なかなか妙な……技を使うな？ヒヒッ」

「努力の結晶ってやつだ、誰でも出来るぞ」

そう、この火の粉は以外と簡単に出来るはずだ。これは火の粉に見えるように改良を重ねた灼熱の炎。ある程度炎に関する知識と、イメージ力が無ければ出来ないが、そこは努力次第でなんとかなるだろう。確かに作るのに多少は苦労したが、魔力を多めに使えばある程度ポワツとしたイメージでなんとかなったから……誰でも出来るだろう。技名はまだない。

「ヒヒヒッそれが簡単に出来るなら……ぜひ教えてほしいなあ……」

「別に教えてもいいよ？あのおかつぱをいい感じにボコボコにして、誘拐犯として叩き出せた後でならいくらでも」

「調子に乗るには……まだ早い。それに、あれでも一応は、ヒヒツ……依頼人だ」

もちろん冒険者の先輩、それもAランク相手だ。相手が死なない程度？無理だろ。全力だ。

襲い来る蟲達。迎え撃つスライム達。ローグは……後ろか！振り向くと草刈り鎌のような武器を脳天めがけ振り下ろすローグが！すかさず大鎌で受け流す。何だあの鎌、めちゃくちゃ髑髏や骨が裝飾されてたぞ。かつこいいじゃん！受け流した瞬間、横からまた鎌が振られた。当たらないギリギリで避ける。

「ヒヒヒツ、その年でその身のこなし……末恐ろしいな」

「お褒めいただき、光栄ですよ！っつと」

上下からの鎌を素早く払い、大鎌で斬りつけるがするりと避けられた。

しばらくカンカンキンキン斬りあっていると、急にローグが距離を取り出した。気がつくとも蟲は居らず、スライム達が俺の後ろに陣取っていた。

「ヒヒヒツ、お前……化け物だな。その鎌、魔鉄だな？それに常に魔力を流してる……普通はもう魔力切れだと思うが？」

「幸いなことに魔力は底無しなんでね」

体質のおかげで使ったそばからMPが回復するから、魔鉄のように魔力で強化するタイプ本当に重宝してる。

「ヒヒヒツ……やめた……」

「え？」

やめた？手を引くってことか？

「いくら依頼でも……さすがに、わりに合わないぞ……ヒヒツ……てなわけで、依頼は失敗だ」

「ふ、ふざけるな！僕は雇い主だぞ！泣いて喜んで命をかける！雇ってやっているんだから当たり前だろ!!」

「命は有限、依頼主のために死ぬ冒険者は希。ま、罰金や信頼は落ち

るが命を失うよりかはな？……ヒヒヒッ……それに、そろそろか」

最後、ローグがなにかを呟いた後に飛んで帰った。んー？さつぱりわからん。おかつぱ共々『??』状態がしばらく続いたとき、部屋のなかに兵士がぞろぞろと………新手？

「お、おお！はやくそいつを捕まえろ！不敬罪だ！」

おかつぱが兵士に対し叫び、兵士が動き出す。少し身構えたがなにかおかしい……敵意がない？疑問に思っていると兵士は俺を通りすぎ、おかつぱを囲った。

「何だ！はやくそいつを捕まえろ！いや、殺せ！」

「お前には誘拐、脅迫その他の犯行で王城から捕縛命令が出ている。おとなしく来てもらおう」

そこからは早かった。暴れたおかつぱが捕らえられ、無事にシリカを救出、あつさりだった。さすがに、ここまで進んでしまったらおかつぱに攻撃できないな。というか、このおかつぱの名前をはじめて聞いたな。

しかし、なぜここで誘拐が起こったなどが分かったか聞いてみたが、匿名でタレコミがあつたとしか分からなかった。そして、後処理は兵士に任せ、シリカが落ち着くまで我が家で保護することになった。

## トラブルに魅入られてた龍介

保護といっても、俺の家でちょっと休んでもらう程度。心身の疲労が溜まっているだろうと、人をダメにするスライムソファアでゆっくりしてもらっている。

あの子の処理は兵士に任せてこっちは軽い事情聴取で解放。なんでも、あのおかつぱはいくつかの小貴族から大量に賄賂やらなんやらもらって好き勝手やってたという証拠が出てきたらしい。すべての権利、資産没収は確定だろうとのこと。ついでに、その小貴族もしばけてラツキー、らしい。

今回の騒動でシリカにはめっちゃ怒られた。はやく助けに来てほしかった、と………全くもってその通りです、はい。そのお詫びと言っては何だが、それで、今度買い物に付き合うことになった。もちろん俺の奢り。シリカには溜息をつかれたけど、これぐらいしか考え付かなかったから仕方ないね。あと、これを機にシリカとの距離が縮まった気がする。なんというか、フレンドリーさが加わって敬語口調が取れた？なんやかんや、信頼は勝ち取れたってことでいいかな？きっかけがきっかけだから申し訳ないけど……

「このスライム、座り心地最高くスベスベプルプル」

「レベルの高いスライムだから座り心地、触り心地は最高だと思っぞ」  
スライムはレベルが上がると艶やかになる。最近気がついたことだ。すべすべに磨きがかかり、弾力が増す。もうかわいい。ひたすらかわいい。

「受付嬢やってて、事件に巻き込まれるなんて都市伝説。まさか体験するとは思わなかったわ……」

「都市伝説……そんなに珍しいか？」

「どうも、そうらしいのよ。大昔、とある商會が逆恨みでギルド員を攫ったとかで、その商會及び商會の取引先その身内もろもろの人の依頼を無視し続けたとかでね」

へへ、そんなことが……

「さらにさらに、この国の国王が……何十代も前だったかしら？ギル



ドに依頼を出しつつその報酬を延滞し続けたことがあってね。その時はいい加減ギルドも怒ったって話。なんでもギルドを閉鎖したとか……」

「そうなら冒険者は大変だろ？」

「たしか、国から冒険者がほとんどいなくなったらしいわよ？冒険者はまともな職につけなかった人も多いから……」

それもそうか……まともな職につけたらこんな命をかけた職には就かないよな。でも、そういう命の掛け合いや、人によつてはすんなり稼げたりするのが冒険者が減らない理由でもあるんだろうけど。べつに俺はまともな職に就けなかったわけではない。むしろ異世界では冒険者こそが醍醐味だと思っっているから！

「さてと、昼飯食べてく？」

「食べてく」

## 龍介、ダンジョンふたたび

あれから一か月後、特に事件もなく平和的な日常と依頼をこなしていた。しかしある時思った……

「刺激が欲しい」

「それを俺に言っただうなる」

ギルマスなら何とかしてくれると信じて、突撃してみたが……相も変わらず書類に喰われてるな……

一体その積みあがった書類はいつ終わるのだろうか？

「刺激ねえ……お、これなんかどうだ？」

ギルマスが書類の山を崩して取り出したのは一枚の紙。なに？ 学園の教師？ Bランク以上の依頼か。

それより、たくさんの書類が散乱したがよかったのだろうか？ 後ろからチクチク刺すような視線が来るんだが……

「へ、へ。学園なんてあったんだな」

「知らないのか？ ここより南にある町だ。定期的にこんな依頼がくるんだ。学園の卒業生はなぜか冒険者に憧れるやつが多くてな、そしてその死亡率も高めとききた。そこで、少しで冒険の危機感を肌で感じて貰って……やってやつだ。しばらく先のことだが、やってみるか？」

「面白そうだな、もちろん厳しく良いんだよな？」

「らしいな、毎回これを受けた野郎共は、舐めた感じで突っかかってくるって愚痴ってたぞ。中途半端に力だけあるもんだから調子にのってるらしい。時期まで暇ならダンジョンでも潜ったらどうだ？」

「なるほど、その手があったか」

そういえばランクの高いダンジョンがあるじゃない！ 一気に楽しみが増えたな。

「そういえば、リュウは仲間は増やさないのか？」

「仲魔？ ならたくさんいるが？」

「なにか間違いだろ、それ。パーティーメンバーだ、パーティーメンバー」

「……考えたことなかったな、パーティーなあ……」

「つながりは広いほうがいいぞ？無理にとは言わないが……」

「そうだな、そのうち……そのうち出来るんじゃないか？きつとおそろく多分……」

そんな感じで帰宅。ダンジョンか……怒涛のランクアップだったからこれは楽しそうだ。ダンジョンでの新しい出会いも期待できるかな？でも、どうもダンジョンの魔物は洗脳に近い感じになっているらしいんだよな……果たして、仲間は増えるのか。

パーティーか……考えたことないなあ……人間関係は大事だし……まあ、陛下と繋がっている時点でパイプラインはぶつといかもしれんが。

となるとダンジョンへの準備だよな。食料の買い込みは必須だな、そろそろなくなってきたし。武器の手入れ……そういえば皆の武器を魔鉄製にしよう。ムダンラの木の武器も耐久性と打撃力はあるがメインで使うにはいまいち心もとないし切れ味を高めよう。ついでに今日は家具でも作って暇をつぶそうかな。



足りなかった。なので魔石を使ってMPの回復増加をつけた。ちなみに魔石は髑髏の目に使用している。紫に光る怪しい目がチャームポイント。魔力を全体に込めた時、黒紫色のオーラが漂うのもいいな。こう、心がくすぐられるような、何とも言えないワクワク感があるよな。

魔力で浮けるし、黒紫なオーラを纏<sup>まと</sup>う鎌を振りかざすフードを被った黒ローブ……もう風貌は完全に死神。二つ名に相応しい装備になったかな？やっぱ見た目が大事だよな。どんなに人聞きよくても見た目がダサかったらそこら辺のペーパーと一緒に……人聞きがいいかはおいておこう……多分いいはず。

「ん〜……は〜……だいぶ疲れたな」

『主、そろそろ終わった？』

『あるじ〜終わった？』

『……終わってる？』

『すみません。あまり主様の邪魔は、と思ったんですけど……』

「とと様〜ここすごいね！」

「ん？ああ、皆。ちょうど今終わったところだよ」

『じゃちようどよかった。今からみんな温泉に行こうと思ってたんだよ、それで主はどうなのかな〜と思ってね』

主思いでいい子たちだなあ……本当、俺にはもつたいないんじやなからうか。さあ、明日に備えて心と体を癒しますか。

「よし、すぐ行こう。ところで、そこから見てる人はどうするの？」

「あれ、ばれてた？」

「ばれてましたね」

なんでもない感じでステル達神々が出てきた。

「もう、隠れる気なかったよな？特にステルとか」

「そもそも隠れる意味ないしね。というわけで温泉、行こうか」

「そういうえば、女湯とかないけど？」

「あく……皆気にしないから」

そういつて、ステル達は温泉に行ってしまった……

え、マジか。9柱のうち8柱が女性なんだけど……



何より。ステルにはたつぷり井戸に、その他の女神にはちよつと顔を洗う感じでかけてあげたとのこと。よくやった！褒美に冷凍したムダンラの実をおやつにしよう。高級シャーベットののような味わいだ。さてと、ダンジョン行くか！

~~~~~

ということでお城へ来ました。Aランクの入れるダンジョンは……この国には2つ。魔界の扉と裁きの扉。

記憶だと、魔界の扉ってボスが魔王だった気が……確かミルドラスだったような……こいつ大魔王じゃ無かったっけ？階層は30階ほどだったかな？物質系のみのだんジョン、これは行くしかないな。物質系の、特に機械系の仲魔はいないからな。いったいどこまで似通っているか分からないのが怖いところ。

問題はダンジョンの魔物をタイムできるかどうか……スーから聞くと自分の意思がない感じがするから怪しいところではある……が、しかしここで何とかしてこそ魔物使い。今日も一日、頑張るZ………やめておこう……ちよつとどころじゃなく恥ずかしかった……

「今、^{おそれ}畏たな？」

うまい具合にビビってくれたので回し蹴りをぶちかまし、仰け反ったところに足払い。ガシヤガシヤンと倒れるデビルアーマー。その首筋に大鎌とハヤブサの剣を押し当てる。数秒後……デビルアーマーが諦めたように大地に身を投げ出す……タイム。

へデビルアーマーのタイムに成功しました へ

このログも久しぶりだな。目の前には恭しく跪くデビルアーマー。騎士だ、さすが鎧、騎士道があふれてる。

おっと、丁度さまようよろいも終わったらしい。タイム。

へさまようよろいのタイムに成功しました へ

この調子だ、目指せ魔王！……魔王がボスかは全く分らないけどけど。

い物体は？

|||||

スマイルロック ♀ Lv1

ランク：D

HP：167 / 167

MP：197 / 197

攻撃力：95

防御力：192

素早さ：157

賢さ：203

器用さ：108

幸運：76

スキル |||

・笑顔 LvMax

|||||

1、2、3、4、5。5匹か……レベルも高くない。スライム達、ゴ！無茶はしない程度に、頼むぞ。いくら回復が居ると言ってもやはり怪我はしてほしくない。

体に大量にまとわりついてじやれていたスライム達の攻撃が！スマイルロックに衝突！一瞬にしてスマイルロックが瀕死に。さ、アイテムだ。

へ ティムに失敗しました へ

お？失敗。まだいける！もう一度！

へ ティムに失敗しました へ

うわ、スマイルロックの顔面が憤怒に歪んだ……スキルにも激怒が追加されてる。こんなスキルがあるのか……手が付けられなくなる、とかかな？どちらにせよ、ティムは失敗か……難しいな。運が関係しているのか？数撃ちや当たるって言うしもう少し頑張るか……地下二階で。そろそろ景色に飽きました

多くのモンスターが落とす。

|||||

...

大量のGと岩塩、ばくだん岩のカケラ、魔法の小瓶その他もろもろ。とにかく大量なアイテムが手に入り儲けがすごい。

ただ残念なことはこの階の魔物は全滅したらしい。隅々まで探索をしたつもりだが、果てしなくドロップが落ちているだけだった。

メガンテの誘爆……おそろシア。

「ニグウ……ニグウ……」

……そんな悲しそうな目で見られても喰われてやるつもりはないんだ……代わりに、こういう肉があつてだな。

とりあえずたまたま残っていたジャミラス肉をポイっと。

「ムガ……ムグ……ウメツウメツ」

お、いい食いつぷり。まだあるぞお食え食え。

「ゲフウ……」

箱が横になってゲツプしてる……

「結構食べたな。それで、これからお前はどうするんだ？」

「ニク、クウ」

「でもここじゃ大変だろ？」

「……グウ」

「……それでな？俺と一緒に来てほしいんだよ」

「……グウ」

「………もつと肉食え」

「ムグムグ……ウメツウメツ」

……もうお腹が空いたのか……腹の音がすごいな……仲間になつてくれるかな？

龍介、ダンジョンふたたび 8

地下16階

「ニーク！ニーク！」

「お前はさつき食べたばかりだろ？もうそこまで大量にはないぞ？」

オークの群れ討伐の時に入手した肉が底をつきそうです。これはものすごい大喰らいが仲間になったもんだ……

隣で上機嫌に跳び跳ねている様子から分かると思うが、ひとくいばこは仲間になりました。

「肉あげるよ仲間にな」いいよ！「おお」みたいな感じ？これは他の人に餌付けされたら着いて行きかねないかな？タイムしてるし大丈夫か、そう信じたい。

ちなみに、もうひとつの宝箱からは大量のゴールドが出てきた。ざっと100万枚。あの宝箱を開けた瞬間ザラザラと溢れ出てきたんだが、どうやって収まったのかすごく気になる。拡張された空間でもあるのだろうか？いくら調べてもなんの変哲もない宝箱だったので、そういうものとしておこう。

地下16階からは、綺麗な城の内のような内装だ。シャンデリア、赤いカーペット、金縁の絵画。豪華豪華豪華三昧。ただ、装飾品は固定されて持ち帰れないらしい。残念だ……あの絵とか貴族層に高く売れそうなのに！残念。

気持ちを切り替えて、探索だ。見たところ一本道に左右にいくつかの扉。とりあえず扉越しに聞き耳だな。目星に聞き耳は探索の基本。どれどれ……物音は聞こえないか……開けようとするが開かない。

鍵か……ならば、鍵開け（物理）！

扉を力を込めて蹴り飛ばすとドガン！と扉が吹き飛び反対の壁に当たる。中には大量の武器が乱雑に立てかけられている。武器庫かな？品質はなかなか……全部持ち帰りだな。鉄の剣に鋼の剣がちらほら……んく山賊サーベルとボウガンが大半を占めてるな……こいつはどこかで見たことあるな……クロスボウには何かに設

龍介、ダンジョンふたたび 9

「とと様く、こここの部屋はなに〜?」

「この部屋は……整備室?なんだここ」

武器庫の次に入った部屋は整備室?機械室?色々な部品や工具が置いてある部屋だ。かすかにオイル臭い。

「とと様、これ見て!かっこいい!」

スズランが持ってきたのは少し古ぼけた紙か?—ペラペラペラ……—これは設計図、だな。ポンコツ兵、プロトキラー、キラーマシン、キラーマシン2、キラーマシン3、スーパーキラーマシンか。

「でかしたぞ、スズラン。よしよし、いい子だ」

「えへへ、もっと探してくる!」

頭を撫でるとデレるスズラン。やっぱりかわいい。他のスライム達も撫でるとぐにやぐにやデレるんだよな。やっぱり深い仲魔愛は強いな。

『スーも褒めてー!』

『ライムも……』

「よしよしよしよし!みんなかわいいぞ〜」

やはり家のスライムたちは、どいつもこいつもかわいいなあ。ぽよんぽよんふにょんふにょん、ぷにぷにすべすべ……眺めてよし、触れ合つてよし、ビッグスライムなど大きなスライムは人をだめにするソファです。あれは、魔王をもだめにします(当社比)

あ、話を戻そう。確かキラーマシンの作成者はドクターデロト……ゲームの説明でちらっと、それも一瞬しか出てこないからよくは知らないけど、彼は名前だけの登場で詳しい情報はまったく不明。この世界ではきちんと存在していてこれを作ったのだろうか?そんなでもつて、ここは彼の研究所兼製造工場か?でもここはダンジョンだし……つまりダンジョンは不思議なことがいっぱい、はつきりわかんだね。

よくわからない設計図はしまちやおうねえ。こいつはなんとなく世界に出しちやいけない気がする。古代の遺物というか古代兵器

龍介、ダンジョンふたたび 10

「マスター？俺が？」

「ハイ。起動スルタメニ必要ナ魔力ヲクダサツタ貴方ガマスターデス。命令ヲ」

「命令……特には無いな」

今のところ、殲滅するような敵もないし。

「特ニナイ……ソレデハ私ノ存在意義ガ……存在意義ガガガ……」

「ああ……そうだな、この後の探索中に敵が出ると思うから殺さない程度に攻撃してくれ」

「ハイ！今後モ、ヨロシクオ願イシマス」

へ タイプGのタイムに成功しました

さて、タイプGのステータスを軽く……

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

タイプG ♀ Lv20

ランク：B

HP：1200 / 1200

MP：100 / 100

攻撃力：700

防御力：600

素早さ：500

賢さ：500

器用さ：700

幸運：90

称号：邪神の加護

SP：0

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

アルマは仕事が早いな。ほかの子にもちよくちよく加護がついてるんだよな。全員に付かないってことはやっぱり加護に人数制限に近いものがあるのかな？

『お、正解だよ。人数制限はないけど結構加護をつけるのってきつい

んだよ〜？一週間連徹夜みたいな疲労に襲われるんだ。神なのにね』
『ステル、念話はいつも唐突だな。あと神は全能じゃないのか？』
『万能ではあるんだけどね。さっきの加護のおかげでアルマはボタンキューだ。いったいどう落とし前付けてくれる!?』

『いきなり半笑いで迫られても困るんだが……そうだな、ムダンラの実10個でどうだ？』

『……そ、それでいいよ』

いつもよりも弱々しいアルマの声が聞こえてくる。本当に加護をつけるのって大変なんだな。

『え？なに？僕の言葉信じてなかったの？』

『アルマか？大丈夫か？加護ありがとうな。ステルは冗談で大げさに言いそうだからな』

『ちよつと？それはいくらなんでもひどいんじゃない？』

『その、ステル兄さんは……大げさにいう事があるから……しかたないと、思う』

なに？兄さんだと？う、うらやましい！俺の家はひとりっ子だったから弟か妹が欲しいとずっと思ってたんだ……くう、ステルがうらやましい!!

『龍介……その年でお兄さんと呼ばれたいの？ちよつと引くんだけど……』

『昔から弟か妹が欲しかったんだよ。別にそれぐらいいいだろう？』

『べ、別にいい、ですよ？……りゆ、龍兄さん？』

「グハツ!!」

心にダイレクトアタック！龍介はメロメロだ！可愛いなあ、これだ。これが欲しかったんだよ。いや〜満足。

あ〜、こころがびよんぴよんするんじや〜。そういえば年越しの時に風の神アネモスにお兄ちゃんって呼ばれてたな……あ〜、心がびよんぴよんするんじや〜！

『それから龍介は小1時間ほど放心状態だったとき』

『だ、大丈夫なの？』

『大丈夫大丈夫……多分』

龍介、ダンジョンふたたび 11

地下24階

とりあえずルームの中で一泊した後、探索続行。新しい仲魔の戦闘力を確認しつつ慎重に進めていった。

新しい仲魔のタイプGの殲滅力はすごい。道中、皆様おなじみばくだんいわやデビルアーマーさえも自慢の剣術とボウガンで切り伏せていた。下に行くにつれてどんどん敵が強くなっていくのにも関わらず、楽々殲滅だ。うちの古参スライム達と同等だな。

索敵能力もずば抜けて高く、敵を見つけては走って切り伏せている。まあ、敵を見つけたそばから突っ走っているので、罠が発動し後方はてんやわんや。ちよつとうちの殺戮マッシーンの頭をたたいておこう。

「痛いデス……」

「そりゃあれだけ罠発動させたら誰でも怒る。見てみるよ、この矢と槍の数」

剣山かっつというほどの壁や地面から生えた槍、それにハリネズミのように壁から生える猛毒の矢。上の階層では落とし穴やら、酸やらのダメージ床……突っ走るのはいいんだけど、もうちよつと後ろの事を考えてほしいな。おかげで耐性関係が軒並み上がったけども。矢の代わりに魔法が飛んできたりしたからなおのことだ。しかし、魔力の壁で防御しても耐性のレベルが上がるのは新発見だった。自分の魔力だから体が学ぶのかな？

さて、舞台は変わらず、城の中。少し前の階層から、キラーマシンやからくり兵などの機械系がちらほら増えてきた。どこかに生産施設でもあるのだろうか？設計図があるってことは、作れるし……一応魔物だからポップもするのか？タイプGは魔力を流して起動したが、こいつらはどうやって起動してるんだろうか？タイプGみたいにな魔力を流すなら、上書きは可能なのか？あー、いろいろ検証したいな。サクツと弱らせて検証してみるか。気絶とかするのかな……

さ、スライム達よ！弱らせるんだ！

—ドドドドドドドツ—

「…………フ、フルボッコ。まあやれって言ったの俺だけでもこれは、イジム……いや、まいいか。このキラーマシンのHPが1割か。まずはどこかにボタンはないかな、無いな。充電するケーブルも差込口も……無い。やっぱりタイプGと同じ魔力か。それでは、ありつたけの魔力を背中から、ドーン！」

「魔力ノ？ガリヲ確認シマタ。マスターノ管理下ニツキマス」
「お、正解だったか」

「ツイニ私ニモ後輩ガ出来タノデスネ」

「ついに」 というか 「もう」 だよな。お前昨日起動したばかりじゃん？

「というか……物質系の雄雌ってどうなってるんだ？」

「ソナナ……マスターハソナナ恥ズカシイコトヲ言ワセル変態ナンデスネ……」

「あ、大丈夫つす」

「なんか調子狂うなあ……」

龍介、ダンジョンふたたび 12

地下28階

「……………」

「おわっ」

探索をしていたらバルザック3匹と角でばったり……………このままぶつかっていたら……………いや、そんなことは無いな。おふぎげが過ぎた。ほら、今にも3本の自慢のこん棒が振り下ろされ……………「てええええ!?!」

あ、あぶねえ……………物質系の中でもなかなか生物らしい見た目、しかしその心は物質のごとく冷血か。

「……………イ……………」

バルザック2匹が何かを唱えたと次の瞬間中規模の爆発、イオラか。すごく聞き取りづらかった。あいにく、爆炎耐性はそのそこにつけているんでね。このくらいなら、炊飯中の炊飯器の蒸気キャップに手を置いたくらいだ……………前言撤回、思ったより熱かった。ホイミ。

爆発の中、残りのバルザックの殴打2撃目。もちろんそう簡単に当たってやる理由はないので、大鎌でこん棒は細切れに。

身の丈ほどあったこん棒がヒノキの棒に早変わり。それを見たバルザックはしばらく考え……………

「…グウ……………」

バルザックが祈りを込めるような仕草をし、細くなったこん棒を十字に切ると、光り輝く十字の斬撃が飛んできた。グランドクロスか。ちなみに、こんなに聖聖している見た目のグランドクロス、実はバギ系である。とりあえずメラを数発ぶつけて相殺。どうやら修行が足りなかったようだな。チェックメイトだ。

素早く近づき、両腕両足を取れない程度まで斬った。どう頑張っても立ち上がれないだろう。心なしか諦めているように見える。

「タイム」

へ バルザックのタイムに成功しました へ

急いで回復、とりあえず簡単に家のルールを説明し、ルームで休ん

でもらう。今回は意外とうまくいったな。物質系は心が硬いのかなかなかタイムを受け入れてくれなかった。力でねじ伏せるのが悪手なのかな？でも斬りつけられつつ愛情持って接するのはちよつと難しい……結局、殴って従えるのが一番か……反乱とか起きないよね？しつかりした食料と適度なストレス解消もといバトロワすれば大丈夫なはず。

さて、残りの2匹は引き連れていたスライム達が抑えているが、やや劣勢か？少数を3グループほどで回していたが、経験が少なかつたか？押しつ押しされつ、ヒーラーをつけてるからやっていけているって感じか。まだまだ、強くならなきゃいけないな。

「相手の武器ばかり見ないで、全体を見るんだ。次にどんな動きをするか、ある程度予想しておくとなお良い。自分の武器は手に持っているものだけじゃない、体のどんな部位も武器になりえるんだ、まんべんなく使うんだ」

目つぶし、いやがらせ、急所突きなんでも使う。これが大事。卑怯汚いは敗者のたわごと。命は1つなのだから、大事にしないとね。スライムたちはアドバイス通り、武器を使いつつ体を伸ばして死角からの追撃など、多種多様な攻撃手段を使うことができてきた。連携も上がった気がする。良きかな良きかな。

龍介、ダンジョンふたたび 13

地下30階

おかしいな。ゲームの通りだと……いや、ここはゲームじゃないから違うことだらけなのは当たり前か。しかし、このダンジョンはまだ続くらしい。また森の中である。おかしいな？

へー二刀流のレベルが上がりました。く

「うるさいなあ」

「へいへいへッ?!?!……」——♪パラライ!?!——

エビルチャリオット2匹の突進を剣と鎌で捌いたらいいレベル上げになった。こいつら、妙にテンションが高くて暴走族風。とにかくうるさい、くるくる回りながらパラリラパラリラ、ハイハイハイ……うるせえ!つてね。

その後ろからブラッドソード3匹が回転しながら突撃してくるが、ナイトが叩き落す。ブーメランのように3方から同時に飛んでくる剣を叩き落せるのは家の子たちでも古参組ぐらいかな。

スーの場合は3本の触手にそれぞれ武器を持ってはたき落とす、ライムは魔法を多重に展開して近づかせないし、レムは飛んでくる途中に影縫いでしばって影刃でブスリ、スズランは腕力で叩き落としてたなあ……べちやつて……

しかし、四方八方から同時に襲ってくる者への対処はいい訓練になったな。ブラッドソードとエビルチャリオットはタイムできてるからこのやり方を今度コロシウムでやってみよう。

「ハハハハハ!!」——ドドドドドツ——

おっと、今度は高笑いした木馬の騎士の群れか。エビルチャリオットをタイムした後、タイミングを見計らったかの如く高笑いしながら突撃してきた。こいつ等も中々なスピード。1匹ずつ分断し、久しぶりの登場のキングとクイーンに分ける、あとは自分で処理よ。攻撃型&回復型のキングと魔法&補助型のクイーン。耐性はまんべんなくLv1でレベルも上がっているから十分に対処できるだろう。現に吹き飛ばしちやつてるし、まさかキングの突進が木馬の騎士のランスも

ろとも吹き飛ばすとは……なあ、あれ正拳突きだぜ？頭で突っ込む正拳突きとは……どの部位でも出そうと思えば出せるのか、それとも種族の関係なのか、いろいろ楽しいことがいっぱいだあ。

ところ変わってクイーンはというと、4つの呪文叩きこんで爆殺してたな……死んでないけど。

そろそろ、この二匹も進化しそうだけだなあ……ジャミはノーサンキューでお願いします。あいつ面構えこそ馬だけど、見事な逆三角体型・二足歩行の獣人でボディビルダーのようなポーズしたインパクト絶大マンだからな。この世界にもいるのかな？ゲマとかいると確実に悪さしてそうだな。

……そろそろ3日目かあ……いつボスが来るのだろうか？

龍介、ダンジョンふたたび 14

地下33階

……お？

「いらっしやい！ゆっくりみえていってください」

旅の扉特有の商人の部屋か。これは、楽しみだな。

|||||

ツインスワロー	6800G
ソードブレイカー	5500G
地獄の大鎌	9500G
まほうのよろい	6100G
まほうのビキニ	13800G
まほうの盾	5000G
やくそう	8G
どくけし草	12G
アモールの水	120G
まほうのせいすい	300G
食用肉	50G
有機野菜	20G

|||||

商人のお兄さんが見せてくれたが、これはなかなか品揃え……

「武器と防具はいくつあるんだ？」

「そうだね、それぞれ5つだ。道具ならいくらでも」

「武器防具全部と……アモールとせいすいを50個たのむ。あと肉と野菜を100だ」

「まいど！お客さん太っ腹だね！合計261,500Gだ……ピッタリですね、ありがとうございます」

毎回思うんだが、どうやって会計しているかと思ったら計算してくれる道具があったんだな……何か箱のように入れたら金額が表示されていた。八百屋や宿屋とかでもゴールドを下の方においていると思ったらそういう事か。

「このダンジョンって何階まであるかわかるか？」

「ダンジョン？ここは魔法の商店さ。何処をさまよっているか、何処につながるか、さっぱりな、魔法の部屋。品物も新しいお客さんが来た時点で変更されるしね。あ、これは秘密だよ？珍しく大量買いしてくれた珍しいお客だから話すんだ」

なるほどなるほど、それは珍しいことを聞いた。となると神殿も同じような仕組みであるのか？

それぞれの武器を1つスーに渡し、レム、ライム、ナイト、スズランにほしい武器をそれぞれあげて後の武器は……仲魔の中の上位に渡すことにしようか？でも魔鉄の武器に魔力を込めた方が威力が上がるんだよな。

いまだに武器を持っていない奴に渡す事にしよう。

地下24階

なぜか急に空気が変わったな……重く押し掛かるようなというか、なんというか、とくにさっきの道具屋との落差が激しすぎて特によくわかる……

—GUUUUU……—

あゝ、心なしか急に殺意高めになってない？メタルドラゴンとメカバーンの群れがお出迎えか……こいつ等はドラゴン系じゃないのか？確かにあの作品だと物質とドラゴンを行き来していたな。どう見ても機械だから物質系に分類されたか。ともかく……メタルドラゴンがBランク、メカバーンがAランク、その数30か。メタルドラゴン1匹に仲魔5匹で対処すれば勝てなくもないか。回復、防御、攻撃、魔法、強化or障害で組めばいけるはずだ。メカバーンの数6匹。スー達と同じ数だ。能力もどっこいどっこい、戦略さえ間違わなければ勝てる。よし行くぞ！

あ、タイムするからちゃんとき残りしてね？

—GUUUUUUU!!—

まばゆい金色のボディのドラゴンか。かっこいいなあ。手始めに魔法を一発。

—パキイン！—という音と共に魔法が跳ね返ってきた。あぶ

をなめていた……というより新しく入ってきたメタルドラゴン達が多くてさらに拍車かけてるんだよな。ムダンラの実があるから多少は大丈夫なんだけど……いざ食料が尽きるってなるとちよつと……さつきもつと食料買っておくんだつた。

しばらく休憩したら強行突破だな。

~~~~~

準備も終わった。突撃班、魔法班、回収班の順でぎーつと。基本俺とスー、レム、ナイト、スズランは突撃班、ライムが魔法班で。

ルームから出ると補充されひしめき合っているメタルドラゴン達。早速魔法班からの攻撃で火の海、氷の山、風の嵐、光の雨、闇の波、あたり一面を埋め尽くす。残るはドロップの山か……OVERKILL！

でもすぐさま奥の方から魔物の大軍が補充されるんですけどね。第2ウェーブである。

突撃班はドロップを無視し追加補充された魔物を倒しに行き、あとから続く回収班がすべてドロップを回収。

突撃班は敵を弱らせることが仕事で、あわよくば倒す。弱らせた敵は後ろに回して魔法班に飛ばしてもらおう。回収班が回収のサイクルで次の層への階段を探す寸法だ。

ちなみに、下への階段が見つかったのは大体34ウェーブ目が終わった後であつたとさ……

つらっ

## 龍介、ダンジョンふたたび 16

### 地下35階

地下に降りると、背丈以上の重厚な扉が静かに存在していた。この先にボスが居ますよ！って言ってますね。

その前に扉の横にインターホンがあるのが気になる。ここは家なのか？でもどう見てもボス部屋だし……でも家だったら勝手に入るわけにもいかないし……よし、長年鍛えた営業スマイルを見せてやろう。

ーピンポーンー

「……はい」

「こんにちは、冒険者のリュウスケと言うものですが、ここら辺に出口でもないかなと思ひまして」

「出口……あゝ、ありますよ。ちよつとお待ちください、今から開けますので」

ガチャツつという音と共に重厚な扉が結構軽々と開いた。ゴゴゴゴゴッなんてことはなくスツと。開けたの自分もよく知っている王の中の王、ミルドラス。人間という立場から魔界の王に成り上がった手腕の持ち主である。本作では印象が薄い魔王として有名になっているが自分は好きです。

……王の中の王が自ら扉を開けるんだな。

「……もしかして私のこと知ってるんですか？」

「え？もちろん。魔王ミルドラスですよね？」

有名じゃないことで有名な魔王様じゃないですか。もちろん知っています。

「こんなところで立ち話もなんです、どうぞ上がってください。」

これが本当に魔王？普通にいい人じゃん。あ、キラーマシンが箒と塵取り持って掃除してるし、悪魔神官もティーセットを銀のトレイに乗せてもって来てる。なんだろう、すごく平和だ。

内装も豪華な屋敷で、煌びやかなシャンデリアなど一般市民から見れば気の遠くなりそうな調度品ばかりだ。

客間に通された後、少しうれしそうな雰囲気でミルドラスが話始めた。

「実はですね、魔王としての認知度が低く、文献にひとかけら、それも名前のちよびつとしか残っていないので……本当にあなたが知っていたことをうれしく思っているんですよ」

「あくなるほど……確かに……言ってはあれですけど……」

「そうなんですよね……最初は何かして知名度を上げようと世界でも滅ぼそうかと、割と力を貯めてもみたんですけど勇者に倒されました。それも遥か彼方の話です。今ではここでのんびり過ごすのが日課です……そんな時に自分を知っているあなたが来てくれて……本当に、本当にうれしかったです。ありがとうございます！」

昔そんな大ごと起こして勇者に倒されたのに文献に残っていないって、だいぶひどいな。

「にしても、魔王のわりに、そのなんていうか……」

「ああ、この口調とか態度ですか？流石に時間がたてば魔王の貫禄も無くなるってもんですよ。魔王として活動していたのは一体いつだったか……」

これが「長い年月を経て神をも超えた」と豪語した魔王なのだから世も末と言うか、時の流れは強いと言うか。

「ともかく、今はいたって普通の一国一城の主みたいなものですね。ああ、うれしい。今日は今までの日常の中で一番心に残る日だ。まさか、自分を知っているものがいたのですから。記念日です記念日」

「そこまで……とにかく喜んでもらえてよかったです。これからもよろしく願います」

「これから……ええ……ええ！ぜひ、また来てください！」

俺の目の前で涙ながらに両手をつかんで上下にブンブン振ってる人がいるだろ？この人、魔王様だぜ？

ともかくお近づきの印として、ムダンラの実をいくつか渡してこの日は帰った。屋敷の最奥に帰り用の旅の扉が置いてあったんだ。

必ずボスと戦って倒さなければいけない訳じゃないらしい。ボスも死んでいないのでダンジョンのレベルも上がらないが、一応突破と

して認められる。

帰ったらすぐ、陛下が会いたいという事なので休む暇なくリブロに  
連行されました。

## 龍介、ダンジョンから帰宅

毎度おなじみ、謁見の間

「リュウスケ、よくぞ戻った。そしておめでとう。けどちよつと待っててくれ」

いったいどうしたのだんだろう。謁見の間に入ると、皇帝陛下と王妃がひそひそ書類とにらめっこしていた。

少し聞こえた内容だと、あの男爵はくだとか取り潰しだなくとか物騒なことが聞こえてくる。誰かやらかしたんだろうな。南無南無

「待たせてすまないね。気にしないでくれ、ちよつとした事だ。それよりも、早速驚かせてくれたね。Aランクになって早々ソロで高ランクダンジョン攻略とは」

「いやいや、エルネスト夫婦とか同じようなことやってるのでは？」

「彼らもいくつか攻略はしてるよ？でもカルネちゃんや知り合いのBランク冒険者と一緒だね。だから、ソロ攻略はすごい。というわけでリュウスケのその功績を称えよう！何か欲しいものある？」

相変わらず軽い皇帝だ……欲しい物、欲しい物……あ！

「陛下、実はこれ売りたいんです、いくらで買い取ってもらえますか？」

そうしてリング大のムダンラの実が入った箱をいくつか出す。ムダンラの実の並はこの大きさ。大きいものになるとスイカぐらいになるんだが、ここは1つだけ、紛れ込ませておこう。

ついでに、2つ切り分けて皇帝に献上しよう。これは見るより食べてもらった方が早い。

「この果実はもしかしてダンジョンで採れたものかい？喜んでいただけよう。うまい！これは良いリン……ん？ブド……いや、まさか……」

「あなた……これって……」

ビックリしてる、ビックリしてる。そうだよな、味が変わる果物なんて、1つしかないよ。すぐに答えにたどり着いた皇帝達。

「リブプロも1つ食べてみる。驚くぞ」

「それじゃあ1つだけ……………お前これ」

「ムダンラの実だ」

「ムダンラの実……………」

「これが……………幻の……………」

「ああ……………」

「……………」

皇帝と王子は気を保ってるようだが皇后は意識を飛ばしたらしい。残った二人も放心状態だ。さらに次いでだからざわついている警備の騎士達や、色々な所に隠れている忍者風の護衛の人達にも1つ渡しておこう。受け取った瞬間から膝が大爆笑していたけど。おかしいな……………鍛治のおっちゃんに渡したときはそこまでの反応は無かったが……………

もしかして、おっちゃんも食べた後こんな風にしばらく放心していたのかな。

「ああ……………神よ……………」

皇帝が神に祈り始めたんだが……………いったい誰に？

《あ、僕にだ》

お前闘神かい。この状況で闘神に祈るのか。

《まあ、内容はこの出会いに感謝をー、みたいな感じだしいいんじゃない？あと、これをわたし忘れてたんだ。ええつと……………何処においたっけなー、あった！ダンジョン攻略おめでとう》

へ 称号：魔王の友 を取得しました へ

この称号でMPが1.5倍……………だどー！おいしい。称号おいしい！これからは称号集めも視野に入れようかな。

「あ、ごめん。取り乱した」

「期待以上のリアクションで何よりです」

「それで、これなんだけど買い取りは……………全部は無理だ」

やっぱり伝説の実を箱1つは多すぎたか。皇帝と皇后の「買いたいのだけでも！買いたいのだけでも！」みたいな感情がものすごく顔に出ている。

「そうですか、ではいくつ買ってくださいますか？言い値で大丈夫ですよ」



「そうだね、実は宝物庫にも1つムダンラの実あつてね。それと比べ  
て見るとはるかに質も大きさも良いと思う……となると、これ1つに  
国宝1つ2つ分の価値はある。宝物庫がすっからかんになっちゃう」  
そこまで？

## 龍介、ダンジョンから帰宅 2

「よし、こうしよう。実1つにつき宝物庫の物を1つだ」

「全部はさすがに無理なので5つにしましょう」

「それがいい」

この部屋にいる全員でいろいろ話し合っていた結果、そうすることに落ち着いたらしい。王様と騎士達が円になってひそひそするのはシユールだったな。

5つか。実は、話し合いの間ムダンラを選別して良いものを選ぶのである。悪戯心を含め、すべてスイカサイズ。ついでのついでに、あらかじめ作っておいたムダンラの木箱にムダンラの木屑を敷き詰めて丁寧に1つずつ入れて並べている。高級メロンの如く。

「リュウスケ……これは？」

「ちよつとした遊び心で用意しました」

「なかなか神聖な雰囲気が出てますね。材料はいったい何を使ったの？」

「ムダンラの木です」

「……………」

予想通り以上の反応！あ、しまった……どう説明しよう。家に無尽蔵に生えてるから忘れてたけど、幻の実の木となるとそれこそ天然記念物並の代物……よし。

「すいません。やっぱり今の無しで」

「いやいやいやいやいや、まてまてまてまて」

ですよね……つい、ついね、調子に乗りました。とりあえず説明か。

「……………」

ああ、ダメだ。気絶じゃないが、意識が見当たらない。さっきの全力の返答はなに？本能？まあ、意識が見当たらないならそれはそれで都合、今のうちにしまおう。なにも見えていない、いいね？

「ハッ！」

「なんだ、夢を見ていたのか……ムダンラの木で作られた木箱の夢を」

「え、ええ。きつとそうですよ。ムダンラの木なんて、まさか」

「ははは、すまんリユウ。俺達は疲れてるみたいだ」

木箱をしまつてからしばらくして、意識を取り戻したそばから口々に呟き始めた。そうかあ、疲れてるのか。さつき栄養豊富なムダンラの実を食べたのになー。ナンデダロウナー。さて、そろそろ交換しにいきましょう？

「所で、リユウスケ。説明を頼めるか？」

「ぜひ、お願いします」

「ちよつと、リユウとは常識について話し合う必要がある」

ナンノコトカナ。それより、3人とも目が笑って無いんですけど……その、入り口を他の兵士で固めないでほしいんですけど……それに、リブロが持っている広辞苑の様な凶器はなんですか？いつの間に用意したんですか？あの、もしも？自分、なにか悪いことをしましたか？ムダンラの木は文字通り腐るほどあるんですよ？ルームには朽ち木もありますからね。だから、ね？

結局、色々説明して納得はしてもらったが、かるく2時間は常識について説教された………解せぬ。

そんな、説教の意味も含む勉強のなか、入り口を固める兵士の生暖かい目は絶対に忘れない。顔は覚えたからな！また度肝抜いてやるから覚悟しとけ！

## 龍介、ダンジョンから帰宅 3

やっと説教と勉強から解放され、宝物庫から5つもらってきた。

何をもらったかというところ……錬金窯、短剣武器のキラードピアス、スティックのさびたおうしやく、オリハルコン2つである。錬金窯があれば何でもじゃないが、ある程度はつくれるじゃん、もらった方がいいのか？と言ったんだが、聞いてみると陛下たちは使い方をまったく知らず

「そもそもそんなのあったのか。宝物庫は管理人に一任してるからこっちは大まかにしか知らないよ、ははは」

そんな具合だった。

今さら使い方を知った所でどうしようとも思わないから持っていった方がいい。たまに錬金釜で作ったものを持っていこう。

そして、拳大のオリハルコン。希少金属の上位メンバーである彼だが、宝物庫には20個ほどあったので2つほど貰った。希に高レベルダンジョンで落ちるからある程度は定期的に流れるらしい。いざ行つて乱獲だな。オリハルコン製の調理器具が欲しい。

あとはキラードピアスとおうしやく。おうしやくは錆びて使えないので取り敢えず宝物庫に入れておいたとのこと。どんなに磨いても錆が落ちないから。こんな錆びた棒と、あのスイカ並ムダンラと交換なんて申し訳ない！なんて言われたが、俺はこいつの価値を知っている。是非ともと交換して貰った。ときのおうしやくの素材だ。

キラードピアスは皆さんご存じ、というか、耳飾り版と短剣版があるはずなのだが、この世界では短剣バージョンらしい。二回攻撃できる短剣。

キラードピアスはスズランに持たせておこう。その前に魔力文字で強化だ。視た感じ刃の部分に2回攻撃の文字があるから、持ち手や刃の余白になにか入れよう。

これを機会に他のノーマル武器達にも強化を施そう。

実験もかねていろいろ混ぜこぜしてみよう。3回攻撃、不壊とか？実はキラードピアスの2回攻撃が書かれているのは刃の片側だけなんだ。

んでも、久しぶり過ぎて文字を入れすぎるとどうなるか忘れちゃったんだよな……刃の大きさにそんなには書き込めないけども。とりあえず3回攻撃のみを書き込み、実験。

10回切りつけた結果、半分が2回攻撃でもう半分が3回攻撃になった。はやぶさは素早く2回斬りつけられる感じだったが、キラークピアスは斬りつけると不可視の斬撃がもう一度攻撃する必中攻撃らしい。

必中……これいいな。適当な安物のナイフに必中と付ければ、投げるだけで当たる便利なものになるのでは？これは量産ですわ。つと話がずれたかな。キラークピアスには追加で不壊もつけておこう。これで壊れなくなる……まではないにせよ壊れにくくなるだろう。

この前ダンジョンで買った武器にも同じように不壊を付けて、攻撃力増加（極）でも付けておくか。あと攻撃速度増加（極）とか。ハヤブサの剣にもつけておこう。おお、残像が見える。剣が速すぎて残像が見える！カッコいいな！やっぱり武器の強化はロマンだよな。

もう少しで大陸の中央に行くからそれまでにすべて強化してやろう。

## 龍介は準備中 1

いろいろあったが、陛下に報酬を貰った日から1週間ほど後。ギルドから呼び出しがあった。例の学園への依頼の準備がいろいろ終わったらしい。説明を受けにギルドに来てほしいとのこと。

~~~~~

なのでギルマスの部屋に来ました。

「よく来たな。まあそこに座れ」

座るとギルド嬢がお茶を出してくれる。しかし、入ったときこの部屋にはギルドマスターしか居なかったはずでは？あ、深く考えてはダメな気がする。そういえば、陛下のところのにもそんな人がいた気がする。この世界の補佐をする人はきつと何か、すごい何かを持っているんだ。

「簡単に説明するとだ、ここから馬車で11日位のところにあるステシャの町に行き、そこにある学園で冒険者を教えることだ。3日ほど準備をして向かってくれ。期間は14日だ。向こうでも説明を受けれると思うが、まあ頑張れ」

「そんな軽く言われてもな……」

「ええい、こっちは書類作業で疲れてるんだ。この位楽しても許されるだろ？」

そんなに晴れやかな笑顔で言わんでくれ、悲しくなる。

それに、そんなこととしていいのかギルドマスター。後ろでクリスが書類抱えてるぞ？それは……それは大量の書類を……

そうだな……俺は何も見えていない。そう、この後ギルマスがどんなに絶望的な顔をするとしても。今、仕事が終わった幸福をかみしめているギルマスの笑顔を守るために。 〈完〉

この後、町中に響いたギルマスの悲鳴は、ごく普通の日常の中に消えていった。と言うより、日常の一部と化していた。南無く

というわけで、ギルマスも無事逝ったことだし向こうステシャに着くまでにこなせる依頼を探すことにしよう。とはいっても薬草探したり現地の魔物を狩って素材を売ったり……鍊金したり。そうだ、馬車に鍊金

釜設置するの忘れてた。久々の馬車生活だし、馬車の改造も施さなければ。食材を買い貯めて、馬車を改造して、早めに出発でいいか。道中で時間を取られるし。明日から頑張ろ。

~~~~~  
テレレレテツテツテ (某睡眠BGM)

今日は、食料調達。

「おばちゃん、久しぶり。野菜をそこからそこまでの半分をお願い」  
いつも野菜を買っているおばちゃんの店。ダンジョンに潜ってる間に品揃えが豊富になっている。

「あらあらあら、本当久しぶりねえ。最近どこか行つてたのかい？」

「ちよつとダンジョンとかいろいろね」

「気を付けるんだよ？ベテランの冒険者でもコロツと逝っちゃうのがダンジョンなんだから。まだまだ若い命を散らせると神様たちが悲しむからねえ」

「もちろん、気は抜いてないつもりだ。もしミスして死ぬようなことになったら、そうだなあ……神達に謝るよ」

《舐めプで死ぬようなことになったら、どんなに謝っても許さないけどね！》

ええい、うるさいぞ！そういうことは万が一にしかないはず。はず。

「そりゃあいいね！私も不慮の事故の時はとつさに祈るかねえ」

そういえばAランクになったといつても特に変わってないな。何かあつたかといえ……人がグロテスクスライムになったり、シリカが攫われたり、ろくな目に合っていない……この後もきつとそうだろう、楽しみだ。

「なんだい、ニヤニヤして。気持ち悪いね。早く野菜をもつていきな！そんな顔で居られると客がこなくなっちゃうよ」

しまった、いろいろこれからの楽しみにニヤニヤしてたら追い出されてしまった。あとは肉の調達か。これは今ある在庫と相談しつつ、現地で集めよう。

……今日の活動終わり！  
よし、従魔たちと遊ぼう。

~~~~~

ニューワールド
共存の地

ルームの中の1部屋。森や岩地、村など従魔に合わせて環境が整えられる便利な部屋である。

メインはスライムや植物系などが住む森林地帯。その周りに草原や岩場、古城など……トロデーレン城か……

中に入ると荒廃したトロデーレン城が再現されていた。そこには物質系の皆がうろついていた。

「クククク、ついにここまで来た力。勇者ヨ。この大魔王タイプG様二逆らおうなど身のほどをわきまえぬ者ヨ。ここに来たことをくやむがよい」

「1つ聞かせてもらう……魔王よ！なぜこの世を滅ぼそうとする！答えろ！」

「エ……世界を我ら魔族の物にスル、それだけが目的ヨ。ほかに理由などいらヌー！」

「そうか……やはり和解など無駄か……ならば、勇者の名にかけてお前を滅ぼす！覚悟しろ、大魔王タイプGよ！」

「ククク、来い！勇者！」

魔王に向けてハヤブサの剣を抜き縮地で近づきく。まずは武器のついている手を「ちよちよちよつトタイム！」

「え？」

「え？じゃないですよ！何で本気デ斬りに来てるんですか!？」

「いや、だって、ネ？」

「無理ですって！マスターに単体で勝てるわけないじゃないですか！
魔物より魔物じみてルのに……」

「おい」

とりあえず拳骨いっぱつ

「それより、大魔王タイプGっておかしいと思いません?」

確かに……ほかにもタイプβとかいそうだな。

「それで、名前が欲しいのか?」

「ハイ」

名前か……迷うよな、名前つて。

「そうだな、赤い彗星」「別のデ」

「マジンガーゼツ」「却下デ」

「鉄人28ご」「まじめニやってみます?」

すまん、いいが出ない

龍介は準備中 2

「紅玉、なんてどうだ？美しい容貌の例えとしてもつかわれるし、ボディの色といい、ちょうど良いんじゃないか？」

「紅玉……はい、気に入りました。特に美しい容貌の所が。ありがとうございます、マスター」

長かった、やっぱり名前は難しい。地球の父さん母さんは凄いな。悩みに悩み抜いて命名する大変さが身に染みだ。

「……えらく流暢にしゃべるようになったな」

「ネームドか否か、高位の魔物などの判別の1つに会話の流暢さがあります。たぶん、そういうことでしよう」

なるほど、すらすらと会話が出来ればランクの高い魔物や強い魔物の可能性がある……

スズランは最初から喋っていたとなると、Aランク辺りからか。皆もう少しだな！なに、ランクの1つや2つ気長にいけばすぐ上がる上がる！きつと、たぶん、おそらく。

所で……今何をしようとしていたんだっけか……あ、馬車の改造。

イメージはドラクエ8の錬金釜。馬車の後ろに台座を作り、赤い敷物、適当に覚えていた錬金素材の羅列の書かれた本、ポーションか聖水。いや、水で良いか。容量拡大の文字を刻んで多目に入る水瓶にして錬金のつど、使おう。

しかし、ムダンラの木材は楽でいいな。台座は釘を使わないタイプなんだが、木材同士の接合部分に樹液？か何かが固まって接着剤の役割を果たしているし、至れり尽くせりな木材だ。滑り止めみたいな塗装もされている。

試しに何か錬金してみよう。

特やくそう×特やくそう＝万能ぐすり

じつは、昔からこれが作りたかった。HP回復に状態異常回復。これがあれば便利なこと間違いなし。

あとは、上手く作れるかどうかだな……

「いすらいム達がまつてるぞ！」

「ちよつと無理がありますけど………」

「さあ！行こう！我々のエデンへ！」

「この後皆で遊びました（まるる）」

龍介は準備中 2. 5

その日の夜

「主様」

「レムか。どうした？」

「最近……その、私の事を忘れていたりはしませんか？あ……べつに、不満とかそう言ったものじゃないんです……ただ……」

「寂しかった……か？」

「っ！……はい……」

「そうか……そう、思わせてしまったか。出番が少ないばかりに……」

「そうか、レム……ちよつとこつちに来てくれ」

「？ はい」

近くに來たレムを隣に座らせ、肩を抱き寄せる。

「っ!?主様!なにをっ」

「すまなかつたな……そんな気持ちにさせて。俺はレムの事を忘れたことなんてないよ。当たり前だろ?だって俺の影からいつも見守ってくれているのだから。夜に見回りに出たり、鍛練だって欠かさずにいるだろ?」

ピクリと、肩越しにレムが驚いたのが伝わってくる。

「……気づいていたのですね」

「もちろんだ。お前の主を舐めんなよ?神から貰った力前回でお前達を見てるさ。それでさ、こんな思いをさせているのにすまないが、引き続き俺を守ってくれないか?自分でも強くなったつもりだけど、失敗はだれにでもあるからさ。守ってくれる人が必要なんだ。俺もお前を守るから。俺のシノビとして、忍び寄る影から俺を守ってくれ。もう、そんな思いはさせないからさ」

「その言葉、絶対ですよ?主様」

「ああ、もちろんだ」

「わかりました」

そう言うと、レムが立ち上がり、片膝をついで頭を垂れた

「その大役、このレムが引き受けました。私は貴方の懐刀となり、一生お守りいたします」

「よし！じゃあ、最初の任務だ！大人しく頭を撫でさせろ！」

「ええ!?それはちよつと……」

見るからにあたふたし始めたレム。初々しいというか、なんというか。

「ほら、早く早く」

俺のとなりをぽんぽん叩いて急かしてみる。

「は、恥ずかし……うう、はい」

「よし、それで良い」

隣に来たレムをもう一度抱き寄せ、頭を撫でる。だけど、レムの座高が高くて少し撫でにくい。こうなったら……

「ほいつ」

「えつ、えええええ！これはさすがに「いいからいいから」

横にずれてすかさずレムを倒し、俺の膝の上にのせる。これこそ逆膝枕だ！膝枕なんてされた経験ないけどな。これで撫でやすくなった。

「たまには、こうやって甘えても良いんだ。これからもよろしく頼むよ」

「……………はい」

『あー!!レムだけずるい！スーもスーも！』

『ん……………すごく……………羨ましい』

『うーん、ちよつと羨ましいかな?』

「レム姉いいなあ……とと様、スズランにもー!!」

「ほう、逆膝枕ですか。マスターも隅に置けませんね、そんなイケメン限定の高度な落としテクを身に付けているとは。少し私も興味あります」

お客様のご来場だ、こうなったらどうにもならんから皆一列にならべー！

「すまん、レム。今日はここまでだ。俺は愛しい子供達の相手をしてらやなきやいけない、もちろんレムもな。だから、続きはまたこん

どな」

「はい、その、その時はまたお願いします」

~~~~~

side:レム

「続きはまたこんどな」

そう言うと、主様はスー達の相手をするために離れてしまいました。

わかってはいたのです。主様がきちんと私達の事を見ていて、愛してくれていることを。でも確証がなかったのです。感じていた親愛が、実は自分の思い違いで影の薄さ出番の少なさのせいで忘れられつつあるのではないかと。聞くのが怖かった。

でも、いまはそう感じません。百聞は一見にしかず……主様の世界の言葉でしたっけ？少し意味が違う気もしますが概ねその通りでした。

私が主様にタイムされる前の記憶はとても薄いです。ですがなにかを求めていた気がします。それで、ゴーレムの居る鉱山に行つた。その求めていた物がたぶんこれだったのでしよう。

仲間家族が欲しかった。そんな気がします。

いま、私はとても幸せです。仕える主がいて、主は私を家族のように慕ってくれる。これを幸せと言わず、なんと言いましよう。

頭を撫でてもらうのはとても気持ちいいものですね。また近々お願いしましょう。

### 龍介は準備完了 3

「なんやかんや、早めに準備が終わってしまった。早いが出発するか。その前にギルマスに連絡だな。」

「プルルルルル」

『どうした?』

「もう準備が終わったから昼には出発しようと思って、連絡を」

『ああ、そうか。だが行く前にギルドに顔ぐらい出せ。あいさつの一つでもしていけ』

「わかった」

~~~~~

ギルド

「リュウさん、中央に行くんですって?」

「ああ。今日はそのちよつとした挨拶だな。お土産は何がいい?」

ギルドに入っつてすぐシリカのところへ。なんやかんや、依頼とかで世話になってるし迷惑もかけたからな。

「なら、中央でのみ開かれています名菓店の焼き菓子!!あれが絶品らしくて!いつか食べたいと……思っていたんです」

一応仕事中心なのを思い出したのか、テンションの落差が激しい。顔も少し赤くなってるし。

焼き菓子、クッキーかな?地球のものにどれだけ近いか……それとも地球以上か。いいね、買いたいな。

「了解、焼き菓子ね。ギルマスの所にも行こうと思うんだけど、ギルマスの予定は?」

「ゴホンツ、はい、リュウさんが来たら通せと聞いています。あちらの扉からどうぞ」

「ギルマス、顔出しに来た。じゃ」

「まで」

顔を出しに来いって言ったから来たのに、これじゃダメ?やっぱり

？

「依頼の最終確認でもしていけ」

「期間は14日、向こうでも聞けるからこれだけ分かっていたら別にいいだろう？ 現地で情報は集めるさ」

「なんというか、お前の人間関係が心配になつてくるぞ」

「失礼な、俺のパイプは太いぞ？ 皇帝に王子、ほかのAランク冒険者に八百屋のおばちゃん。おばちゃんなめんなよ？ 噂話に事欠かないんだからな？」

ギルマスに心配されるほど、人付き合い悪くない……はず。

「パイプは太くても国内にしか走つてなかったらあまり意味はないがな。どうせ陛下や王子には話すらしてないんだろ？ ま、向こうは話さなくても知ってるだろうが……顔出ただけ良しとするか。気を付けて行つてこい。こつちには帰つてくるんだろ？」

「ここが俺のホームだからな」

「それが聞きたかった。こつちも高ランク冒険者の拠点になつてるといふ看板が欲しいからな」

結局それか。なんというか、なんというかあれだな。あれ……俗物的だなあ。もつと感動的なことは言えんのかね？

~~~~~

無事(?) 挨拶も終わったのでそろそろ出発しよう。ゆっくりのんびり、スローライフだ。きつと中央、ステシヤでは忙しくなるんだろうしな。

この世界の中央にある学園か……どんなインパクトで登場しようか。魔王ぶつてみる？

それとも弱そうに見えて強いムーブとかどうだろう。才能をもつて威張り散らしているつて話だし、強化したスライムで一捻りは確定だな。

「リュウ、その悪い顔をしながらここを出るのはやめてくれないか？」

「おっ？ リブロー……もうここまで来たか」

「なんだそれ……わき見運転はやめてくれ、事故を起こされると困る」  
「すまん、今後の予定を考えていた……」

「一言、言ってくれれば。手助けできたのに」

「やめてくれ、俺はAランク冒険者だぞ？自分ですべて用意できるさ。  
それに一人じゃないしな」

荷台にはスー、ライムにレムとナイト、スズランを乗せている。あとは錬金釜かな。

他にも大量に分裂して増えに増えまくったスライム達、その他愉快な魔物達でお送りしております。

「過剰戦力……もし盗賊が襲ってしまったら地獄を見るな……」

「そういう事で、しばらくステシヤに行ってくる」

「ああ」

さて、約10日間の旅。楽しめますか